復刻版

横尾忠則全集

附録

国書刊行会

CamScannerでスキャン

『横尾忠則全集』はぼくの最初で最後の唯一の作品集です

横尾忠則

今回『横尾忠則全集』(講談社)の復刻版が国書刊行会から出ますが、それ以前のぼくの作品集としては一九六八年に出た『横尾忠則遺作集』(學藝書林)というのがあるんです。粟津潔さんが編集構成デザインをしたもので、この本もこないだ復刻版が出ました(トゥーヴァージンズ刊)。これは前から言っていることなんだけど、ぼくはこの本があまり気に入ってないんですよ。というのは、出版社の編集者が勝手に構成を粟津さんに頼んで、ぼくは出来上がった印刷物をニューヨークで見た。そうしたら、粟津さんが無茶苦茶やってるんですよね。最初の頁にぼくのお葬式のシーンがあって、うちのかみさんまで引っ張り出されて(笑)、ぼくの昔の大事な写真に火つけて燃やして、燃やした感じをそのまま使ったり、ぼくの絵に勝手に赤ベタ入れたり、表紙だって目玉くり抜いて白目にしたりね……もう著作権侵害もいいとこですよ(笑)。ですから『遺作集』というのは、

CamScannerでスキャン

ぼくは大嫌いなんです。そういうことがあったんで、『横尾忠則全集』というのは、ぼくの反抗心、反発、『遺作集』への批評、あれはぼくのものじゃないよ、という気持ちの表れもあったかもしれない。

この『横尾忠則全集』は一九七一年の刊行ですね。その前年、七〇年万博の年の一月に交通事故にあって入院したんですよ、虎ノ門病院に。入院が二ヶ月以上というので休業宣言をした。それで、これまでの経歴をまとめた作品集を作ろうと。ぼく自身がすべて完璧に目を通した作品集、それまでの作品を網羅した書籍、それで『横尾忠則全集』となった。退院してすぐ作業にとりかかって、まずその年の五月に『横尾忠則全集展』という展覧会をやりました。で、その年の九月に足と腕の痛みでまた入院して二ヶ月病院生活。だから、その年は本当に仕事しませんでしたよ。その間にアルバイトで「少年マガジン」の表紙デザインだけやったんです。これ、休業宣言した以上は、仕事を再開したと思われると困るから、全部他人の絵やマンガを使うことで自分自身を消したんです。文字だけ描いて……あと印鑑を押しただけ（笑）。でも、全然消えてないと言われるけどね。モノクロのデザインのやつ、出来上がったものを編集長が講談社の社長に見せたら「これ実際は色が入るんだよね」って言われたと。版下だと思ったんでしょうね。ぼくにデザインの依頼があったときに、「少年マガジン」は当時八十万部売れて

る、それを百万部にしてほしい、と言われたの。そんな自信ないよと言ったんだけど、このモノクロの表紙で本当に百万部いったんです。反時代的でもあるけども、周りに色とりどりの派手な表紙が並ぶなかで、モノクロームで少年マガジンというタイトルがあるだけでものすごく効果が出ると思ったんですよね。通常の価値観を踏襲しないで反抗したわけですよ。そういうものこそ、結局は大衆が最も求めていたものだったんでしょうね。今ある常識的な価値観で物を作っても、ある程度は売れますよ、その時代のニーズに合えば。でもこれは時代のニーズを否定したものです。そうしたことが商業価値を持つっていうことを、出版社も分かったし、ぼくも分かった。

それ以前は、ぼくの作った土方巽や寺山修司の「天井桟敷」、唐十郎の「状況劇場」ポスターなんて、デザイナーのコンクールとかで全部落とされてしまった。でも実際にポスターが街に貼られたり、こういう本になったとたんに、あっ、我々が求めてた、欲しかったのはこれだっていうので人々に受け入れられた。そういった大衆のエネルギーが当時のぼくを支えてくれたと思うんですよね。

『横尾忠則全集』は、作品はもちろんデザインもレイアウトも構成も装幀もすべてぼくが手掛けています。その後、作品集やカタログをたくさん出していますけど、こんなふうに自分一人で完全にデザインをした作品集はこの『全集』一冊だ

CamScannerでスキャン

けなんですね。要は、この書籍自体、ひとつの作品として作ったわけです。そういう意味で『横尾忠則全集』は、ぼくの最初で最後の唯一の作品集なんです。

七一年だから全集を出すのは早いよと言われて（笑）、実際短い期間のものしか入ってないけど、後から見るとやっぱり全集になっているんですよね。ぼくはいつも後から気がつくんだけど、時代とか自分の経歴を全部先取りしちゃっているというかな、深く考えてないけれども、意図してなくても全集になっている。やっぱりアーティストは想像力がないといけないというか、ある種の未来予見がないとダメだと思う。『横尾忠則全集』は海外の出版社から海外版が出たので、当時デイヴィッド・ボウイがこの本を買って感激したらしいんです。後年彼に会ったとき、「この本は世界で最初のパンクだ」と言って親指を立てた。あの時代、こういう本はなかったから、それはパンクかもしれないね。

野坂昭如さん、高橋睦郎さんに文章をお願いしたのもぼくの意向ですね。あと、この本のサイズですが、当時の画集・作品集というと「薄くて大判」というのが定番だったので、それに反発して分厚くて小さいものにしたのかな。でも考えると、今も昔もこういうサイズの作品集はあまり見ないよね（笑）。そういう意味では本当にセンセーショナルなものだったような気がする。

この本は作品集ということでポスターやらイラストレーションを集成していま

CamScannerでスキャン

すが、同時にぼくという人間も作品として扱っているんですよね。万博のせんい館のデザインをしたり、大島渚監督の『新宿泥棒日記』に出演しているぼくも作品として載せてます。さらには高倉健さんや浅丘ルリ子さん、藤純子さんが出たり、最後にはぼくの当時の部屋の写真が載ってたりしてる（笑）。そのへんが作品集というよりも、より私的な、私小説的なところがあるかな。ぼくの創作と生活、そして時代を一体化したかったんでしょうね。

自分を露出することによって、自分の中の不透明なものを消していった。それは前進するために必要だった。ぼくの休業宣言というのは、デザイナー決別宣言だったんですね。だから、この『横尾忠則全集』は、ぼくのアーティストとしての生き方、人生と創作を一体化した生き方の宣言の書だったんだと今では思います。まだこの時点では、未来に画家宣言するのをぼくは知らないわけだけど。

この本で『遺作集』の頁を載せてるところがあるでしょう（四〜八頁）。ぼくの代表作がずらっと並んでいるんだけど、こんなに小さくして、最後にはペンで落書きまで汚しちゃってる。これはね、当時のデザイン界がぼくを否定したことを再現したんです。ぼくを評価しなかった彼らに対してのメッセージですね。粟津さんが作った『遺作集』を否定したかったこともあるけど（笑）。今回の復刻版で、新たに八頁分追加して、きちんと作品を載せたのは、今という時代をどこかに欲

しかったんですよね。あの時代の反復で終わるんじゃなくてね。時代の無意識がぼくの感性を必要として、ぼくは時代に作品を作らされているところがあると思うんです。だから、つねに今の時代精神、ツァイトガイストを入れておきたい。

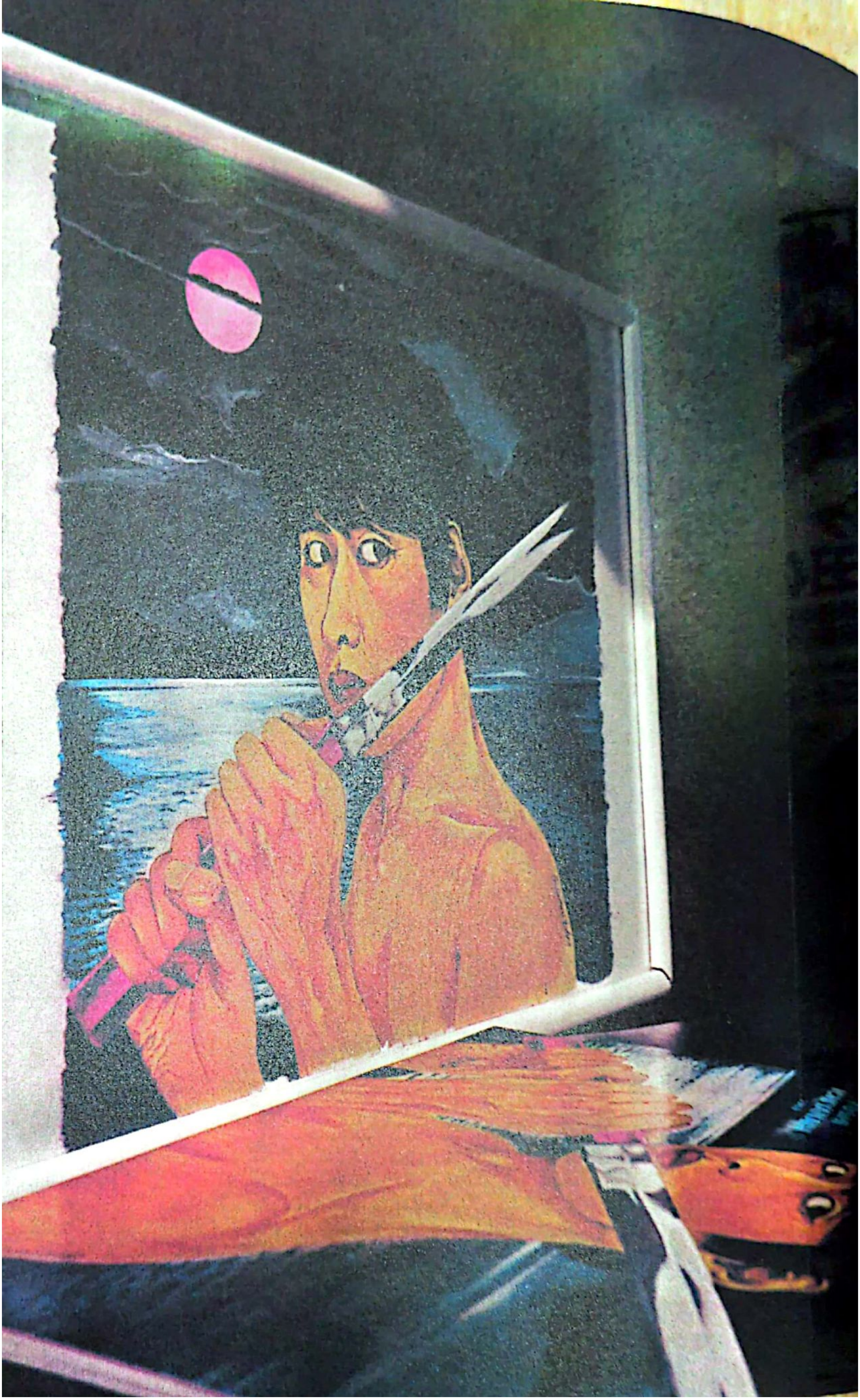
ぼくは基本的に過去の作品には未練がない人間なんです。いつも国書刊行会のような出版社が突然現れて、復刻させてくださいと言ってくるんで、こうやって出てしまう（笑）。でも、刊行当時は印刷の限界でぼくの作品があまり綺麗に掲載できていない頁が多かったんで、そういうものは今回いつもの凸版印刷の富岡さんが完璧に整えてくれました。二〇一三年に国書刊行会で復刻した『絵草紙うろつき夜太』のときも驚いたけど、オリジナル版より復刻版のほうが鮮明なんですよね。これも今という時代がしっかり入っているということで、ぼくにとっては嬉しいことなんです。（談）

（二〇二四年十月／横尾忠則アトリエにて／構成＝国書刊行会編集部）

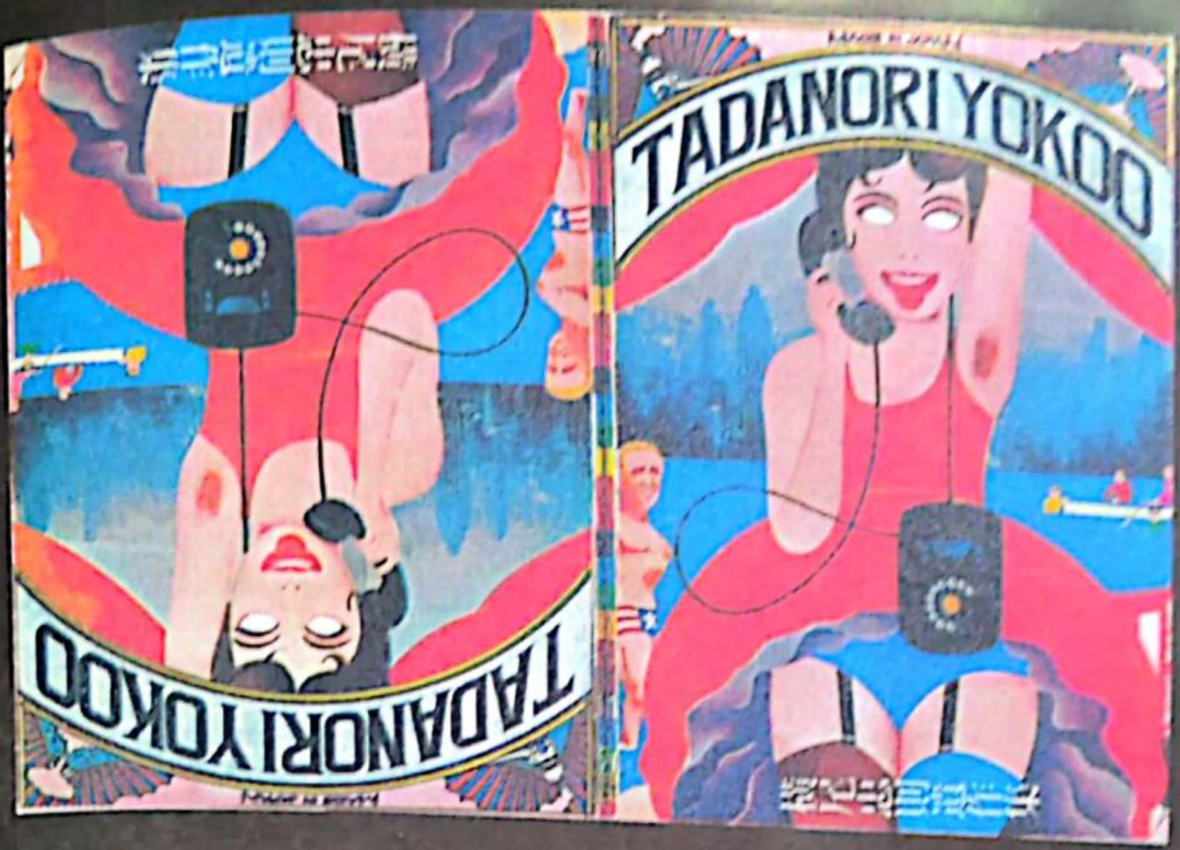
＊表1・4図版『横尾忠則全集』新聞広告（デザイン＝横尾忠則）

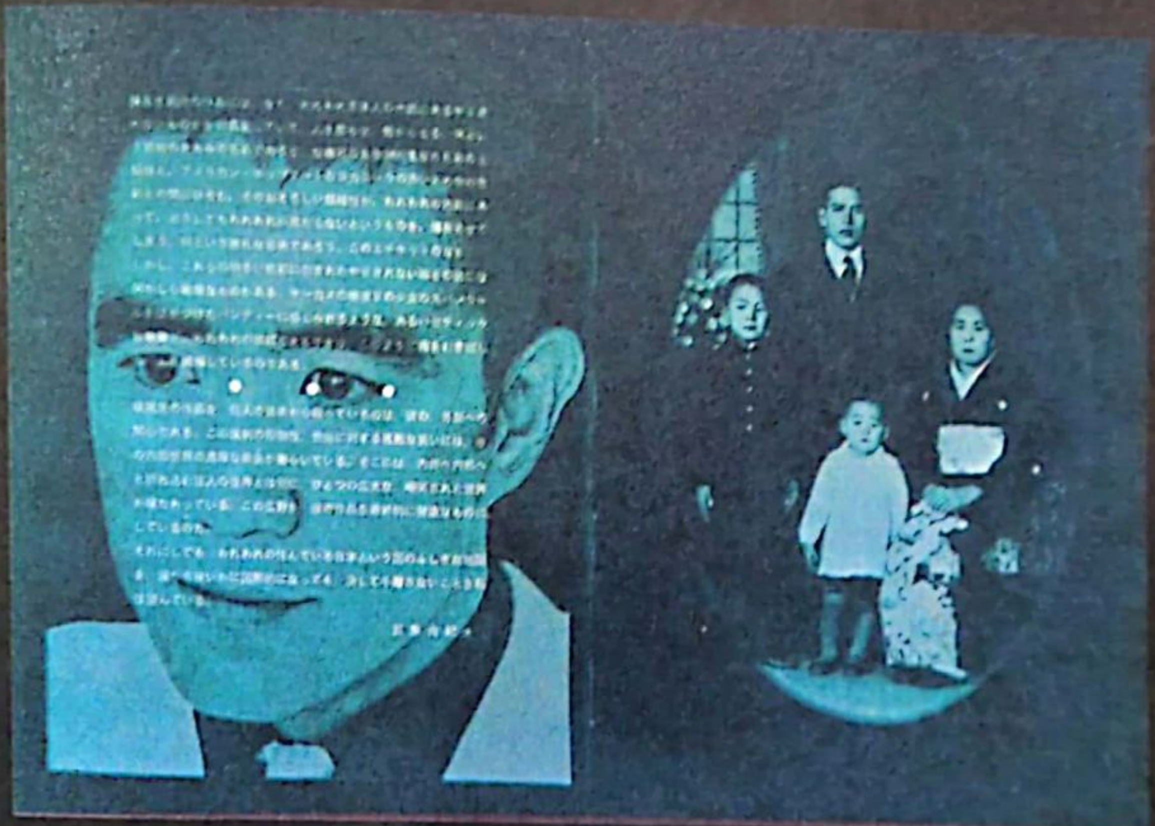
＊本書掲載の写真について連絡のとれない著作権者がおられました。お心あたりの方は国書刊行会編集部までお知らせください。

横尾忠則
全集
出た！
春眠を破る
衝撃の全集！
発売たちまち大反響！
只今大増刷中！
全一巻
ウワッハッハッハッ
●横尾忠則のすべてを完全収録！
横尾忠則著
大増刷発売中！ 五八〇円
未完への脱走
"人間喪失"を
峻拒し自己の
原点を告白。
異色のエッセイ
定価二九〇〇円
講談社

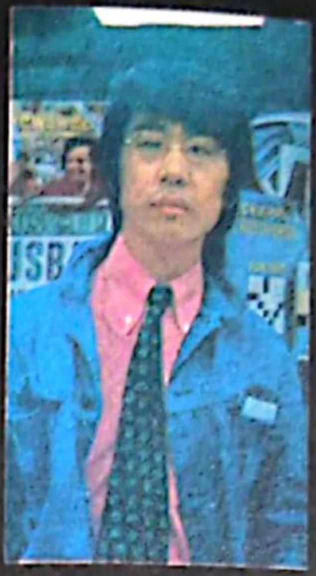


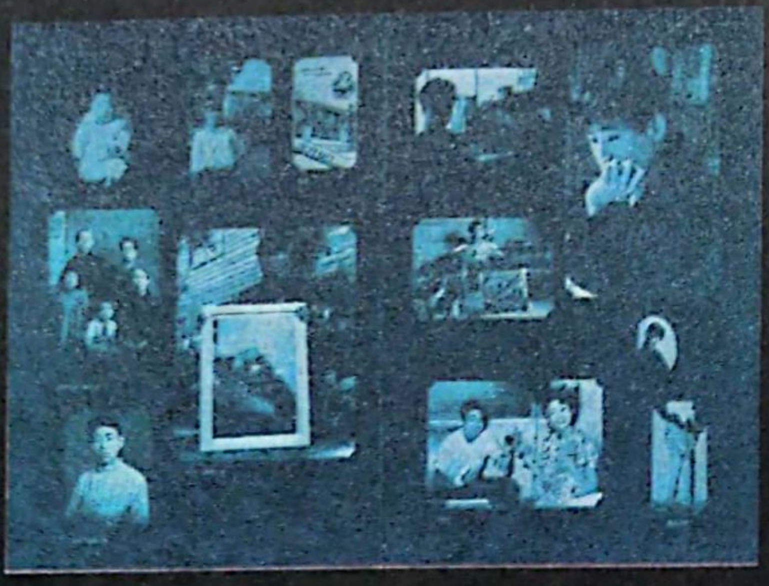
CamScannerでスキャン



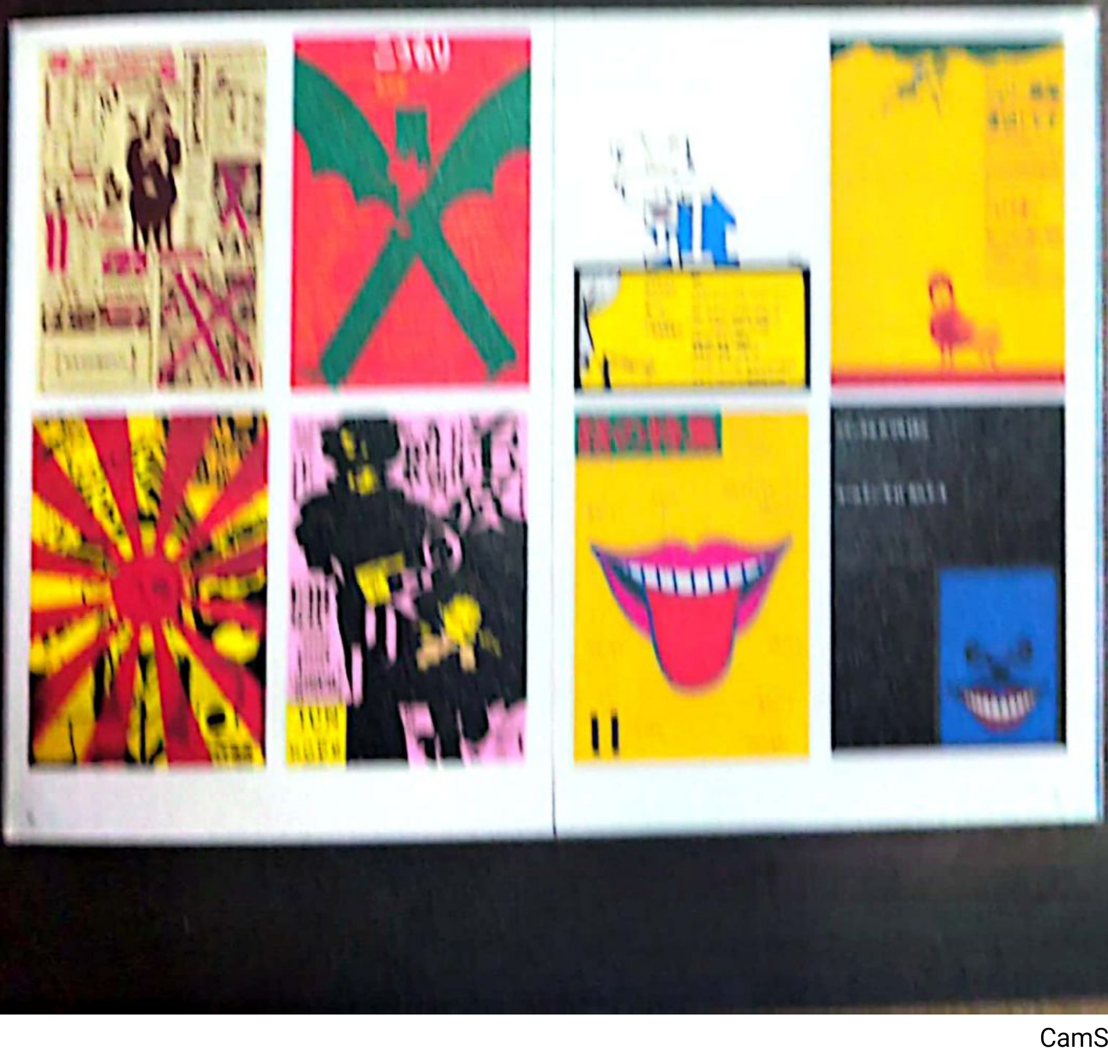


CamScannerでスキャン

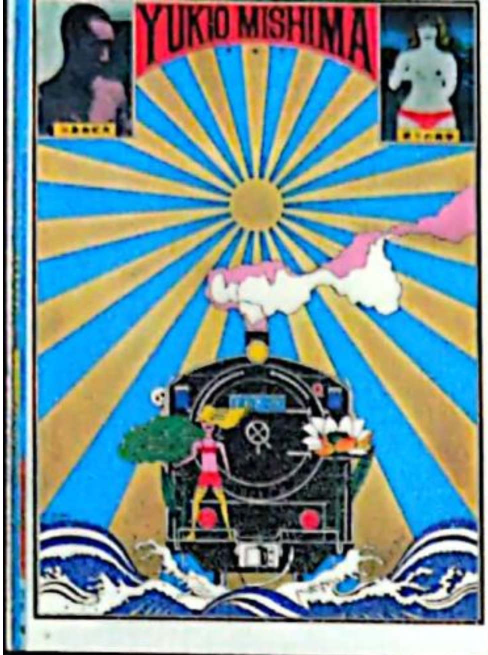


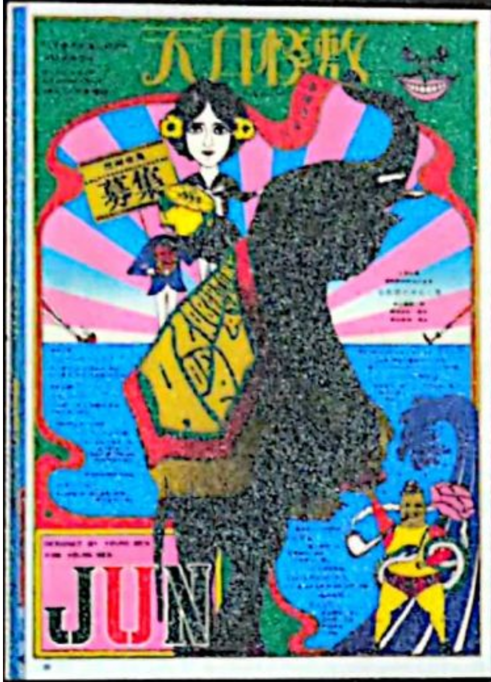


CamScannerでスキャン

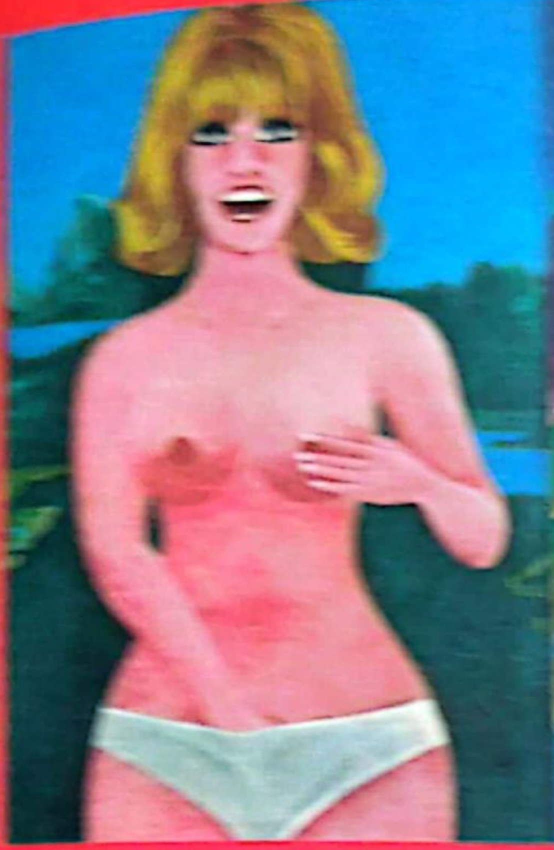


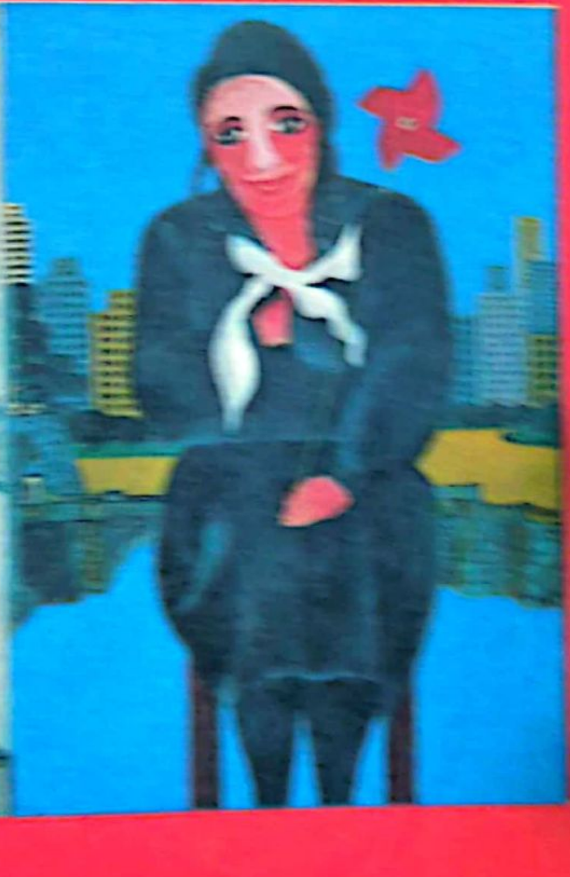
CamScannerでスキャン



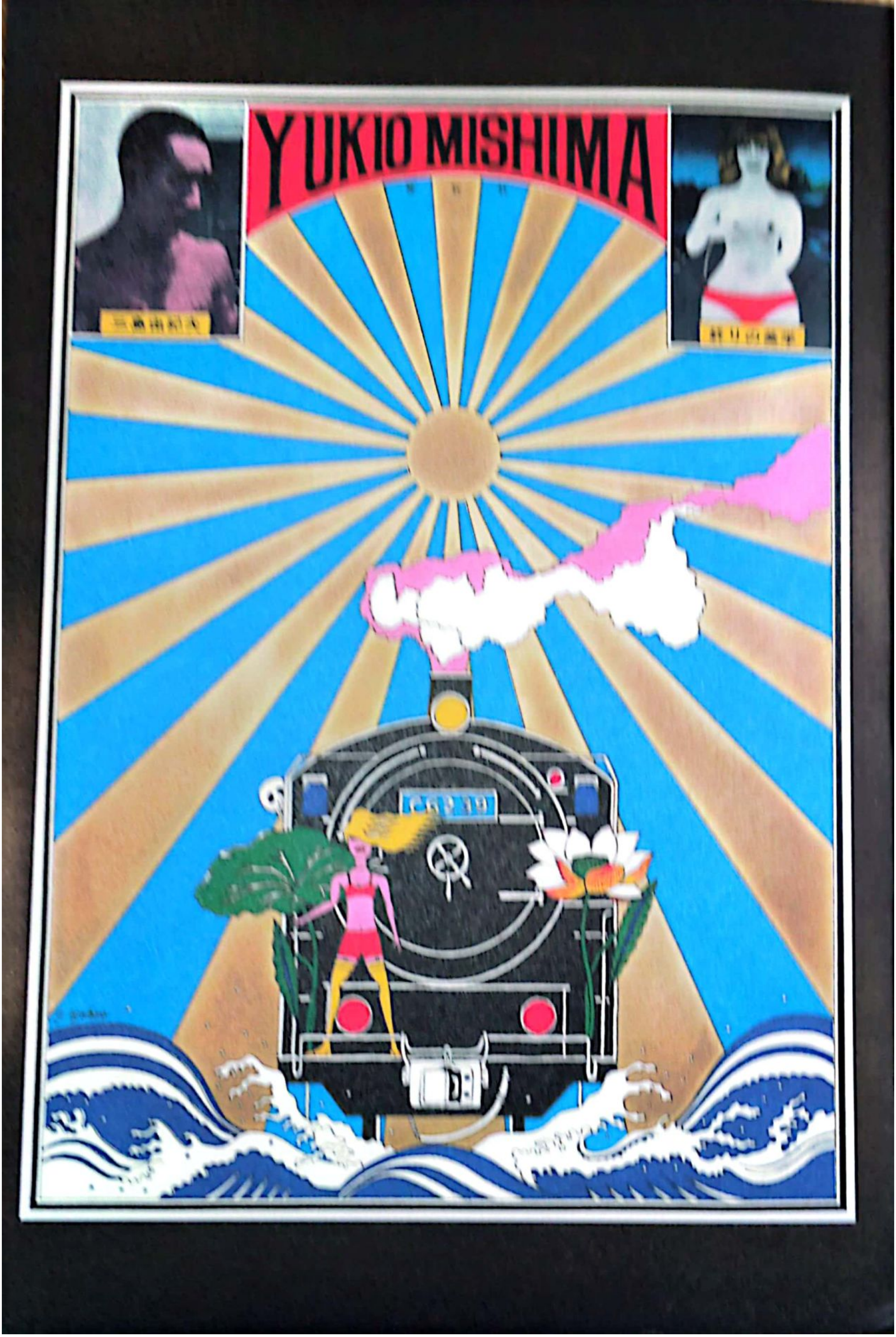


CamScannerでスキャン



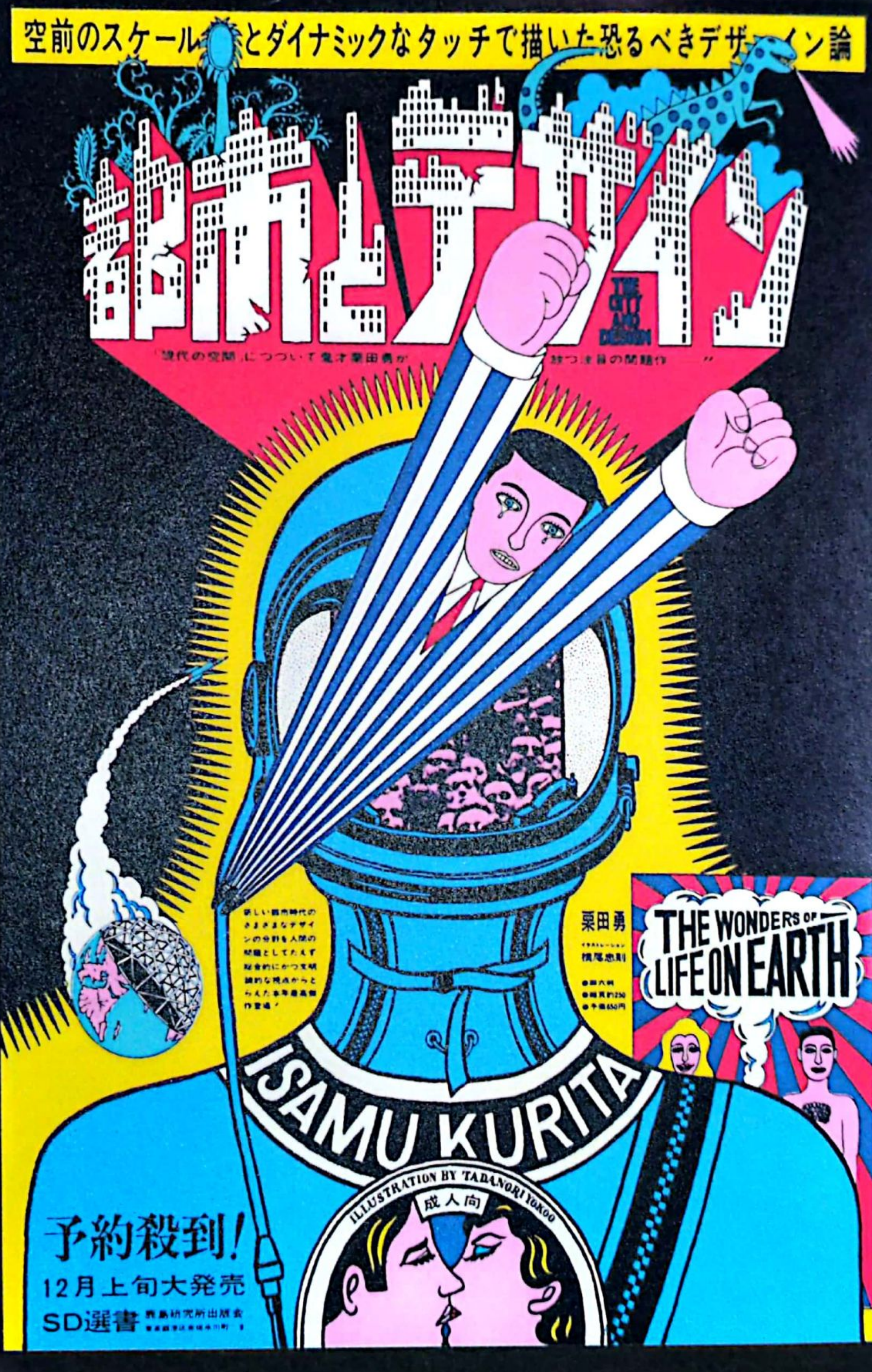


CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

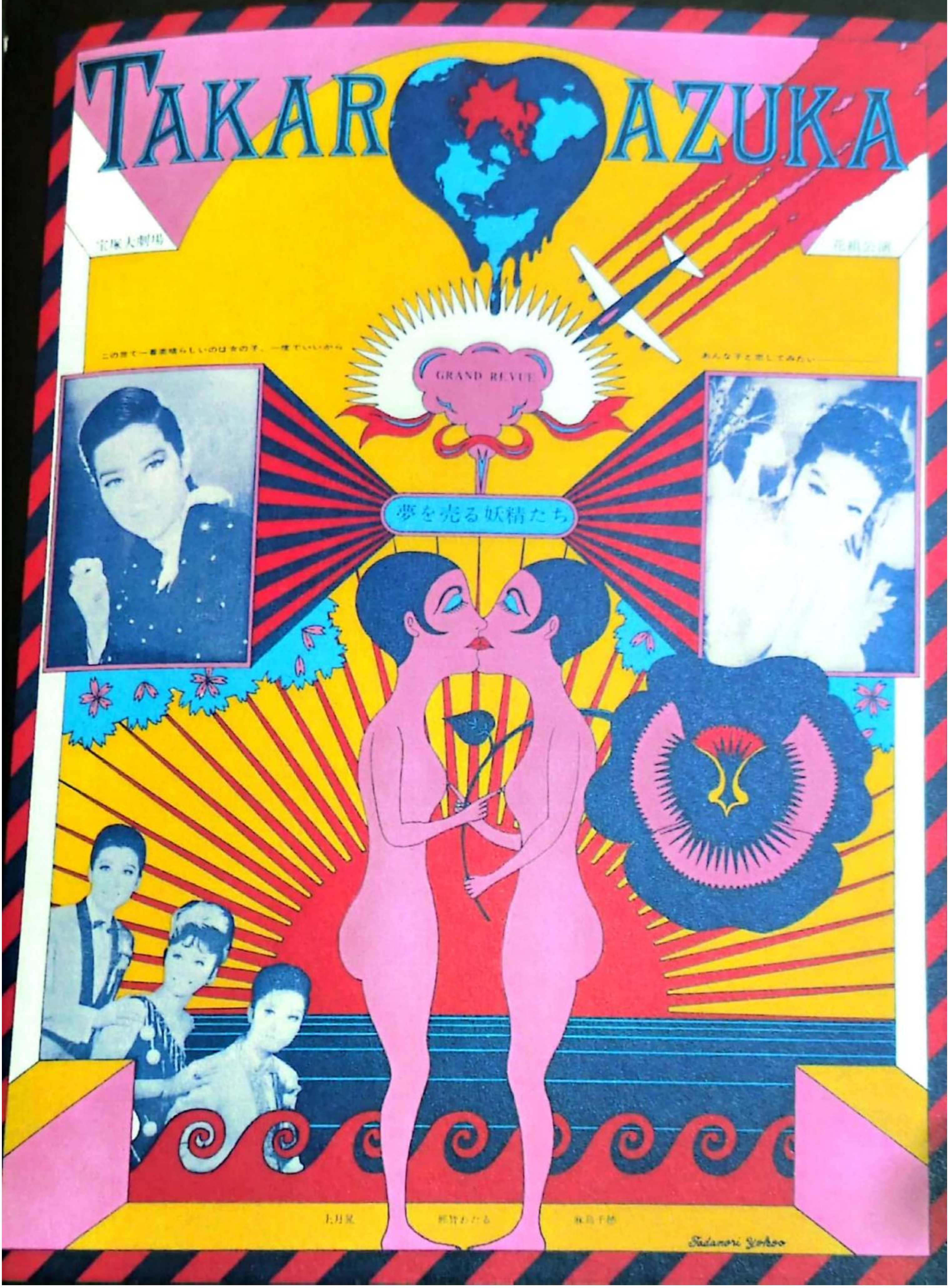
CamScannerでスキャン



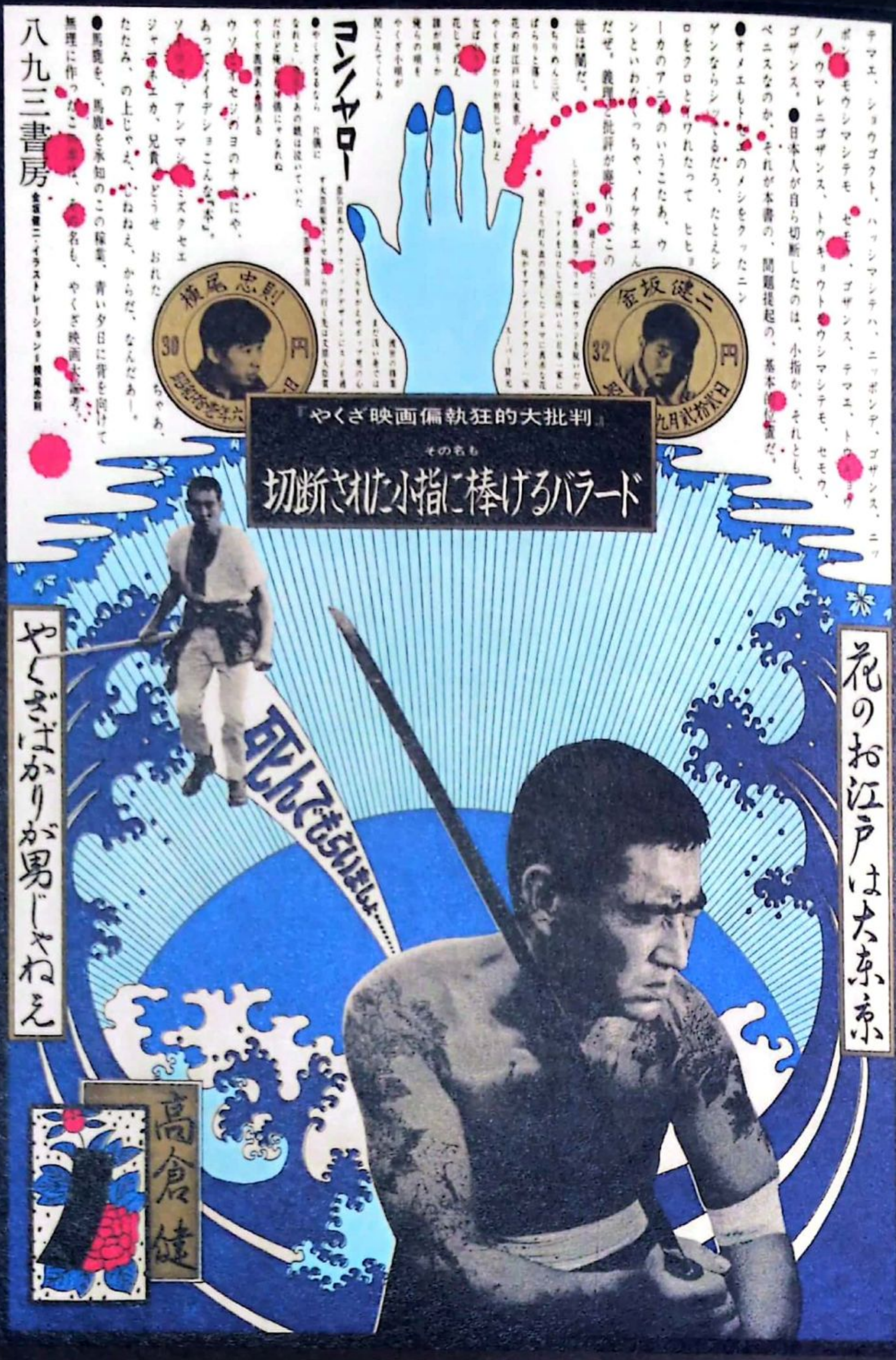
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

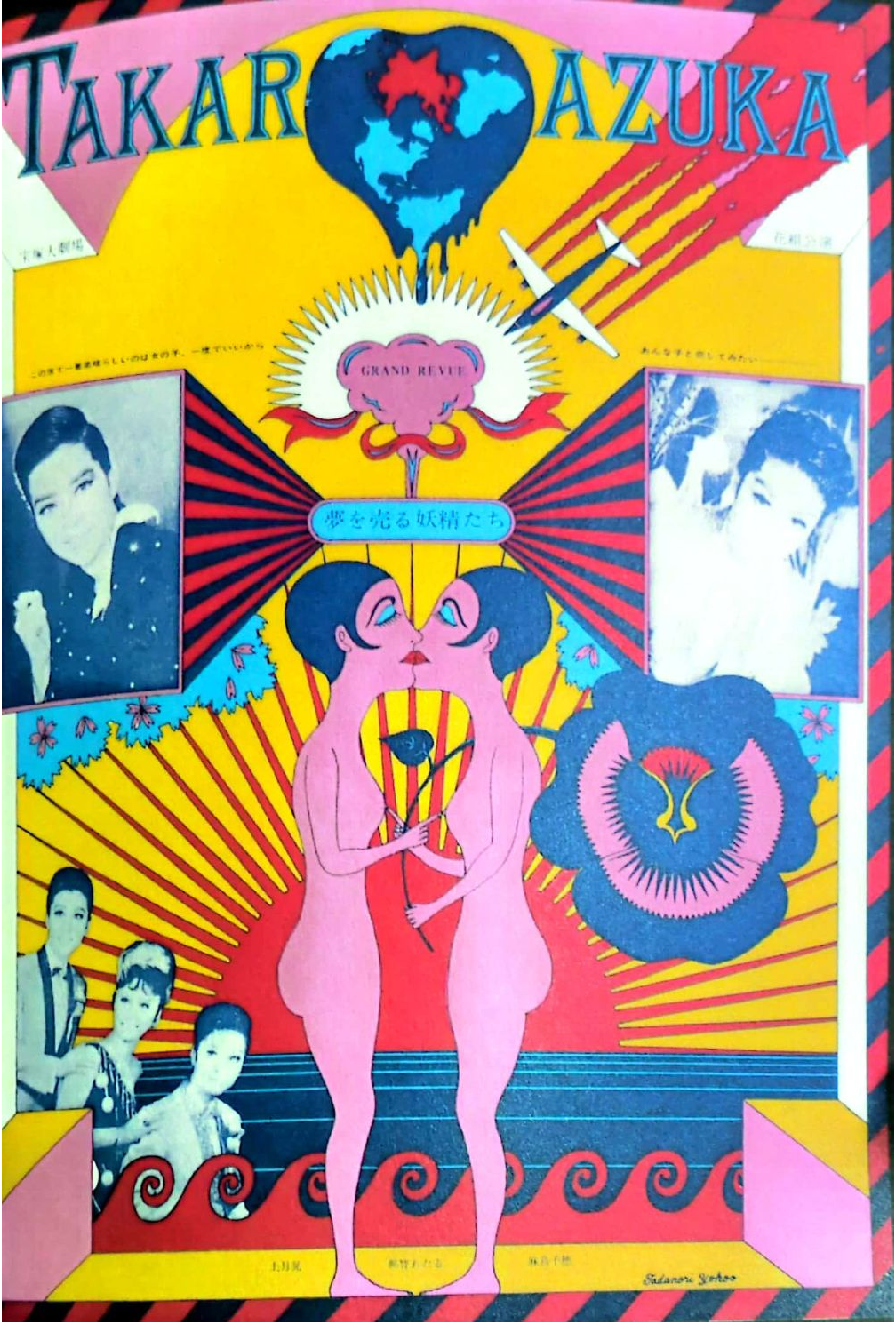
CamScannerでスキャン



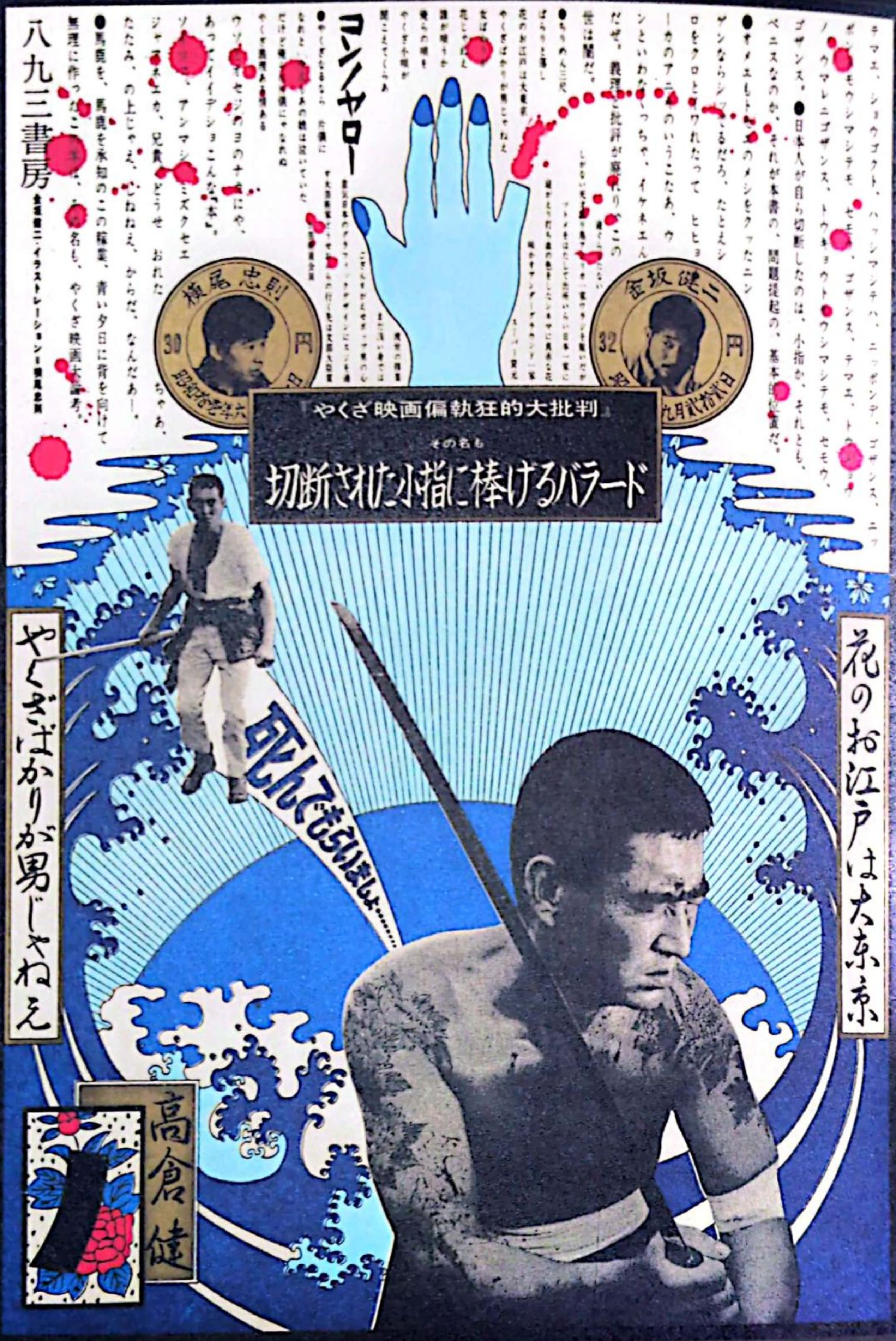
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン


コンノヤロー
金坂健二
横尾忠則
30円
32円
『やくざ映画偏執狂的大批判』
その名も
切断された小指に棒げるバラード
死んでもらいます
やくざばかりが男じゃねえ
花のお江戸は大東京
高倉健
八九三書房
金坂健二・イラストレーション＝横尾忠則

CamScannerでスキャン

横尾忠則年譜1936〜1967：高橋睦郎

1936

六月二十七日午前六時、兵庫県多可郡西脇町の成瀬光政・ツヨの次男として生まれる。この年、昭和十一年は二・二六事件発生、思想犯保護観察法案成立、日独防共協定調印の年に当っている。なお、最近流行の占星術に拠れば六月二十七日は「蟹座」に位置し、この星のもとに生まれた人間は「模倣の天才」だが、模倣から新しいものを作り出す「創造の才能」にも恵まれている。一方「ヒステリックな自己主張にも、人一倍激しいものがある」そうである。

1939

実父成瀬光政の実兄、横尾誠起に養子縁組。横尾家長男となる。養母、稲垣てるゑは故あって、生涯横尾姓を名乗れなかった。子どものなかった横尾夫妻は、軒を並べて住んでいた実弟の次男、忠則を可愛がり、養子縁組を迫ること数度に及び、横尾家、成瀬家のあいだには、忠則の「譲渡証書」らしきものもとりかわされたようである。当時、横尾夫妻は呉服商を営んでいた。忠則は、日当りの悪い納屋のしみと埃の匂いの中の反物のラベル……桜に朝日印、桔梗印など……を、さわると手に金箔がついたことまで、はっきりと覚えている。また、呉服の取引先のカフェや料理屋につれて行かれ、取引のあいだじゅう女たちに可愛がられるのが習性となり、夜になると「赤い灯、青い灯、見につれてって」と養父にねだり、女たちに会わないと眠れなかったという。

講談社の絵本、石井滴水筆「宮本武蔵」の挿絵および文字を始めから終りまで書き写し、全く同じ「宮本武蔵」を一冊作る。横尾忠則による贋作第一号である。

1942

西脇町立幼稚園に入園。模写に並並ならぬ才能を示し、四人の先生たちが最初のファンとなる。桜の木に忠則が書いたルーズベルトとチャーチルの絵を掛け、園児一同、一列に並んで矢を放つなどのこともあった。

1943

西脇国民学校一年菊組に入学。入学早々に川に落ちて左足に重傷を負い、三ヵ月休学。この傷は医者の薬では治らず、当時養母が信仰篤かった黒住教の御神油で治癒。すでに一年生にして、模写とくに細密描写において学校中でいちばんうまかった。

1944

母親が担任の先生にこっそりお中元を届けたため、級長に選ばれる。但し、この級長、クラスの全員に命令して、教室の床を板の目に逆らって拭かせたため、一週間級長に終る。このあと、授業中、飛行機の音を聞いて、見るために中庭に跳びおりて、先生の激怒を買い、「この生徒は授業中に中庭に跳びおりました」と書いた厚紙を首からかけて、一年から六年までを一クラスずつ廻らせられ、全校の人気者となった。このころから、父親の夢遊病的発作がおこる。この昼間は善人そのものの父親は、夜半、寝床からむっくり起きて、目を血走らせて「殺してやる!」など喚きながら、台所に刃物をとりに行ったり、玄関の硝子戸を素手で割って、血まみれになったりした。母親は忠則を抱いて逃げ、発作のおさまるのを待つのが常だった。この怖ろしい夜は忠則の高校三年生のころまでつづく。「戦争以上の体験だった」と、のちに忠則は告白している。この年、遊んでいて、拇指の関節をはずした。

1945

きれいな女の先生が担任になる。ほのかな慕情を感じたが、表現は逆に出て「××先生の×××くさい」と黒板に書いて、先生を号泣せしめ、以後、先生の信任はまったく失われた。八月十五日、大東亜戦争終結。詔勅は隣組の組長のうちで聞いた。「いまにアメリカの赤鬼にさらし首にされるぞ」と年上の子たちは言ったが、そんなこともおこらなかった。やがて町に出まわった英語の漫画の本を買ってきて、英語を勉強し、進駐軍兵士と話をするのが楽しみだった。父親はインチキ石鹸の販売をしていたし、地主でもあったので、人が粉にむせていた世の中にも、米の飯にこと欠かなかった。

1946

石鹸製造がダメになった父親は、機屋から輸出用の衣料を横流ししてもらって、衣料品関係のヤミ屋をはじめた。父親は罪ぶかい商品を自転車の荷台にくくりつけ、カムフラージュのため、その上に忠則を乗せた。家までつくと、こんどは母親が、その商品を腹に巻きつけて、三ノ宮のガード下に売りに行った。或る日、父親と幼い息子が協力して運ぶ途中刑事につかまり「悪質ブローカー」として三面記事になった。川上選手、青田選手にあこがれ、少年ジャイアンツの会に入る。エンタツ・アチャコの映画を見て、友だちと漫才をやり、エンタツ・アチャコの絵ばかり書いて「エンタツ」なるニックネームをたてまつられたのも、このころである。

1947

のちに「のらくろ」とニックネームをつけた男の先生が担任になる。絵の時間、早くべんとうを食べようと、あっという間にデッサンを終えて、先生に注意された。一年からこのかた、絵がうまいというだけの理由ですべてが許され、優等生でとおってきたが、この年HBという女の子に地位を奪われた。忠則はHBさんを「先生がえこひいきしてる」と、山につれて行き、木に縛りつけた。四月八日花まつりの日、ウサギの草をとりに行くと言って出たまま、「エノケンの法界坊」を四回たてつづけに見たため、家では行方不明ということになり、近所中、大さわぎした。学芸会で狂言「ぶす」をやることになり、練習中はじめ太郎冠者をやったが、のち次郎冠者にかわったため、本番で混乱。両者のせりふを一人でやり、中止となった。

1948

漫画家志望。「漫画少年」「こどもマンガ新聞」などに投稿したが、いずれも選外佳作だった。

1949

町村合併で市となった西脇市の市立新制西脇中学に入学。芸大卒業の本格的な絵の先生が来て、デッサンの重要さを力説、細密描写を貶めたため、友だちのあいだでの忠則株が大暴落。講談社の絵本と呉服のラベルだけがほんとうの絵で、印象派など自分とは関係ないと信じこみ、いよいよ内向的となる。どもりがはげしくなり、「どもり矯正法」をとりよせ、「ン、ワタクシ ハ」などと涙ぐましい練習をした。

1950

習字をはじめる。手本そのままに書くのは得意中の得意なので、学校でもたちまち頭角をあらわし、絵にかわって、習字のチャンピオンとなる。全国書道コンクール最優秀賞その他をとり、両親もこれに力を入れる。この年西脇市商工会議所のポスターをつくり、これが最初の印刷物となった。

1951

成績は中学三ヵ年をつうじてクラスの十位ぐらい。地理と英語が得意だった。実際は方向音痴であるにもかかわらず、抽象的な地理となるとツヨかった。英語は小学生以来うまくアメリカ、ニュージャージー州のバーバラ・ホワイトヒルなる女の子と文通。このペンフレンド関係は高校二年までつづくが、忠則が不用意にも「愛してる」と書いたため、断絶した。ソロバンをはじめ、たちまち検定試験四級に合格。これ以上うまくなると商人にさせられると考えて、止す。

1952

兵庫県立西脇高校に入学。隣のクラスに双生児の女の子がいて、一人はエリザベス・テイラー、いま一人はマリリン・モンローに似ていて、どちらも好きだった。ために、二人がかよっている英語塾に入塾したがこの二道かけた恋は実らなかった。

1953

エリザベス・テイラー、アン・ブライス、クラーク・ゲイブル、美空ひばりなどにファンレターを送る。とりわけエリザベス・テイラーには似顔をスケッチブック一冊分送り、タイプライターによる返事とアメリカ発行の切手二十五枚をもらった。武蔵野美大出身の絵の先生が赴任してきて、可愛がられ、突然、岩と水ばかりの絵を描き出す。一方、漫画をあきらめ、日本通信美術学園のテキストで挿絵の勉強をはじめる。二学期、家庭の事情で進学をあきらめ、就職コースに入る。生徒会の文化部副部長に選出される。このころから熊本県八代市の女の子と文通をはじめるが、のち修学旅行で神戸を通ったさいに、会いに行って、美人でないことを確認してガッカリ、以後絶交した。この年、東京からオードリー・ヘップバーンそっくりの女性(二十二歳)が西脇に来て、忠則をたちまち恋のとりこにする。毎日学校に行くと称して、この女性のもとを訪れ、ひねもすキッスして暮らした。老いた両親に早くこどもを見せたい願いもあって、女性と見ればプロポーズしたが、成功しなかった。

1954

兵庫県主催その他の油絵展覧会にどんどん入賞。学校では追試験を受けるほどの劣等生だったが、突如、進学コースに転向、美大を受けることになる。校長以下、全校が「正規の勉強はしなくてよいから、学校のため、絵だけを描いていろ」と応援する。

1955

武蔵野美大に受験すべく上京するが、老いた両親のことを思い、進学をあきらめて帰る。職はない。アルバイトに郵便局で郵便分けをするが、分けるのが早く、たちまちチャンピオンとなる。西脇市の織物まつりのポスターに応募、一等になる。加古川市の印刷工場からスケッチマンとしてこないかという話がありジンク版の版下屋として入社。版下の仕事がかたづくと、神戸にジンク版を運んだり、活字を買いに行ったり、仕事は多かった。取引先に集金に行く途中、魚を釣っていて、先方の伝票受付時間におくれたことにはじまってうちつづく大失策をやらかし、クビになる。両親にクビだとも言えず、毎日べんとうを持ってそのころつきあっていた女性の家にかよって夕方帰っていた。アルバイトに西脇時報社の挿絵を書く。一方、西脇演劇研究会に入り演劇活動をはじめる。同じ会の会員の女の子が西脇時報社に連載してほしいと持って来た小説を見ると、何とその女の子と忠則を主人公にしたエロ小説だった。このころ、神戸新聞にカットを投稿する。

1956

三月、神戸新聞のカット入選者たちが集まって「キリン会」を結成、カット展を催す。見に来た新聞社の人の勧めで、神戸新聞宣伝技術研究所に助手として入る。日宣美の存在を知り、応募。京都竜安寺の観光ポスターだがそのころ知りあった灘本唯人が「鳴門だね」と言ったため、「京都」と書けないまま出品して、みごと落選し、日宣美がすごいところだとの感を深くした。このころ、研究所の先輩のうちに一ヵ月千円で下宿、毎日、三ノ宮ミュージックでストリップを見る。下宿を移ることになり、周旋屋で「女の子のたくさんいる下宿」という注文を出したら、独身の娘八人という下宿を紹介された。そのうちの五番目の娘と親しくなる。兵庫県商業デザイン展新人賞受賞。財産といっては、月刊誌「アイデア」のボロボロの一冊と三島由紀夫「金閣寺」だけだった。

1957

九月ごろ、新聞会館に勤務していた谷泰江なる女性が、忠則の友人に「横尾忠則という人を紹介してくれ」と依頼。友人のはからいで三ノ宮のミタスという喫茶店で会う。泰江さんはジュースを飲み忠則はアイスクリームを食べた。忠則はすぐ泰江さんの裸を想像し、結婚でもしようかなと思った。ともに映画「昼下りの情事」を見たが、泰江さんの顔をみつけてくれるので、この人なら入場料は無料。しかもさっさと席で入場料は無料。しかもさっさと席をみつけてくれるので、この人ならたよれると直感し、一週間後に婚約した。以後デイトを重ねたが、費用はもっぱら泰江さんの十万円の貯金から出た。するうち、泰江さんは新

CamScannerでスキャン

しいアパートをみつけ、忠則の荷物を全部運んでしまう。忠則は、あとからのこのこついて行った。同棲生活から新婚生活へ。二十一歳の新郎と二十二歳の新婦である。当時の収入は忠則七千円、秦江夫人九千円。夜になると鏡の前で二人仲よくメーキャップした。

朝、洗顔の時、洗い落とすとバカみたいに見えるので、目の下に茶いろをうすくひいて出勤。夫人も夫のメーキャップに大賛成だった。この年、日宣美にポスター三点を応募、アサヒゴールド入選、モダンバレエ「青い炎」「ふしぎなふえふき」で日宣美奨励賞。日宣美会員に推される。なお、この年は、勝井三雄、伊坂芳太良、和田誠、安斎敦子、江島任などの俊秀が輩出した年でもある。

1958

とにかく東京に出たかった。

1959

神戸新聞を退社。寿屋にあこがれたが果せず、ナショナル宣伝研究所に入る。ビクターの新聞広告、グンゼのカレンダーなどを手がける。雑誌「グラフィス」で、まだ誰も注目していなかったプッシュピン・スタジオに注目、大いに親近性をおぼえる。神戸労音の機関誌の表紙を担当。田中一光にあこがれたのもこのころである。

1960

一月、ナショナル宣伝研究所が東京に移転。ともに上京したが、一ヵ月で退社。田中一光を訪ねた。喫茶店で「何にするの?」と問われ「何でもいいです」と答えて「物事は赤か青かハッキリするものだ」と叱られる。忠則はその年結成された日本デザインセンターに入りたかったが、ハッキリとは言えず、それとなく田中一光を訪ねては、入れてほしそうにしていた。四月、不吉な夢を見た翌朝、父親の死を知る。養家を売りに出して、西脇、東京往復生活がしばらく続く。五月、風邪で入院していた夫人からの電話で長男英の誕生を知り、びっくりする。このころ、田中一光と合作で神戸労音の「椿姫」のポスターを手がける。忠則のイラストレーションは上出来とは言えなかったが、田中のデザインがよかったので、大いに自信を持った。六月、永井一正、木村恒久、片山利弘らのバックアップで日本デザインセンターに入社。早々に安保闘争の町に亀倉雄策作るハトのプラカードを持って繰り出すことになる。日本デザインセンターは左右いずれにもつかず、その意味でのハト・マークでもあったが、忠則にとってこのデモは、安保より、田中一光、永井一正、宇野亜喜良などと腕をくんでデモること、つまり、このえらい人たちと連帯感を持てるということに意味があった。帰途、タクシーのドアで指をはさんで骨折、つづいて人さし指と中指が瘭疽に罹り、爪を剥いだ。鈍痛が約半年つづくが、それよりも、あこがれの会社に入る早々、仕事ができなくなったことが痛く、会社の廊下で偉い人に目が合わないように顔を伏せて歩いた。心身二つの痛みを忘れるためにディズニーの映画ばかり見て歩いた。この年の日宣美提出作品の「年上の女」は、口に筆をくわえて描いた。或る日、日本デザインセンター重役の山城隆一に「キミはイラストレーションなんか止めなさい」と言われ、「やめます」と答えたが、内心は「やめるもんか」と思った。この事件がなかったら、イラストレーションを止めていたかも知れないと、のちの忠則は山城に感謝している。

1961

痛みと闘いながら、田中一光の紹介による京都労音のポスター、永井一正のアート・ディレクションによる大和証券DM「ダトック」のイラストレーションなどを手がけた。このころ、田中一光を介して知り合った和田誠と友だちになりたいと思ったが、ムッツリしてこわく、これはよっぽどいい仕事をしないと相手にしてくれないな、と思った。ところが、或る日、和田から電話があり、東芝のレコード・ジャケットをいっしょにやることになった。

1962

それまで住んでいた渋谷の百軒店の安アパートから池尻に越す。バーの女たちの多いアパートで、夜、一人でいると女たちがまんじゅうなどを持ってきてくれた。隣室にストリッパーが住んでおり、夜半に「イチニッサン、ハイ。イチニッサン、ハイ」という男の先生によるダンスのレッスンの後ヘンな男女の声が聞こえた。毎日、渋谷SSミュージックでストリップを見た。会社ではヴィジター部に属したが、給料は安く、いい仕事もない。京都労音の仕事に一所懸命だった。宇野亜喜良らとパーティーをひんぱんに催した。宇野亜喜良、梶祐輔と絵本「海の小娘」を出した。後藤一之、原田維夫が日本デザインセンターに入って来て、大いに刺激を受けた。寺山修司とはじめて会う。「どこへ行かれるんですか?」「ボクシングだよ」「ボクシングはいいですか?」「ボクシングは血と涙のブルースだよ」寺山は有楽町の人ごみに消えた。

1963

前の年、九州から上京して日本デザインセンターに入っていた「焼芋みたいな田舎っぺ」高橋睦郎を知った。プッシュピン・スタジオとくにポール・デイビスの作品に惹かれ、いずれそういうスタジオを作りたいなと思いはじめた。会社では、まったく飲めないくせにアサヒビールを担当。秋から藤原歌劇団のポスターをやりはじめる。祖師谷に越した。

1964

日本デザインセンターを退社。宇野亜喜良、原田維夫とスタジオ・イルフィルを結成。さあ、これから仕事をやるぞと思ったが、仕事がなく、月収四千五百円という月もあった。十月、和田誠とヨーロッパ旅行。和田は毎晩ミュージカル、忠則はストリップ小屋という生活だったが、和田はものすごく親切で、事務的なことはすべてやってくれた。養母稲垣てるゑがガンを宣告され入院。付添いのベッドで描いた春日八郎のポスターが京都労音の入れるところとならず、以後仕事が絶える。しかし、このポスターは、美術出版社刊「日

CamScannerでスキャン

本民話グラフィック」の「堅々山夫婦庭訓」(高橋睦郎・文)のイラストレーションとともに大きな転機となった。

1965

二月、長女美々誕生。五月、日本橋吉田画廊で、宇野亜喜良、真鍋博とそれぞれ一週間ずつ個展。イラストレーターが画廊で個展をやるのは、はじめてのことだった。会場にて高橋睦郎の紹介で三島由紀夫を知る。意外に色白の、声のセクシーな人だなと思った。スターが気軽に話してくれたことが何ともうれしかった。三島の紹介でタイム・ライフ社の記者に取材され、ライフに載る。九月、マックスファクターの仕事で忙しくなった宇野亜喜良がイルフィルを脱けたいと言い出して、スタジオ・イルフィルは解散。千駄ケ谷にアパートを借りて、仕事場とした。小康を得ていた母親が再入院。ペルソナ展の話がおこり、付添いのベッドで作品を制作。ここで作った「ガルメラ商会」「自分自身」のためのポスターで、れいの春日八郎のポスターによる転換が定着する。ガルメラ商会主人、土方巽の印象は、一見、犯罪者の顔だが作品を見ると、やっぱり犯罪者だった。十月のアニメーション・フェスティバルに「堅々山夫婦庭訓」をアニメーションにして出品した。同じ月、十一万円也の貯金通帳と枕絵をにぎりしめて、母親が死んだ。息子に対して、およそ性的な話はかけらもしなかった母親の臨終の手の中の春画に、「母子相姦」的な強烈な印象を受けた。田中一光、永井一正夫妻、忠則、夫人の五人だけの死体安置室でのさびしい通夜であった。

1966

二月、雑誌「話の特集」が創刊。この雑誌は編集長の矢崎泰久を中心にライターの栗田勇、小松左京、寺山修司、イラストレーターの宇野亜喜良、長新太、和田誠、カメラマンの高梨豊、小川隆之、篠山紀信、立木義浩らが集まってつくった、一種同志的な気ままな雑誌で、忠則は表紙と「人物戯論」を担当した。四月から週刊誌「女性自身」に連載の三島由紀夫「終りの美学」のイラストレーションを描く。このノーベル賞候補に擬せられた国際的作家との共同作業に、ファイトも湧かし、大いに自信もつけたようである。成城に移る。六月、南天子画廊で個展、グワッシュと油彩画三十点を一ヵ月で書きあげた。書きあげきれなかった一点は「制作中」と名付けられた。この個展の表面的な特徴は毒々しい色調で、生得的なリリシズムは内にかくされたかに見えた。このころから批評家からデザイン学生に及ぶ忠則ファンが目立って多くなる。映画、とくに浅丘ルリ子と高倉健の熱烈なファンとなり、三月からの深夜興行の全作品を見る。八月、滝口修造を中心に、画家、彫刻家、建築家、作曲家、グラフィックデザイナーたちが集まってエンバイラメント展を開催。忠則は同展に四枚のポスターを出品した。演劇における河原乞食の正統性を標榜し、状況劇場を主催する唐十郎と知り、「腰巻お仙」のポスターを作る。アメリカの雑誌「プリント」に作品が紹介される。

1967

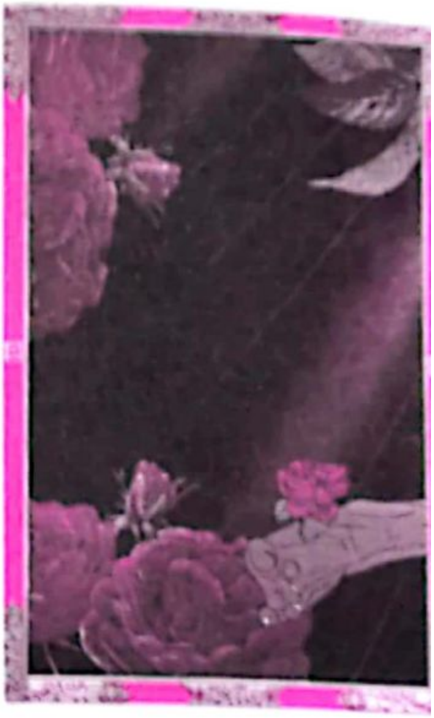
ますます浅丘ルリ子と高倉健熱は高まるばかり。

一月、タイム・ライフ社の紹介で、マイアミのシブイ・ギャラリーで個展が開かれたはずだが、主催者が作品だけを持って行って、音信不通。ニューヨーク近代美術館がポスター十五点を買上げて、パーマネント・コレクションにする。二月、雑誌「ライフ」が忠則をクローズアップ。「ドラマティックよりシアトリカル」を目ざして、寺山修司の演劇集団「天井桟敷」に参加。美術全般を担当する。この新しい演劇集団の成功は、寺山の興行的才腕もさることながら、忠則の美術効果によるところも大きいと言われる。三月からTBSテレビ「ヤング720」のレギュラーメンバーとなる。五月、ドイツのフランクフルトでポスターの個展。このころから、テレビ、週刊誌などへの登場多く、精神界と俗界の詩王をかねたヴェルレーヌ的存在となる。しかも、「もうかるヴェルレーヌ」である。六月、新聞「デザインジャーナル」に喪主横尾泰江、葬儀委員長田中一光の名で死亡広告を出す。以後も、銀座マツダビル地下の万国博インフォメーションセンターの壁画、白木屋インテリアショーの制作、横浜市民ギャラリーの「今日の作家展」にデザイナーとしてはじめて選ばれるなど、精力的に仕事をつづけ九月渡米、十月二日から十四日まで、ニューヨークのポスター・オリジナルス主催の個展。結果は大成功で各種新聞、雑誌でとりあげられる。ポスターの値段は一枚百ドル〜百七十五ドルで、アメリカの一流ポップ・アーチストをしのぐ高さである。ニューヨーク近代美術館で一月から開催予定の世界のポスター展 "Word and image" に八点入選(これは個人としては最高の点数)、「腰巻お仙」のポスターが一九六〇年代の主要作品に選ばれた。ポスターが絵葉書となって発売され、他の作家と、一、二位の売上げを競った。また、この展覧会のためのポスターとパンナーのデザインをピーター・マックスと競作、その結果忠則のデザインが採用され、雑誌「タイム」「ニューズウィーク」などに作品が紹介される。ポップ・アーチストのジャスパー・ジョーンズ、イラストレーターのポール・デイビス、トミー・アンギュラー、ピーター・マックスなどと親交を結ぶ、とくにデイビスとは共同作品 "YOKOO AND DAVIS" を出版のため、ともに時間を過ごすことが多かった。ニューヨークはよほど忠則の気に入ったらしく、当初の二十日滞在の予定が四ヵ月に延びた。ほとんど毎日グリニッチ・ビレッジでサイケデリック・ロックに凝っていたらしい、十二月二十四日帰国したこの享年三十一歳の亡者、アメリカという地獄から何を持って来たか、これからが大いにたのしみである。

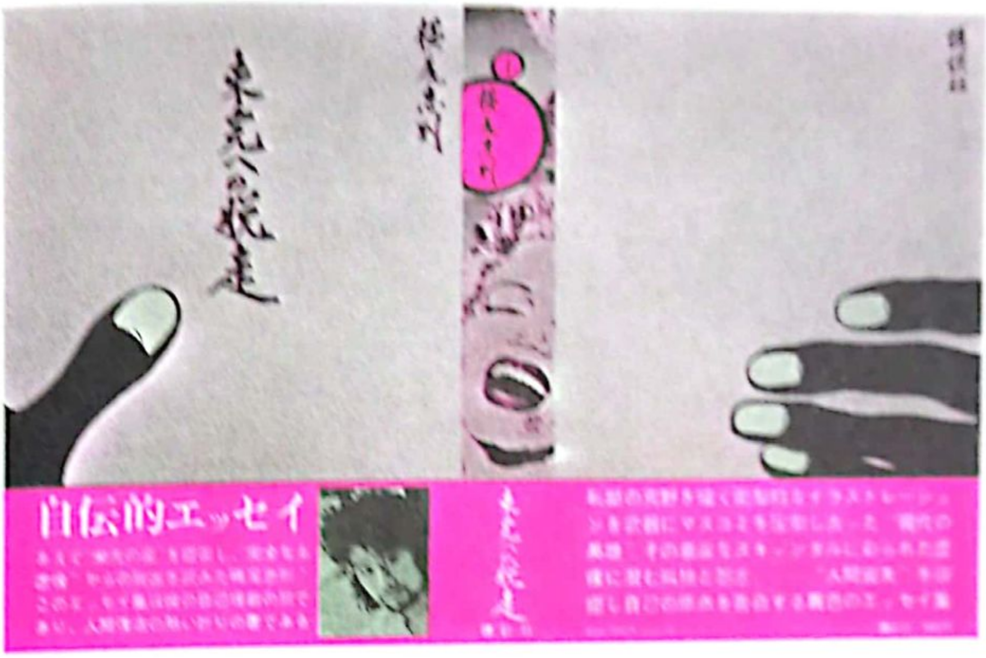
CamScannerでスキャン

絵金展
幕末土佐奇才絵師

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

横尾忠則月譜1968・1～1970・12：高橋睦郎

1968年

1月　帰国第一作ポスター「やくざ映画のすべて」制作。

　前年十二月末、ニューヨークでのサイケデリック体験を頭と心にいっぱい充たして帰って来た忠則を待っていたのは日本のサイケブームであり、サイケデリック活動を行なう以前にすでにサイケのスターになっている自分じしんの虚像だった。渡米前のサイケのサの字も知らず作った作品がサイケの見本になっていたのである。もはや、どんな活動の必要もなかった。自分の存在じたいがサイケなのだった。ともあれ、螢光色をマテリアルにしたこの帰国第一作は、忠則のサイケデリック体験の肉化（風土化）ということにはなろう。

2月　細江英公写真展「あまりにも悲劇的な喜劇」ポスター。

　のちに写真集「鎌鼬の書」として刊行されたこの写真群は、土方巽なる非凡な舞踏家に出会ってなされた非凡な写真家、細江英公の写真による舞踏と言ってよい。ポスターというかたちで、この二人の舞踏にかかわった時、忠則じしんもデザインによる舞踏を行なったのである。ポスターの上の手形は土方巽の手形であり、ポスター上でこの舞踏家が舞踏を行なった痕跡であるが、このポスターじたいがまた忠則の舞踏の痕跡なのである。

3月　粟津潔編集「横尾忠則遺作集」出版。唐十郎と状況劇場「由井正雪」ポスター。ヘンリー・ミラー絵画展ポスターおよび会場ディスプレイ。

　粟津潔の編集にかかる忠則の作品集が遺作集と名づけられたきっかけは、一九六七年六月、忠則じしんが某デザイン紙に出した死亡広告によっている。これを悪ふざけと見る向きも多かったようだが、忠則が新しい仕事へ対う時には必ず仮死という儀式を通過することは記憶しておかなければならない。死ぬ者は、死んで甦るために死ぬのである。

　「由井正雪」は河原乞食の正統を標榜する状況劇場が新宿花園神社の境内にテント小屋を構えて上演した事実とともに、忠則がこの年ものしたただ一点のイラストレーションによるポスターを持ったことにおいても記憶されなければなるまい。このポスターにも螢光インキが用いられている。

　ミラー展のポスターとディスプレイを二つに分けることは、正しくない。この二つは、じつは分かつことのできない一つのものなのである。一枚のポスターが完結した宇宙であるとともに、無数のポスターが天井と床に張りめぐらされた個展会場ぜんたいが宇宙であった。因みに言えば、この仕事において、忠則のサイケデリック体験は、最もよく空間的に生かされたと言えよう。大方の批評はデザイナーの発言が強すぎて、画家の作品を見せるという機能を果たしていないというものだったが、ディスプレイ写真を見た画家じしんからは絶讃の手紙が届き、以来、ミラー夫妻と親交することとなる。この時のポスターは後にニューヨーク近代美術館を通じて販売されることになった。

4月　草月アートセンター・デザイン批評主催のシンポジウム「なにかいってくれ、いま、さがす」の第一回「変わった？　何が」で、一柳慧とサイケデリック・ショウ構成。

　一柳とはニューヨークでともにサイケデリック・サーカスにうつつを抜かしあった盟友である。二人が最初もくろんだのはアメリカ級のサイケデリック・ショウだったが、じっさいには資金難で不可能だった。このシンポジウムでのショウは、二人の夢のごく不本意な縮小版ということになる。そこで、忠則はこのショウを語原的にサイコ・デリシャスというべきところを、サイテ（最低）・デリシャスと呼んだ。なお、この最低には日本のサイケ・ブームへの皮肉もこめられていよう。

5月　万国博せんい館の仕事、本格化。写真集「私のアイドル」（写真＝篠山紀信）の撮影はじまる。「高倉健写真集」の編集をはじめる。

　万博の仕事を引き受けた理由を、忠則は「お金が欲しかったから」と言っている。このきわめて直截な表現は、ある意味では体制の対極で仕事をしている忠則が、体制側の万博に参加した矛盾に対する一つの回答とも言えよう。これを、金銭のための体制べったりと取るか、金銭による体制への痛烈な皮肉と取るかは、受け取る側の自由である。但し、万博を安保との関連において見る見かたは当時にはなく、六九年末に顕著になったということは考慮に入れるべきだろう。せんい館について言えば、忠則は「建築とは破壊されて廃墟になった時、は

CamScannerでスキャン

じめて完成する。それまでは工事中であるにすぎない、とする考えのもとに、工事中のかたちで足場と人間を凍結させた建築を企てた。近代科学の粋を集めた万博会場で、せんい館がきわめてプリミティブな特異性を示していることは事実であろう。

忠則の人間形成の形相因になったのは、幼時以来のかれのアイドルたちだった。忠則の一飛躍には必ず、一種の自己殺戮が必要だったように、また、かれのアイドルたちの殺戮が必要だった。写真集とは、殺されたアイドルたちの墓にほかならない。

高倉健写真集において、この事情はいっそう顕著であろう。高倉健は忠則のアイドル中のアイドルだからである。但し、忠則じしんは、写真集は高倉健へのラブレターであり、ラブレターを書いたことでアイドルとしての虚像高倉健は乗り超えられ、実像高倉健へのラブがはじまったと言っている。要するに、虚像高倉健が墓に入れられて、実像高倉健がはじまったのである。ほかのアイドルは、忠則にとって虚像のみで終ったというべきであろう。

6月　ワイドショウ番組にさかんに登場。

忠則を特徴づける要素の一つに、少年時からの永劫的神経がある。生身の人間と対話することが怖い。怖いだけならまだよいが、同時に多くの人間にふれたい。このか裂した永劫的神経を基盤にするのである。テレビやラジオで自分を複製化して複製化し、いわば遠くなることで実像となる方法は、忠則が追いかけられて見いだしたが、「愛」という形をとる。

7月　映画「新宿泥棒日記」撮影開始。レコード「オペラ横尾忠則をうたう」制作開始。

大島渚の監督にかかる毀誉褒貶かまびすしいこの映画の批評は一先ず措くとして、忠則にとっては、はじめてほんとうの意味で他者になることを得た機会だったと言える。前々から扮装への嗜好を言っていた忠則のことだ、あるカタルシスを味わったのは事実であろう。但し、映画じたいが現実と非現実の関係においてあいまいであったように、忠則じしんと映画の主人公の関係もあいまいであった。そのカタルシスも、おそらくは不充分であったろうことは、想像できる。

レコードについては、映画における肉体が声に変っただけと解釈してよかろう。すなわち、忠則は歌手に化け、すべてによってうたわれたのである。俳優に化け、映画によって演じられたように。

8月　浅丘ルリ子に裸体写真を撮影される。

以前、浅丘ルリ子のヌードのイラストを描いて石原プロとのあいだにあつれきを生じたことがある。そのこととの相殺の意味を持つ、このスターによる撮影は、忠則がかれのアイドルを完全に凌駕するための儀式でなくて何だろうか。当時はまだ忠則にとっては高倉健と並んでルリ子の時代だったが、一年余りのちにはルリ子ファンからおりたことを宣言するに到るのである。

9月　国際版画ビエンナーレ・ポスター制作。学芸書林「伝統と芸術」第1巻口絵担当。二度目の渡米。

ヘンリー・ミラー展ポスターのテーマをさらにおし進めたこのポスターについては、朝日新聞小川正隆記者の「この作品こそ国際大賞を受けるべきだ」という批評を挙げておけばじゅうぶんだろう。なお、この国際展のカタログは、ポスターのデザインが表紙のテーマになっていて鮮やかだった。

ここにあつかった伝統芸術は歌舞伎にしろ、能にしろ、ほとんど見たことのないものばかりである。しかも、それらの見える外側から内側の暗い情念にまで到達しえていることは、忠則のきわめて風土的な才能を証して余りあろう。

今回の渡米は、万博せんい館のための視察旅行が名目だったが、モントリオールには行っていない。万博の中に万博の問題は何もない。アメリカ、ことにニューヨークでできるだけ長く生活することの方が、はるかに収穫が多いというのが、忠則の理屈だった。

10月　ロサンゼルスでヘンリー・ミラーに会う。ニューヨークに十八日間滞在し帰国。

このセックスの世界の偉大な探険家の作品を読んだことのない忠則には、ミラーはただ、ピンポンのうまい、いいおじさんという感じしかなかった。ミラーは忠則を見て「きわめて若い部分と自分と同じほど老いた部分とを持ち合わせている。そこが神秘的だ」と評した。また「きみがダリなら、料理の中に毒を入れてやるんだが」とも言った。

　ニューヨークの十八日間は、グリニッチ・ビレッジを中心にフウテンとして遊びまわった。二度目のニューヨークは、忠則には友人の多いふるさとという感じがした。但し、サイケデリックはニューヨークでもすでに風俗化して、活気がなかった。ふるさとの生活が十八日間で終ったのは、金がなくなったためである。この十八日間に新しく知った友人には、スタインバーク、ウェッセルマンなどがある。

11月　東映映画「日本セックス猟奇地帯」タイトル・デザイン。
　五社の映画にかかわった最初である。

12月　江戸川乱歩全集の挿絵はじまる。
　乱歩の作品については、忠則は少年向けの小説以外、読んだことがなかった。全集の挿絵を描くに当っても、活字を拾った程度にすぎない。乱歩の小説では文章じたいがオブジェになっているからと忠則は言うが、乱歩の場合に限らない。すべてを知った時、人は動けないものであるという事情を、忠則はア・プリオリに知っていたと言うべきだろう。

1969年

1月　朝日ジャーナルに「ビートルズ論」執筆。
　前年十二月に頼まれた二十枚の原稿に

から目を通した。この執筆のために断った仕事は数知れない。以て、忠則のビートルズ熱を知るべきであろう。ビートルズと忠則の関係は数年前に溯ることができる。はじめは音楽は知らず、ルックスから入った。わけても、リンゴ・スターが好きだった。次に共感したのは、ビートルズが揃いも揃って劣等生だったという点である。つまり、知的なものより反知的なものに芸術との深い関連を見いだしたのである。ビートルズの存在の大きさを身にしみて感じたのは、一回目のニューヨーク生活においてだった。さまらばれ、この二十枚の讃歌もまた、ビートルズのための美しい墓でなくて何だろうか。

2月　話の特集にイラストレーション「色情に迷って理性を失うの図」六点を描く。
　絵葉書ふうの風景を背景にエロ写真の男女をシルエットで処理したスタイルは、ポルノグラフィーにまったく新しい方法を、つまりはまったく新しい内容を加えたということになろう。なお、この作品は表現の自由がどこまで許されるかという点での、官憲に対する挑戦と言ってよかった。果たせるかな、警視庁より話の特集に戒告の電話が入った。この作品が表現の自由のぎりぎりの限界であることが証明されたわけである。

3月　壱番館画廊にて版画展「今日の問題点展」に版画としての処女作「写性」三点

　イラストレーターとしては主客転倒のこの仕事ぶりを、忠則じしんは、デザインの問題はデザインの中だけでは捕えられず、生きる総体の中にあるはずだと言っている。全人的な生への欲求が死の恐怖をしずめてくれるとも言っている。なお、この月の数少いイラストレーションの仕事にマリー・ラフォレを描いたポスターがある。忠則は、このポスターを「胎児のとむらい」と言っているが、この胸の悪くなるような甘さをヘンリー・ミラー展ポスターや国際版画ビエンナーレポスターの陰画として見る時、横尾忠則の全体がくっきりしてくる如くである。

4月　藤純子に会う。
　きっかけのコマーシャルの仕事はキャンセルになったが、このやくざ映画のプリマ・ドンナとは以後、友人となる。

5月　雑誌デザインに自伝的デザイン論「原点から幻点へ」の連載をはじめる。「繭の会」ポスター制作。
　原点と幻点……このいささか語呂合せ的な対話の中に、横尾忠則の意味がすべて含まれているとも言える。原点は抽象であり、幻点は日常であるかに見える。じじつ、忠則はあるところで、抽象よりも日常への関心を告白している。しかしまた、原点は形而下であり、幻点は形而上であるとも言える。忠則のこの二年ほどの仕事には形而上的関心が著しい。一言で言えば、日

表会である。ポスターは見かけの静けさの奥にかくされた能の怖ろしいエネルギーを表現しえた、ほとんど唯一のポスターと言える。

6月　日活映画「日本残侠伝」ポスター、キャンセルになる。二十七日、第三十三回目の誕生日を迎える。

「日本残侠伝」のポスターは、やり変えやり変えしているうちに、いつの間にか葬式のポスターになってしまった。折も折、日活社長夫人が死亡。そのことが直接の理由かどうかは不明だが、ポスターは突如、不採用となった。

三十三回目の誕生日の印象を、忠則は「世はすべて事もなし」と言っているが、あるわけはない。有事なのは世の方ではなく、忠則の側であるから。

7月　銀座松屋「フォト・デザイン展」出品。北条きく子に悪霊にとり憑かれていると宣告される。

写真とデザインのプリミティブな結婚に立ち返ることを意図したこの小展覧会で、忠則は、一つの作品の制作プロセスを分解したアクリル版を重ねることで、部分⇅全体の図式を示した。仮に光の方法とでも呼ぶべきこの方法は、九月の東京画廊における個展のテーマに発展することとなる。

日本テレビのリハーサル中、突如、悪寒を覚える。居合わせた霊感女優、北条きく子が祈禱すると、忠則の背中で数珠が弾けた。悪霊が憑いているのだそうである。とっさに忠則の考えたのは亡母のことである。自分の才能や努力をはるかに超えて、ここ二、三年、いい仕事ができたのは亡母の助けだと思ったのである。悪霊を払うことを拒んだ。

8月　連続テレビドラマ「新平四郎危機一発」に出演。大映映画「新宿番外地」に出演。

忠則にア・プリオリな変装願望が、「新宿泥棒日記」のあと、久しぶりにかなえられる機会が訪れた。この頃になると、忠則の中の変装願望は、自分であることの重さから一時のがれるという消極性から、実人生と虚人生が同時に生きられるという積極性へと、その意味づけが変化して来ている。変装願望から変身願望というほどの成長と見るべきかも知れない。配役は平四郎の友人でスナック経営者の北小路秀麿。

「新宿番外地」で忠則が書いた自分じしんのコンテでは、ドスを持った男が田舎家を跳び出し、数年かかって野を駈け、山を駈け、ついに新宿の一スナックに到る。一種のトンネルの奥にあるそのスナックには、自分そっくりの男がいる。男はそのもう一人の自分を殺す。ウイリアム・ウイルスンばりのこのコンテは、忠則の他人変身願望が自己殺戮願望のヴァリエーションであること、かれの言う虚人生が実人生を殺戮するのだが、そのことは同時に実人生を殺すことにもなりかねないことを暗示している。このコンテの意味は監督に理解されず、結局のところ、殺すのは自分とは似ても似つかぬやくざの大男ということになった。

9月　しばしば幻影を見る。東京画廊個展。日宣美総会で終始、解散を主張。

一つの例。自室で寝そべっていると、ドアをノックする者がある。ノックの音が七回つづいてドアが開き、大男が入って来た。大男は忠則の腹の上に乗った。声を出そうとしたが、声が出ない。左足首を引っぱられて跳び起きると、壁面の本棚に大きな影がうつっている。声を挙げて灯りをつけたが、何もない。翌朝、さっそく神棚をつくった。その夜の夢……サムライに取り囲まれている。殺されるぐらいなら腹を切りたいが、その勇気もない。ひたすら許しを乞う……。

今回の個展の中心テーマは、さきに「フォト・デザイン展」で試した制作プロセスの分解と総合だが、「光」または「虹」の方法と考えたい。第一回のニューヨーク滞在とサイケデリック体験の以前を闇または地獄の時代とすれば、以後は光または天国（怖ろしき天国！）の時代とすべきであろう。光はついには虹の七色に分解されて、こなごなに砕けるほかはあるまい。この個展のあとに忠則のめざすべきは、さらに新たな地獄であろう。

忠則が日宣美の解散を主張する理由には、日宣美の有名性に対する疑問がある。忠則の考えによれば、デザインにおけるデザイナーの名は偶然にすぎず、デザインは本来匿名性のものでなければならない。日宣美はたとえばモデル・クラブのように職能団体となり、日宣美展の代りに上手も下手もごちゃまぜのカタログでもつくるべきだと、忠則は考えるのである。

10月　ビクターレコードのための歌唱練習をはじめる。修禅寺で幻影を見る。パリ国

CamScannerでスキャン

年ビエンナーレ版画部門個人賞受賞。イラストレーターズ・クラブの審査をおりる。

渡久地政信作曲、吉川静夫作詞「男花」「ああ故郷へ帰りたい」、十二月まで練習をつづけたが、ついに歌いこめなかった。

「新平四郎危機一発」の修禅寺ロケ中、浴室に入ると、タイルの目にかびが生えている。浴槽に入ろうとすると、温湯が急に水になり、文字通り轟音を立てた。地震だと思って、しゃがみこんだが、床は揺れていない。湯の上面だけが波立っている。栓を抜いて水を流そうと栓に付いた鎖を操ると、水草のように着むしている。どうにか水を抜いて浴室を出、フロントで話そうとするが、切り出せない。自室にもいちめんかびが生えている。夜半、躰を引っくり返されて目が覚める。着ている浴衣がべっとり濡れて、足に巻きついている。寝汗かと躰をさわって見るが、躰が濡れていない。幻影に起こされること数度。翌朝、目覚めて見ると、浴衣は糊のついたごわごわの浴衣だった。

受賞したのはB全判三枚つづきの責め絵である。個人賞は当年新設されたもので、従来のグラン・プリに相当する最高栄誉である。数多くのアーチストを輩出させた青年ビエンナーレだが、当年からフランス政府の発言力がましたこともあって、忠則にとってはそれはどうれしいことではなかった。副賞としての二ヵ月パリ留学も、緊張の連続が予想されて、ただただ気が重い。できれば、金がほしいというのが本音である。

イラストレーターズ・クラブの審査権と被審査権のすべてを拒否した理由も日宣美解散のそれと同じである。

11月　ベ平連「週刊アンポ」表紙。国立劇場歌舞伎「椿説弓張月」ポスター制作。

この表紙では、「EISAKUSATO」の傍線部分がUSAと読めるところが発想点になっている。

歌舞伎のポスターの最上の形式は錦絵である。しかし、忠則には錦絵の技術が当然のことながら、ない。そこで方法は一つ、徹底的に北斎の贋作をつくることしかなくなった。せめて、蛍光色で現代色を出そうとしたが、できあがって見ると、これも古色蒼然でしかなかったというのが、忠則じしんの感想である。但し、三島由紀夫は明治以後のポスターの最高傑作と激賞した。このポスター制作に当って、国立劇場の官僚性に怒ること数度、国立劇場の仕事は二度としまいと決心する。

12月　新書館からエッセー集「一米七〇糎のブルース」出版。高倉健ポスター。マリリン・モンローポスター。匿名性のポスターに意欲を湧かせる。

エッセー集の題名は「もう二糎米あったら一米七〇糎」に由来している。忠則に本来欠落している「あと二糎米」が、これらのエッセーを書かせた原動力であり、夥しい仕事の起爆力でもあったということだろう。それなら「あと二糎米のブルース」とした方がより適切だったかも知れない。とまれ、生れてはじめての著書が、イラストレーションでなく、活字の本だったことは、よほどうれしいことだったらしい。なお、初版出版の翌日に、再版が決っている。

高倉健ポスターは、東映がスターのポスターをイラストレーターに書かせ、そのことじたいをパブリシティにした企画の一環である。映画の凋落ここに極まれりというわけだが、同時にイラストレーターがパブリシティに利用できるスター性を持ちはじめたということでもあろう。このことが忠則に匿名性のポスターに意欲を湧かせる原因ともなる。

マリリンはユートピアを求めて死んだユートピアの殉教者である。マリリンのポスターをつくることは、マリリンの求めたユートピアを復元することであり、忠則じしんのユートピアをつくることでもある。聖マリリンが限りなく増殖し、梵字の光を放射する緑の日輪を背負っていることに、忠則のユートピアの東洋的汎神性を見るべきかも知れない。

忠則の匿名性へのアプローチは、かれのデザイン史観とでも呼ぶべきものに根ざしている。現代（とりわけ日本）のデザインは前近代の無名性を拒否して来たが、結果はモダニズム的な無名性に到ったにすぎない。つまり、スターシステムという名の無個性に到達したにすぎないと考える。もう一度、前近代の無名性・無個性から出発しなおさなければならないのではないかというのが、忠則の主張である。但し、かれのアプローチする前近代の匿名性さえ、スターシステムに組み入れられることは目に見えている。その時、かれがどこに対うかは、忠則じしんにもわかっていまいと思われるだけに興味深い。

CamScannerでスキャン

1970年

1月 交通事故を契機に冬眠に入る。

七十年になってはじめて、昭和年号ではなく西暦年号で今年を感じることができたと、忠則は言う。すなわち、忠則の中で日日がはじめて抽象的な儀式的な時間から具体的な政治的な時間へと変化したのである。たまたま、事務所から自宅へ帰る途中、タクシーが二重衝突に遇い、虎ノ門病院に入院。この事故を奇貨として、政治の季節の中で冬眠し、すべての仕事から解放され、永い潜伏ののち、「弘田三枝子や森山加代子」のように再起したいと言う。その再起は匿名性の再起であるはずだが、匿名性の再起とはあからさまな自家撞着である。この矛盾における死と復活のドラマの中にこそ、ただいまの横尾忠則の位置があると言えるであろう。

2月 入院中、手の治療。胸部の脂肪腫を手術。歩行練習による歩行困難。

事故の後遺症か手が痛くてペンが握れない。十年前に自動車のドアに指をはさんだ前歴もあり、安保の年と手のケガの相関関係について思う。このさい、指の治療も思いたつが、十年前の古傷である指の方は時効で、治療の見込はつかないとのこと。

医師の勧めもあって、数年来、胸部にあった脂肪腫を切除する。手術は手足を縛られ、上半身の産毛を剃られ……という恐怖的なものだったが、摘出された脂肪腫は楕円型のつるんとした美しいものだったと言う。二針縫った。

運動不足を怖れて歩行機で歩行練習。ところが、練習過度が裏目に出て歩行困難となる。退院後もしばらくは階段を上るのが苦痛だった。

3月 退院。個展を思い立つ。

二ヵ月あまり、保護された状態に慣れたからか、退院の足どりは重かった。できれば、もう少しそのままの状態でいたかった。

入院中、冬眠のためのしめくくりとして思い立った個展を銀座・松屋に売りこむ。個展は講談社発行の「横尾忠則全集」の宣伝も兼ね、「横尾忠則全集展」というかたちになる。

4月 ニューロックに凝る。神戸大丸で個展。

退院以来、もっぱらニューロックに凝り、あけてもくれてもニューロックのレコードを聞く。歌謡曲はいっさい聞かなくなった。

神戸大丸で「横尾忠則現代を斬る」と銘打った六十点ほどのポスター展がおこなわれた。

5月 横尾忠則全集展。十年ぶりに西脇市に帰郷。ピーター・マックス来日。「少年マガジン」表紙制作。

横尾忠則全集展はほぼ出発点から今日までの忠則の全作品が、制作過程のラフ原稿も含めて数千点、所狭しと並べられた。入覧者数も空前で六日間で七万三千人を数え、忠則の人気の幅の広さを窺わせた。最終日には、受付に坐った忠則の前にサイン希望者が蜿々長蛇の列をつくった。東京展の後、横浜、名古屋、北海道、神戸、京都をはじめアメリカ各地の巡回展が決まっている。

女性誌「アンアン」のグラビア・ページのモデルとなり、撮影場所として故郷の西脇を希望する。十年ぶりの故郷は人も風景も年老いていた。なお、この時のカメラマンは篠山紀信。忠則と恩師を撮った写真は篠山の傑作中の傑作と評判が高い。

一年ぶりに会うピーター・マックスに忠則は商人から宗教家への変貌を見た。しかし、同時に世界一流の商人という印象も持った。ピーター・マックスと京都旅行。ピーター・マックスの今回の日本旅行の最大の収穫は、高島屋その他との取引成立よりも、横尾忠則の再確認だったようだ。

少年マンガ誌中第一の発行部数を誇るこの雑誌の表紙への忠則の起用は、少年マガジンのみならず、他の少年マンガ誌の表紙のパタンを変える契機となった。忠則は同誌表紙を五月四回のほか、八月四回担当した。

6月 カメラマン志向。

カメラマンを志し、細江英公に師事。ニッコール・クラブ会員として山形の撮影会に参加。覗いてアングルを決めシャッターさえ押せば写るということのバカバカしさと不安を覚える。「平凡パンチ」のためにカメラマンとしてモデル二十人をつれて富士の裾野にロケ敢行。これは「写真はスペクタクルズでなければならない」という持論の実行でもある。この場合、富士の裾野にモデル二十人ということがスペクタクルズの内容である。

CamScannerでスキャン

7月　右脚に鈍痛を覚える。雑誌「アンアン」のために浅丘ルリ子の写真を撮る。絵金のオリジナルを見に土佐旅行。雑誌「辺境」のために小説を書く。

事務所が暑いので冷房の効いたレストランで原稿を書きつづけたせいか、右脚の腓に鉛のつめたいかたまりを入れたような鈍い痛みを覚える。この痛みは八月のロンドン生活中に激化し、九月、ついに入院の運びとなる。

浅丘ルリ子を七時間ぶっつづけで撮りまくる。写真家になることを真剣に考える。

絵金の映画を撮る予定の映画監督中平康らと共に、絵金のオリジナルを見に行く。同時代の錦絵に比べて、まるでつまらなかった。土佐出身の中平の場合は別にして、同行者たちの感激ぶりがふしぎでしかたがなかった。

作家の井上光晴から電話がかかってきて、雑誌「辺境」のためにテーマは自由、三十枚から五百枚までの小説を依頼される。出来あがった小説「長い長い順番」は百枚。文芸評論家の秋山駿に「人の死にふれる感触を確めるくねくねと曲りくねった言葉に変なリアリティーがある」（東京新聞）と評された。新聞の文芸時評欄にとりあげられたことがうれしかった。

感したからである。ビートルズの生家、出身校、歌に登場するストリートなどを歩いて、記憶の痕跡が痕跡にすぎないことを思い知らされる反面、偶然に目撃したジョージ・ハリスンに興奮し、内なるビートルズがまだ健在であることを再確認もした。二週間歩きまわったため、腓の痛みは決定的に悪化し、右脚から左脚へ、さらに腕へと移動した。

小川企画主催、清川虹子主演「あほんだれ一代」のためのポスターは、顔が若く美しく出ていると、清川はたいへんなお気に入りぶりだった。

絵金については七月の項参照。

9月　雑誌「週刊明星」に「横尾忠則右足切断の危機」なる記事。検査治療のため東京医科歯科大学内科に入院。

自宅療養中、「週刊明星」の記者が見舞い客として訪れ、この時話したことが「右足切断の危機」というショッキングな記事に歪曲されて誌上に登場。おかげで十数年音信不通の友人などから見舞いの手紙や電話が相次ぐ。見舞いに来てくれた高倉健と浅丘ルリ子にはさまれるなどのハプニングもあった。

痛みの原因をつきとめるべく東京医科歯

名な写真集「薔薇刑」の意味は発行後七年を経て変化した。変化の原因は作家三島のインド体験である。三島の発意によって企図された新輯版は、忠則の装釘によって完璧になった。忠則の装釘を一言に言えば「死による生のくるみこみ」である。三島はこの装釘を忠則の最高傑作と激賞し、忠則を単なる装釘者から著者の一人にした。

二ヵ月の入院生活で結局、病因は全くつかめず、しかも痛みは去らない。だから、この退院はかなり絶望的な退院だったと言える。

11月　指圧により病状快方に向う。エッセイ集「未完への脱走」（講談社）出版。「ビートルズ・イラストレーテッド」（ロンドンBBC社）のためのイラストレーション二点制作。

高橋睦郎が強引につれて来た指圧師四条清一氏の指圧および鍼灸の治療を継続的につづけるうちに、少しずつ痛みが去り、歩けるようになった。しかし、外に出るのはあいかわらず怖い。結局、はじめて戸外を歩いたのは三島由紀夫割腹翌日の二十六日夕刻の弔問のさいだった。忠則の病状を絶えず案じ、友人たちに忠則を引張り出せと繰返していたその人の死によって外に引張

意味は、忠則のめざすものが完成ではなく未完成であり、しかもその未完成への方向はいつも着実な歩みではなく脱走というかたちをとっていることを言おうとしたものであろう。

ビートルズのためのイラストレーションは忠則のビートルズへの愛憎がインド体験というかたちを借りて表現されている。さきの「新輯薔薇刑」の装釘といい、この作品といい、きたる年の忠則のインドへの旅立ちはもはや動かしがたくなったと言うべきであろう。

12月　福岡大丸デパートで「横尾忠則写真展」開催。「現代版画 横尾忠則」（筑摩書房）出版。「高倉健写真集」（仮題＝都市出版）編集をはじめる。「横尾忠則原形質」（仮題＝河出書房新社）編集をはじめる。

写真展出品作品は、ヌード、浅丘ルリ子、ジョージ・ハリスンなど、ことしカメラマンを志向して撮った写真のすべてであり、「現代版画」「今日の問題点展」「東京画廊個展」「パリ国際ビエンナーレ出品作」を含む八点とシルクスクリーンのオリジナル一点である。「高倉健写真集」については1968年5月の項参照。「横尾忠則原形質」は忠則を形成した人、物、事件をアトランダムに集めた忠則じしんによる解明の作業であろう。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

子泣き砂かけ釣瓶火や

第二十番札所　怪笑山木魂寺

げげげのげげげげげげげげげげのげげげげげげげげげげげげ

魑魅魍魎が打連れて

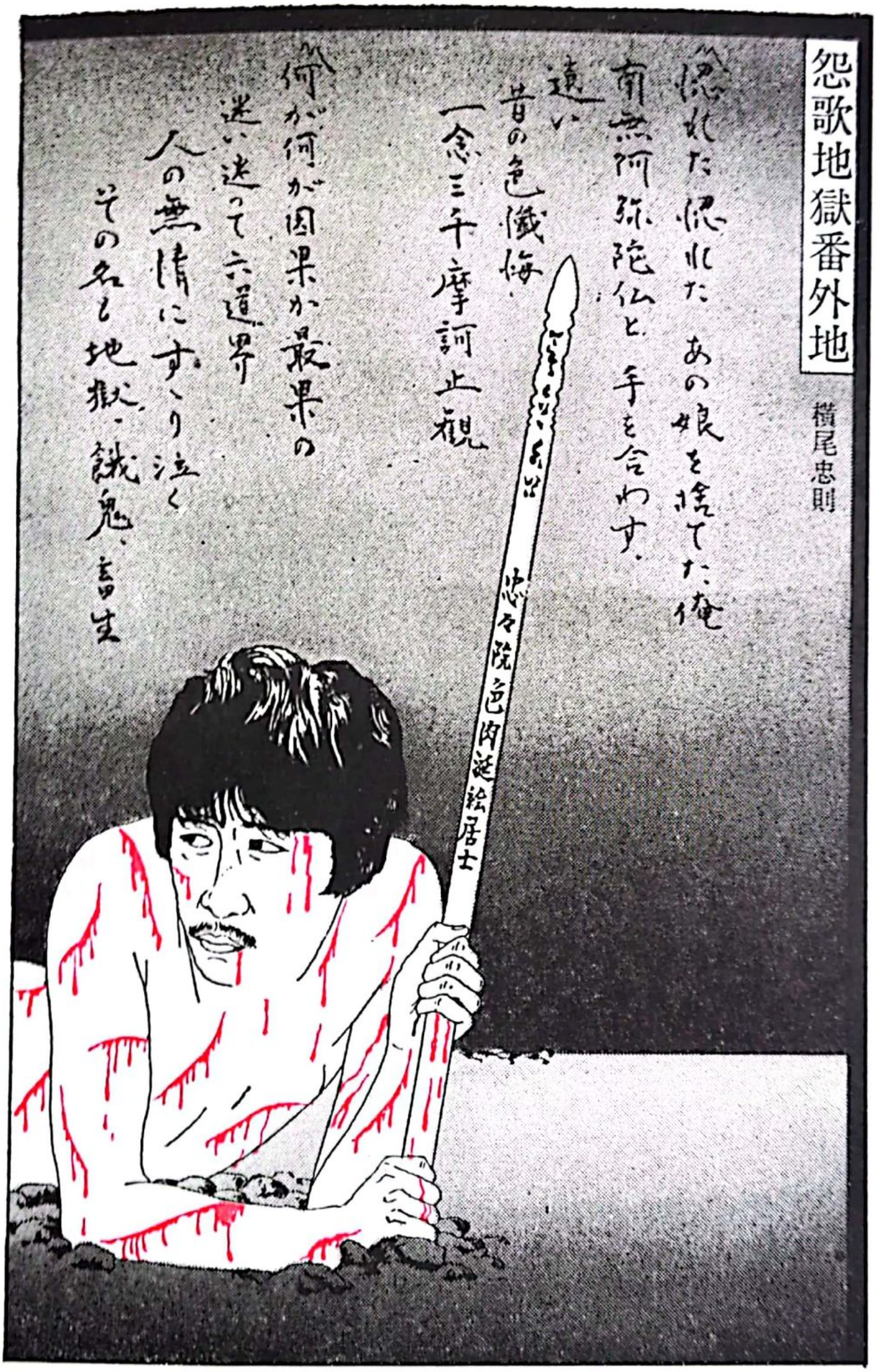
妖異は妖異の道を辿り
人亦人の道を行く

佛の教へに遵らんと
鬼太郎駄にもの申す

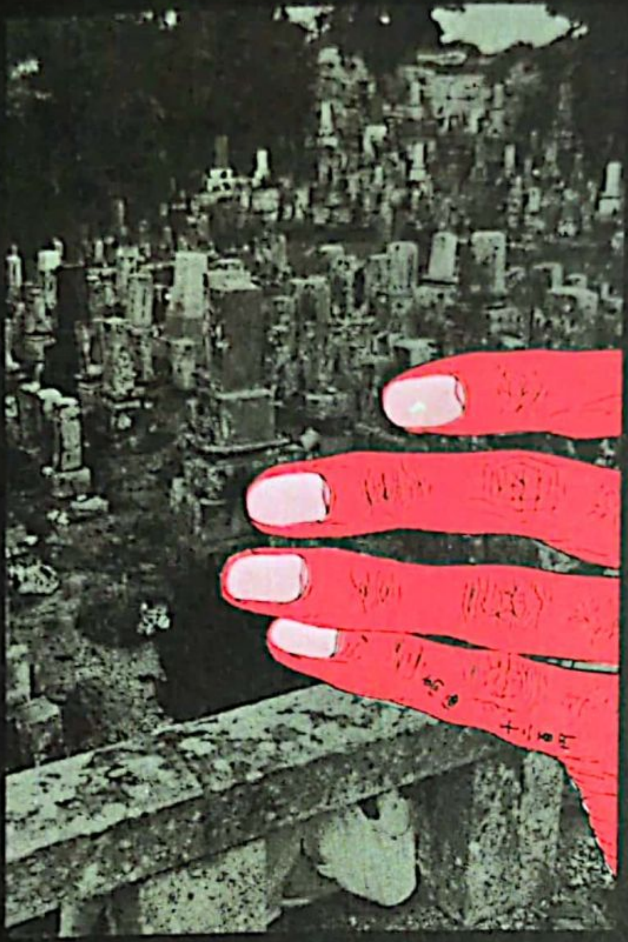
挽歌(ばんか)の空間

横尾　忠則

なんだか、気持ちの悪い絵です。「忠々院肉逓絵居士」とは、横尾氏の戒名だそうで、左の遺影も自分で、みずからを埋葬した図らしい。この世でいちばんこわいものは、だれでもやっぱり自分の「死」なのだろうか。



怨歌地獄番外地
横尾忠則
〽惚れた惚れた あの娘を捨てた俺
南無阿弥陀仏と 手を合わす。
遠い
昔の色懺悔、
一念三千摩訶止観
〽何が何が因果か最果の
迷い迷って六道界
人の無情にすゝり泣く
その名も地獄、餓鬼、畜生

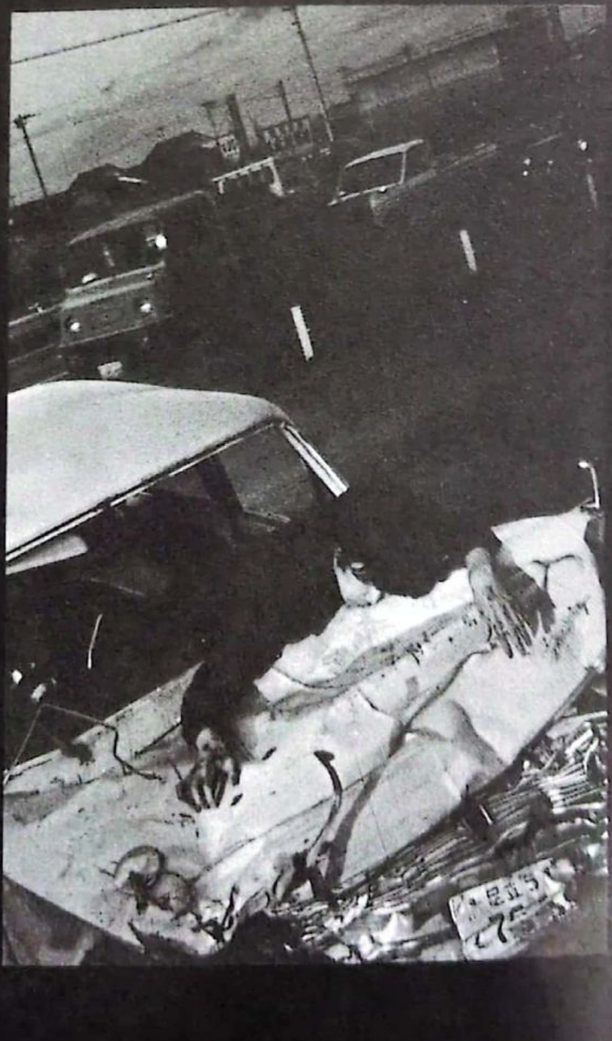


わたしの妖怪

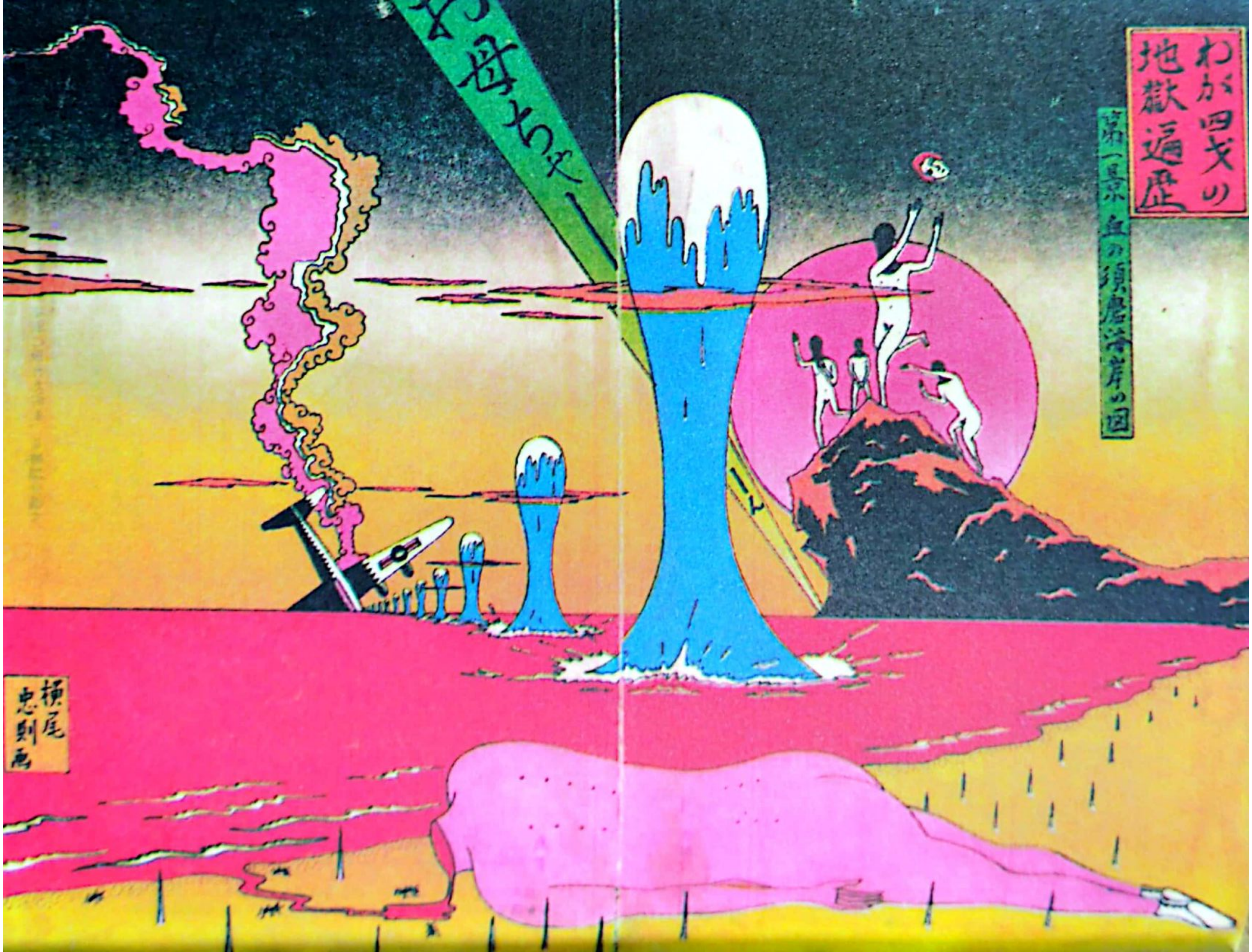
横尾　忠則

南無阿弥陀仏

菊芳英正善童子 位



CamScannerでスキャン


わが愛の地獄遍歴
第一景 血の須磨海岸の図
母ちゃー
ーん
横尾忠則画

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

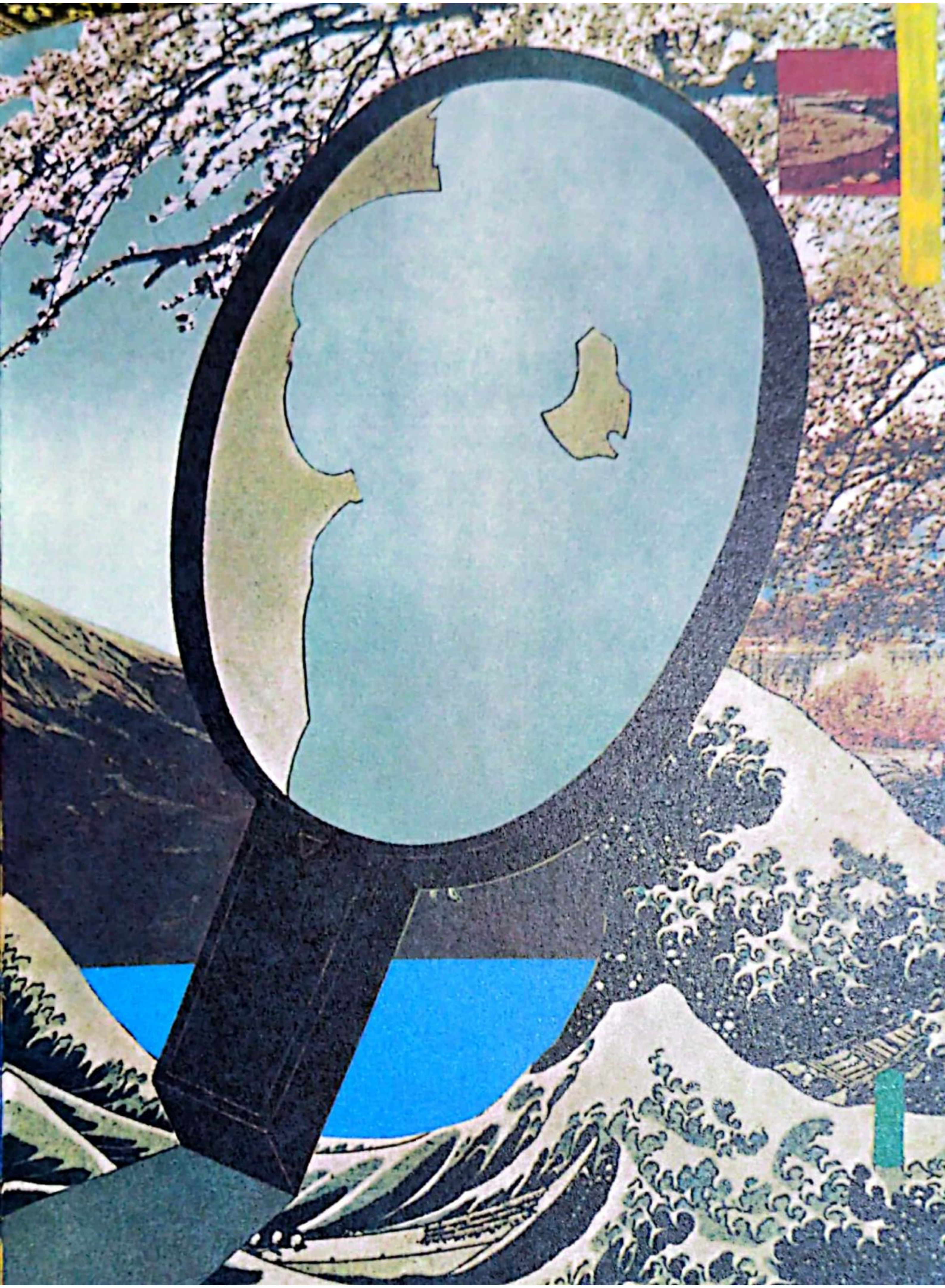
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

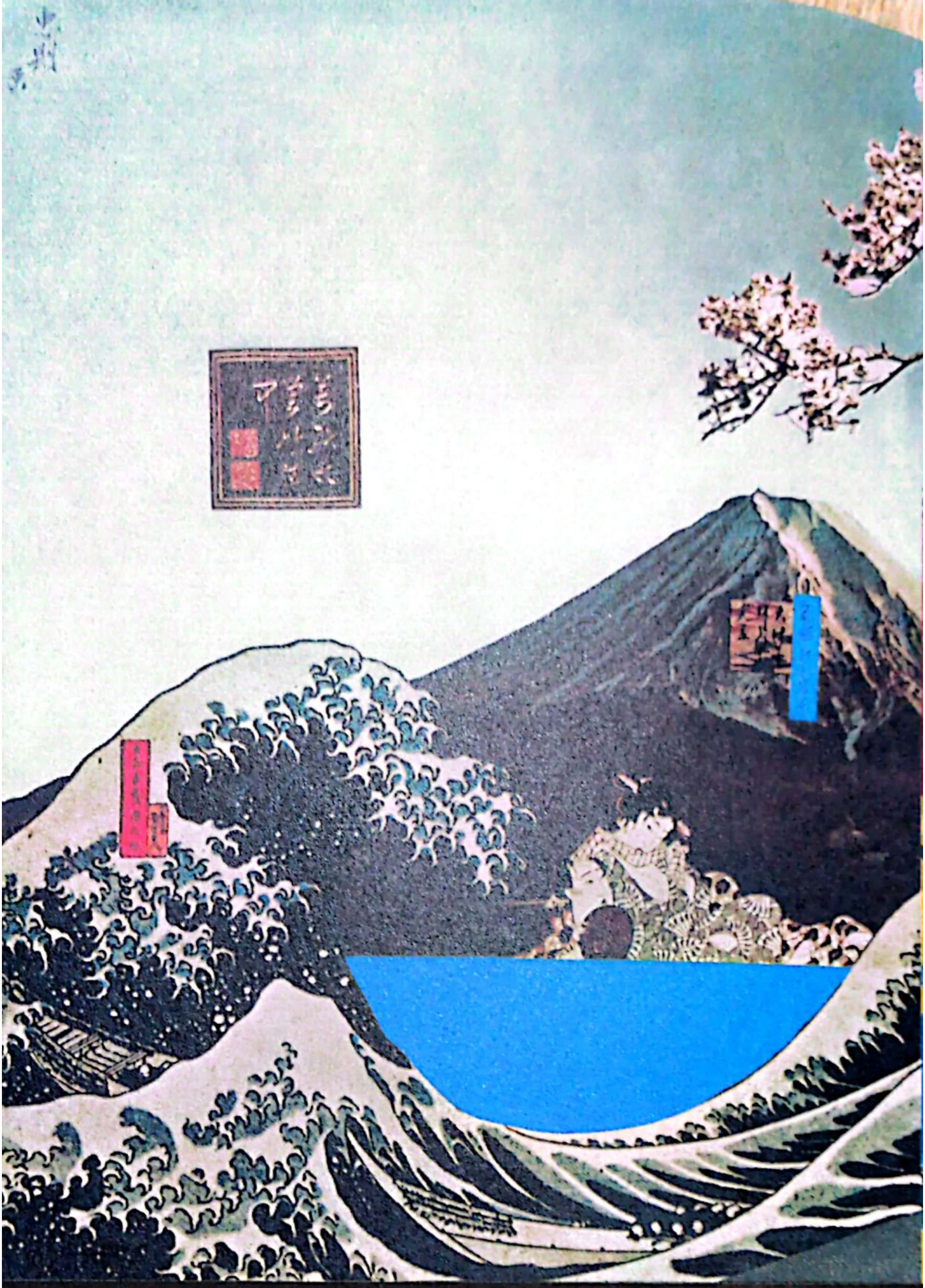
CamScannerでスキャン

通し狂言
椿説弓張月
ちんせつゆみはりづき
十一月歌舞伎公演
三島由紀夫が
熱情をかたむけ
歌舞伎への
夢の全てをかけた
近代古典劇の傑作
十一月五日―二十七日
開演時間 平日 五時
土曜日 十一時三十分・五時
祝日 一時
国立劇場

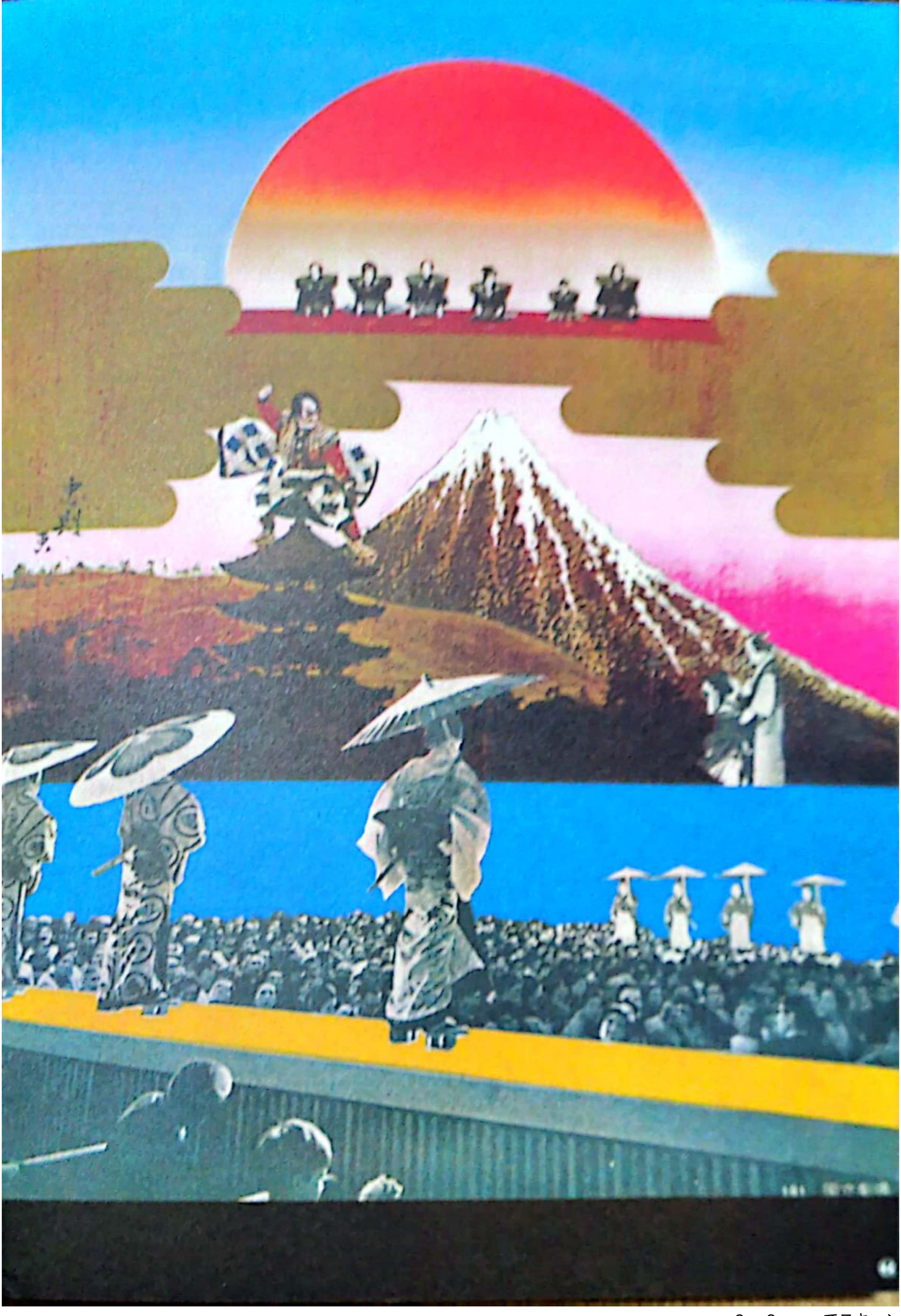
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

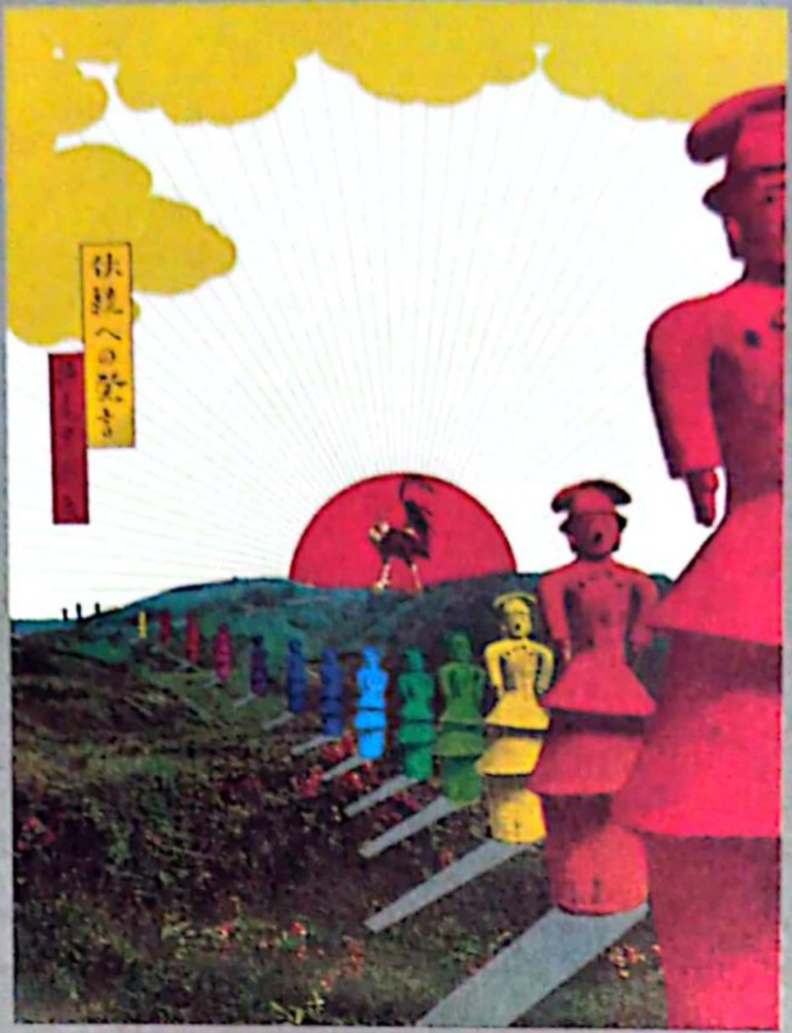


CamScannerでスキャン

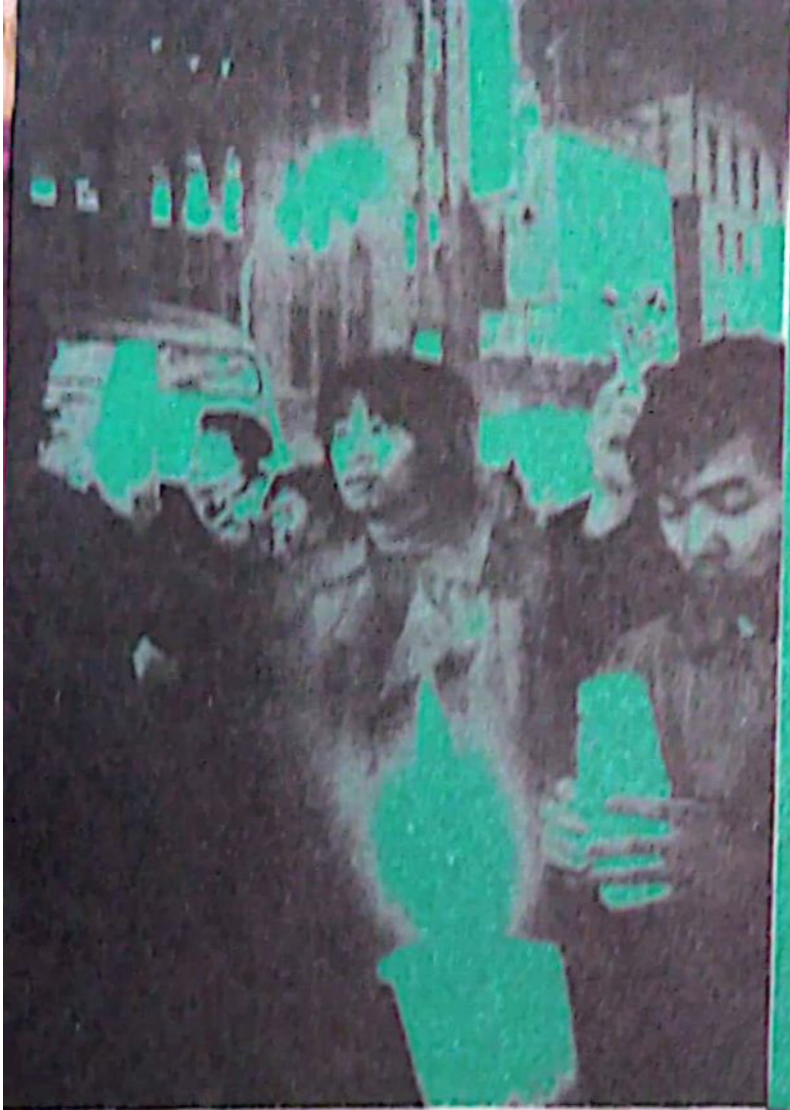
CamScannerでスキャン

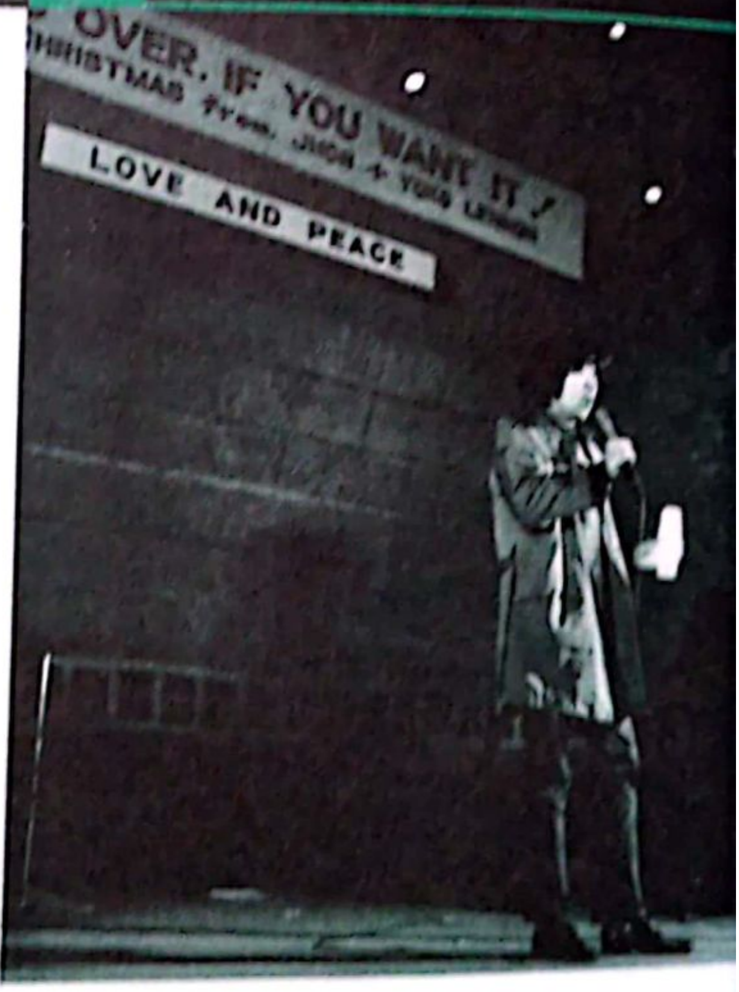
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

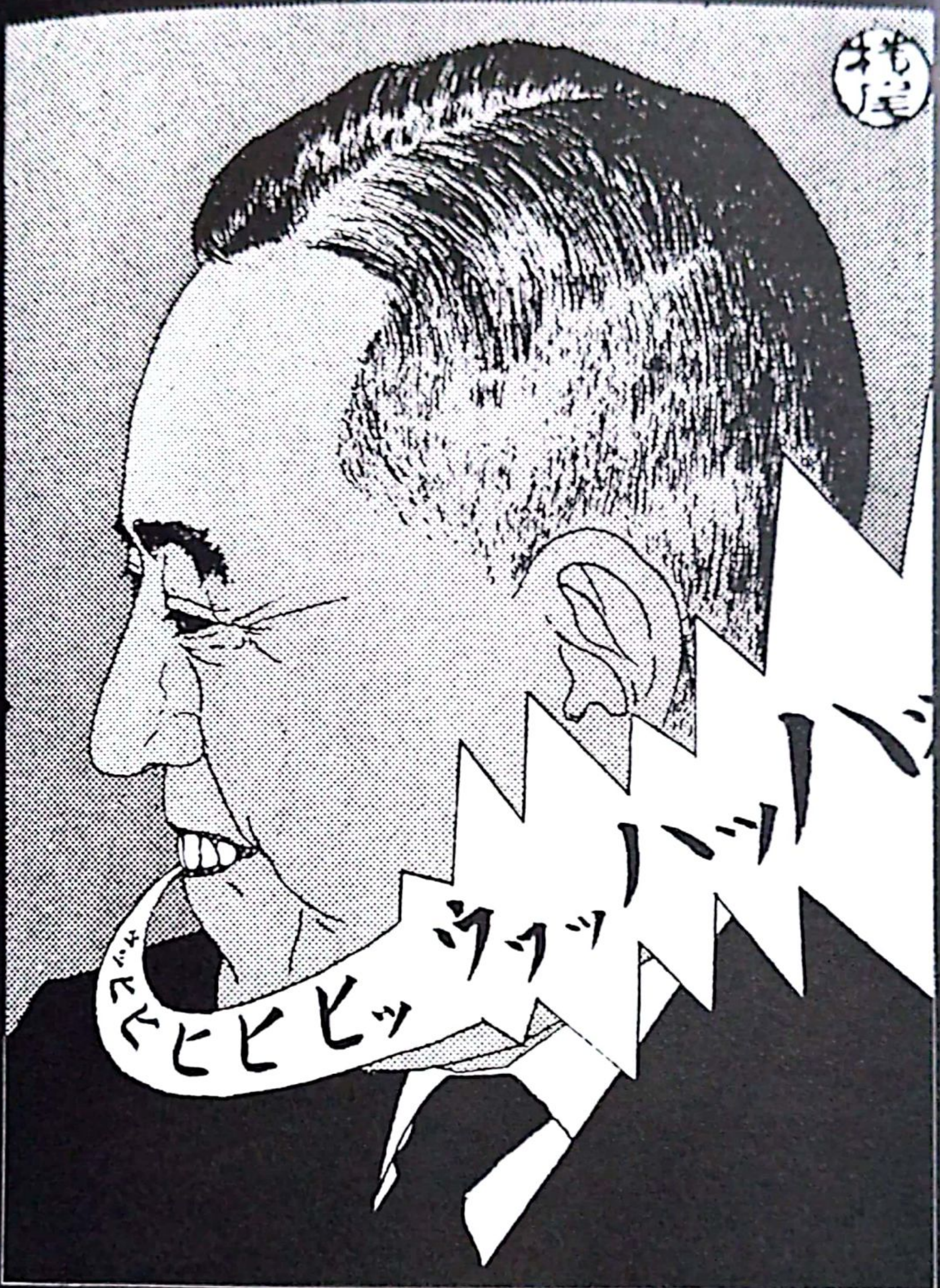


CamScannerでスキャン





CamScannerでスキャン


ヒヒヒヒッ
ウフフッ
ハッハッハッ

CamScannerでスキャン

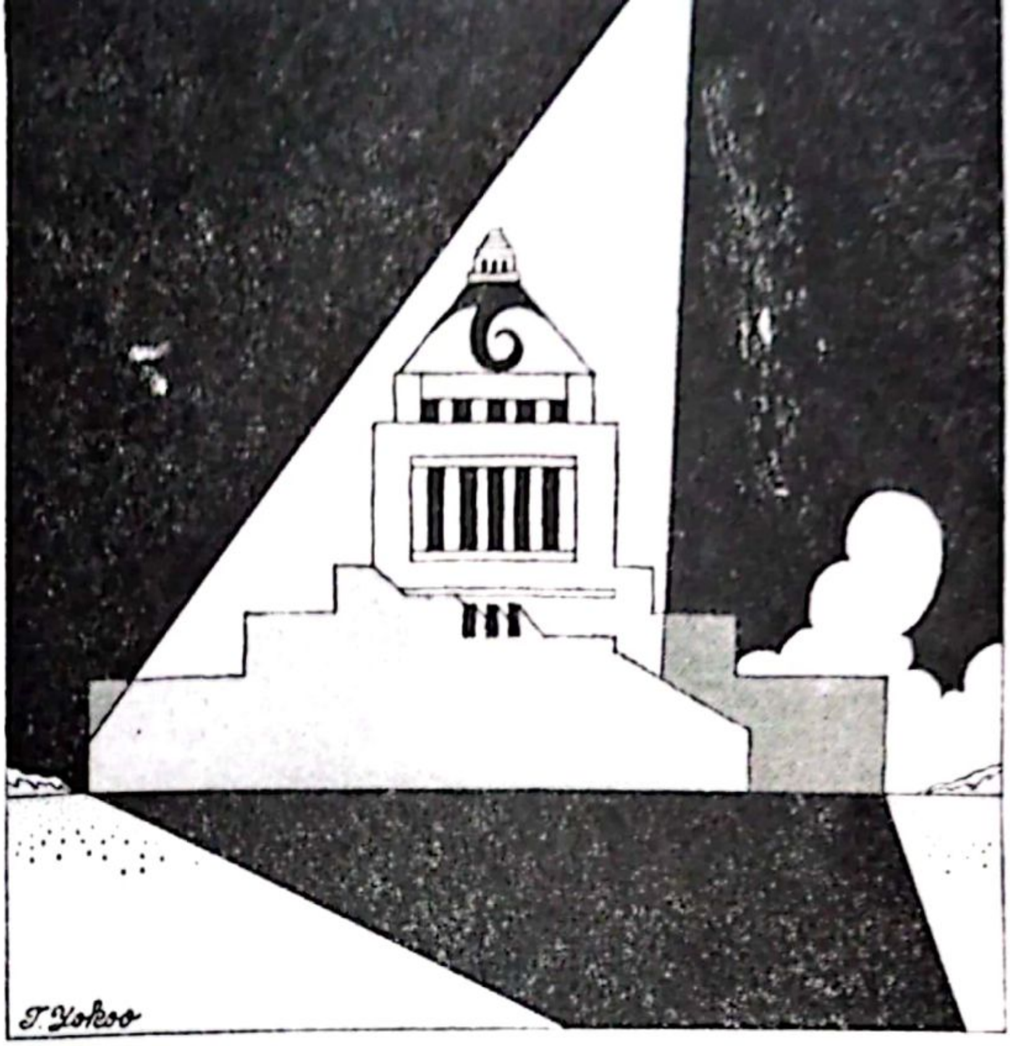
的のタレントというのは青島と、横山ノックだ。お昼、今、大松なんてのはスポンサーつきだからね。もっともスポンサーもつくのがな一のタレントなのかな。青島や横山みたいのか、いままでのタ

できるかどうかわからないからね。無所属で勝手なことをやっていたら、番組スポンサーである財界がなにかと圧力をかけるだろうし　。そうなると一種のホーマフみたいなもので、長くは続かないのじゃないか。そういう意味でキャスチン

質問だ。

パンパカパーン

横尾忠則



政治学者　ノックの場合はよくわからないが、青島は単にタレントとして片づけていいかどうか、ちょっと疑問だ。彼の場合、〝意地悪ばあさん〟にしても、ある種の正義感というものを非常に強くブラウン管で訴えてきている。それに週刊誌でみたんだが、なかなかいいことをいっているよ。植木等にしてもそうだ。ある問題で非常にりっぱな意見をはいていて、見直したことがあった。みんなはあれは芸能人にすぎないくらいにしか考えていないかも知れないが、彼自身がある政治的信念によって動いていないなどとだれがいえようか？

文化ジャーナリスト　ぼくは横山ノックが立候補した時には快哉を叫んだね。選挙というものに対する日本人の考え方はどだいひどく教育的だよ。清く正しい選挙をするんだというふうにね。選挙というのが学校の教材みたいになにか正しいことが行われるという幻想ね。そういうときに変な髪のかっこうしたパンパカパーンというのが出てきたのは、いまの選挙に対する痛烈な皮肉のように思ったよ。

経済評論家　みんな同じようなことを考えているんだな。選挙だけが政治参加じゃないはずだ。ところが、選挙は大事だ、投票しましょうとメッタヤタラに宣伝するのは、じゃあ投票をすればもういいんだという気分をあおることになる

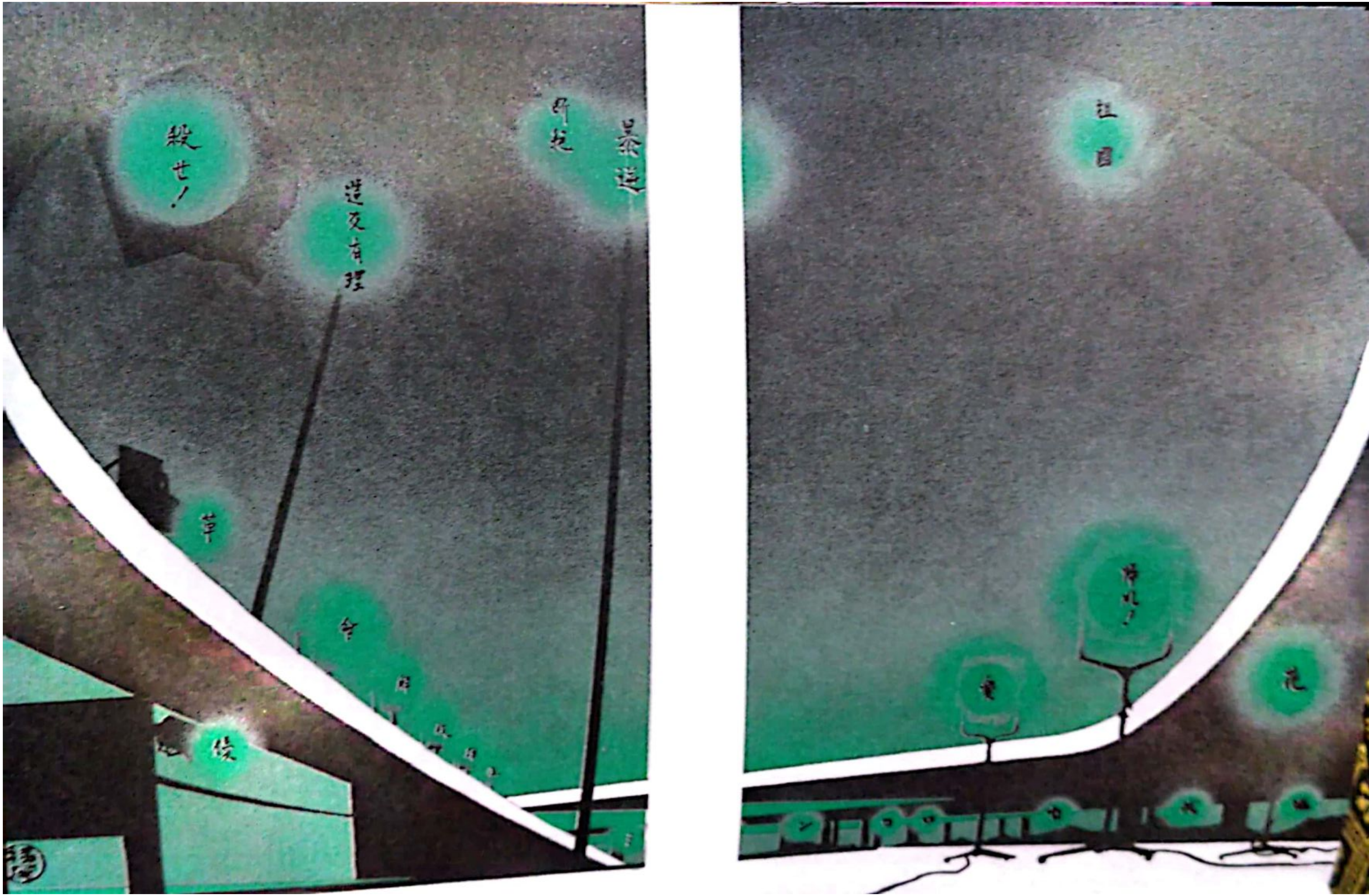
□□□ まじめにやれ選管！ □□□

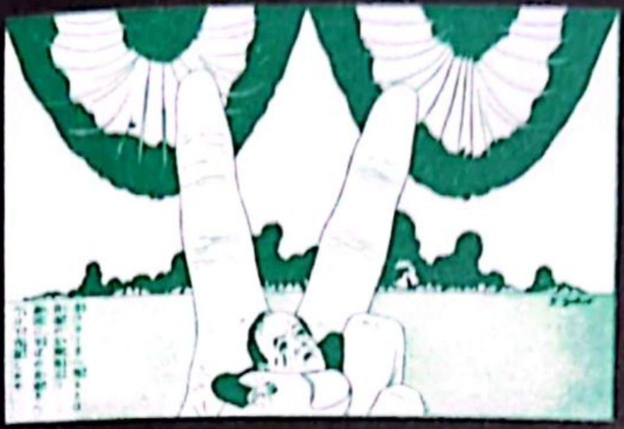
作家　一番けしからんのは選挙管理委員会なるものだ。チンパンジーなんか連れ出して「投票しましょう」だなんてたすきかけさして歩かせやがる。また一方では流行歌をつくって歌わせる。いったい選挙をまじめに考えているのかね。あんなことのために金を使うんだったら、「選挙とは何か」というふうな論文でも集めて、賞金でも出したほうがよっぽどましだ。もっとまじめにやれ。

経済評論家　もっとも、一票に政治参加のすべてをかけるわけじゃないから、まあショー化して、ふまじめにやるのもいいかも知れないぜ。チンパンジーはどうかと思うがね。選挙運動だってアメリカ流にお祭さわぎをするのもいいさ。

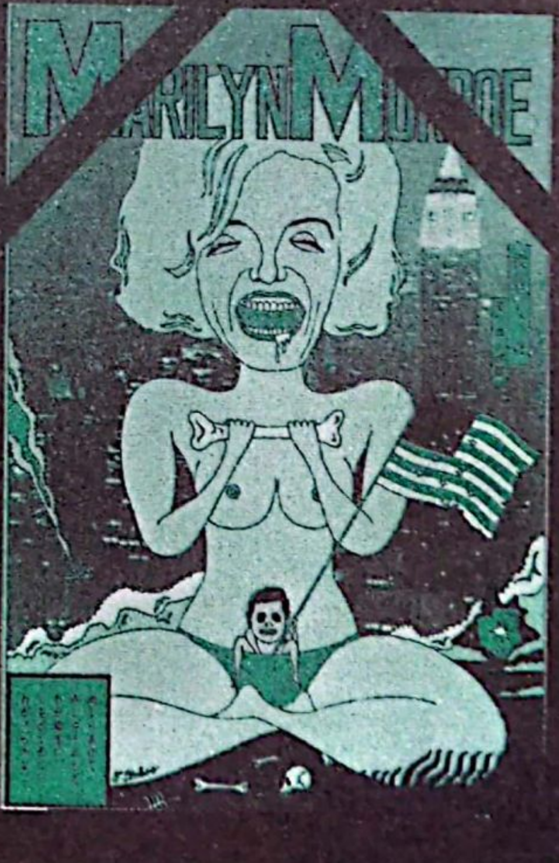
作家　そのデンでいきゃあ、投票してから締切って、そして時間をおいてから開票するというやり方、あれはよくないね。

投票結果が刻々わかっちゃって、一票入れると、だれにはいったということが電子計算機に集計されて出てくるということにならないかな。そうすると、おれのひいきが負けるとなれば、一生懸命にかけ回って「お前まだ投票していないか、していなかったら出てこい」というわけで選挙への関心なんというのは、うんと盛上がることうけあい。

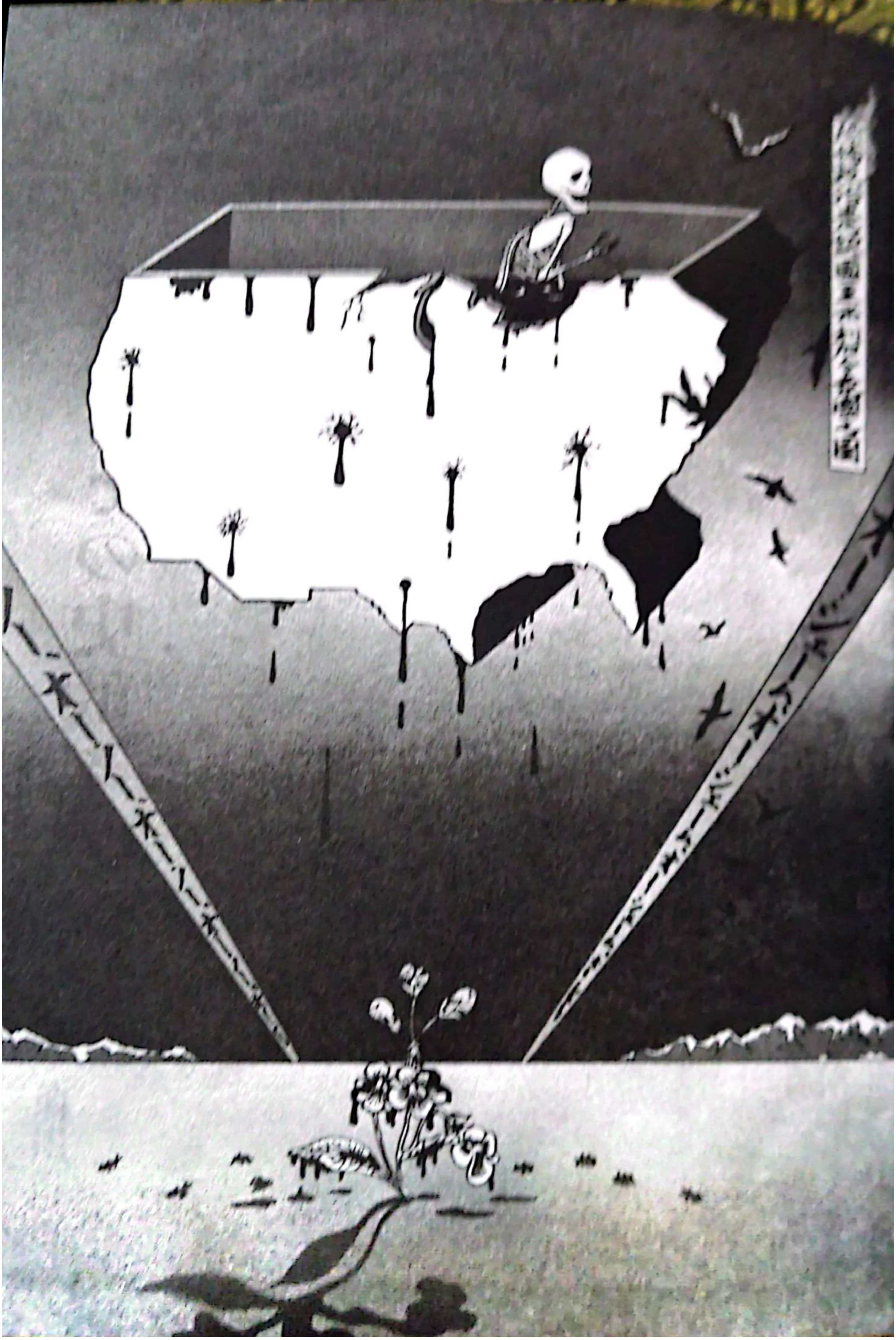

殺せ！
造反有理
暴逆



横尾忠則・画



CamScannerでスキャン

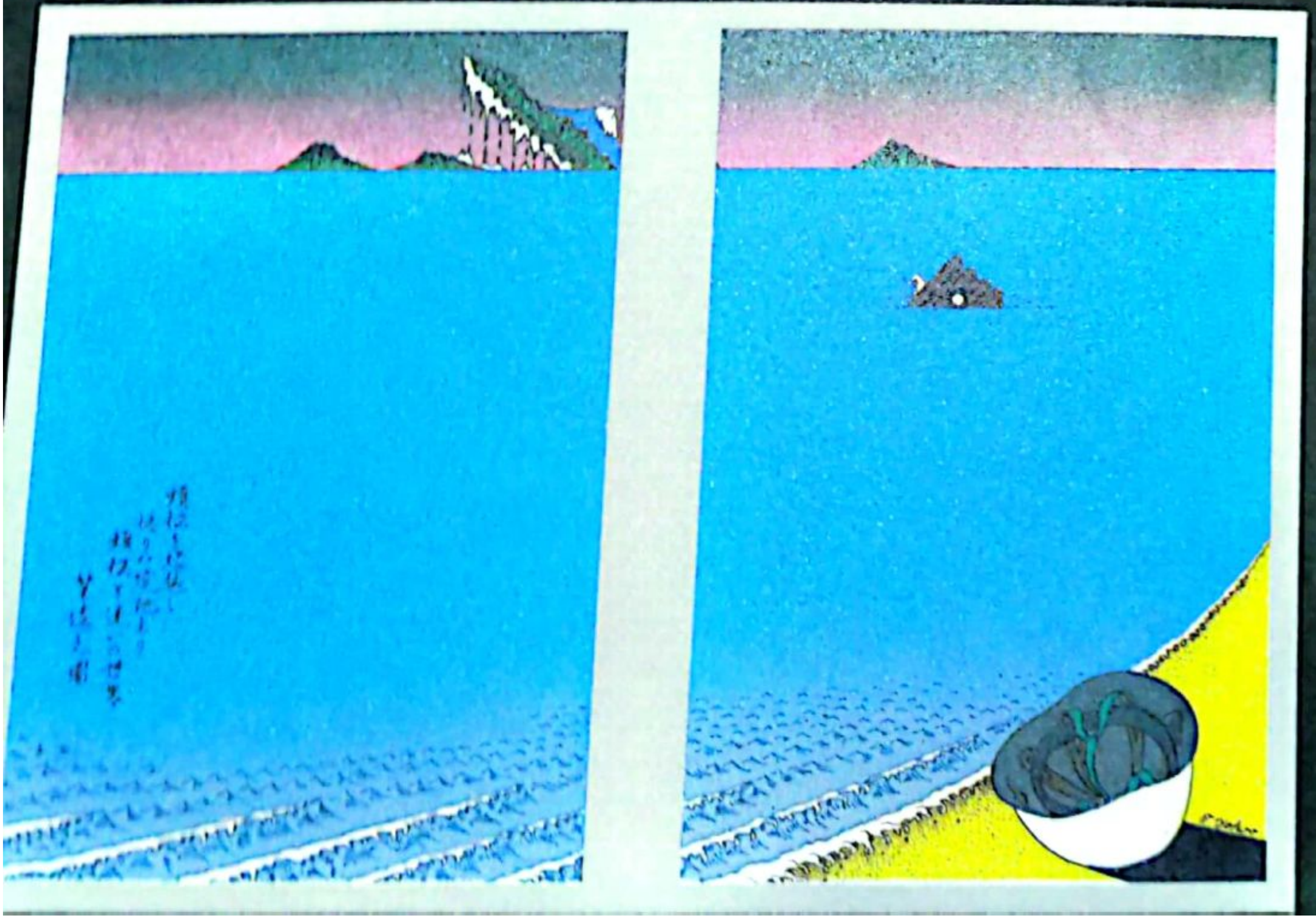


CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

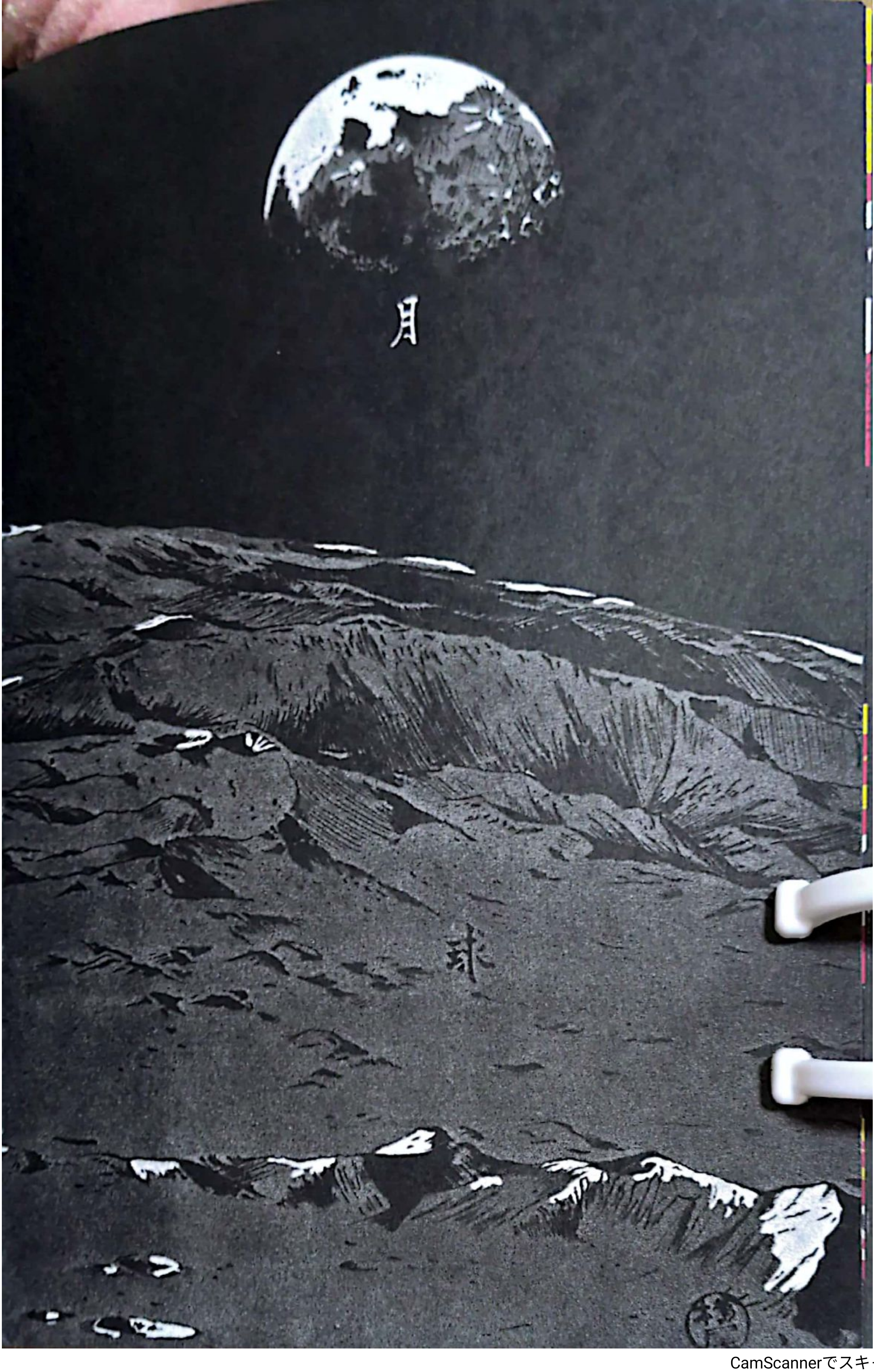
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

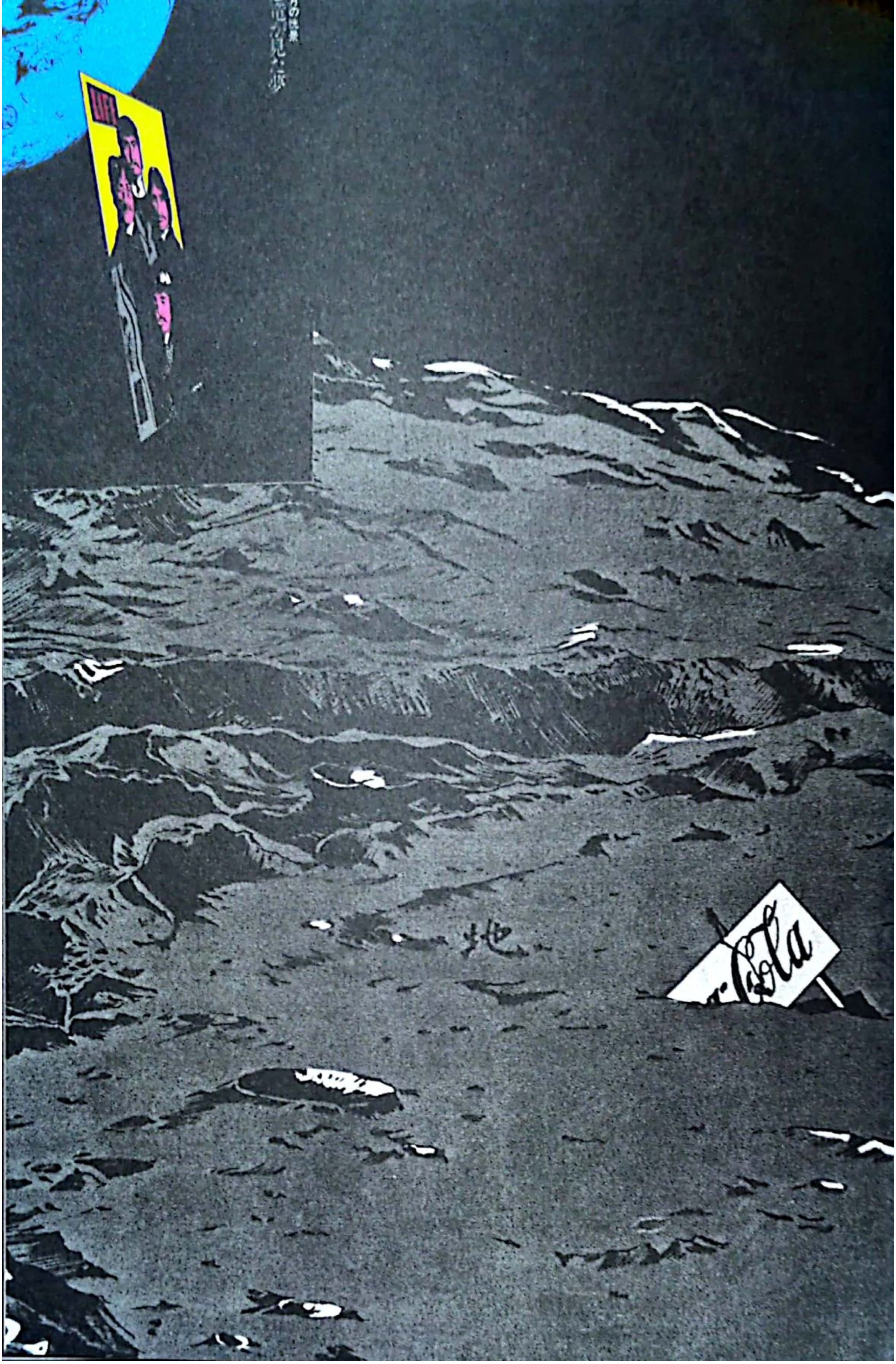


CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ぐずぐずしてたら夜があける

治兵衛

CamScannerでスキャン

小春
ああ、
表現社＋ATG作品
心中天網島
監督・篠田正浩
主演・岩下志麻・中村吉右衛門
あれが・・・・

大映作品
女体
監督・増村保造
主演・浅丘ルリ子

ミチ「だめよ。どうしても一百万円、もらうわ。一円だって負けないから」

晶江「(笑って)それで御不満なら、警察なり、裁判所なり、どこへでも訴えて下さいな。強姦、強姦っておっしゃるけど、とても証明はむずかしいのよ。女が本気で抵抗したら、男だって自由にできませんもの」

ミチ「じゃ私、だらしのない女ってこと？」

晶江「そうは申しませんけど。でも世間にはよくありますわね。わざと男に身をまかせて、それをたねにゆする……裁判所もそう考えて、行夫を無罪にするかも知れませんわ。もし強姦とみとめても、あなたの手にいくら入るかしら。五十万円も無理でしょう」

ミチ「何言ってんのよ。あんたの弟、好きで私を抱いたんなら、許してやるわ。お金も

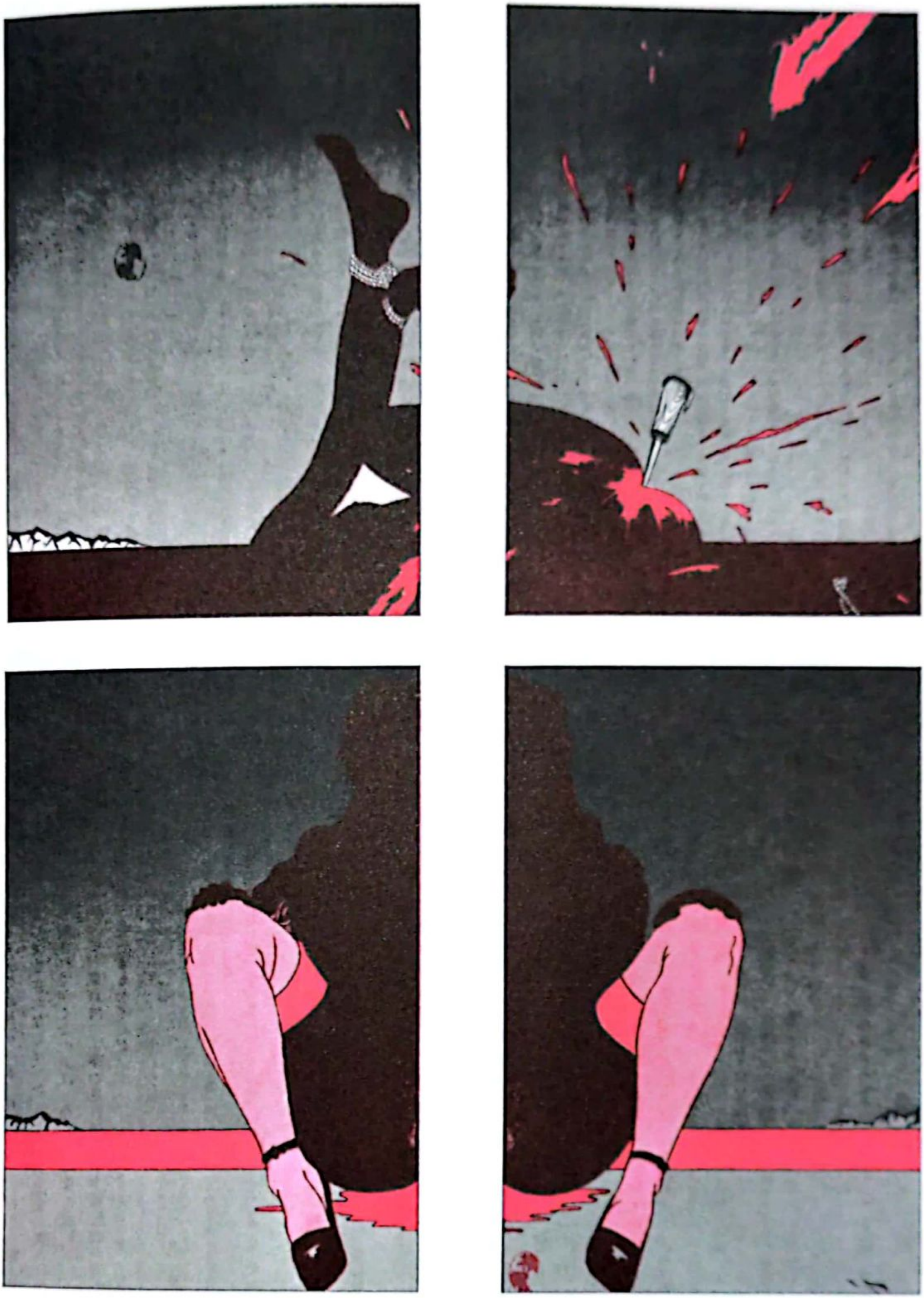
いらない。だけど、頭っからズベ公だときめつけて乱暴されたんじゃ我慢できないわ。あんたも弟にそっくり。私を何だと思ってるの」

晶江「とにかく、百万円しか出せません。明日、主人がお金を届けます

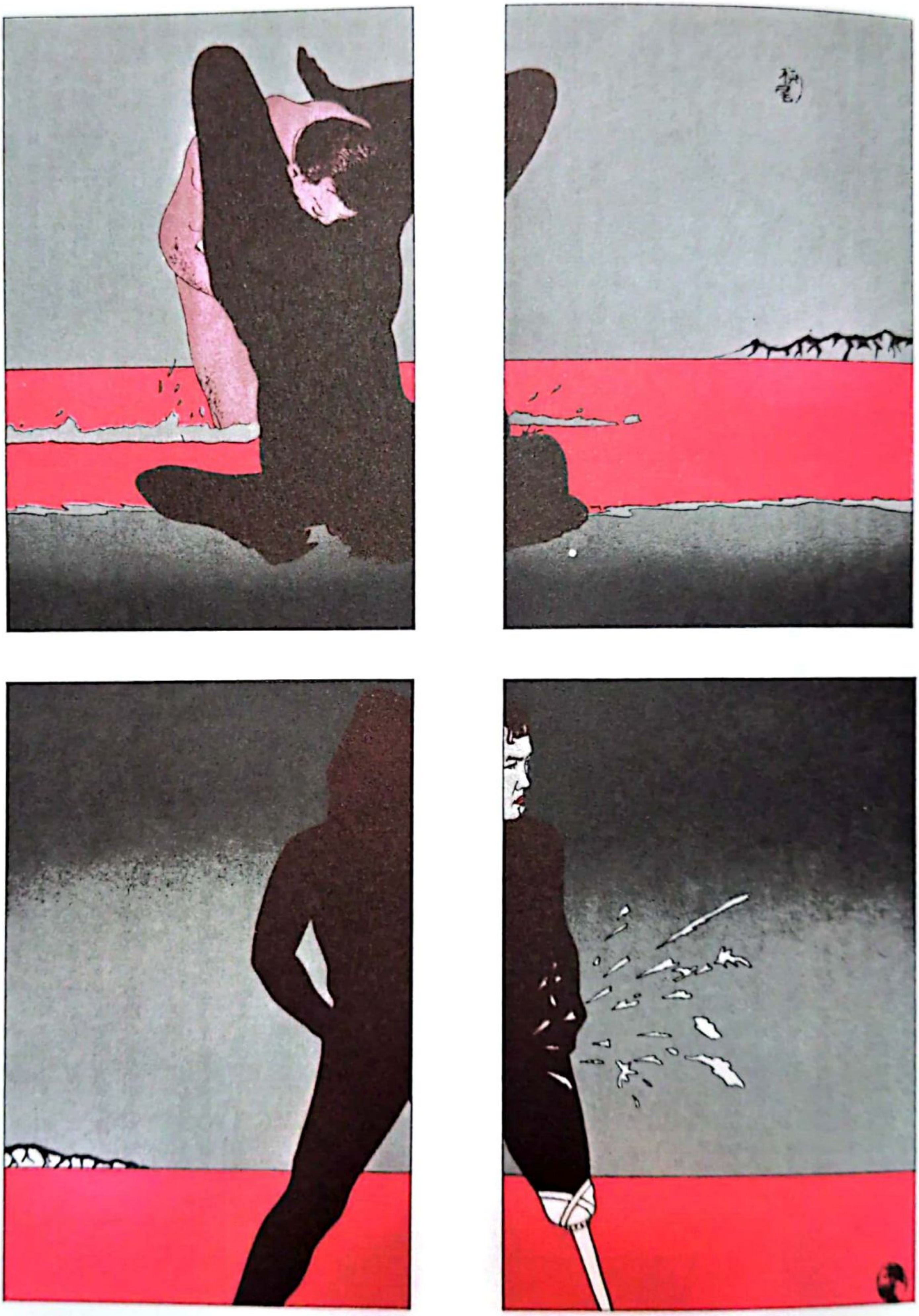
瀬戸内晴美さま江

Love

CamScannerでスキャン



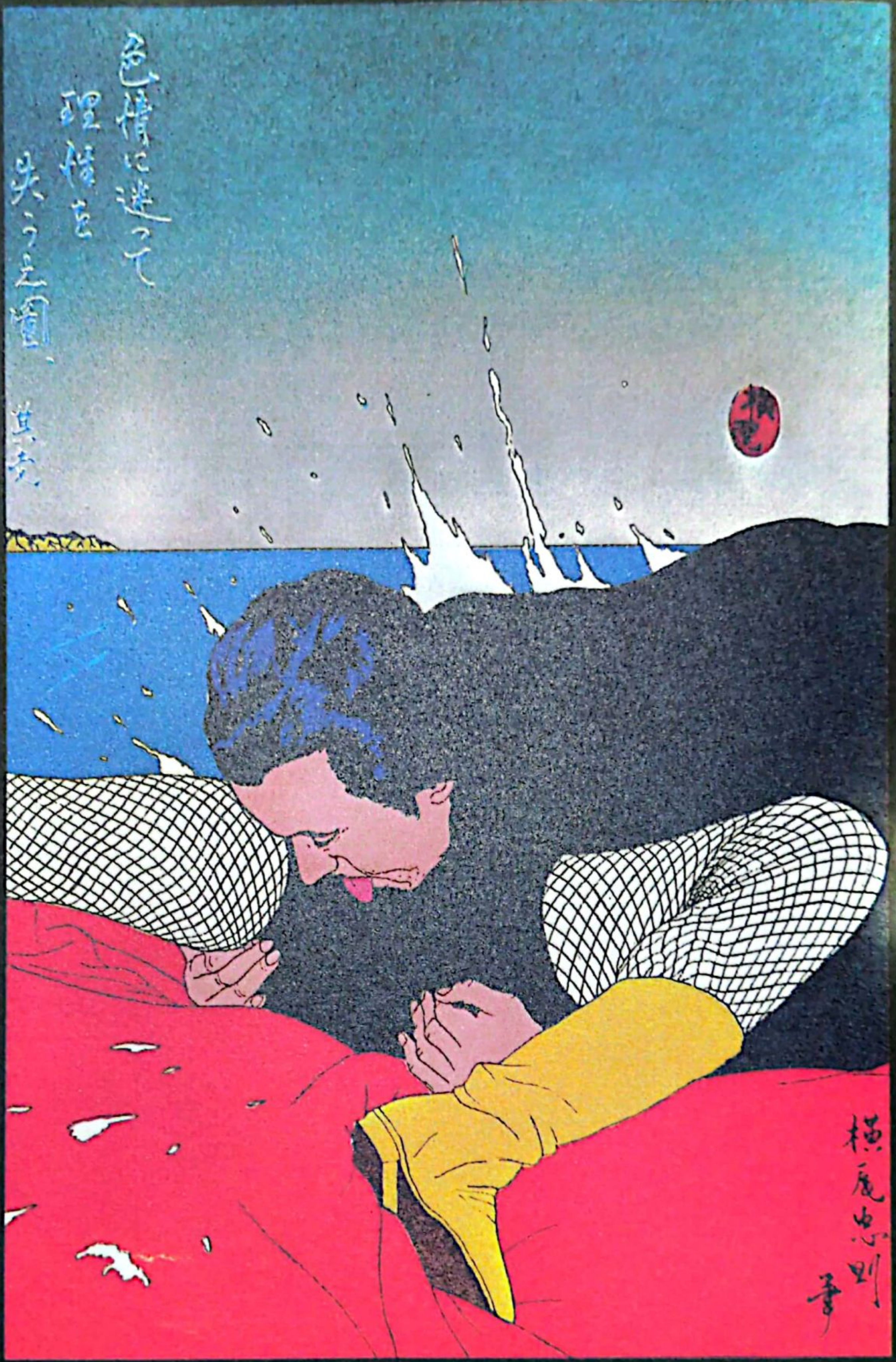
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

デザイン批評

季刊第10号

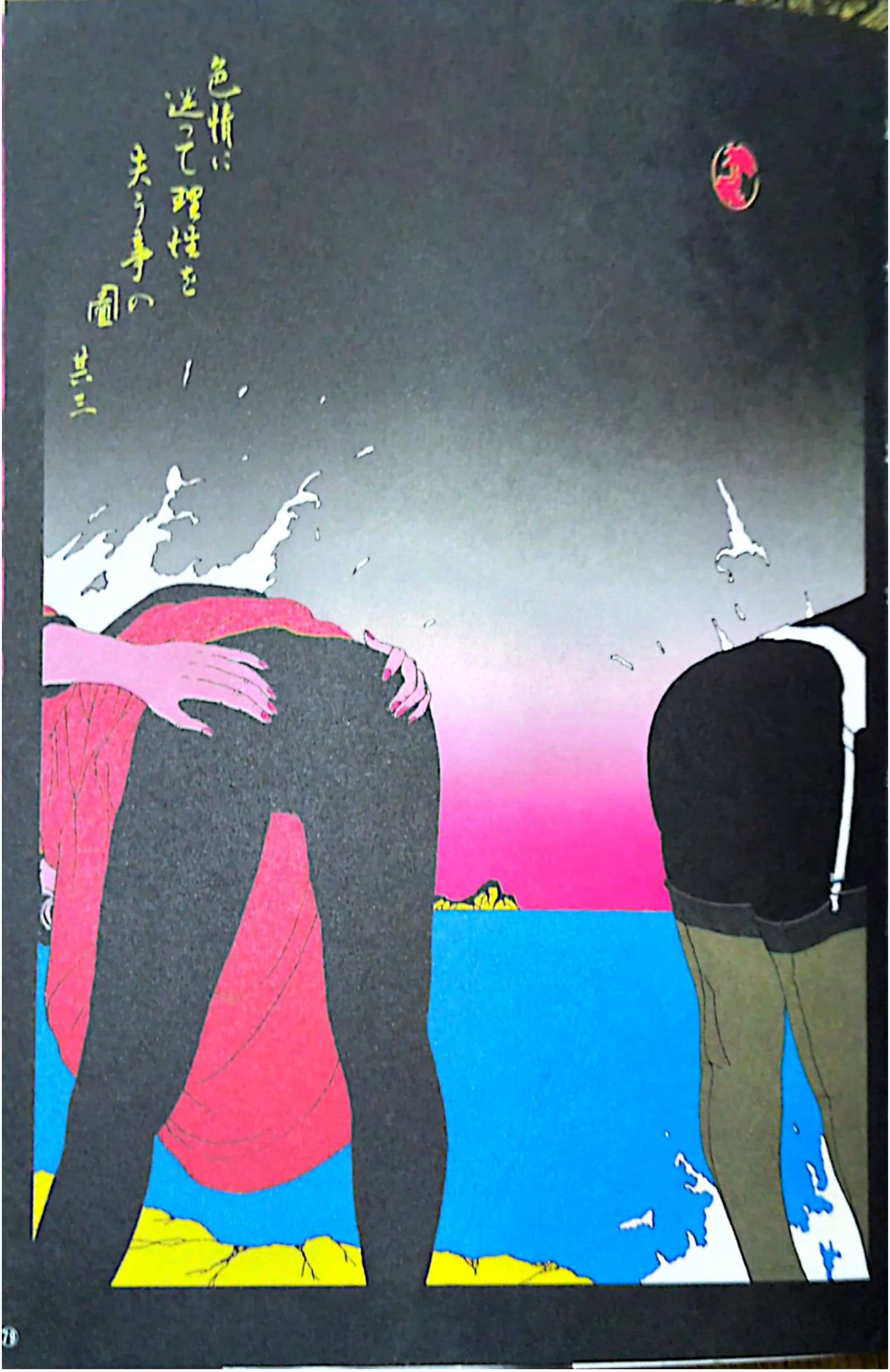


CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

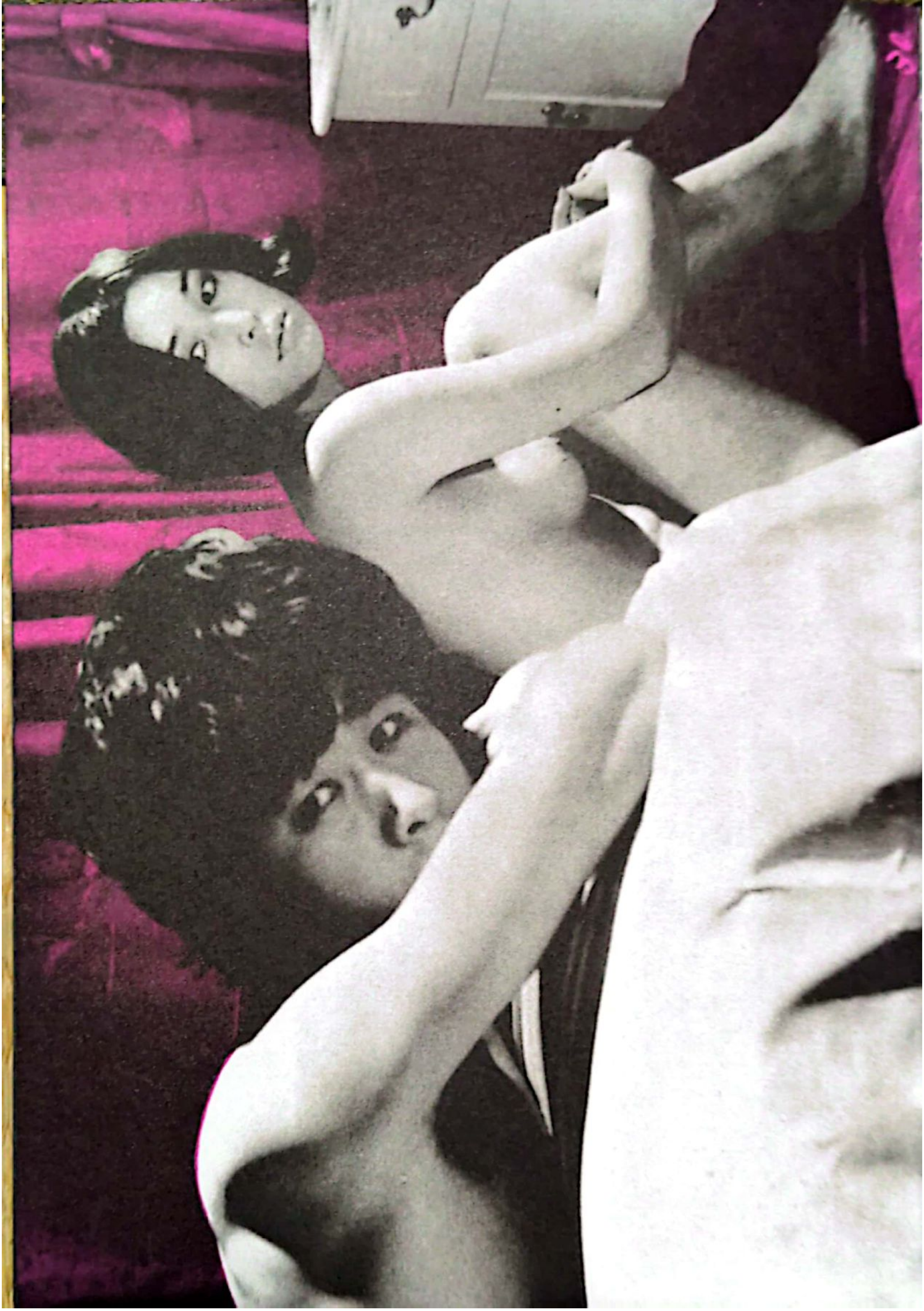
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



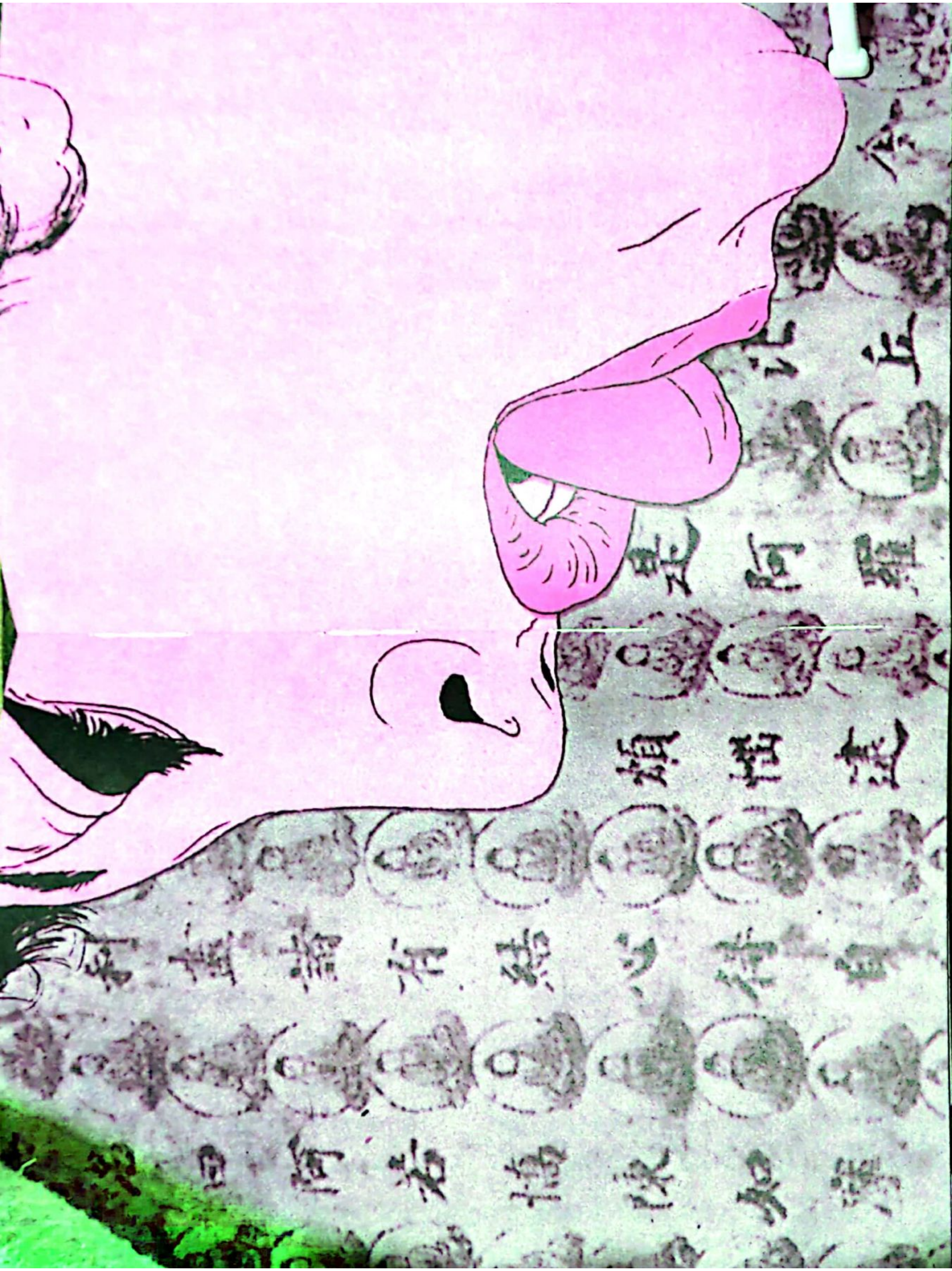
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



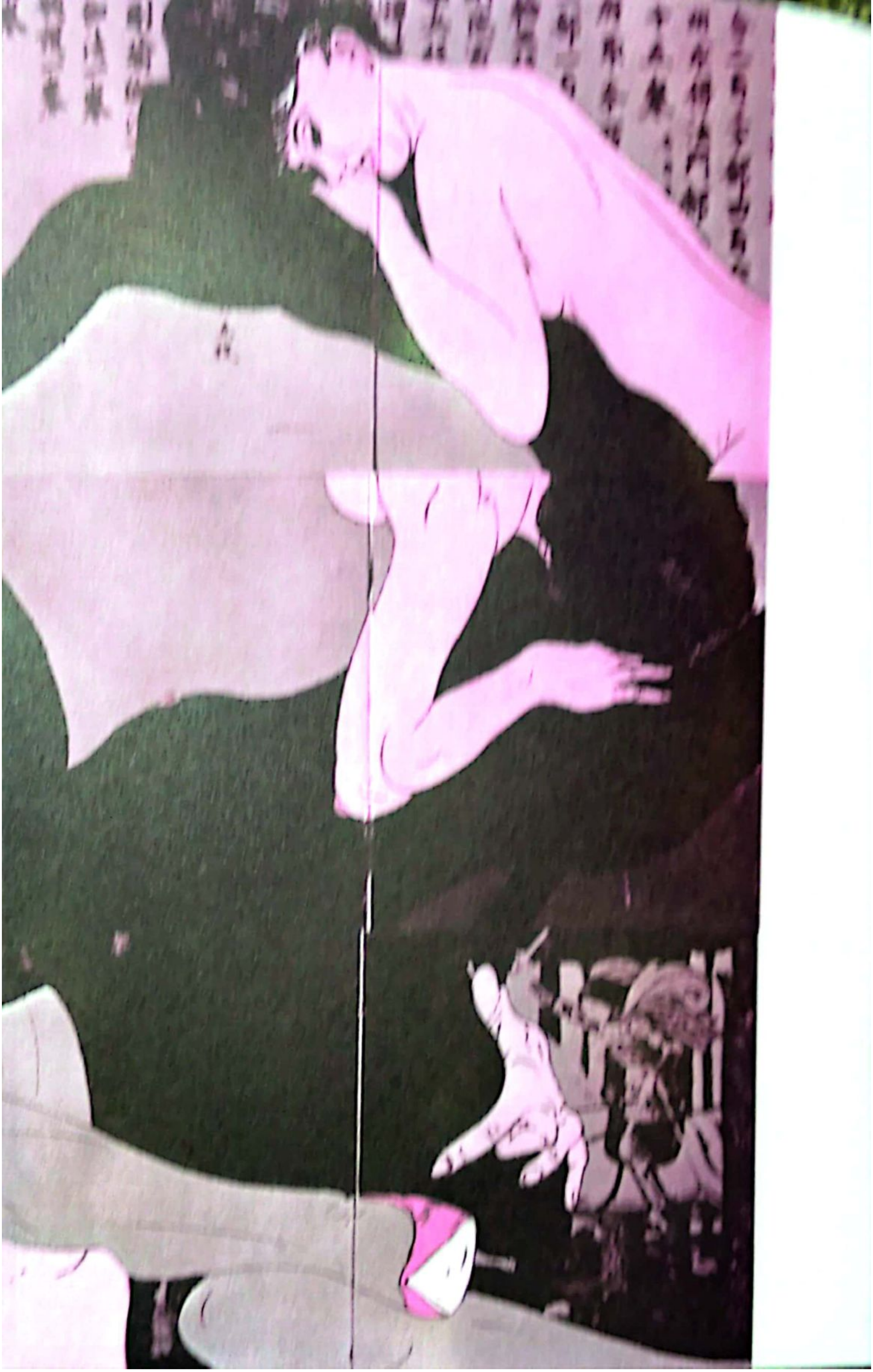
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

脱いで脱がせて顔赤らめて…

浅丘ルリ子と横尾忠則氏がヌード対決

ヌードのカタキはヌードで討つ

カメラマン修業中の浅丘ルリ子が、イラストレイター横尾忠則をまっ裸にして、会心の男性ヌードを撮りまくった。以前、横尾氏にハダカのイラストを描かれたルリ子は、これでめでたくカタキ討ち。……にしても独身の美人スターが男の全裸を撮ったとは、[illegible]出色のハレンチな話。浅丘ルリ子を見直しました。

眠れなかった前夜のモデル

思わず目センをそらしたルリ子

浅丘ルリ子の奇妙なヌード

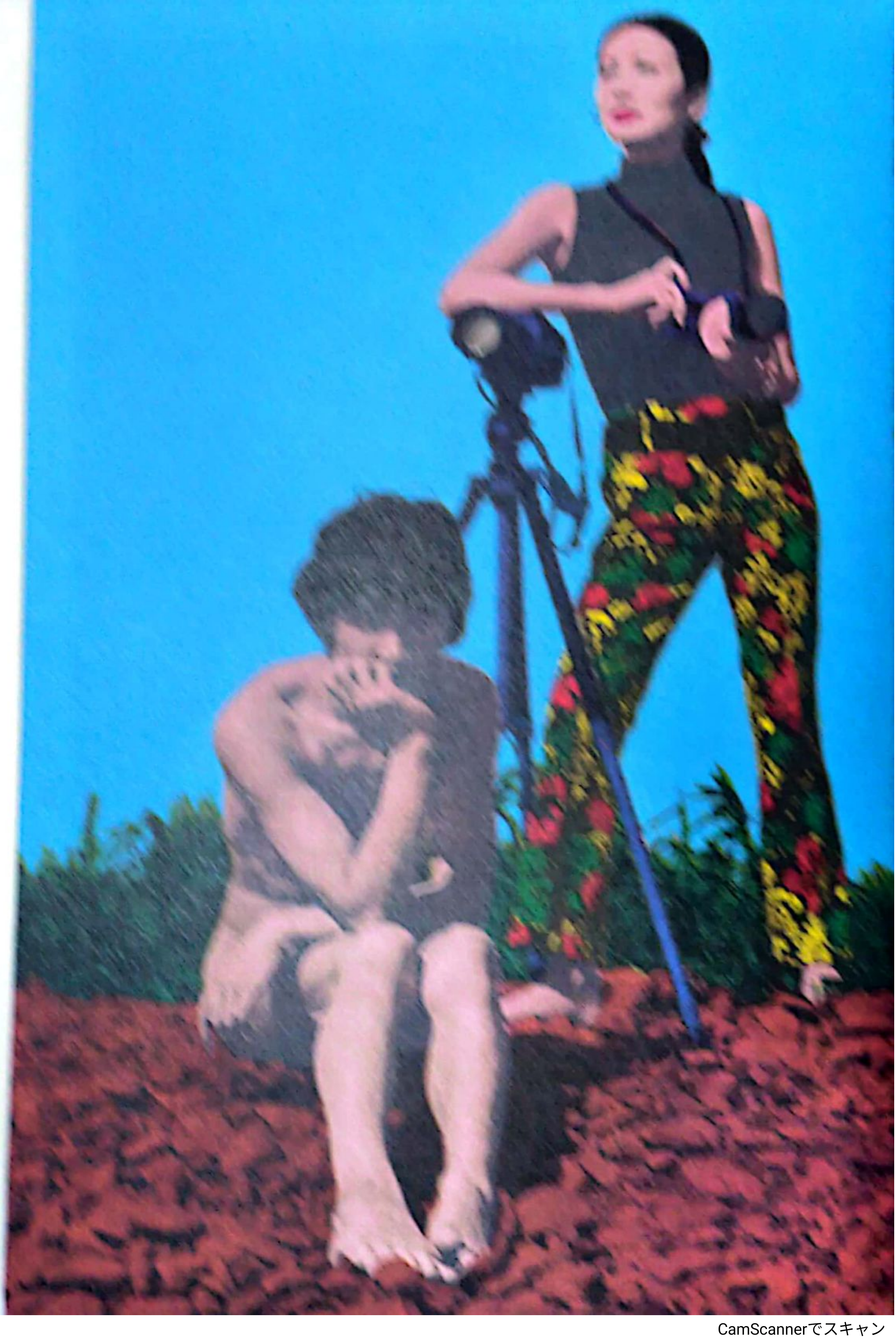
春画か 現代の浮世絵かピンクの全身！

ドキッとしたけど横尾さんの頼みなら

僕はこの絵が好きと三島由紀夫氏

ダイヤ嫁

CamScannerでスキャン

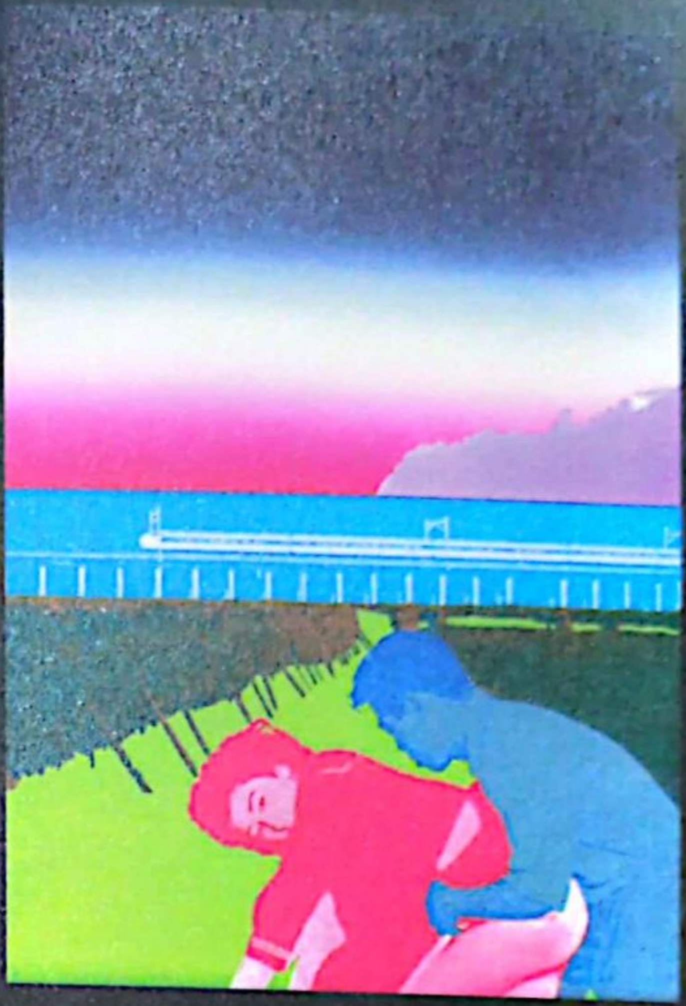
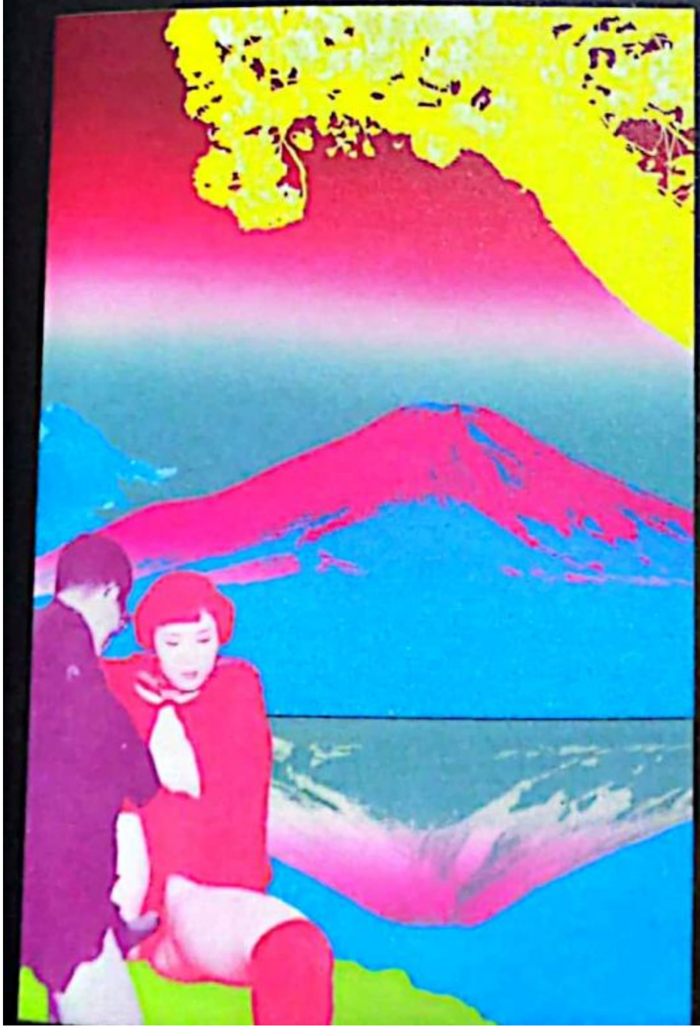
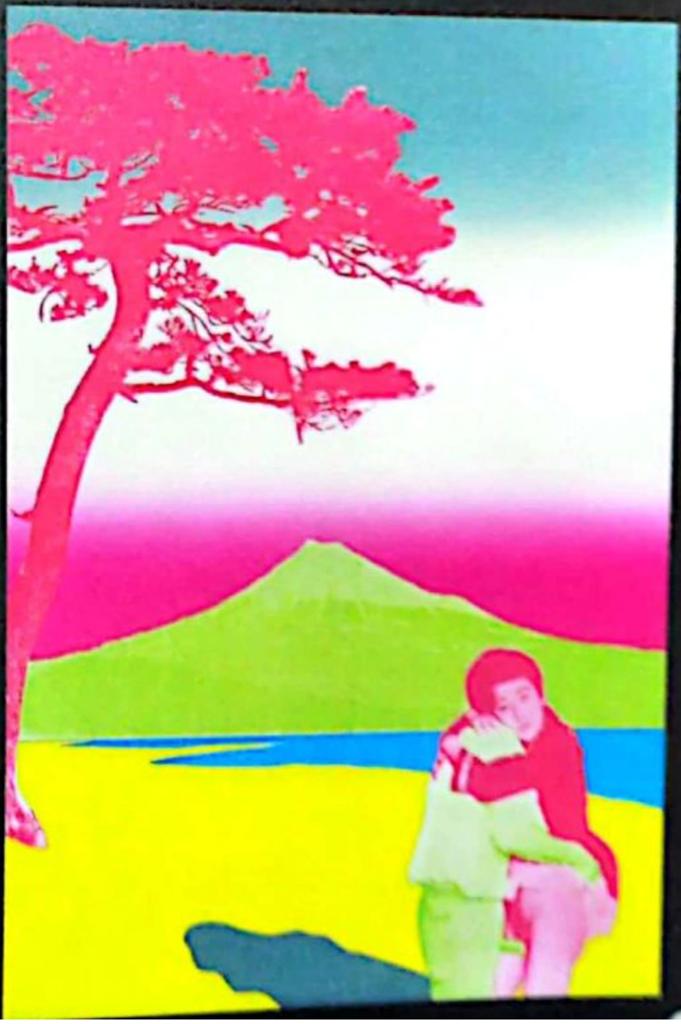


CamScannerでスキャン

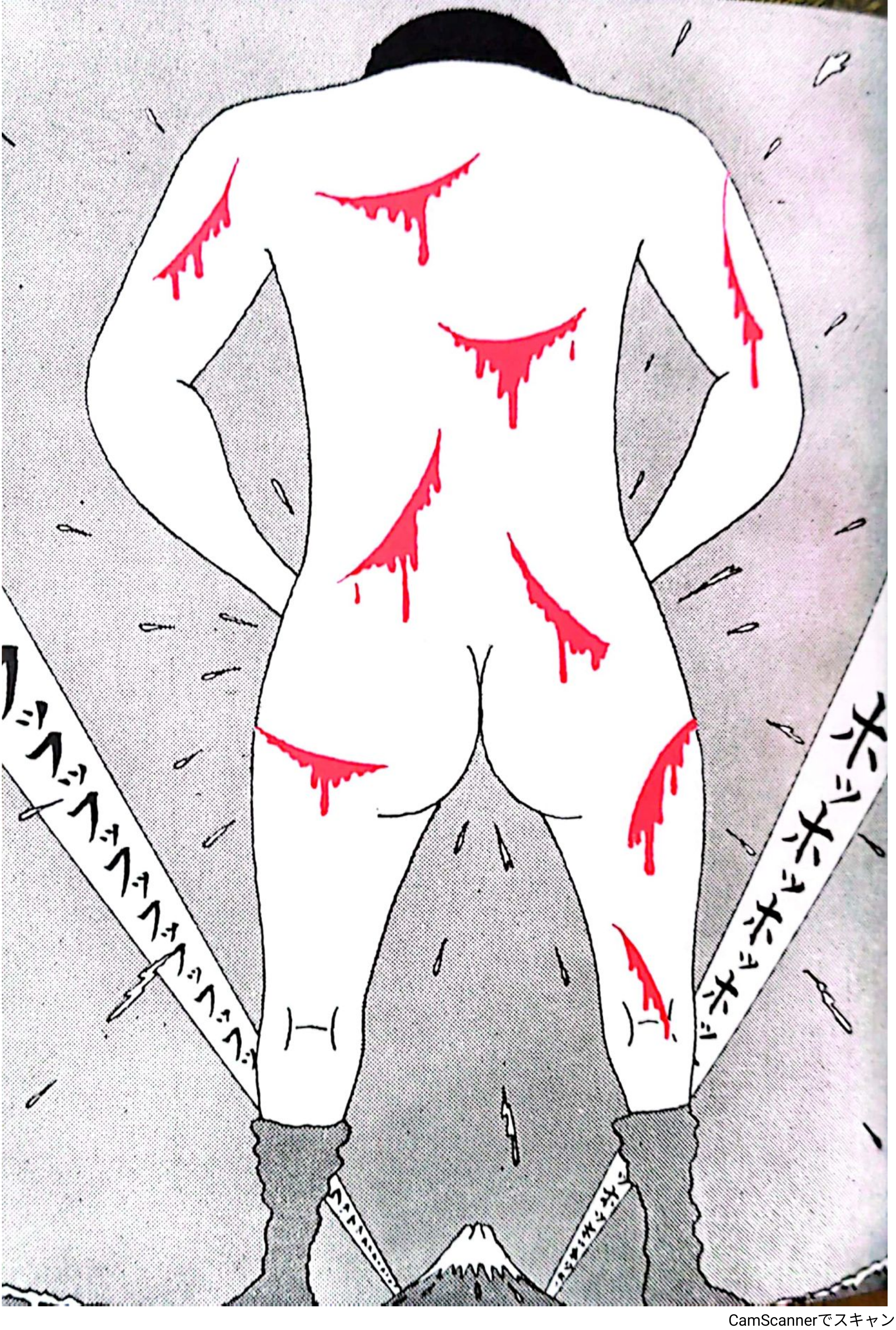
裸体姿之図
ひかれて
火を吐き
風ばかり

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ぼくは確か中学一年生ぐらいまで母に連れられて銭湯に行っていた。ぼくの体からはいつも中将湯の匂いがたちこめていた。それは母親の匂いであり、女の肉体の匂いでもあった。

ぼくが生まれた時、母は五十歳位だった。ぼくには兄弟がなく、一人っ子であることが不思議に思えた。

母は橋の下で捨子だったぼくを拾って来たと教えた。嘘だと信じていたが、母が本当のぼくの母であるということにもある種の疑問を抱いていた。

ぼくの出生に何か隠された秘密があることはうすうす知っていた。しかし確認するすべもなく、たとえ知る方法はあっても事実をつきつけられるのが恐しかったので、出来得る限り傷口に触れるようなことは避けていた。

ぼくは母の肉体を良く知らない。母乳の出ない母の乳房の匂いをかぐこともなかったぼくは、常に母の肉体に憧れ、自らのものにならないことを憎んだ。

母の乳房は、まるで子供を産んだことのない女のそれのように堅くひきしまっていた。なぜか母はぼくの前で裸をさらすことを恥じた。

夏の午後、母は裏の庭でよく行水を楽しんでいた。ぼくはその母の裸姿を盗み見した。

それは、ぼくにとって余りにも刺激の強い眩(まぶ)い光景だった。そしてぼくが次第に母としてではなく女として見るようになっていった。母は自らの裸をぼくに見られることを意識しながらも、作為的にぼくの前に裸を露出したがった。

また、ぼくもこれに応えるかのように母と同じ行為を示すようになった。

母と一緒に行く銭湯が楽しかった。母はぼくの体をぬか袋ですみずみまできれいに洗ってくれた。公共的な場が逆にわれわれを必要以上に大胆な行動にしむけたことは確かだった。ぼくの秘められた出生の謎は、こうして徐々に洗い流されていった。

ぼくは、いつの間にか母の視線や母の触覚に次第に犯されていくような気がした。われわれの愛の形体は親子の愛ではなく、むしろ男女のそれに近似したものだった。

ぼくは喉もとまで、「ターチャン（自分の名前をこう呼んでいた）はお母ちゃんが産んだ子と違うんやろ？」と尋ねそうになるのを、いつもやっとのことで押えていた。母は表面的には親子の関係を装いながら、ぼくを男としてみていたところがあった。ぼくを永久に獲得するためには親子の関係は都合のいいものだったのだろう。

高校に入学して間もない頃だった。ぼくは陰金になった。

治療法について友達や父に相談する前にぼくは母に相談した。この相談は女子学生をデイトに誘う勇気より、数倍勇気のいるものだった。

母は何のためらいもなくぼくの下半身を裸にし、ぼくの性器に手を触れた。

たとえ母であろうと、ぼくは成熟した男性である。たちまち母の指の中でぼくの性器は女性を意識し、勃起した。この勃起した性器はぼくの母への全てを語りかけるシンボルでもあった。

ぼくの陰金の治療には長時間を要した。意識的に病状を延期させたのだ。母も一日に何度も陰金の治療を要求した。こうして母とぼくとの密室的な不思議な関係が続いた。母の指に自由に泳がされるぼくの勃起した性器は一生懸命母に何かを語りかけるために努力したはずだ。

ぼくの母が実母でないことを確認したのは高校二年の夏休みの時だった。

たまたまアルバイトで市役所の戸籍係で戸籍簿の整理の仕事をした時に出生の秘密を知ったのだった。

ぼくが養子であるということは以前から内なる事実として、われわれ親子の間ではタブーとされていたが、こうして白日の下にさらされた事実は、より膨脹した確固たる事実となって、ぼくの最も奥深い部分にドカッと横たわってしまったのだ。

ぼくが結婚してから母は、急にぼくから離れていく存在になった。というよりわれわれ夫婦へ多分に遠慮した態度をとるのだった。ぼくも母への関心が次第に薄れていくような気がした。

そして母とぼくとの深奥部での対話が疎遠になっていった。母を女として見ていたせいか、妻が母に代って女として私の中に存在しはじめたのだ。

母の死が性の終止符か

そんな母が、五年前膵臓癌で死んだ。母の死の床から胴巻に入れられた数枚の春画とわずかな額の貯金通帳が出てきた。

春画の裏にはカーボン紙でなぞった鉛筆のあとがあり、それが何んとも生々しくぼくに生前語り得なかった母の全てを語りかけてくるような恐怖に似たものを感じとった。それは数枚の春画を通して交わった母子相姦のイメージだった。

母を[illegible]で、全てを母のなかから、また母は[illegible]かつて言わなかった。それだけに言葉の底から語りかけてくるような母の[illegible]、善んだ母の苦しさ[illegible]、なおいっそう多くのことを語るのである。

ぼくは母のことに触れなければならない時、何んともいえない重い疲労感に襲われる。

母を語ることは自己を語ることであり、母を否定することは自己を否定することでもある。

ぼくは、今までにも何度か母について書いたことがあるが、母はぼくの中に生誕の空間と時間の位置を占め、母はぼくを自由に操るように支配している。母から出発し再び母に帰らなければならない姿は、まさに輪廻の苦しみのようである。

ぼくの性の歴史は一応母の死で終止符が打たれたのだろうか。ぼくにとって性とは母への[illegible]、母の子宮へあくなき[illegible]である。

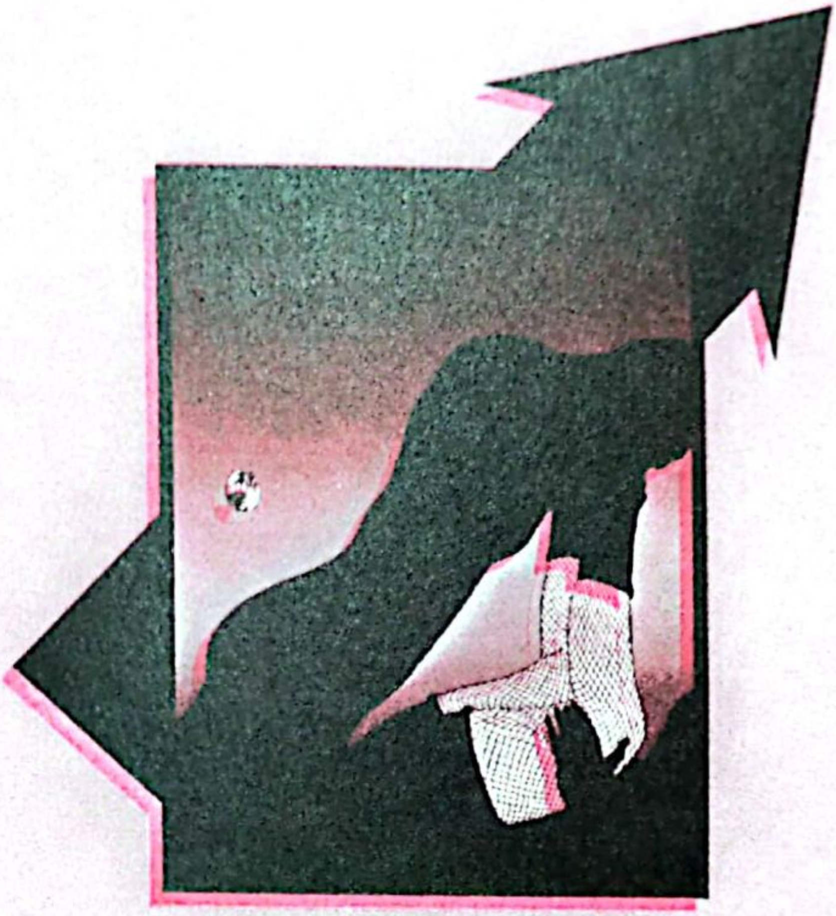
母の胎の中で[illegible]ぼくの[illegible]した下意識の[illegible]を体験した。あの日の[illegible]とした記憶の記憶が今も鮮明に生々しく[illegible]る。ぼくの性は電光の如くあの日の[illegible]の胎児の[illegible]のような記憶の中に回帰していく。

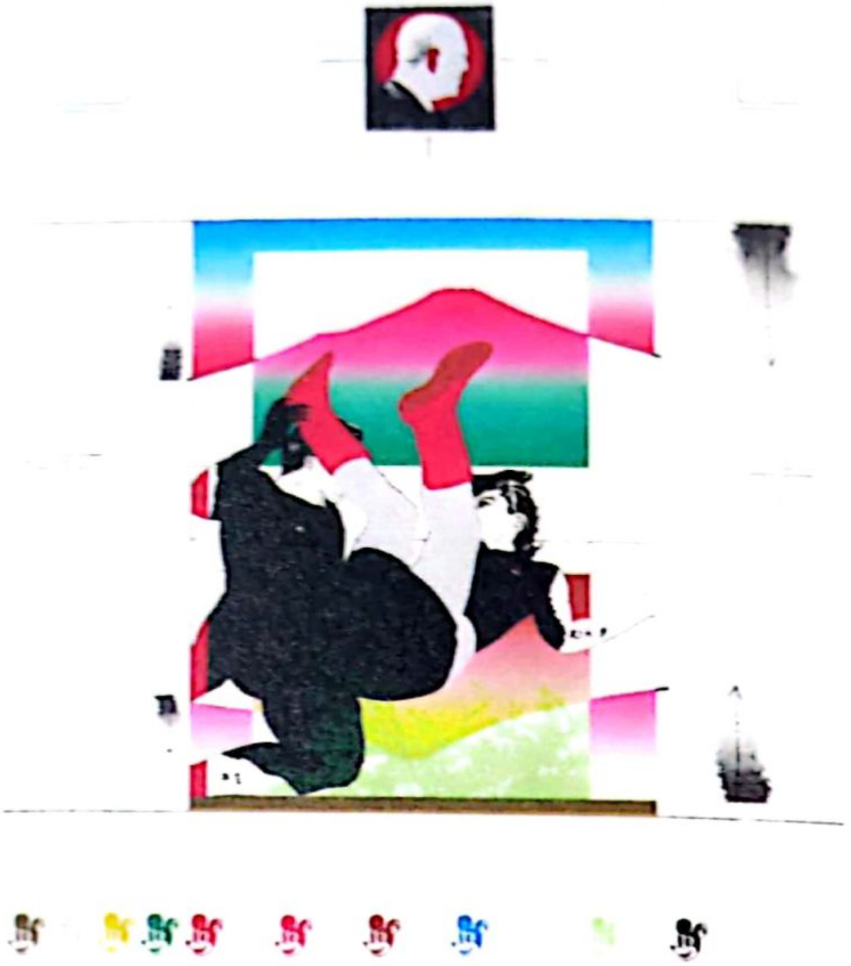
あの日を再び獲得するために、いや、あの日をぼくの歴史の外に追放するためにのみぼくの性が存在し続ける。母と女が渾然に重層するぼくの母は、母と呼んでいいものかどうかぼくは迷う。

しかし母の死と同時に、ぼくは母の胎内に宿り、初めて母を母として呼ぶ資格を得たのかも知れない。

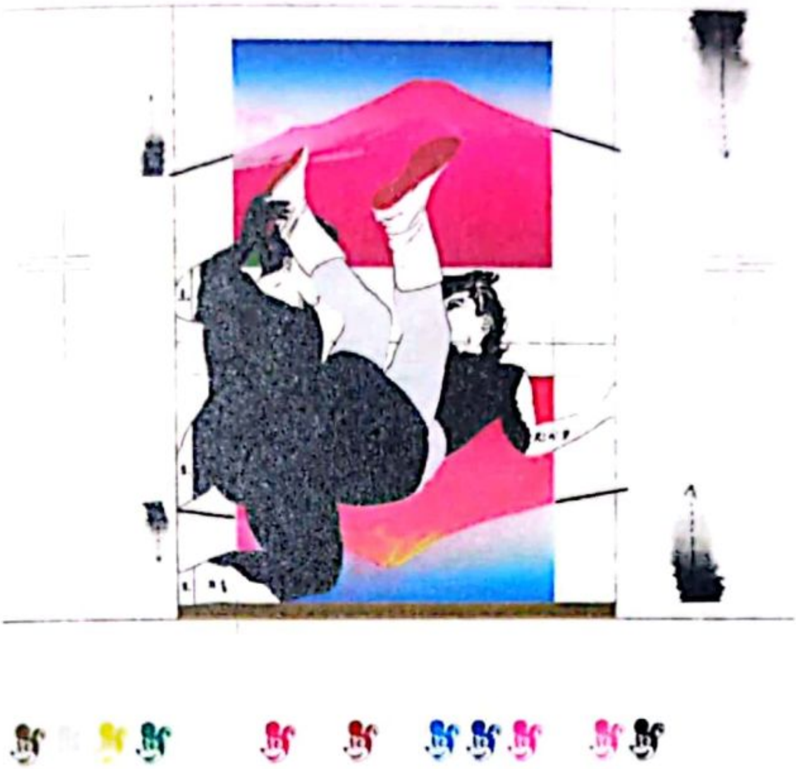
母が永遠であり絶対であるように、ぼくの性も永遠であり絶対なものだ。母に支えられたぼくは性に支えられているのである。

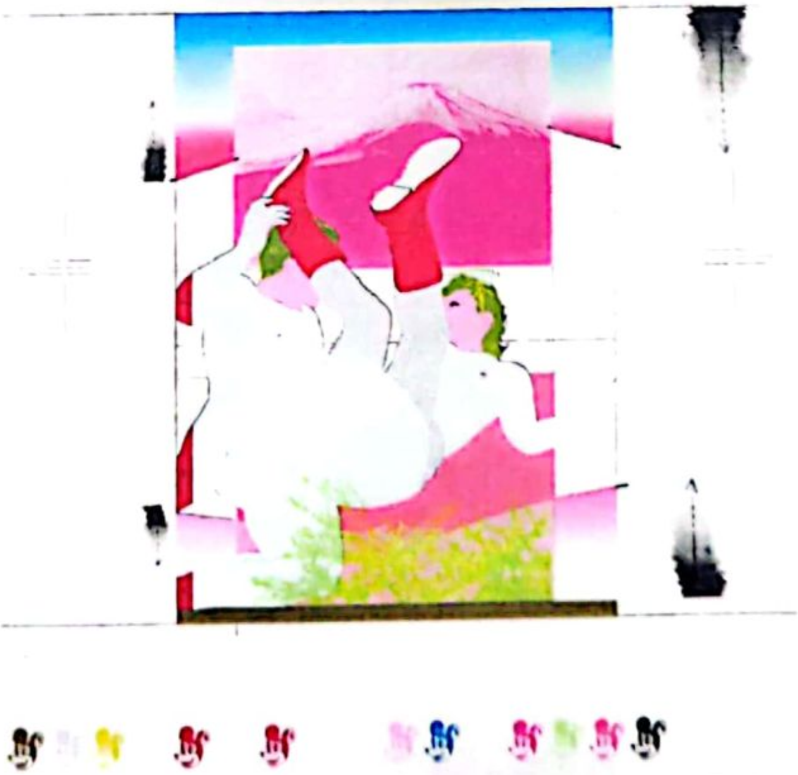
ぼくの世界の核をなす母を獲得するためにぼくは地球上の全ての女性と交わりたい。人類全ての女性を征服することが、ぼくに与えられた課題である。ぼくの母は、そんな罪深い女性であった。





CamScannerでスキャン





CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

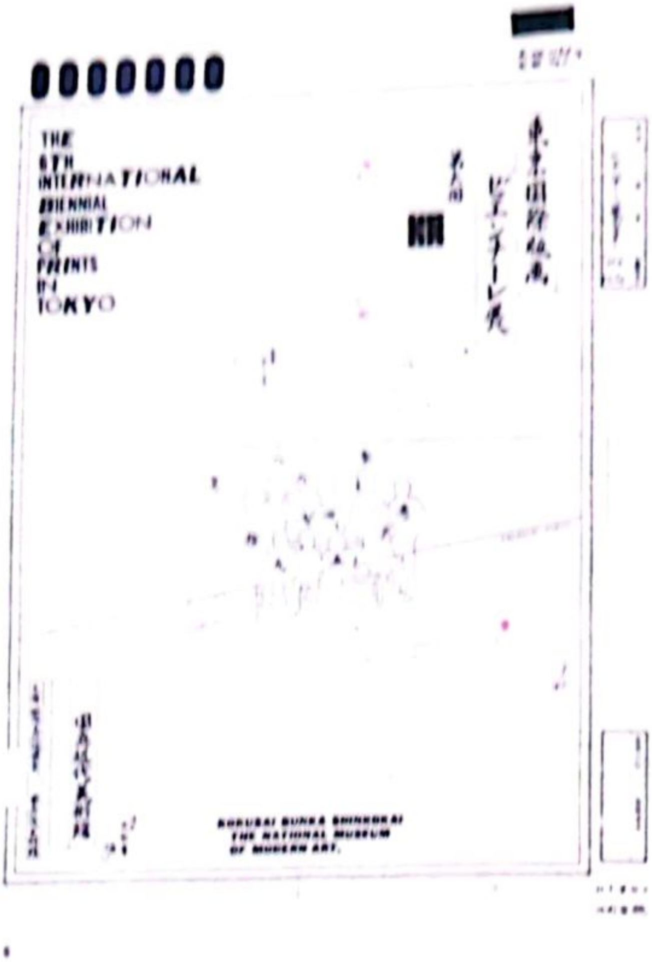
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

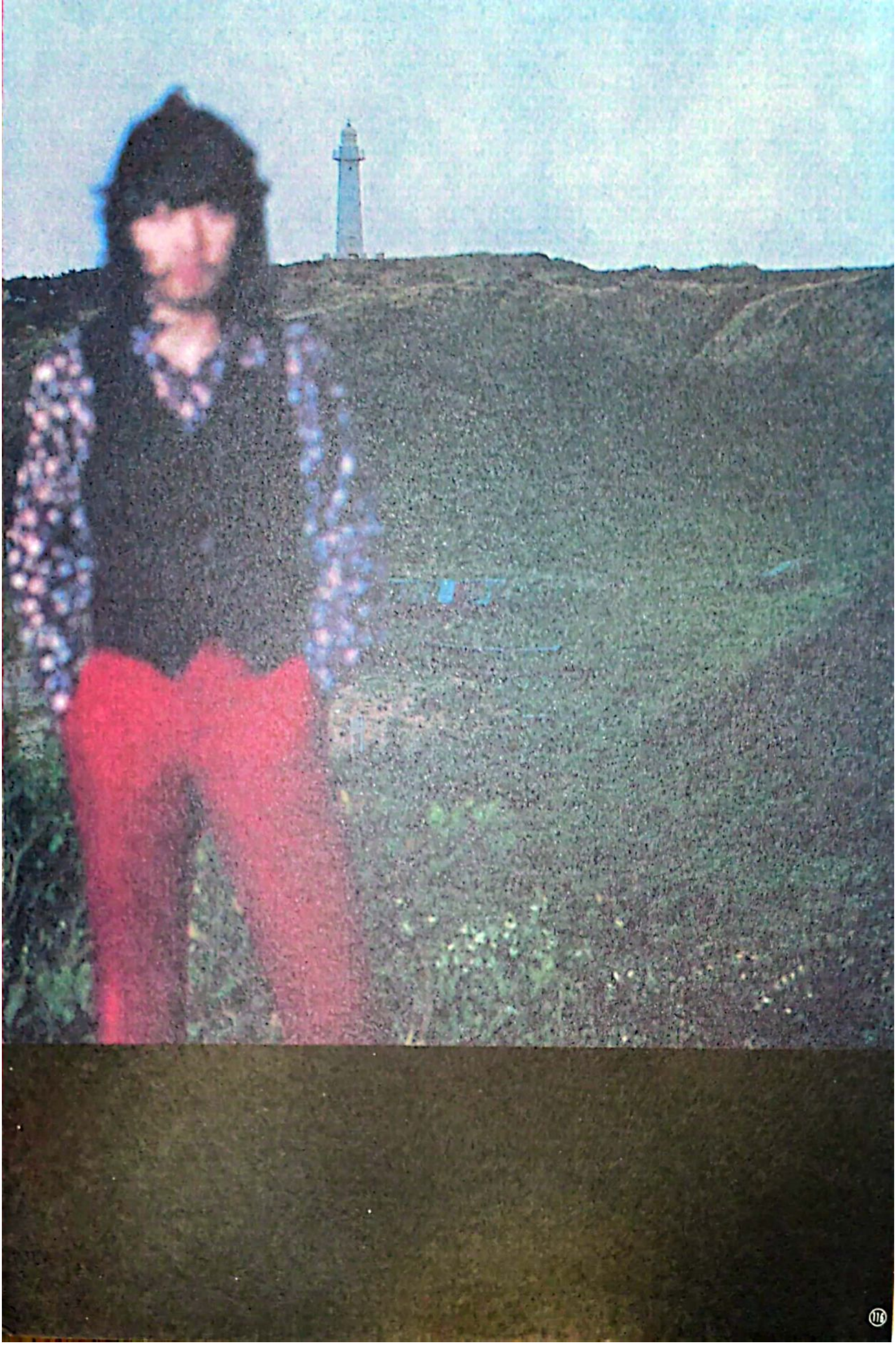
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



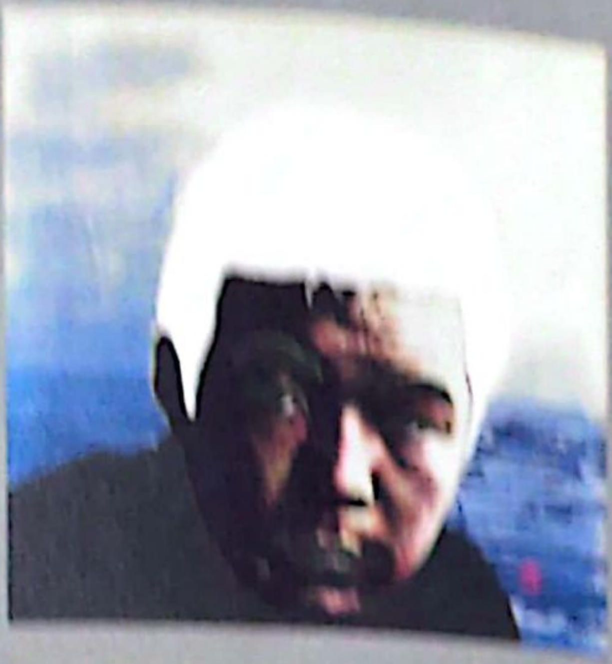
CamScannerでスキャン



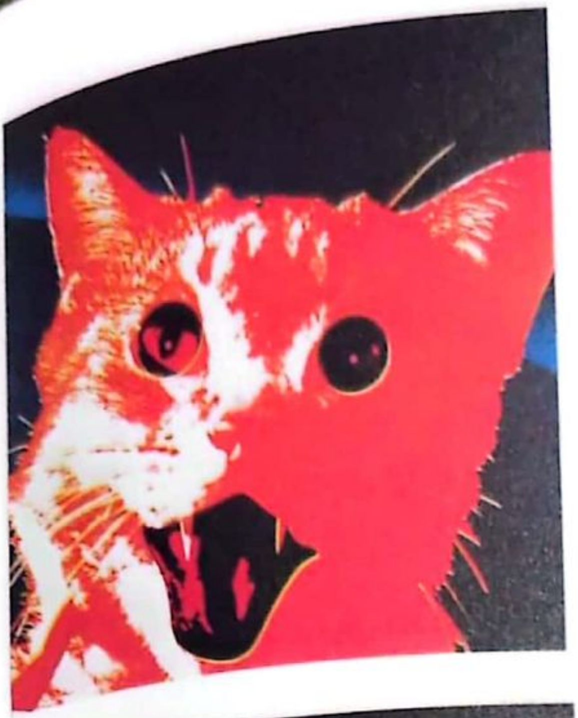
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

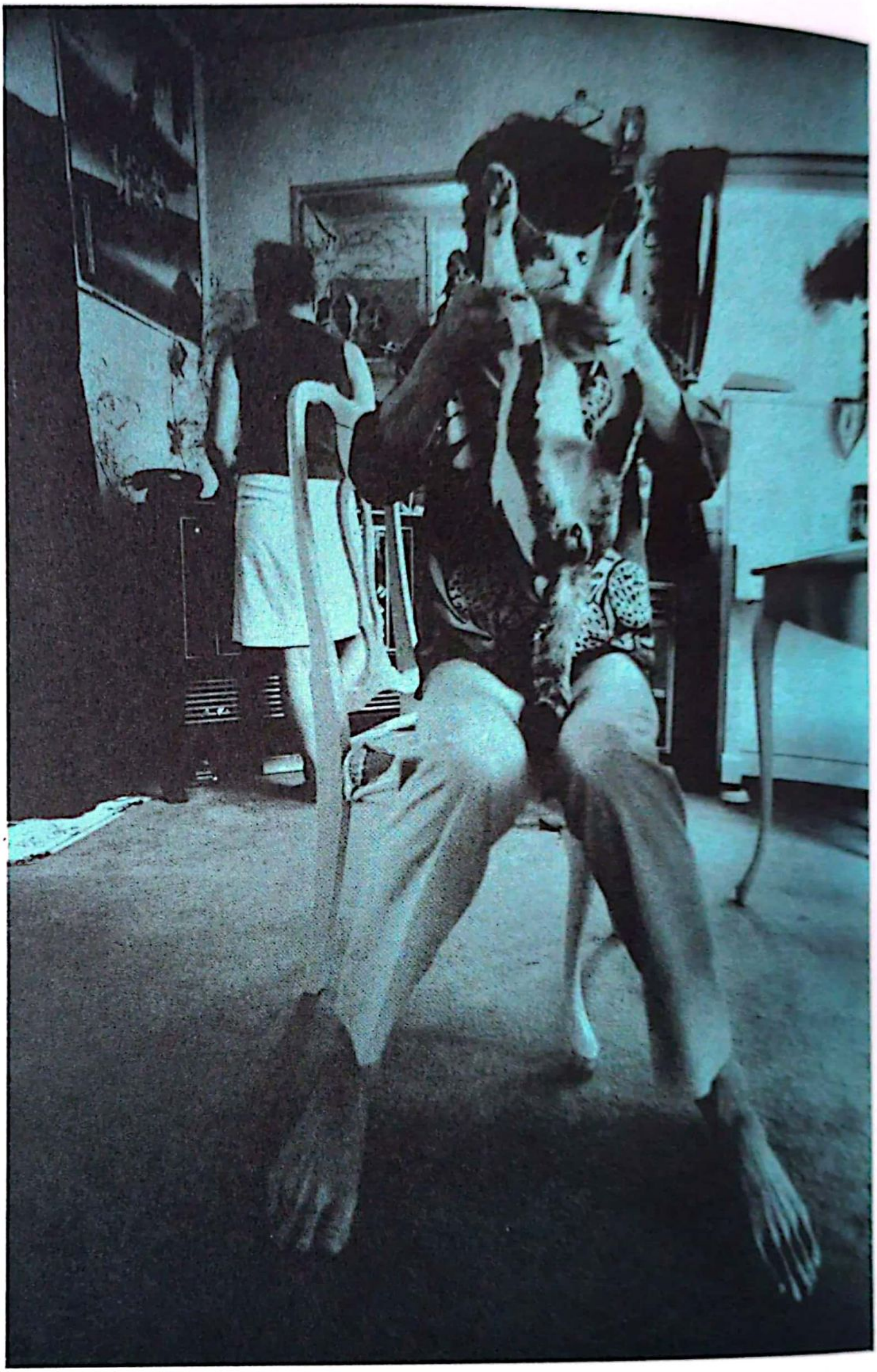
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

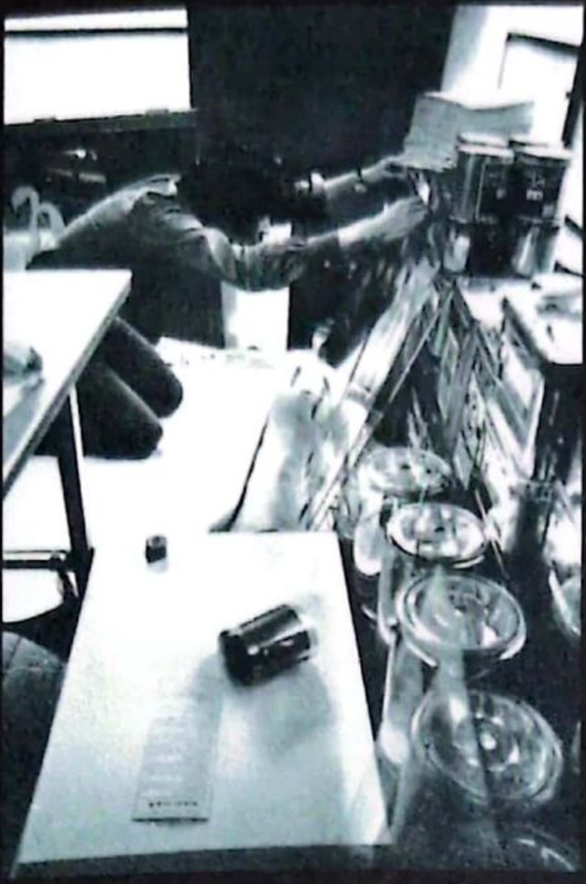


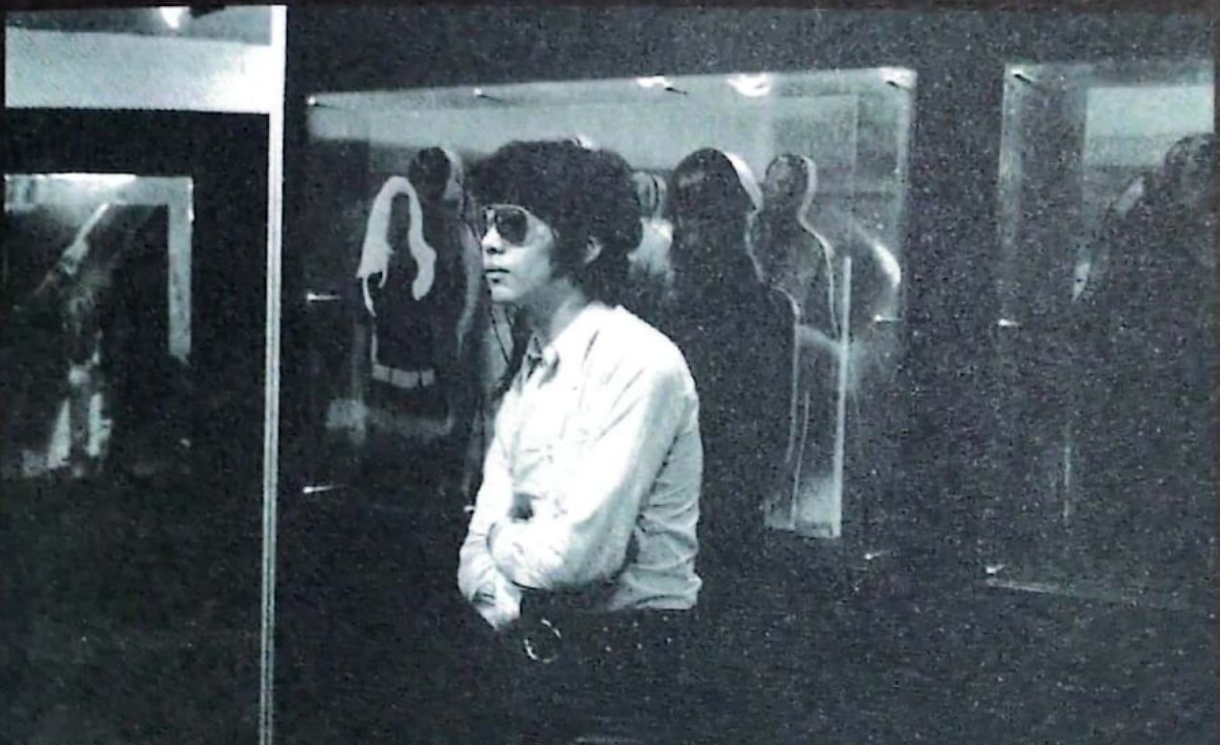
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン





CamScannerでスキャン

私は自分が版画ばかりに特別の関心も興味もない、というのも版画を版画と考えていないからである。私が日頃やっている仕事の一部分は版画であり、絵画であり、そして極論するならすべての表現の領域の一部分であると考えている。

ただ自分の仕事として公認されているデザインやイラストレーションをやるときでさえ、余分なデザインやイラストレーションをやっているという気持ちはごく少ない。むしろデザインをやっているときであれば、可能なかぎり、それから逃れようとさえしている。つまりデザインの中でデザインをやらなければならず、デザインの中で、他のものをやろうとしたいのである。

だから、版画とは何か？という表題に答えるとき、私は、デザインのはみ出した部分とでも答えておきたい。私の仕事は版画であれ、イラストであれ、絵画であれ、広い意味ではすべてデザインに還元されていると考えている。それほど私にとってはデザインというものが発想や行動の重要な基盤になっている。私はデザインの唯一の魅力は、大衆性にあると思う。私はマスプロにより、実像を複製することにより、実像を消し去り、虚像のイメージに転化されることを目的とした。

私が版画に対して、今まで何か、もう一つのり気がしないのは、このマスプロということにある。一枚や二枚といった部数しか大衆の所有物とはなり得ない。私がデザインにもつもう一つの魅力は、捨てられていくという消耗性にある。版画の保存性には、芸術の中に閉じこめておこうという芸術至上主義というか、芸術性の方向さえ内包されているようだ。

それでも私が、多少の色気を感じて版画に手を出そうとするのも、きっと芸術に対するコンプレックスがあるからだと思う。私の内部には、なぜか歌謡曲や落語に似たデザインという大衆芸能のようなものをやっているという後ろめたさがある。なぜなら、私は高校時代、将来、油絵画家という芸術家を志望していたのだが、家庭の事情により、その道に進むことを断念しなければならなかったという一件があったからだ。だから今でも芸術を嫌悪しながらも一方ではそれを求める気持ちが働いているのだ。

しかし私は、どう考えても版画よりデザインの方が好きだ。版画には、額縁があり、応接間に飾られ、家宝に似た貴重品として所有者の地位を象徴するものに転化される危険性があり、一対一で対話するという宗教性が、密室的で閉ざされた世界のものだからいやなのだ。

その点、デザインは最初から開かれたものであり、一方向の目的性をもつという意味で、大変政治的である。デザインの政治性というのは、メッセージをもっているために一方向に人間を煽動させることができる。このデザインにおけるアンガージュマンが、私にとっては大衆的魅力になっているのだ。

版画を版画と考えないところから出発しながらも、版画になっていく私自身の弱さが、たまらなく腹立たしい。いくら版画の中で他のものをやろうと心掛けながらも、版画に足を奪われていくのだ。

しかし、またこのことが版画という芸術的な領域に頭をつっこんでいるということの芸術コンプレックスからくる、充足感さえあるのだから、たちが悪い。

三一八ページにつづく

CamScannerでスキャン

娯楽

大島監督が「新宿泥棒日記」

主演に横尾忠則（グラフィック・デザイナー）起用

大島渚監督の次回作が「新宿泥棒日記」（創造社製作）ときまり、主演にグラフィック・デザイナーで若い人たちに大きな人気を持つ横尾忠則氏（三二）が起用された。横尾氏はポスターや劇団「天井桟敷」の舞台装置のデザインで知られ、最近では「ヘンリー・ミラー幼年期」でも装幀デザインを担当、月刊週刊誌に自分のヌード写真を発表したりして話題をまいた人物である。

横尾　忠則氏

大島　監督

[illegible]

いかえる。

多忙な横尾氏は、このため夏の間の仕事を全部ことわり、映画出演に専念するそうだ。[illegible]

[illegible]

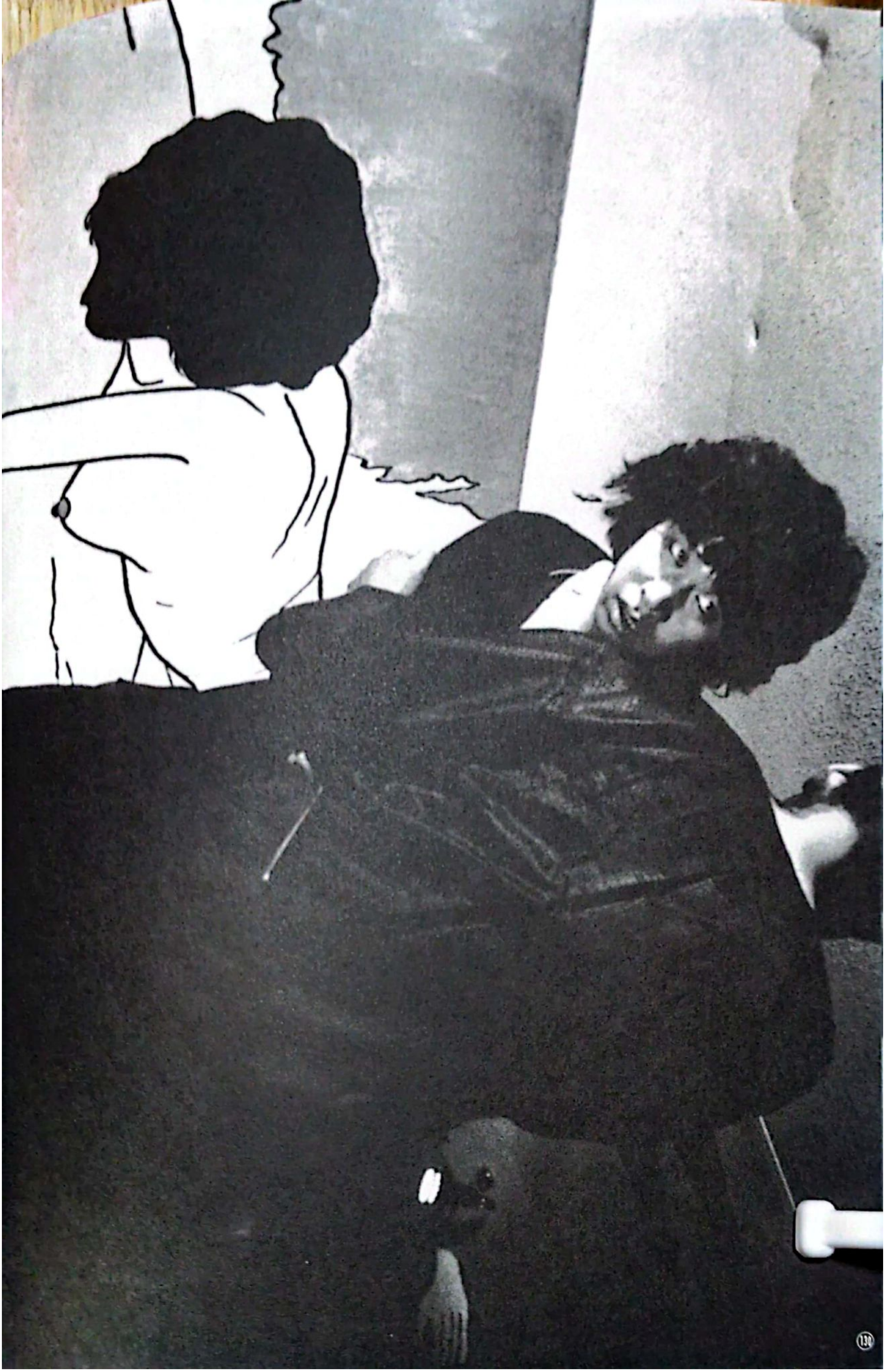
"つめたい殺気を買った"

[illegible]からスカウトを始める。

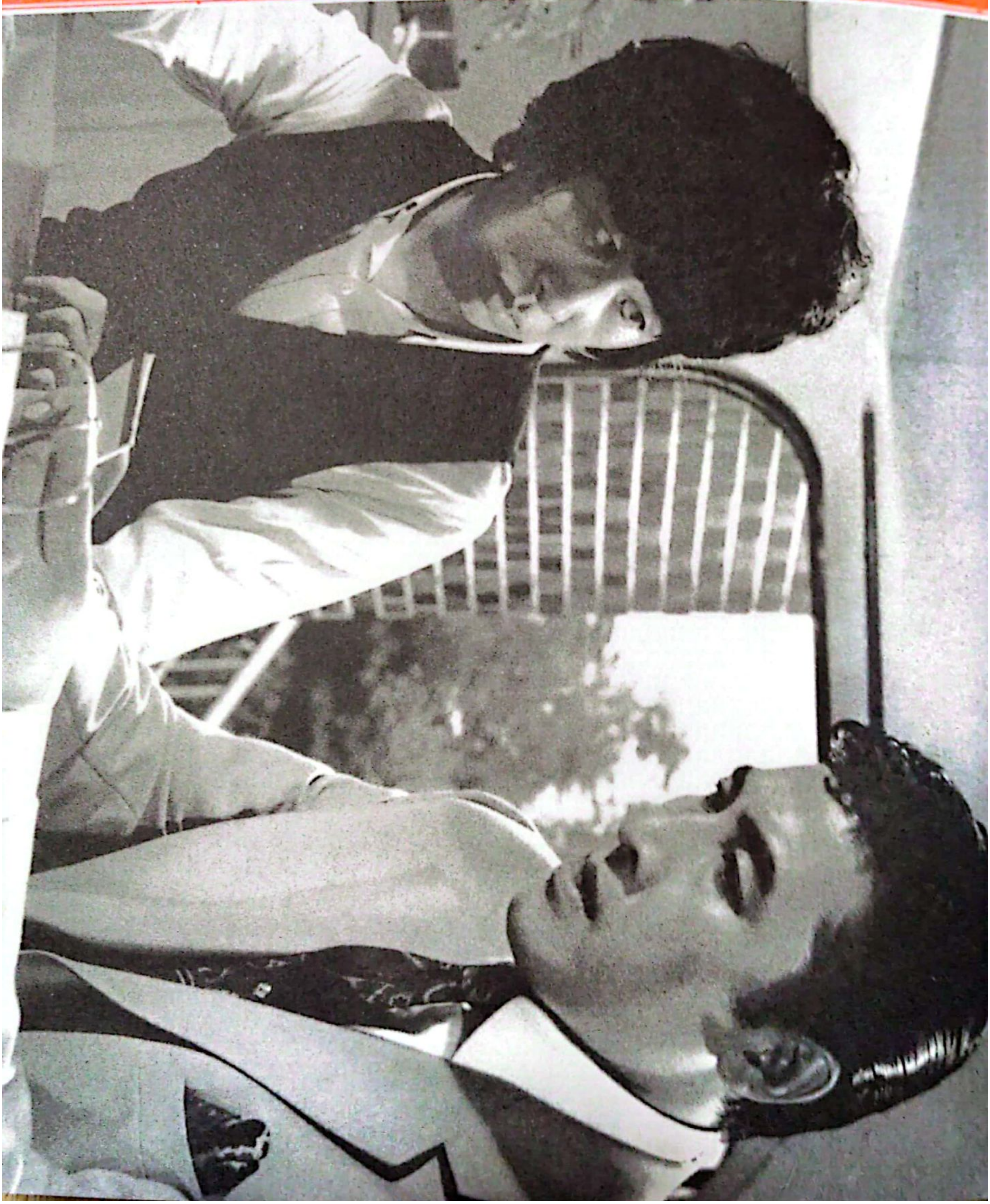
横尾忠則氏の話「映画はガキのころから出たいと思っていましたが、大島さんから話を聞いてびっくりしました。デザイナーが何かのチョイ役かと思ってたんですがね。いまはどうやったらいいか頭の中にシコリが出来たような状態で、ガンになるんじゃないかな。ぼくも大島さんに注文を出して、セリフを少なくするとか、集中・状態が長く続くようなところを少なくしてもらうつもりです。いまのぼくの仕事は二次元か三次元のものだけれども、これからは[illegible]

[illegible]いえます」

CamScannerでスキャン

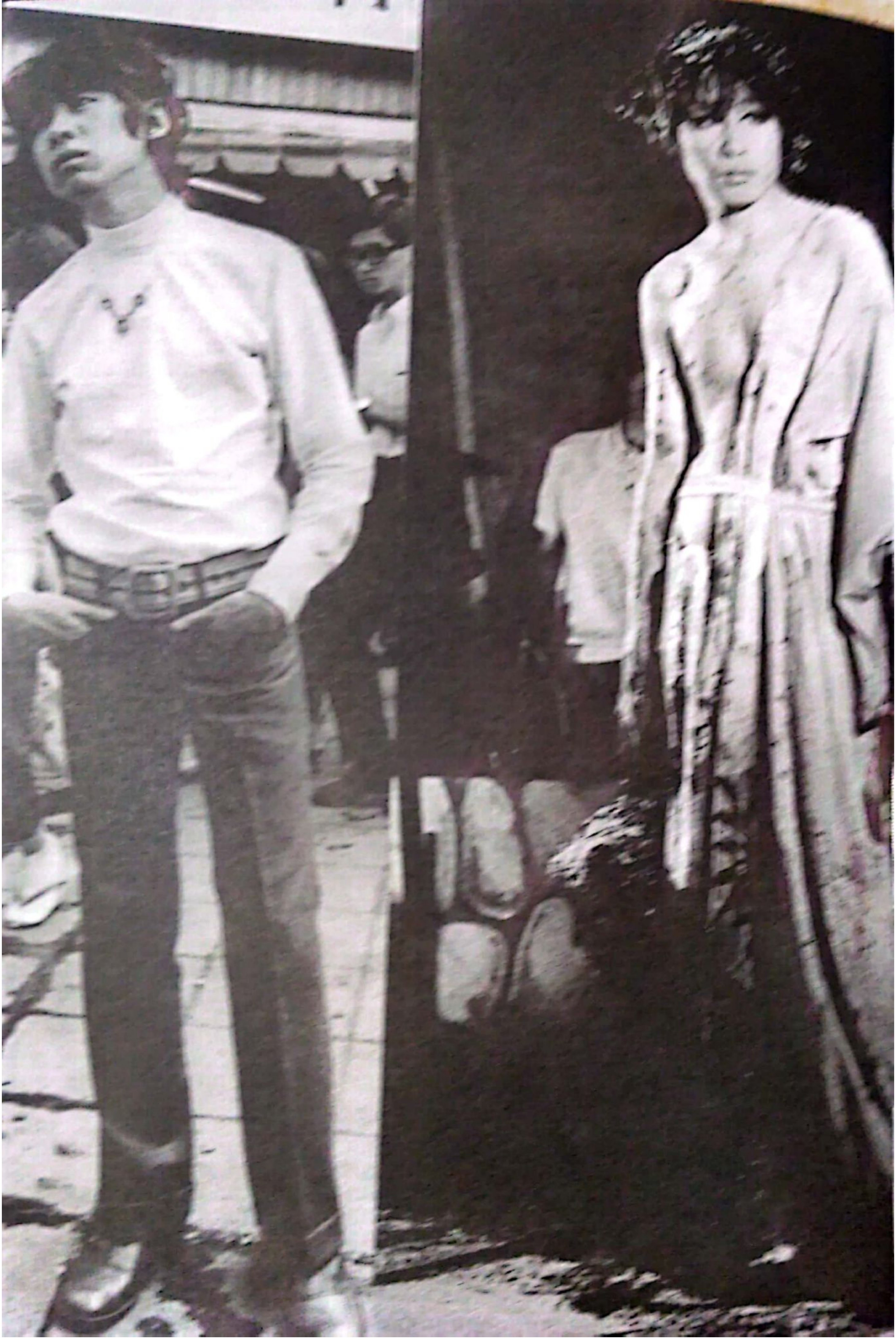


CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

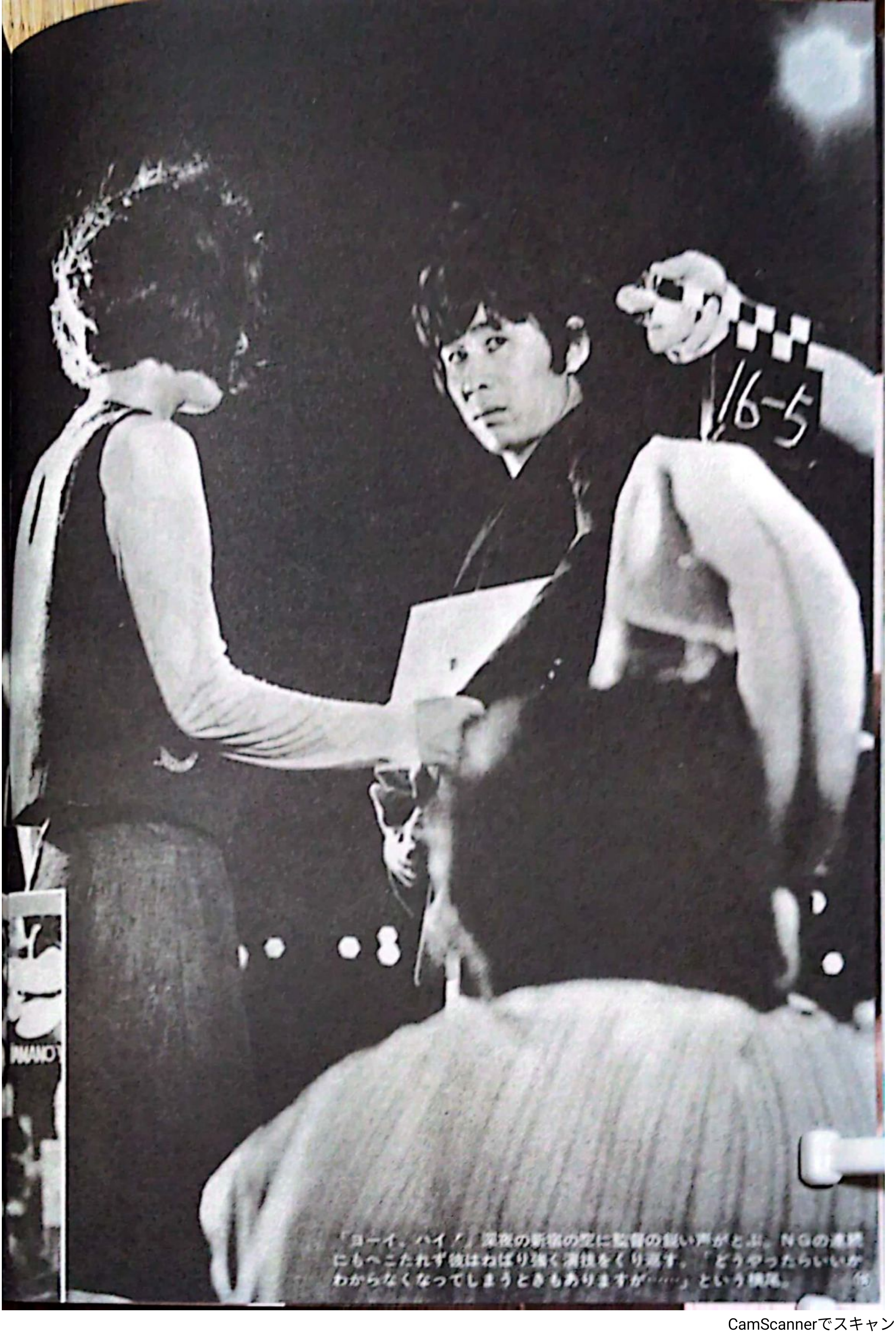
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



「ヨーイ、ハイ！」深夜の新宿の空に監督の鋭い声がとぶ。NGの連続にもへこたれず彼はねばり強く演技をくり返す。「どうやったらいいかわからなくなってしまうときもありますが……」という横尾。

CamScannerでスキャン

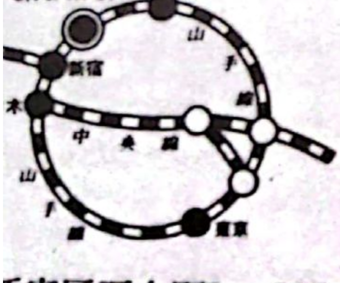
映画はセットを使わず、オール新宿ロケだ。

若者たちの間では教祖的人気をもっているイラストレーターの横尾忠則が映画に初主演する。大島渚監督の『新宿泥棒日記』で、性書ばかりを万引きする学生の役だ。
横尾といえば、彼の朝日と富士山をデザイン化し、極彩色をふんだんにもり込んだユニークなイラストはあまりにも有名。今日のサイケ・ブームのキッカケをつくるものだった。また彼は高倉健と浅丘ルリ子の大ファンだ。「健さま死ぬのは共に」と、高倉に熱烈なラブ・レターを書き、浅丘のヌードをかく。自らもヌードになりアッと人を驚ろかす。まさに彼の行動はハプニングであるといえよう。
大島監督は「彼には殺気と迫力がもうもうとたちこめている。演技力？そんなものは関係ないよ。人間としての魅力、実質をそなえていれば……」と彼に大変な惚れこみよう。
『新宿泥棒日記』には、あらすじはあっても脚本はない。撮影の度にスタッフが討論して脚本をつくっていく。「その意味で、ぼくはただの被写体ではなく、映画自体に、主体的にかかわりあうわけです」と横尾は語る。
昭和元禄といわれる太平の世に狂い咲いたアングラ。サイケ・ブーム。このブームが去ったとしても、すぐれて個性的な横尾は時代の先端に立ち続けるだろう。

撮影　村田憲治

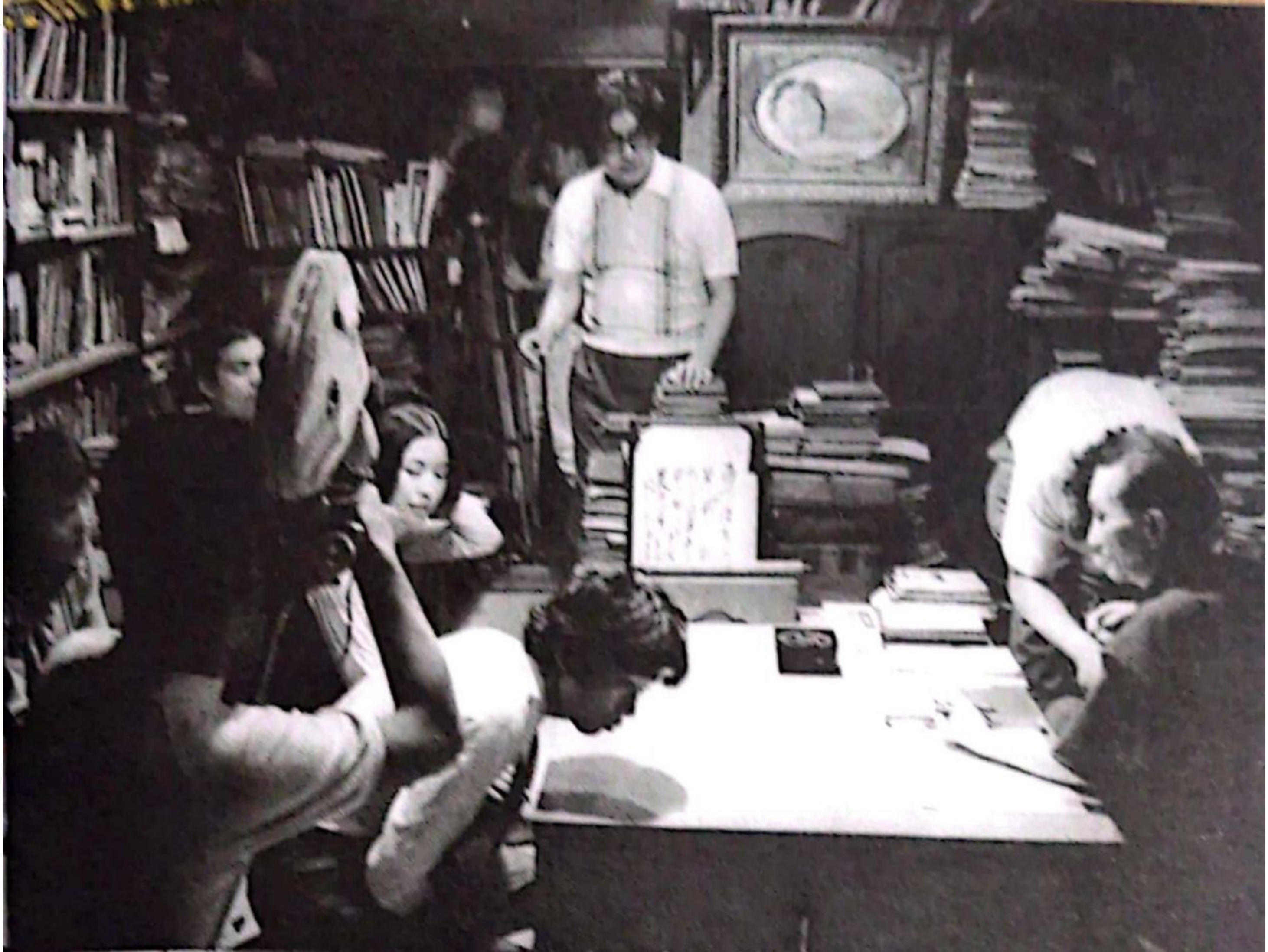
映画の公開は九月の予定。九月には横尾の歌った「オペラ・横尾忠則を歌う」も発売される。

平賀整形外科

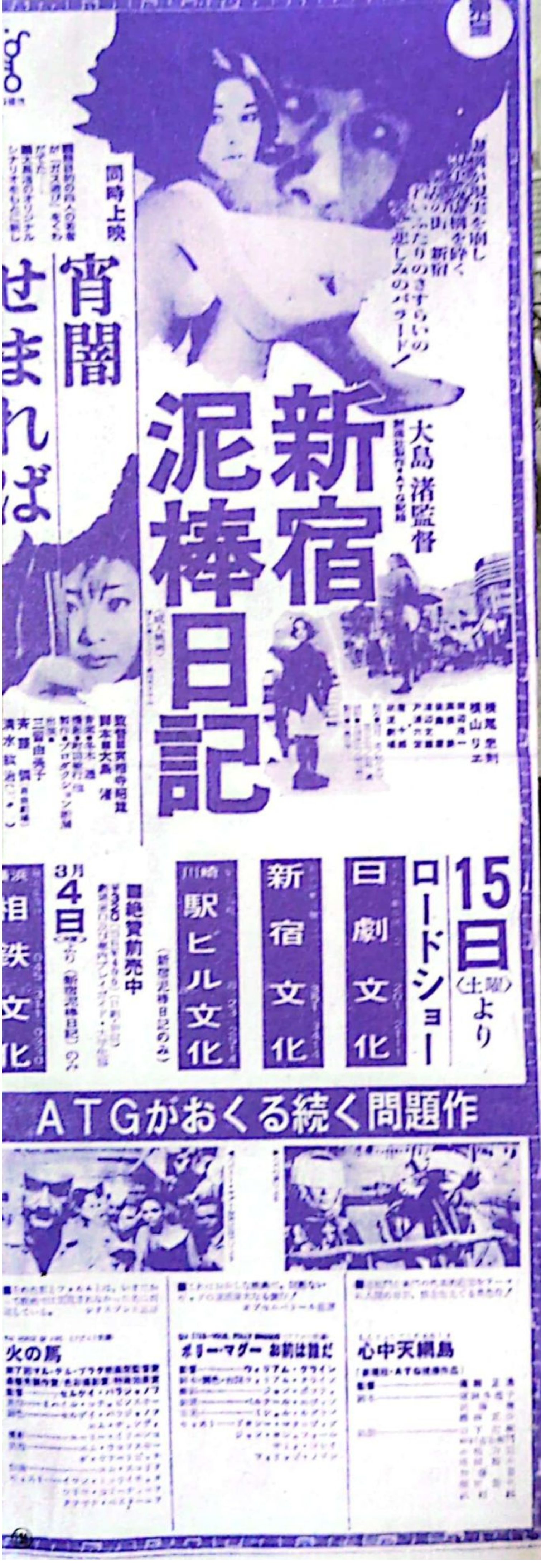


新宿区百人町3～285
《ヤマキビル》

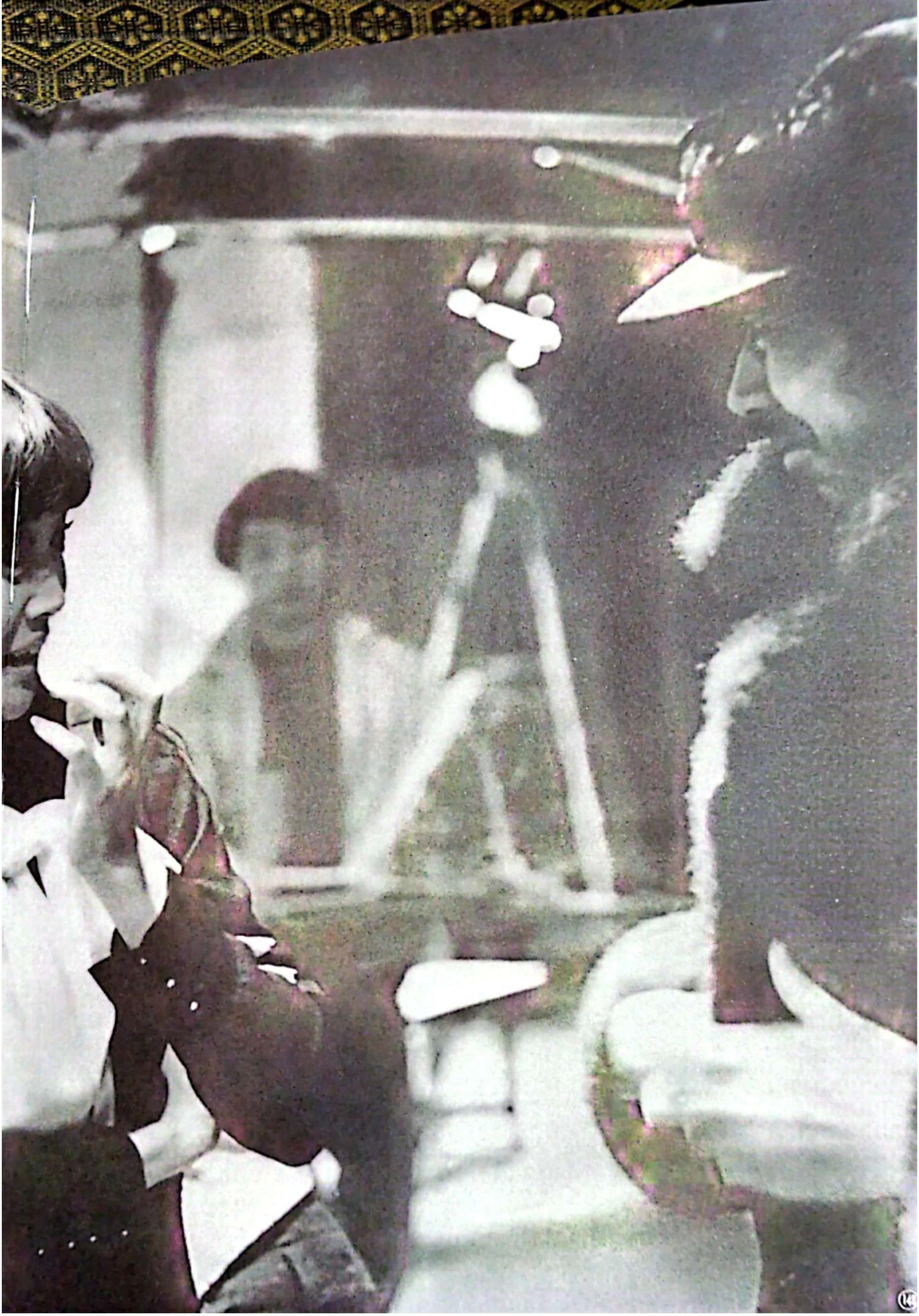
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

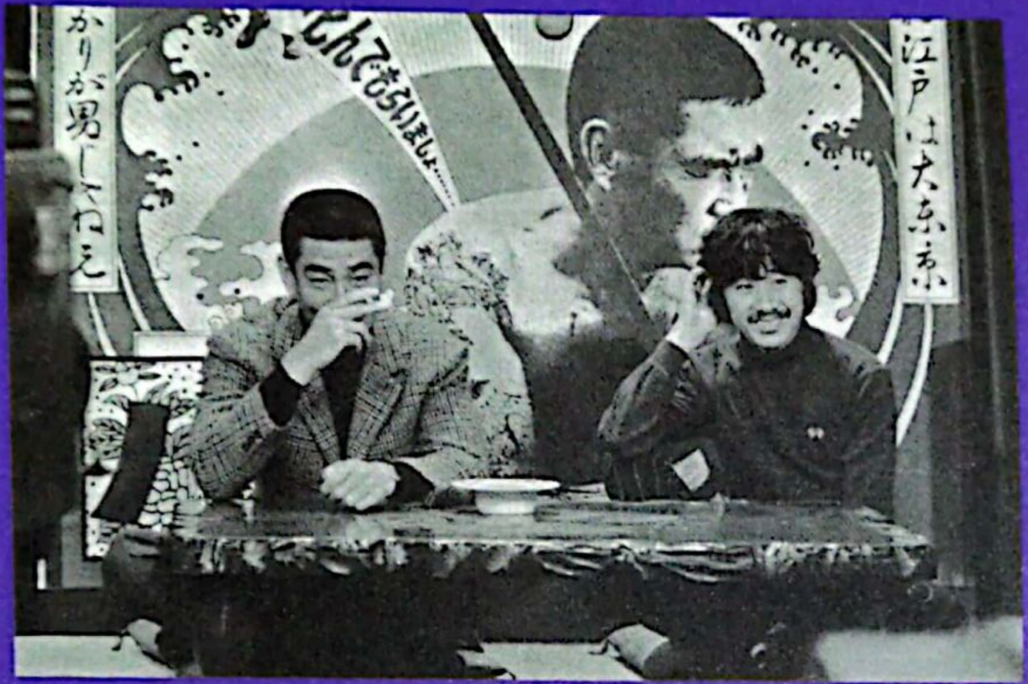


CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

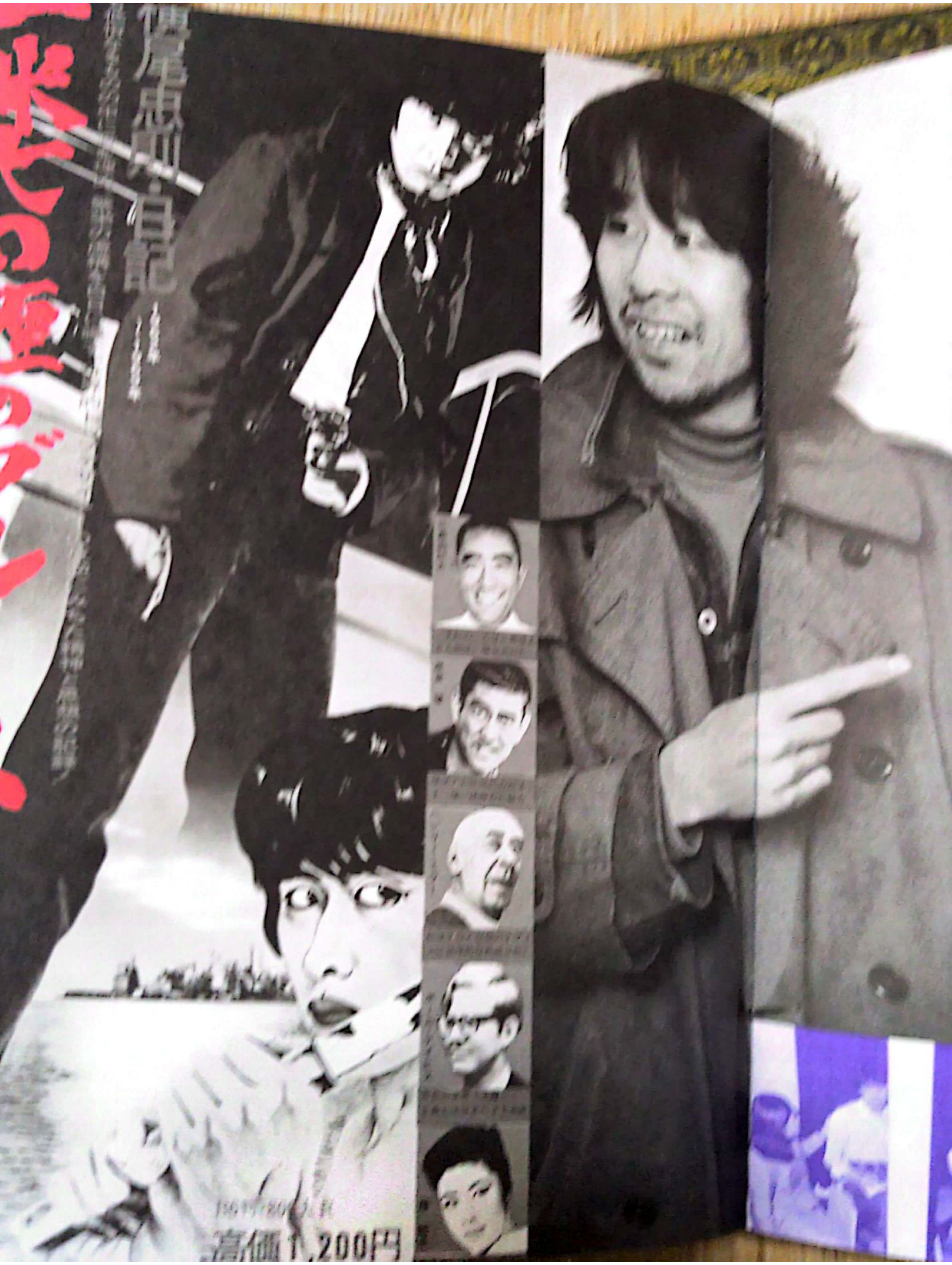
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

女優さんでこんな素晴らしい女はめずらしい。女優さんとことわったが、女といいなおしてもいい。私は彼女と会っていると藤純子という映画のイメージがどうしても重なってこない。映画の藤純子というのはもう一人別にどこかにいるという感じだ。私は映画の藤純子もいいが、実物の彼女の方が、数倍好きだ。実物を知ってから、女優の藤純子のファンになったといった方が正しいかもしれない。どんなことでも安心して語ることのできる友人のひとりとして、私は彼女を大切にしている。藤純子の魅力はいうまでもなく公認の、あのとろけるような色気だが、もうひとつの魅力は、ちょっと人気が出るとすぐ芸術にかぶれて、ヤクザ映画などには見向きもしないという低能役者と違い、大衆のための娯楽映画を演じたいというところである。そしてでもしも進歩的インテリが聞けばホロッとするに違いない、戦後たった一人の女の中の女だ。

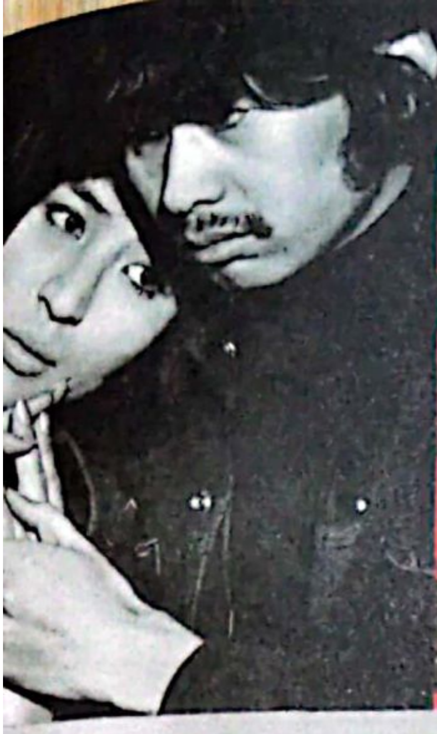


CamScannerでスキャン

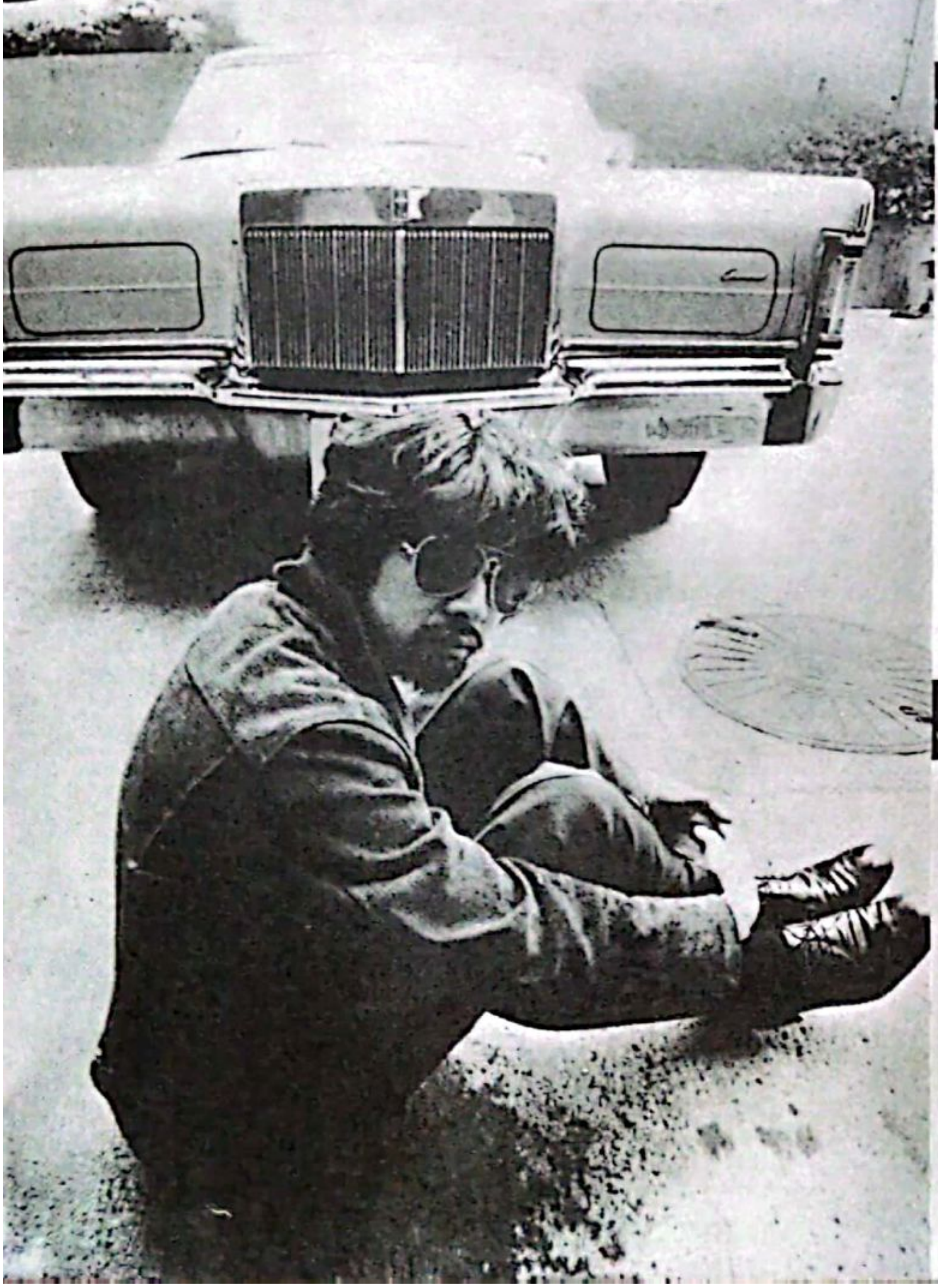
CamScannerでスキャン

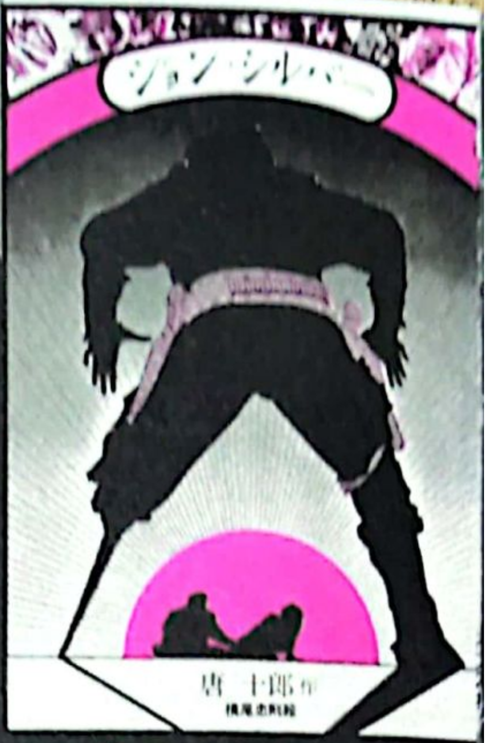
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



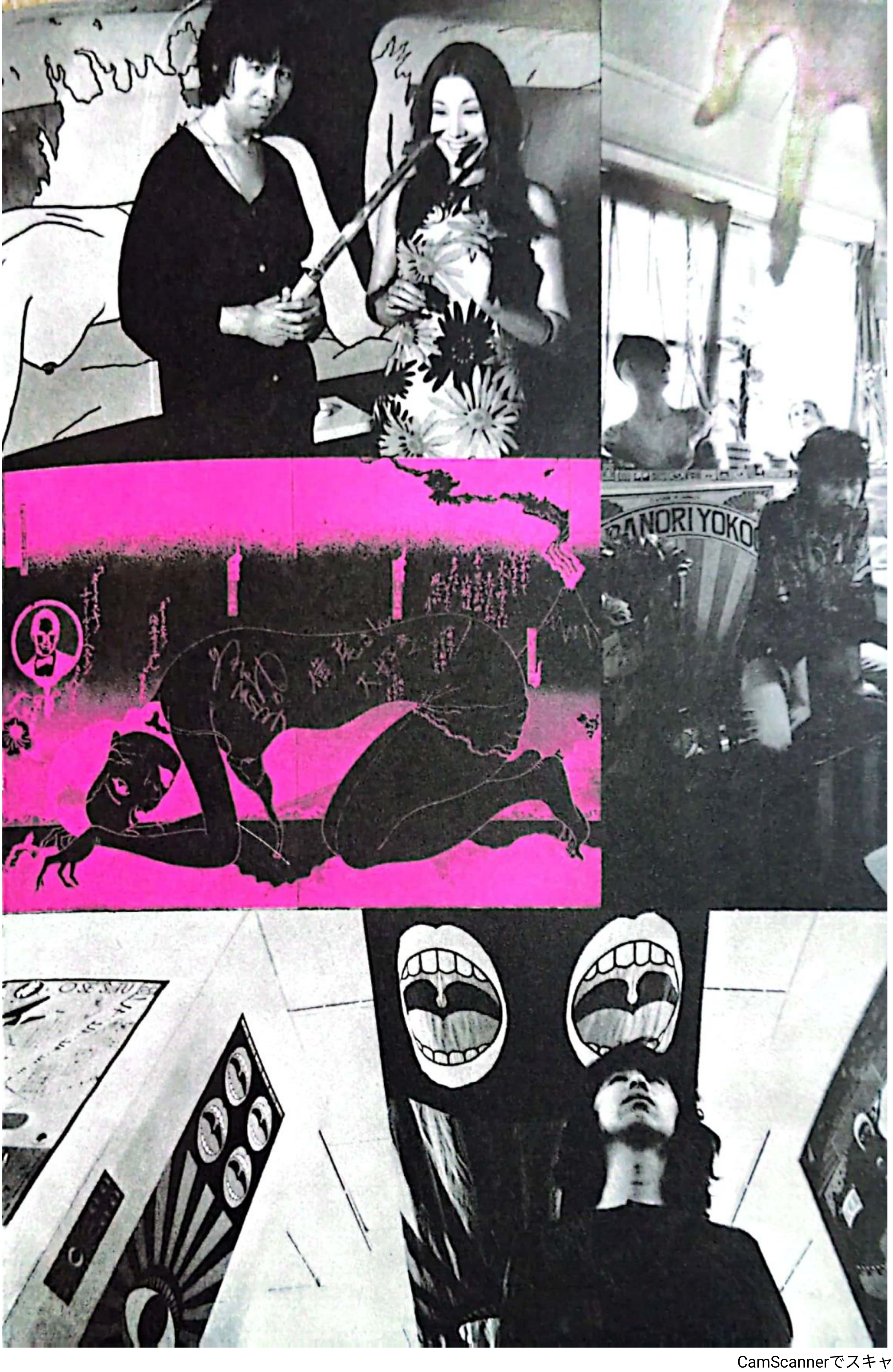
CAR & GUY



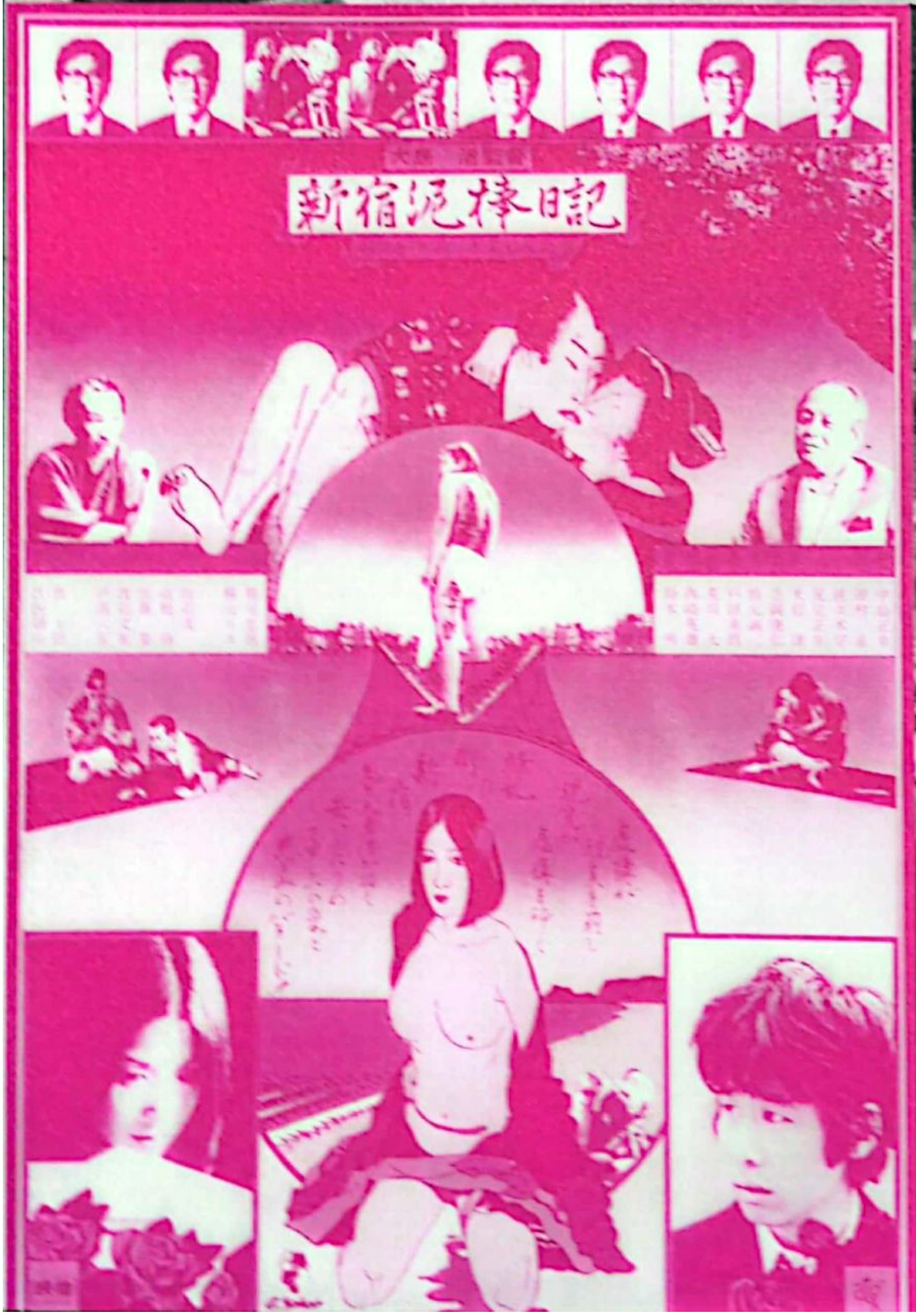


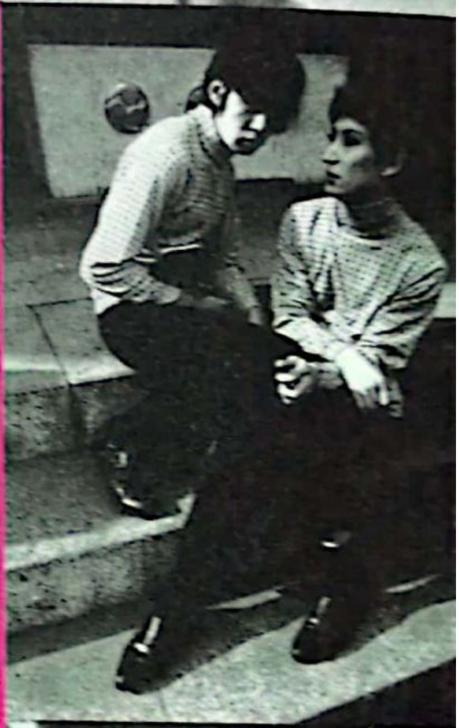
'ORD IMAGE WORD IMAGE WORD IMAGE

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

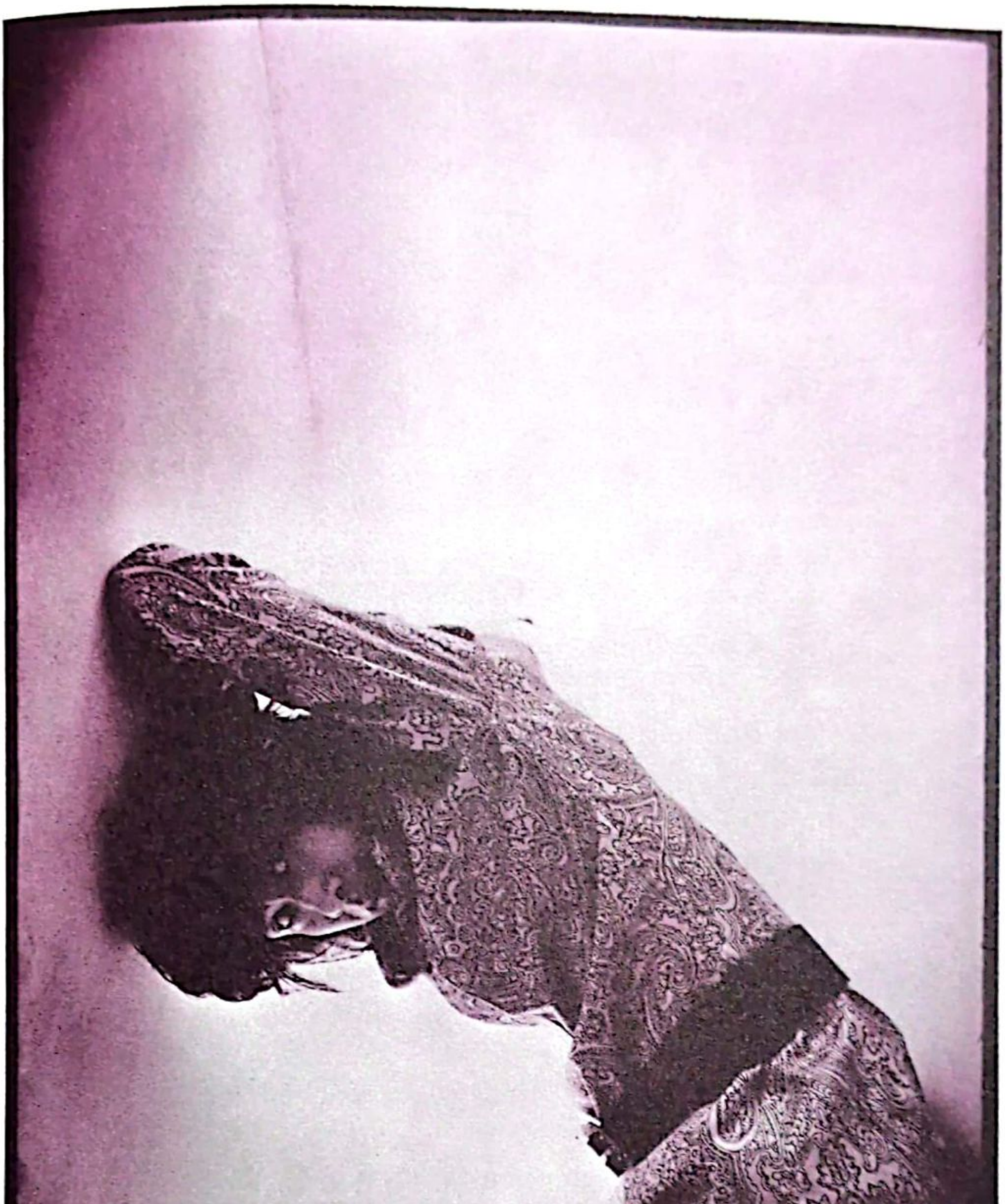




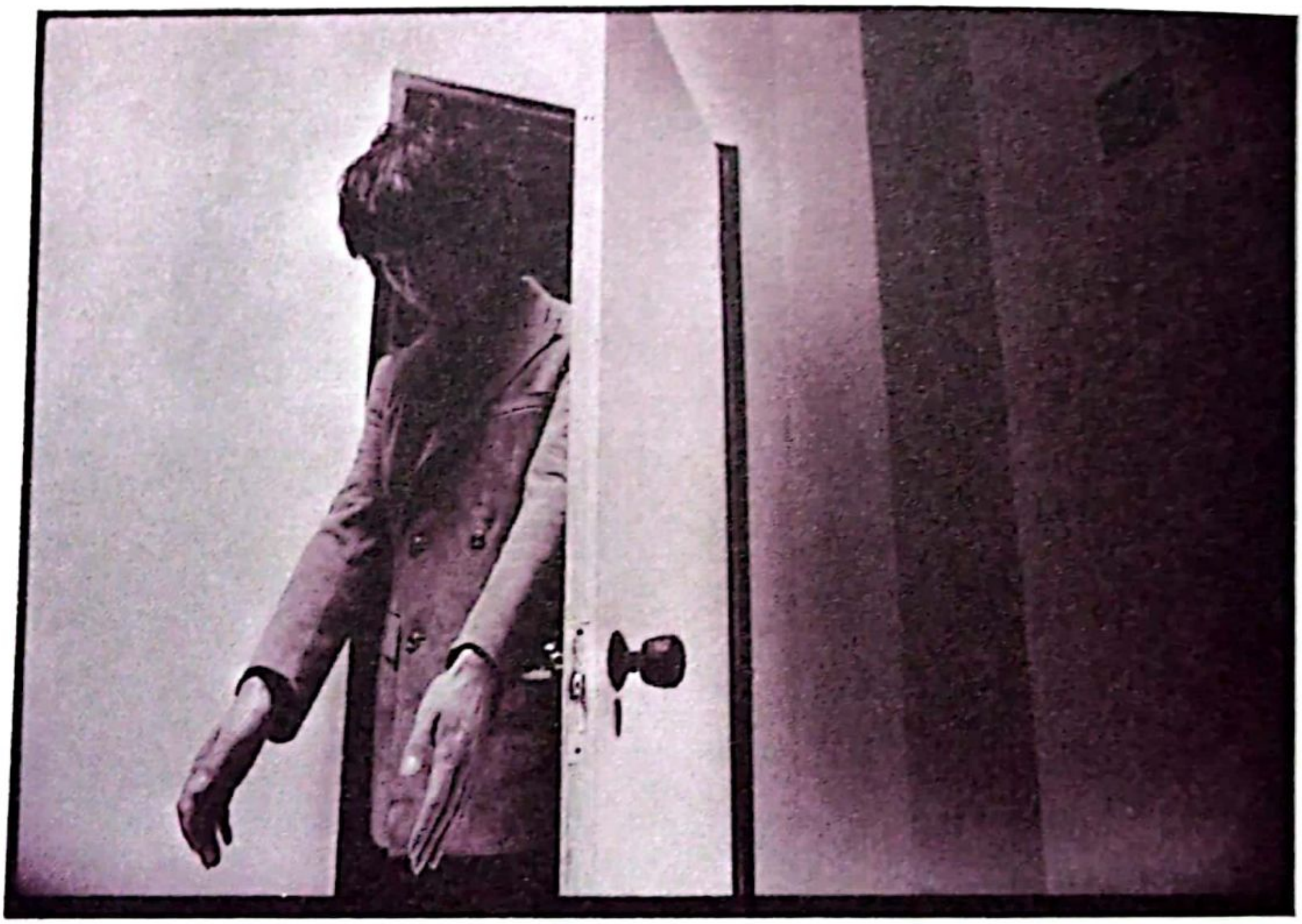
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

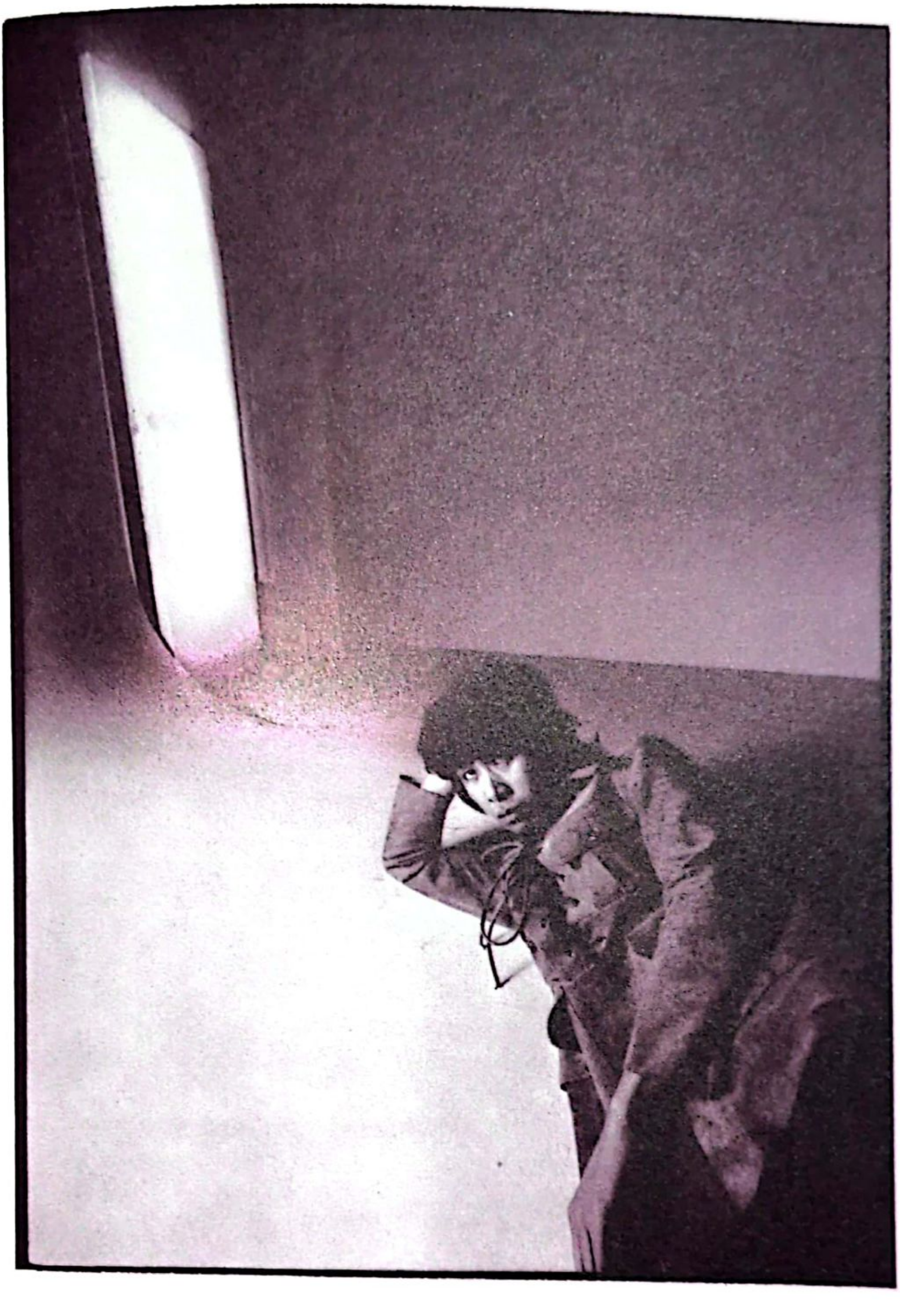
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

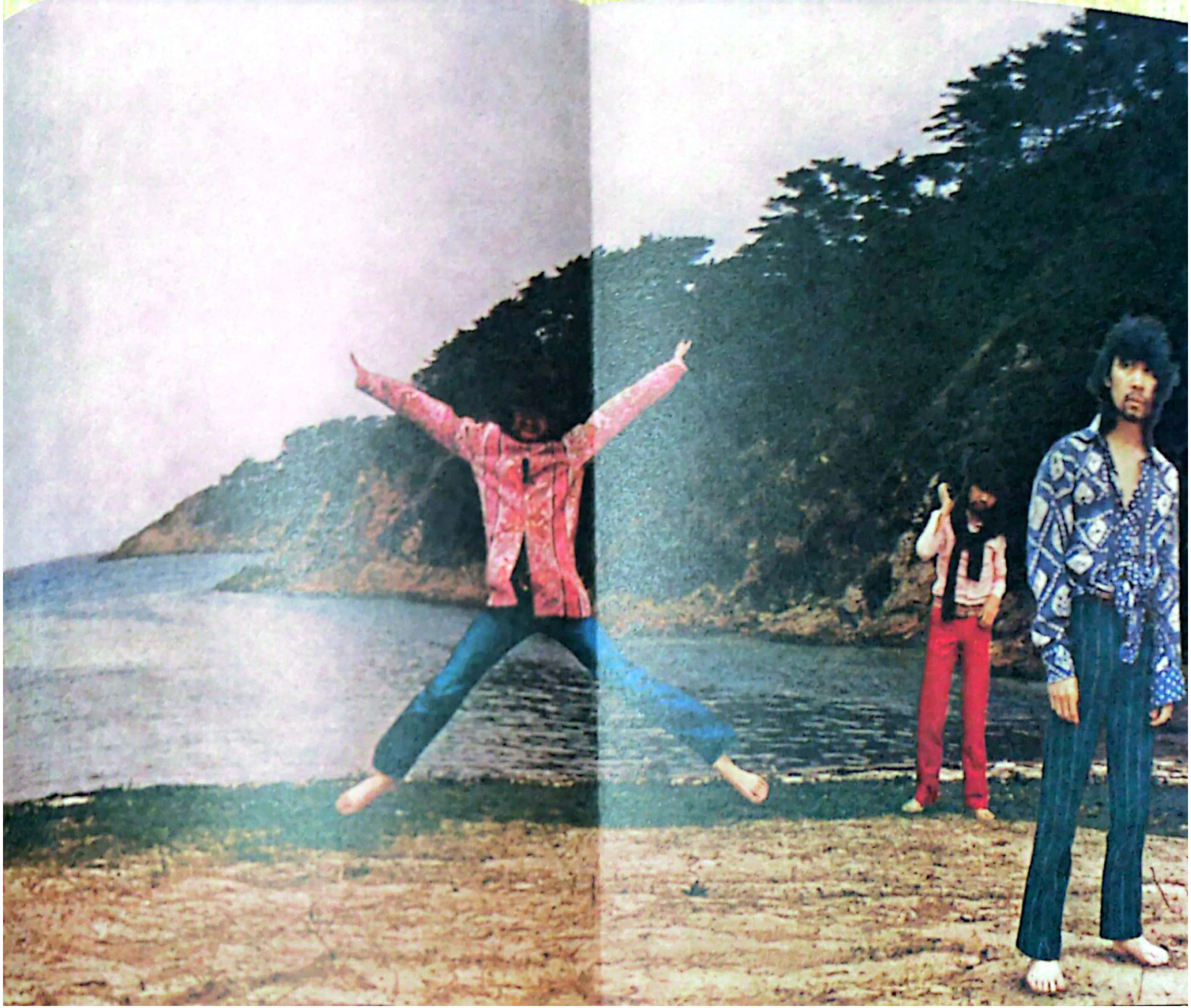


CamScannerでスキャン



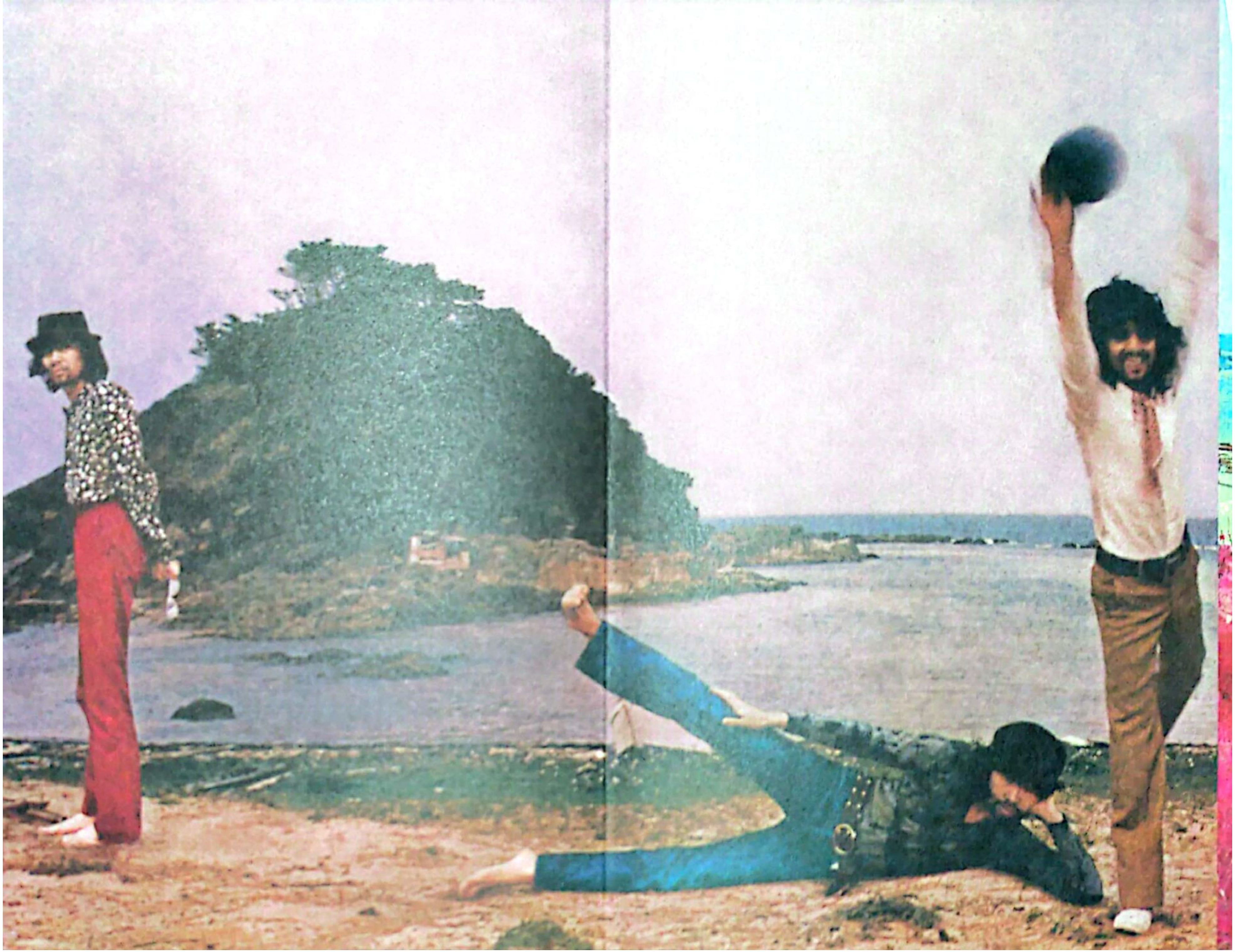
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

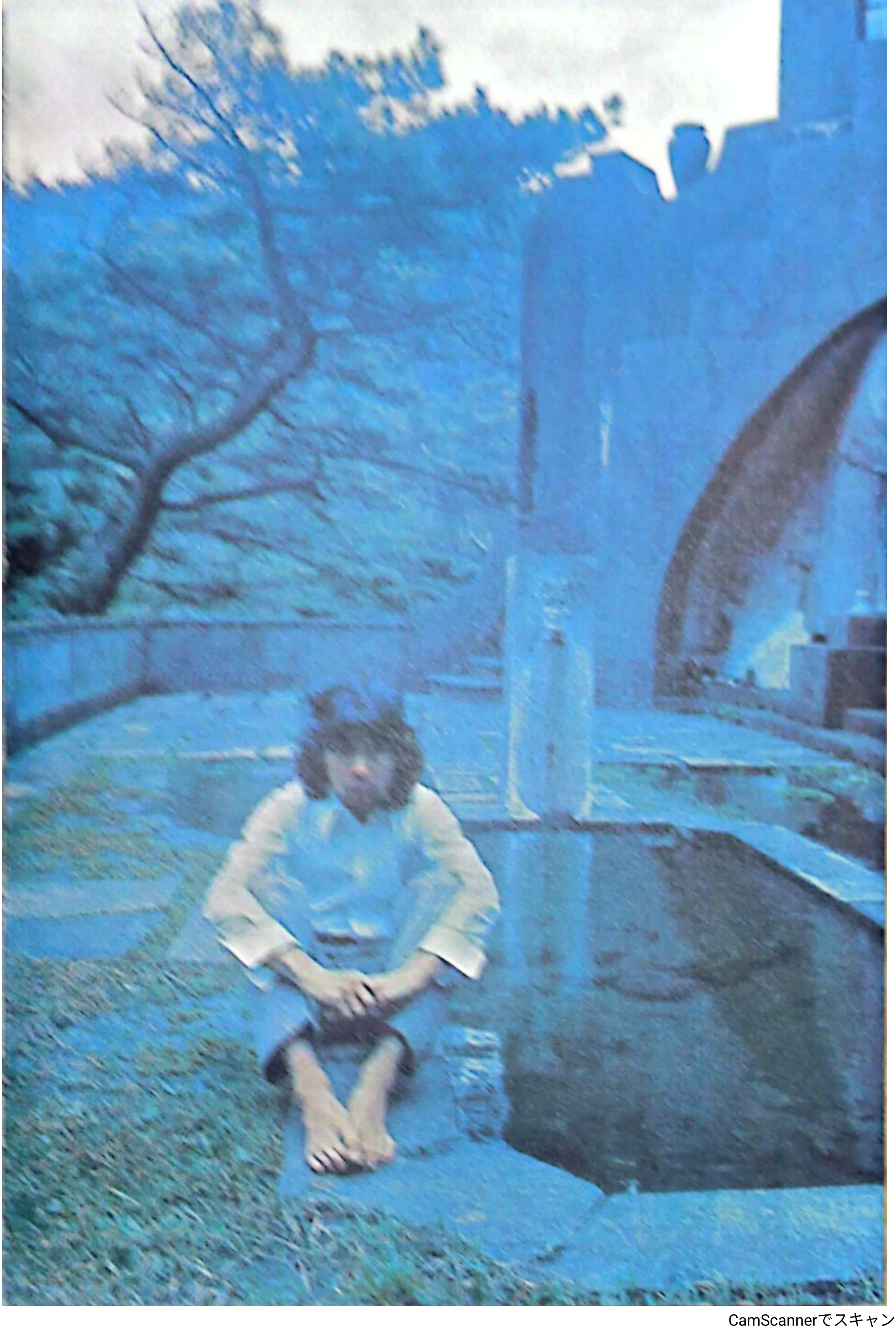


CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン



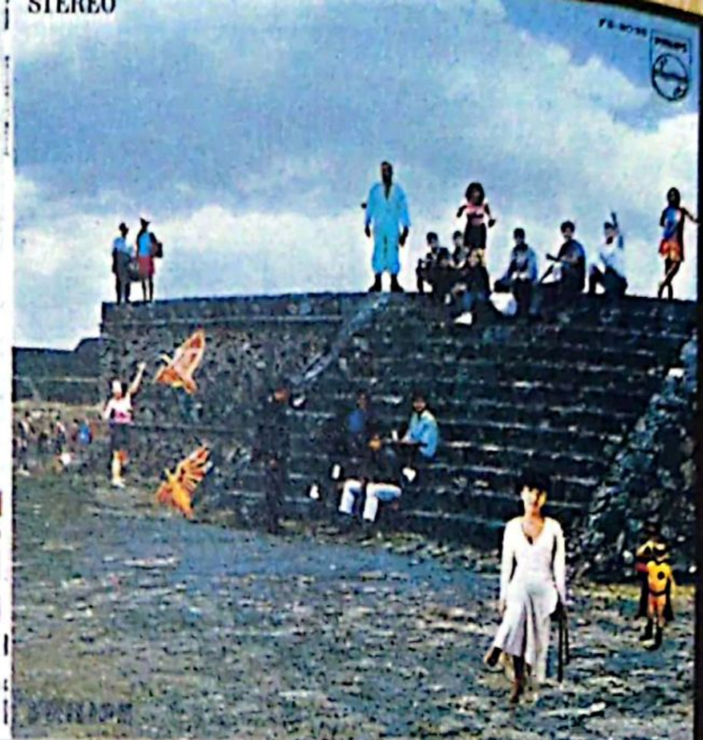
CamScannerでスキャン

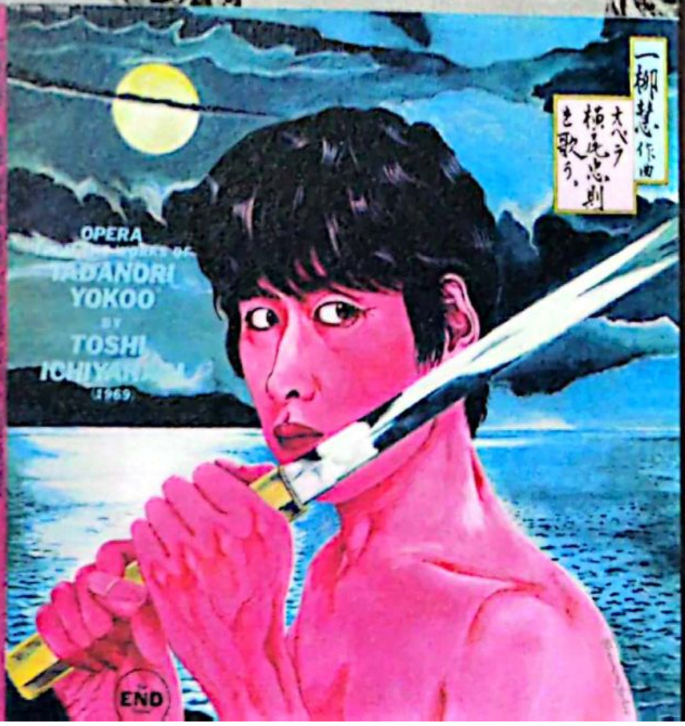
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

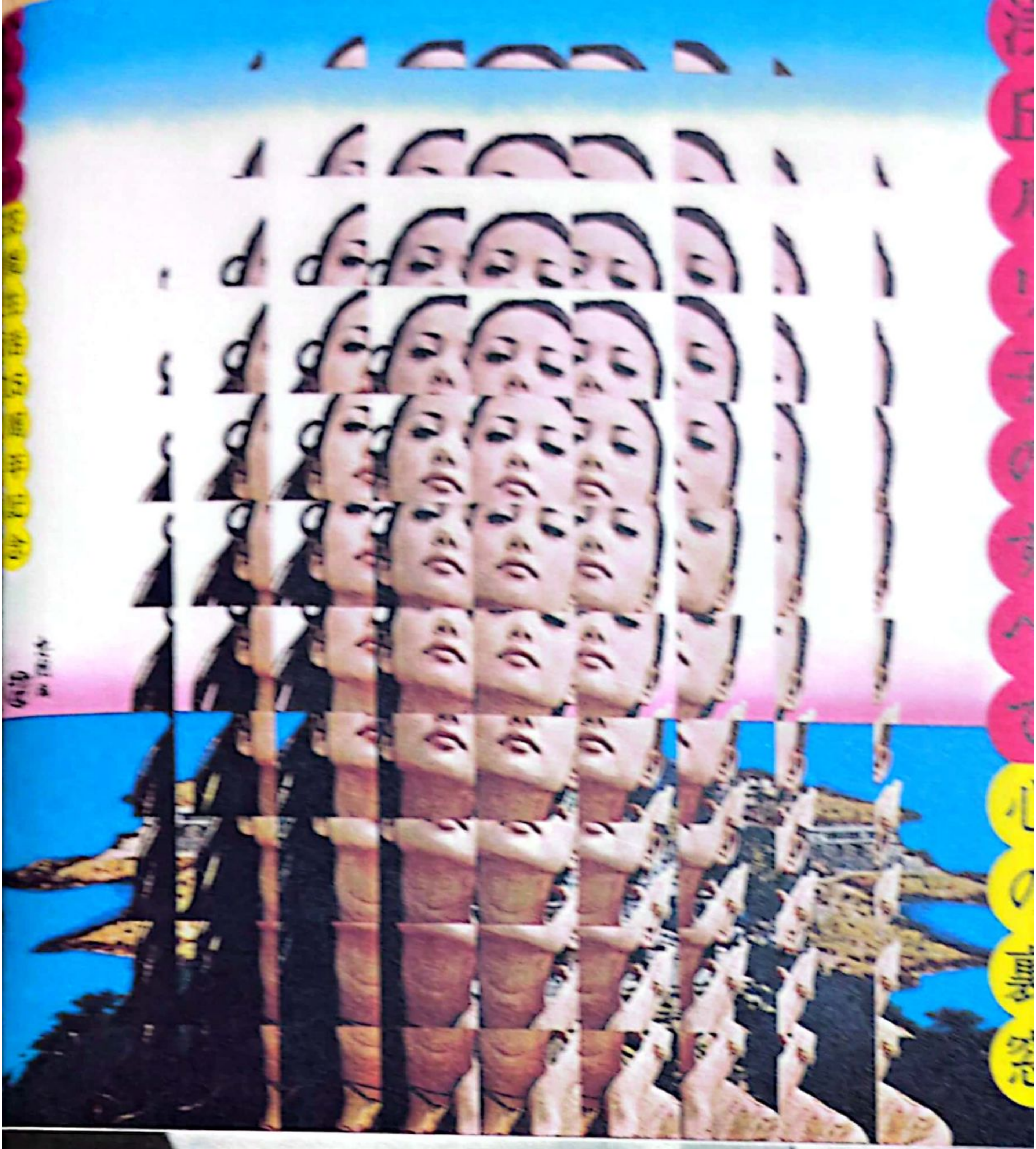
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン





CamScannerでスキャン

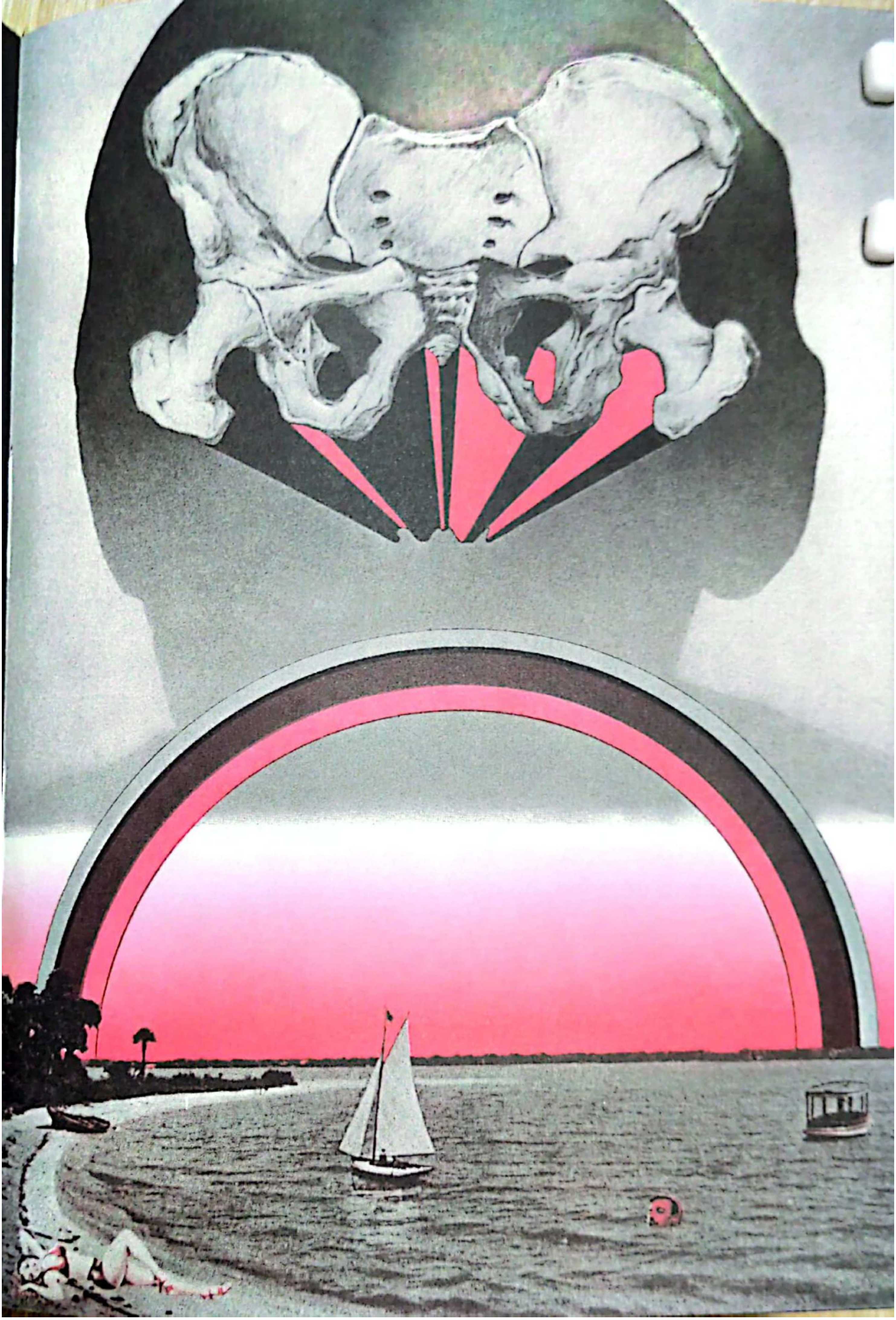


CamScannerでスキャン

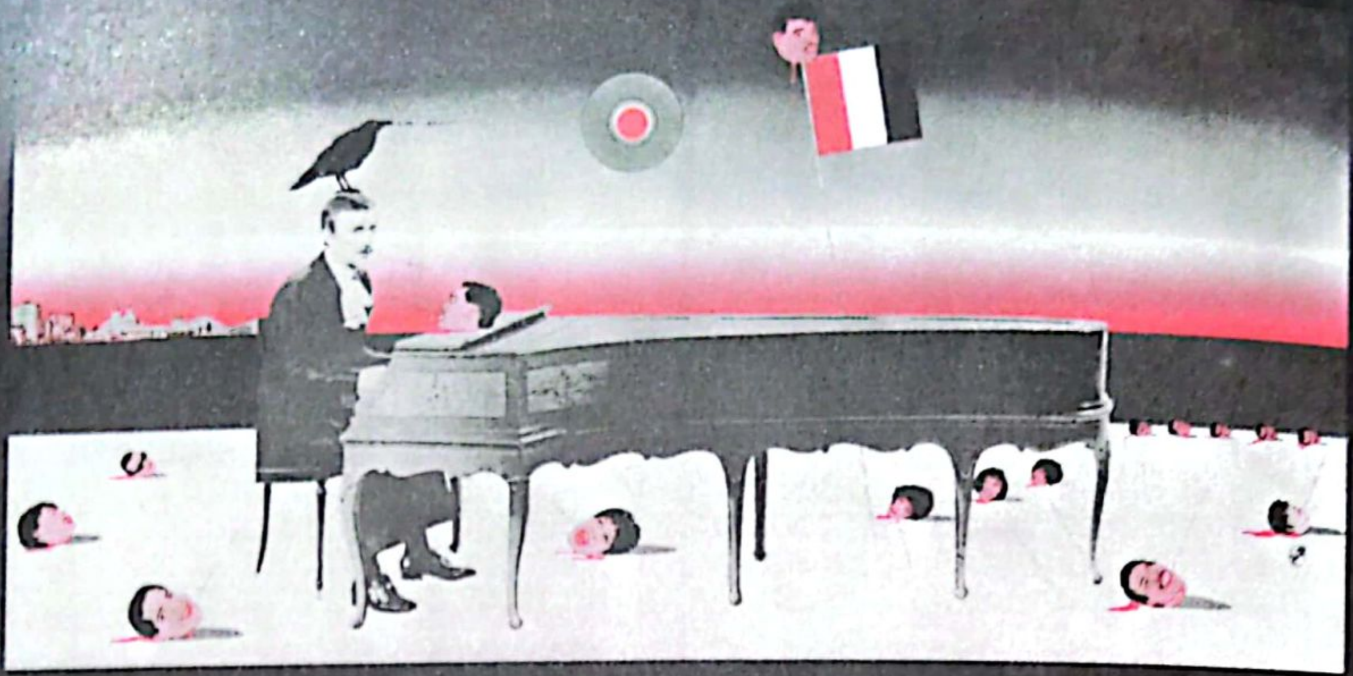
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン



U M 7 け り
T L 1 あ る
I P 5 ぽ う
R A 1 く も
& B 号 う あ
律無安堵舞留州
PHILIPS

《そこにいる》《繁栄するSEX企業》

CLUB

全部読切

CamScannerでスキャン

10月号

鳴岡勝一

狂想曲JAPAN（ピカレスク小説）

立体構成ルポルタージュ（異常な性）

全部読切

小説CLUB

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

天地 864
左右 614ミリ

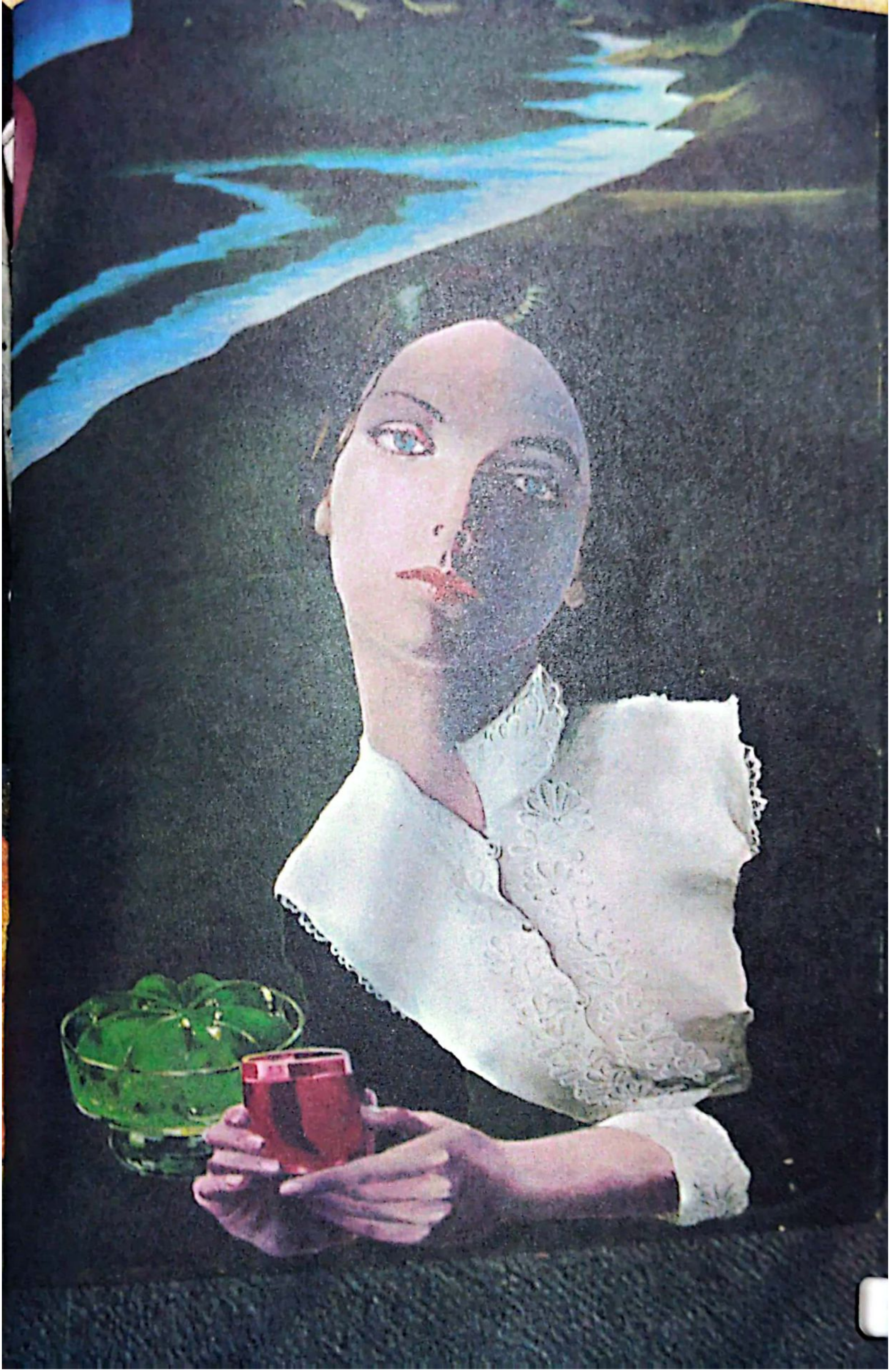
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

現代の顔―大庭みな子

現代の顔―黒岩重吾

現代の顔―安達瞳子

現代の顔―淀川長治

現代の顔―江夏豊

現代の顔―青島幸男

現代の顔―丸山明宏

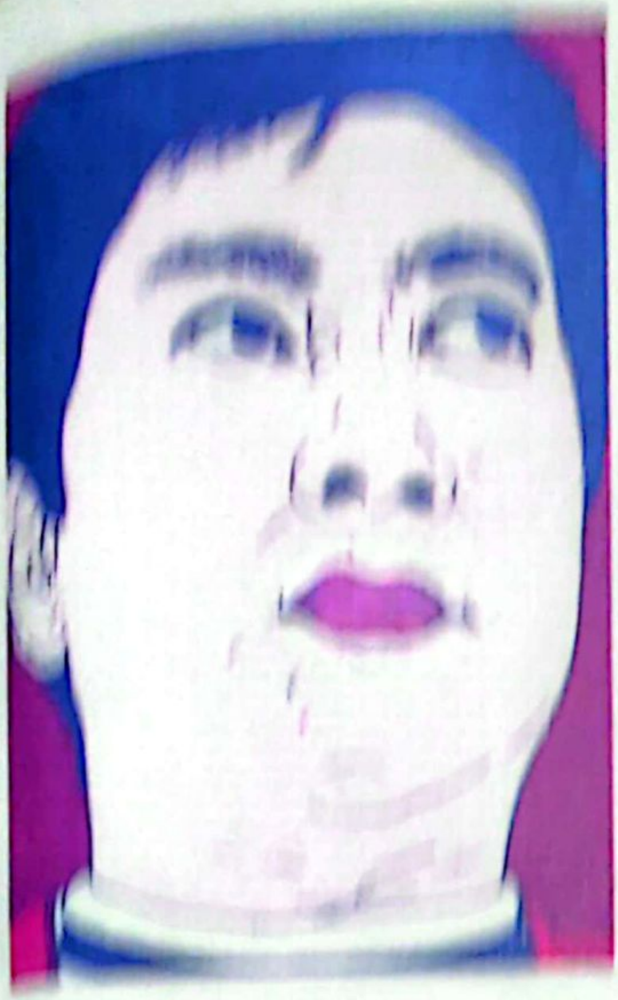
現代の顔―林海峰

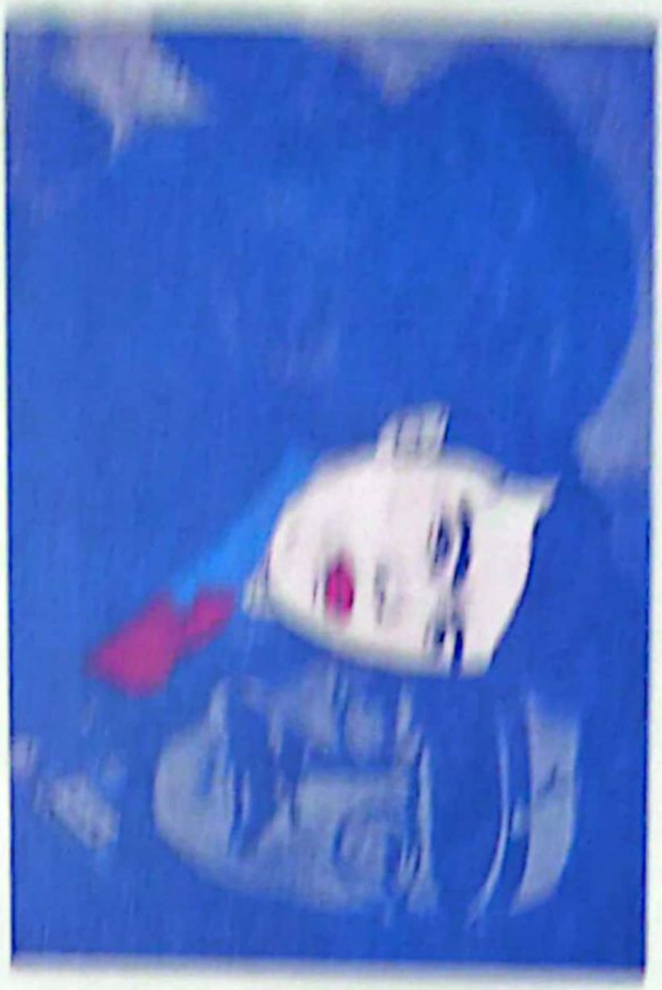
明日
独占緊急取材
手記＝野坂昭如
「今こそ話す！なぜ俺が紅白歌合戦の出場を断ったか……！」
人物戯論49＝歌手野坂昭如
梵唄供養妹亡魂
勧請＝高橋亭睦郎
絵馬＝横尾屋忠則
愛のデュエット対談
美空ひばり＋野坂昭如
死出の山坂踏み越えて
三途の川の川岸や
賽の河原に小花摘む
此は妹に君るか
一重積んでは父の為
二重積んでは母の為
三重積んでは黒眼鏡
戯作渡世の兄の為

★荒木一郎はこうして妻に見すてられた
☆井沢八郎が婚約者と創価学会へ入信
★有馬稲子と西野皓三氏の仲が復活…
☆藤巻潤が初めて紹介
第三十四番札所 修行山宝満寺
いもうとのみたませにおひみそぢすぎゆけどさんきのやまぢはつきず

CamScannerでスキャン

涙の連絡船
関沢新一 作詞
都はるみ・歌
うに忘れた 恋なのに
夜も汽笛が
笛が 汽笛が 汽笛が……
りぽっちで 泣いている
忘れられない 私がばかね
連絡船の 着く港
© 1965 by S. Sekizawa
JASRAC





CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

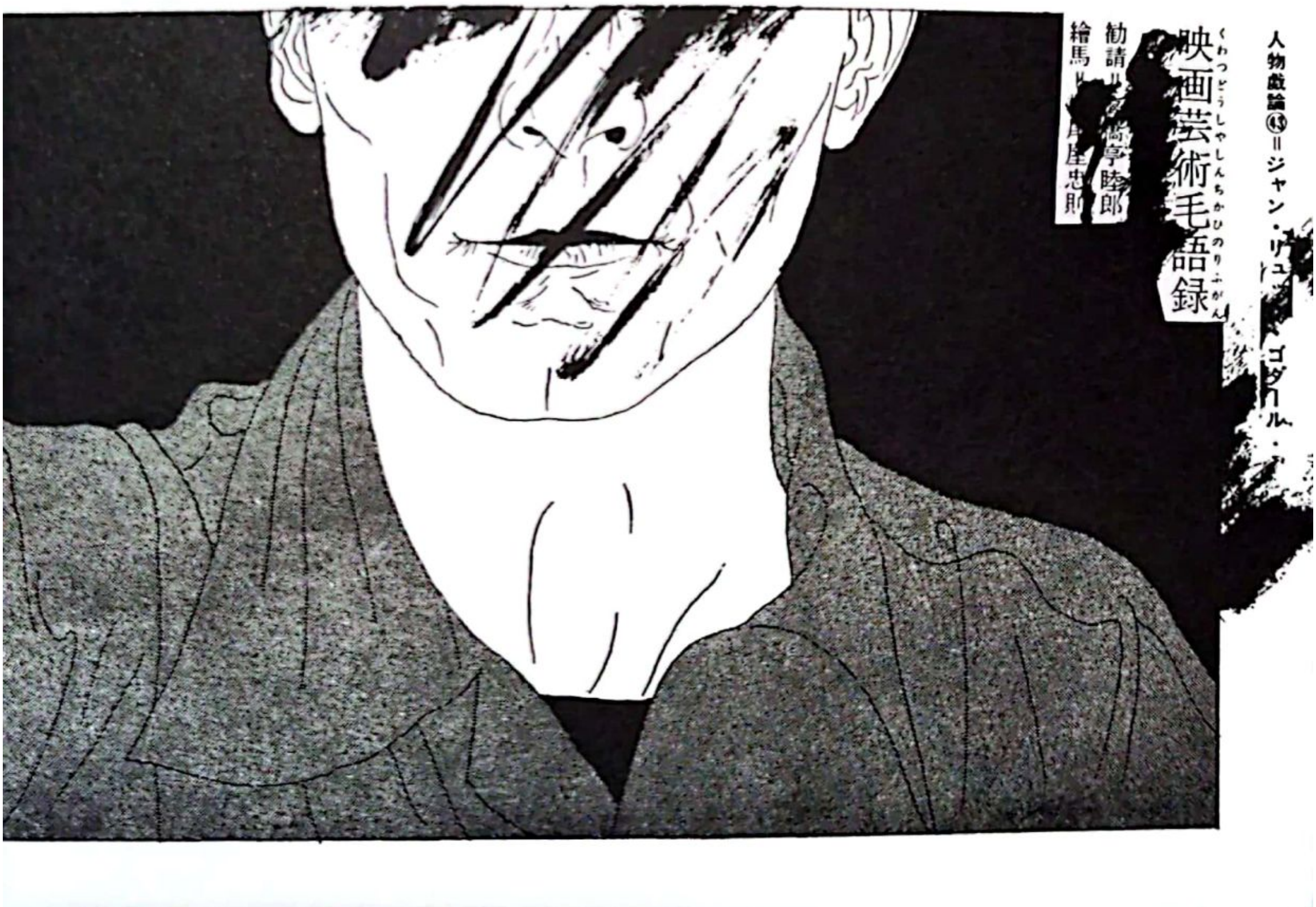
晃子ちゃんに
前田武彦

花があ

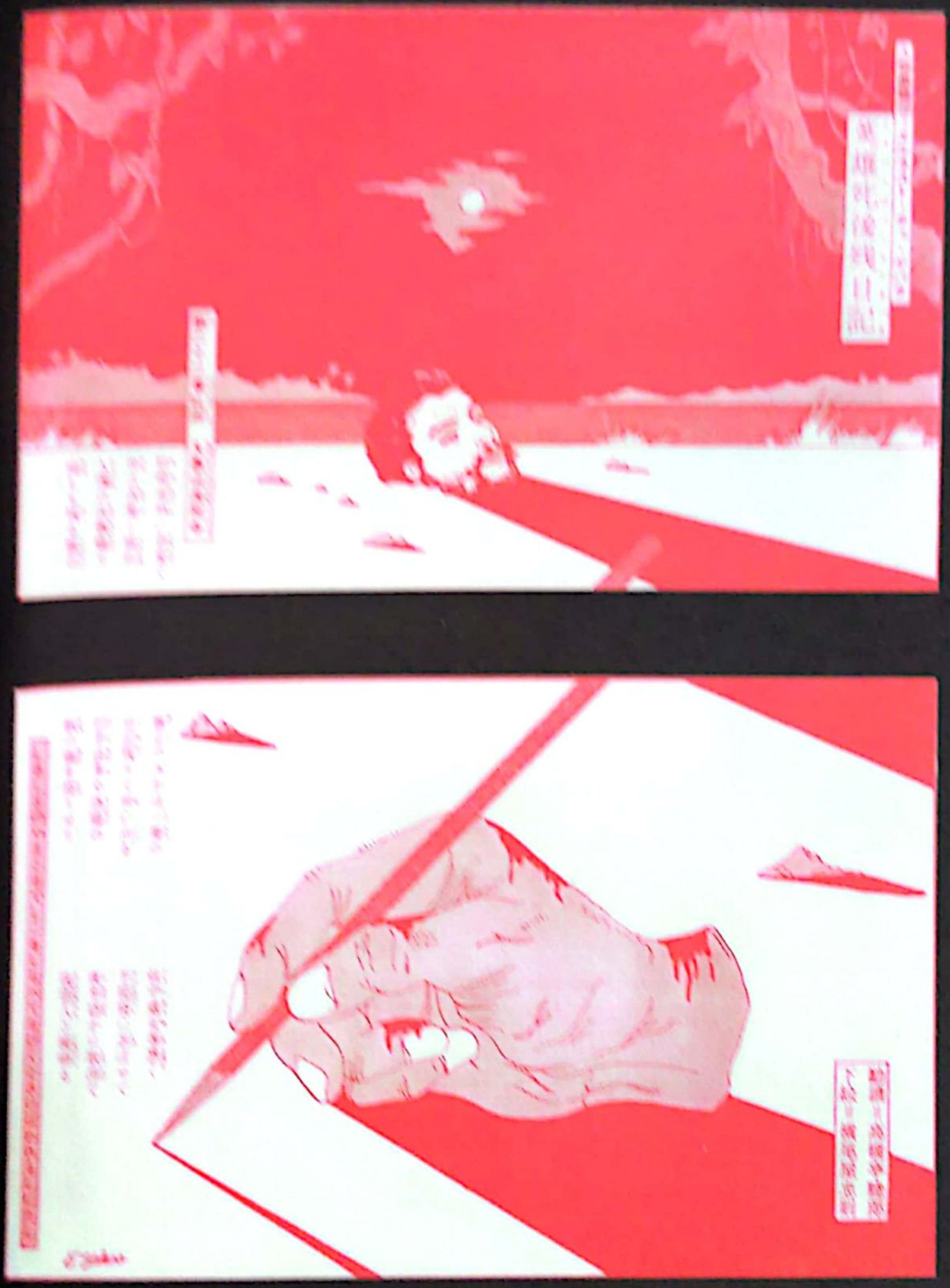
ジュリー
群虎中第一優虎

CamScannerでスキャン

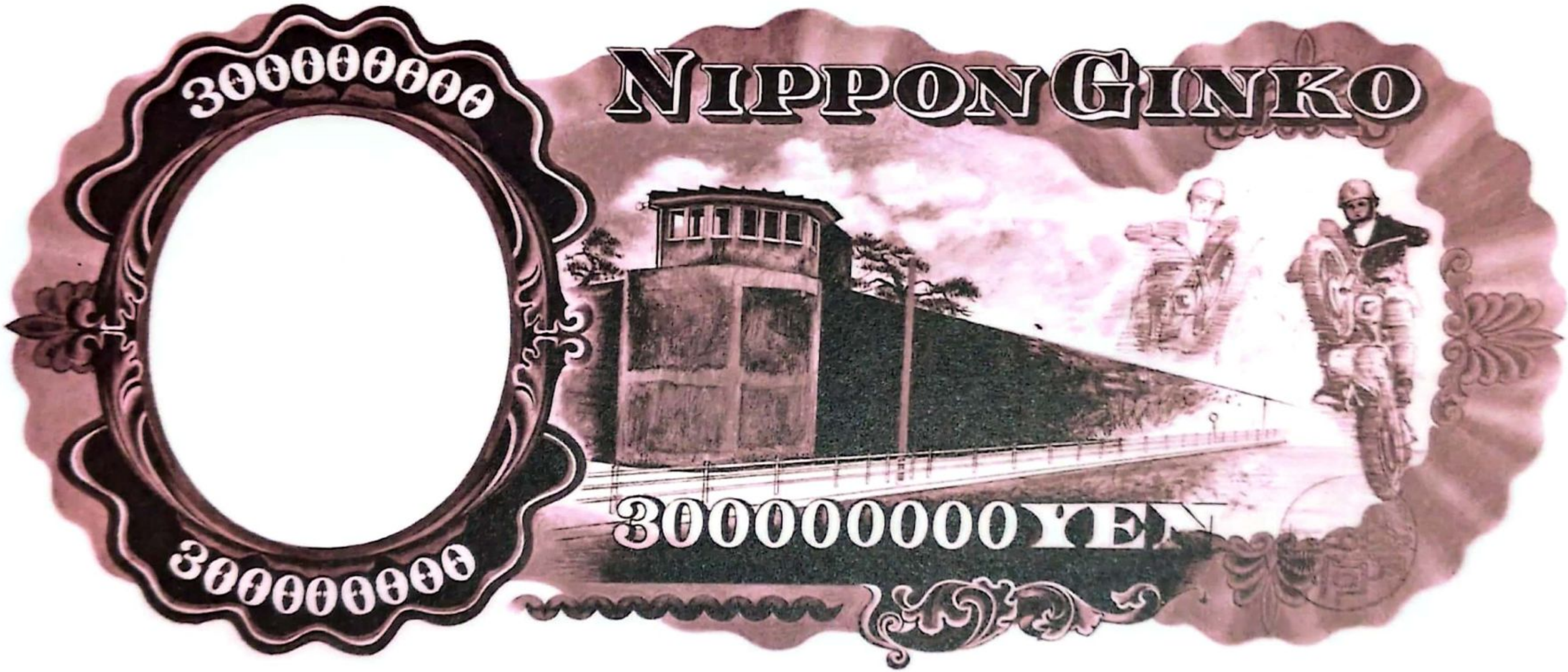
1963
1966



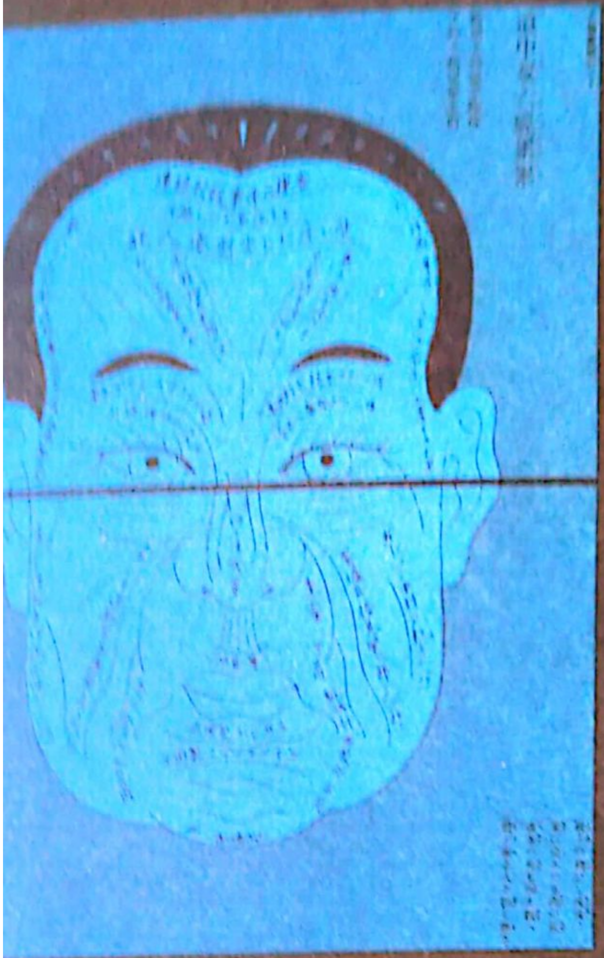
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

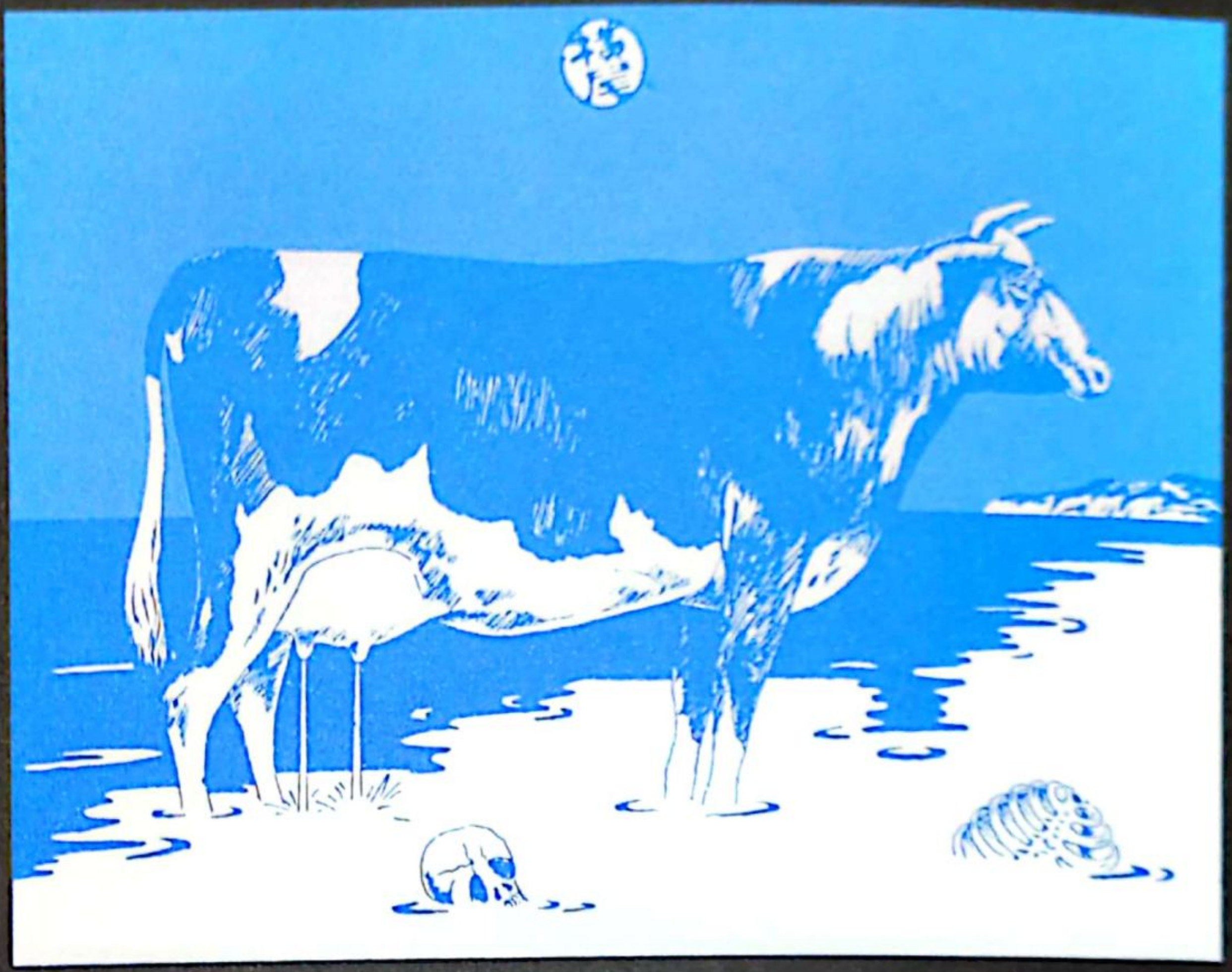


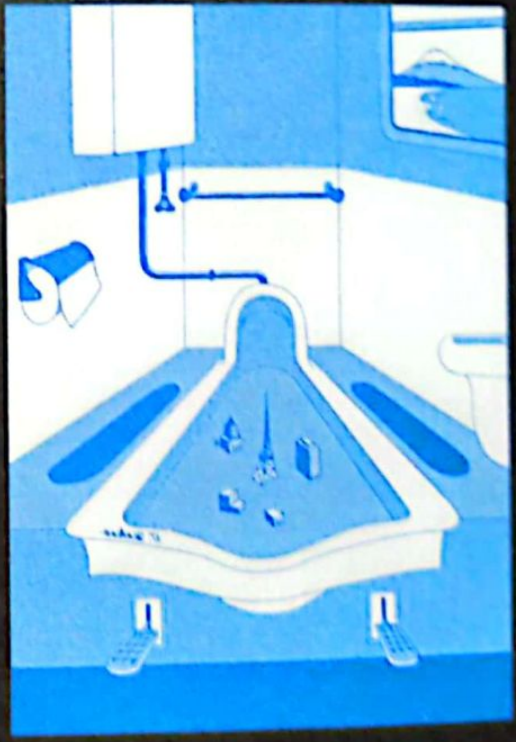
CamScannerでスキャン



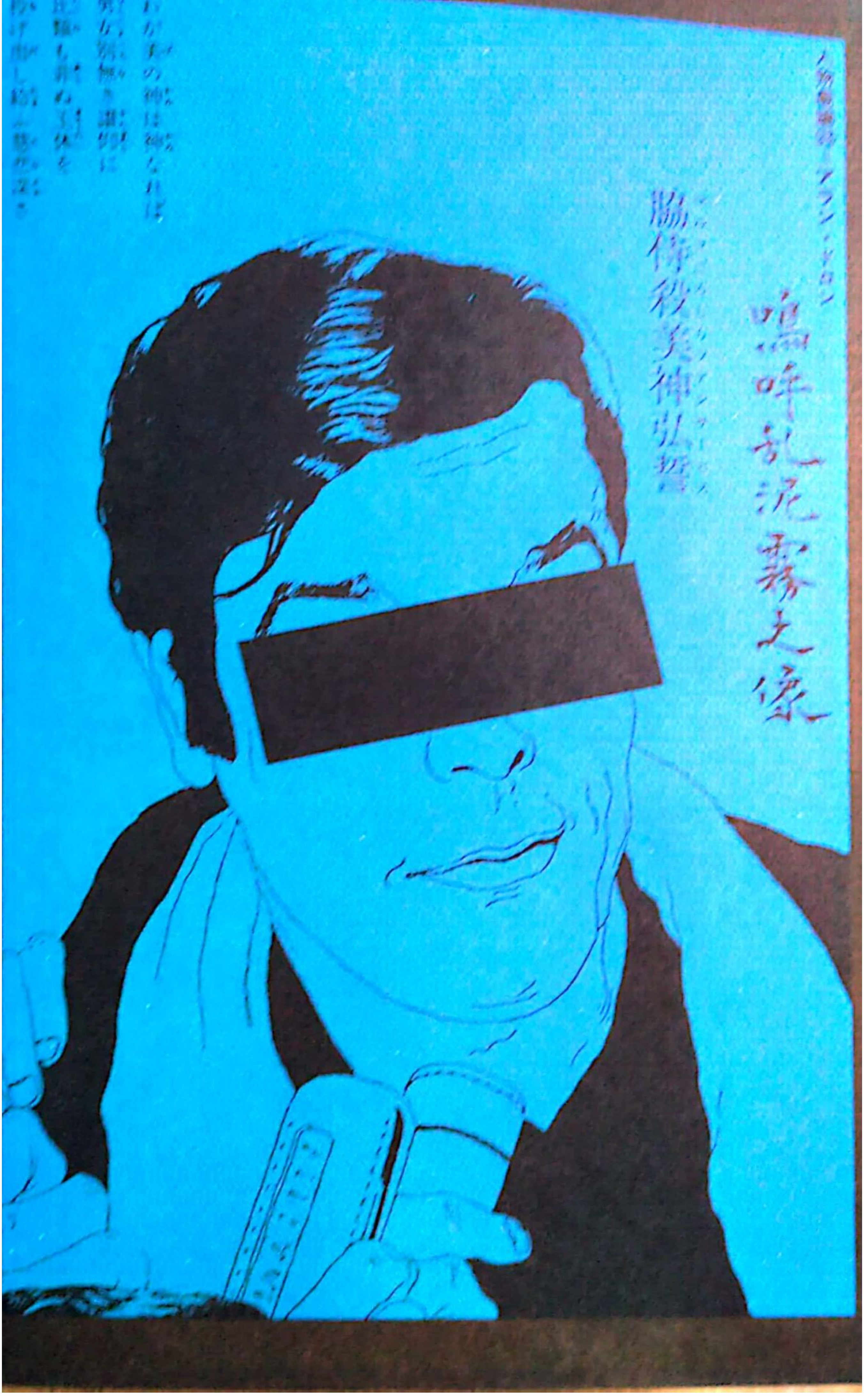
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン





CamScannerでスキャン

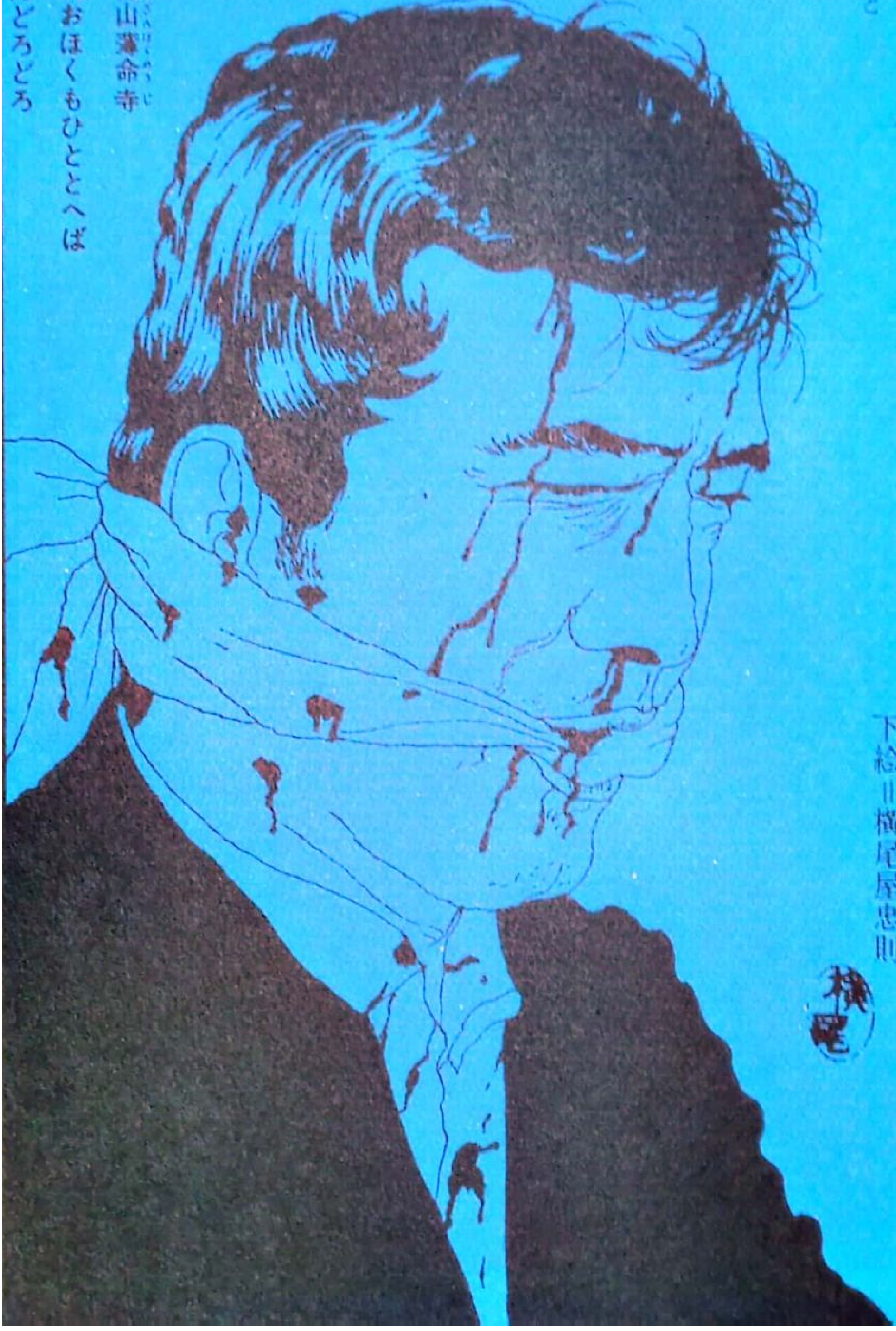

嗚呼乱泥霧之像

善男善女の数増して
何時か御座ぞ弥高き
高きは衆生の嘆きぞと
神は御眉を寄せ給ふ

即ち醜聞の掃溜に
自ら降りて血塗れ
衆生も同じ卑しさに
神下らなる御苦しみ

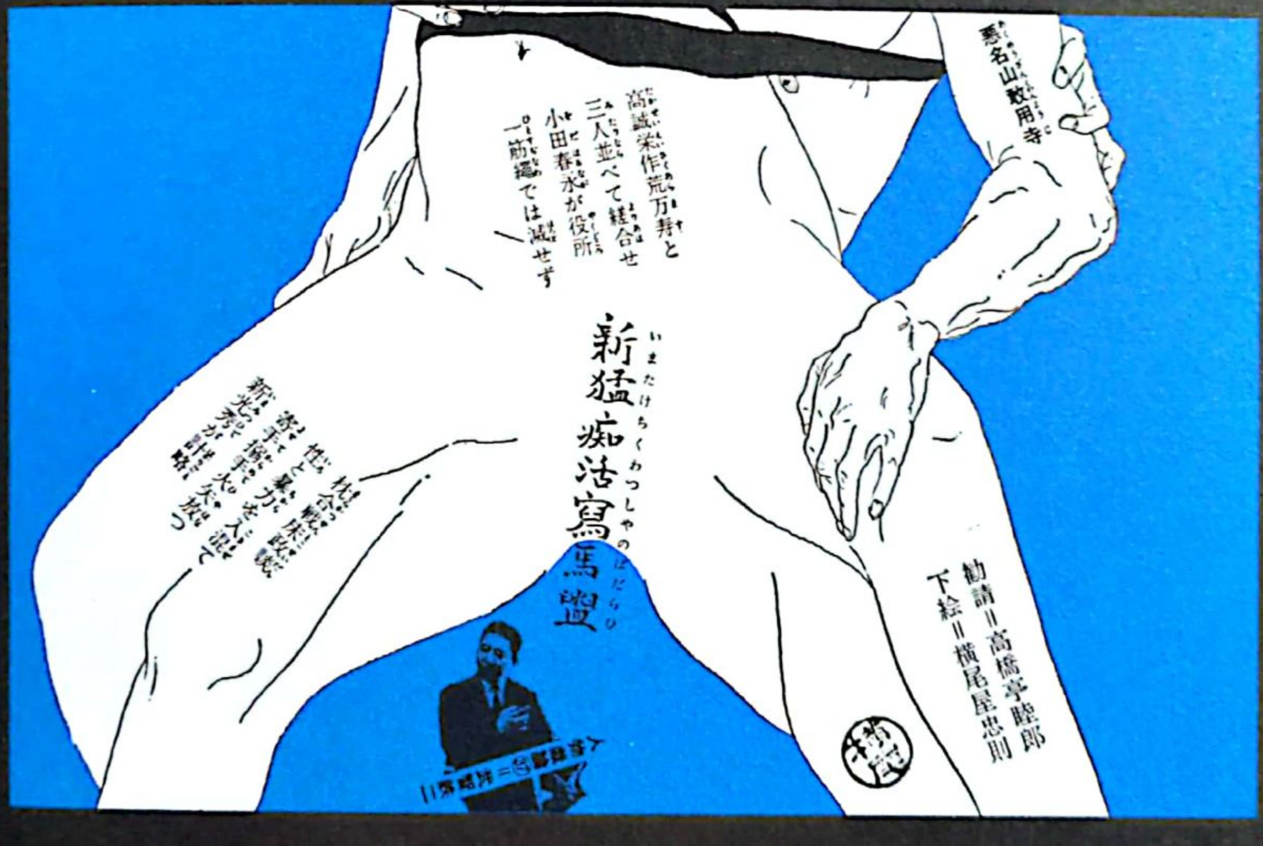
魔流故悲血夫像

勧請＝高橋亭睦郎
下絵＝横尾屋忠則

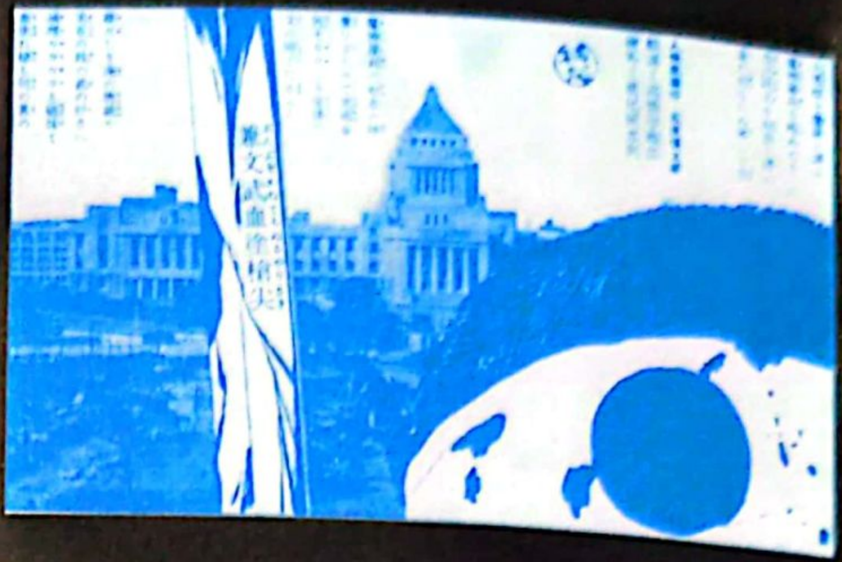


第二十七番札所　美男山薄命寺
つみやあらんとおそれおほくもひととへば
くもがくりませどろんどろろどろ

ああああ………
は、はやく、はやくーん
往生させてエーッ!
あああいうえおッ
いくーしうーッ!
ああああああ
うううううう
ウオーン!
きゃんくくくく
ワンワンくく
コナンゴラー……
荒木一郎を
支持します
横尾忠則
敵や何處木能寺
映倫体制機動隊
総て面倒火を掛て
焼滅さん志

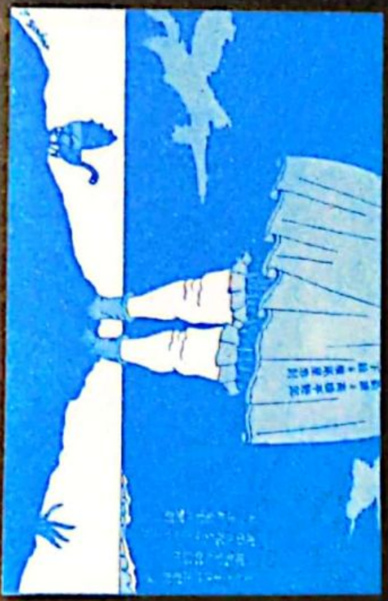

悪名山散用寺
高誠栄作荒万寿と
三人並べて縫合せ
小田春水が役所
一筋縄では滅せず
新猛痴活寫馬盟
勧請=高橋亭睦郎
下絵=横尾屋忠則

勝って
くるぞと
勇ましく
誓って
国を
出たからは
手柄立てずに
死なりょうか
進軍ラッパ
聞く度に瞼に浮かぶ
旗の波



火と
燃える
果てなき
曠野
ふみ分けで
進む日の丸
鉄かぶと
馬のたて
がみ
なでながら
明日の命を
誰が知る

弾丸もタンクも
銃剣も
暫し
露営の
草枕
夢に
出てきた
父上に
死んで
還れと
励まされ
さめて
睨むは



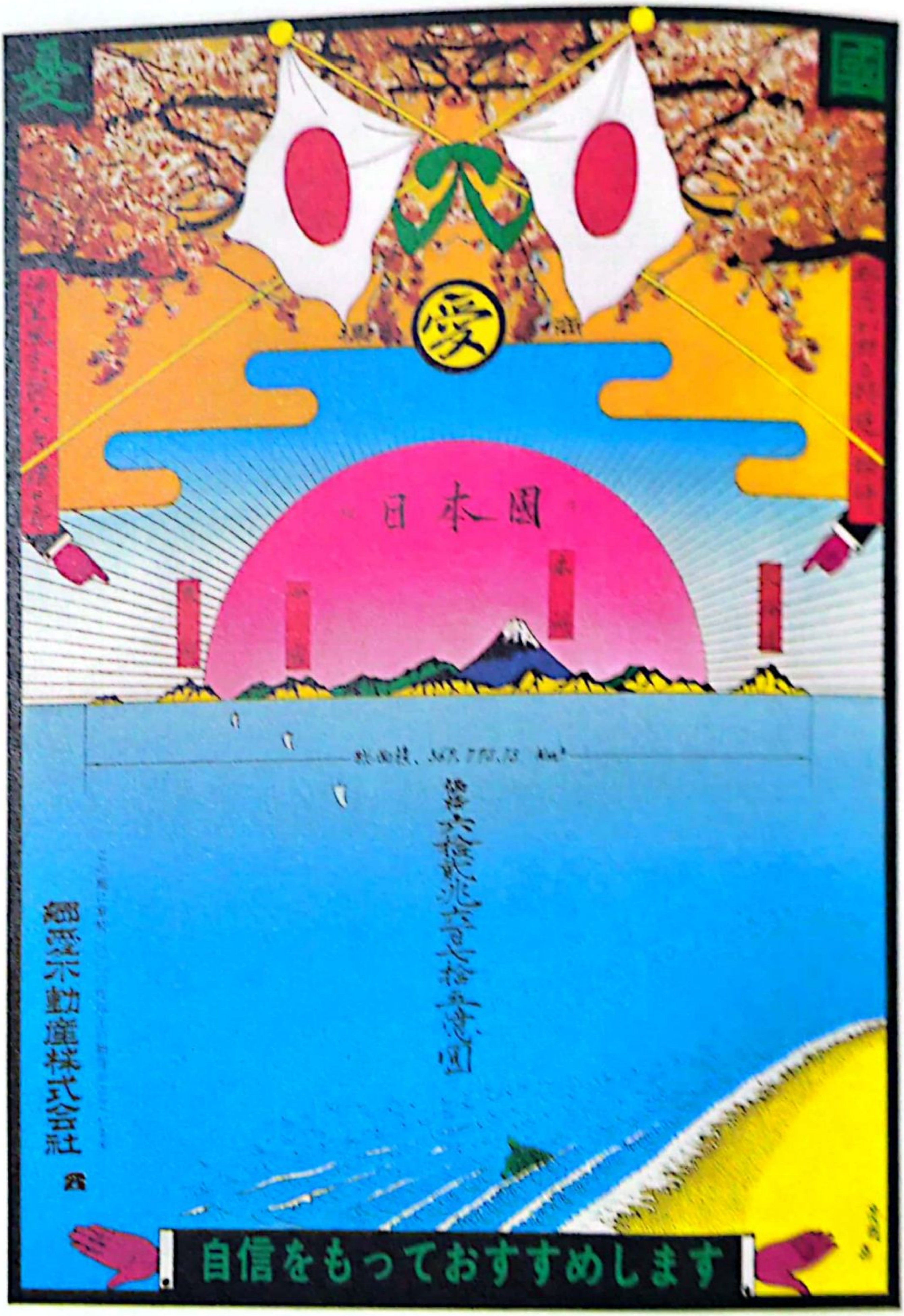
CamScannerでスキャン

7 横尾忠則　神風恍惚切根之図

CamScannerでスキャン

え・横尾忠則

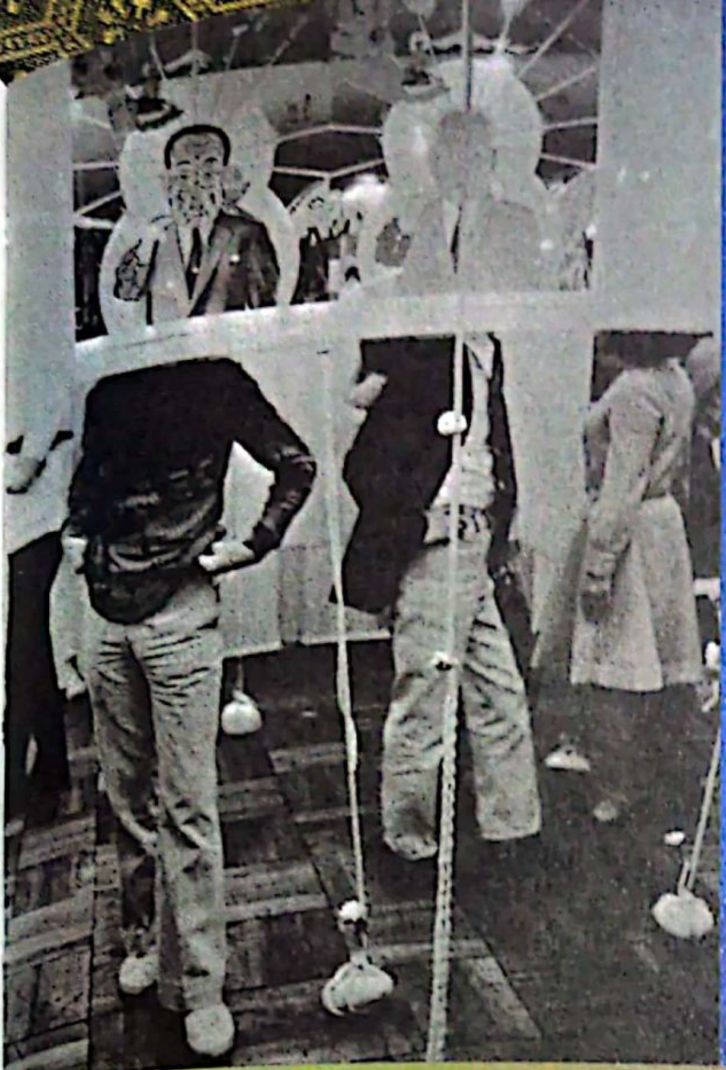
大正初年の宮廷、社交界を背景に松枝侯爵家の嫡子清顕と綾倉伯爵の令嬢聡子との悲恋を描いた古典的恋愛小説。

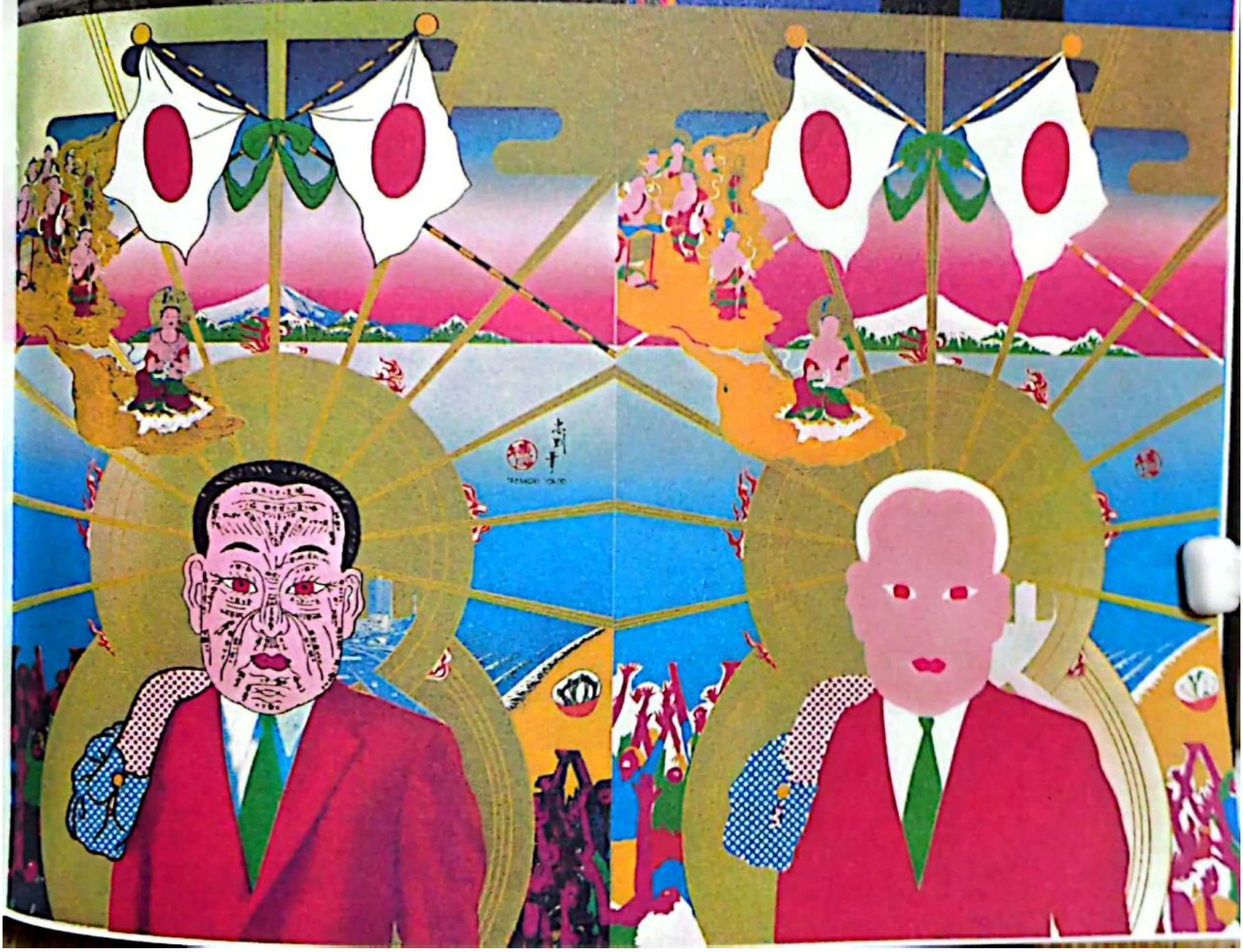


CamScannerでスキャン

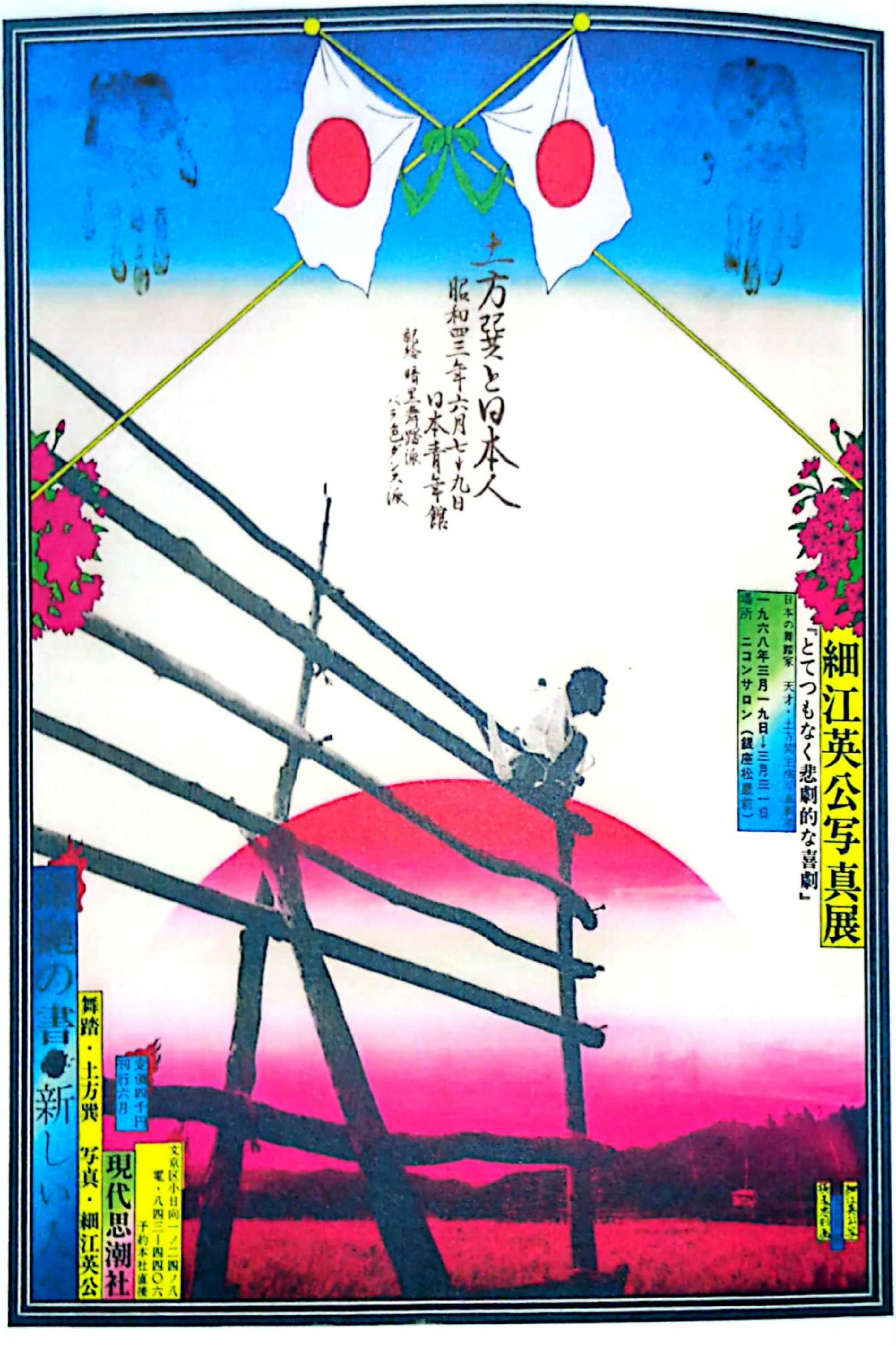
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



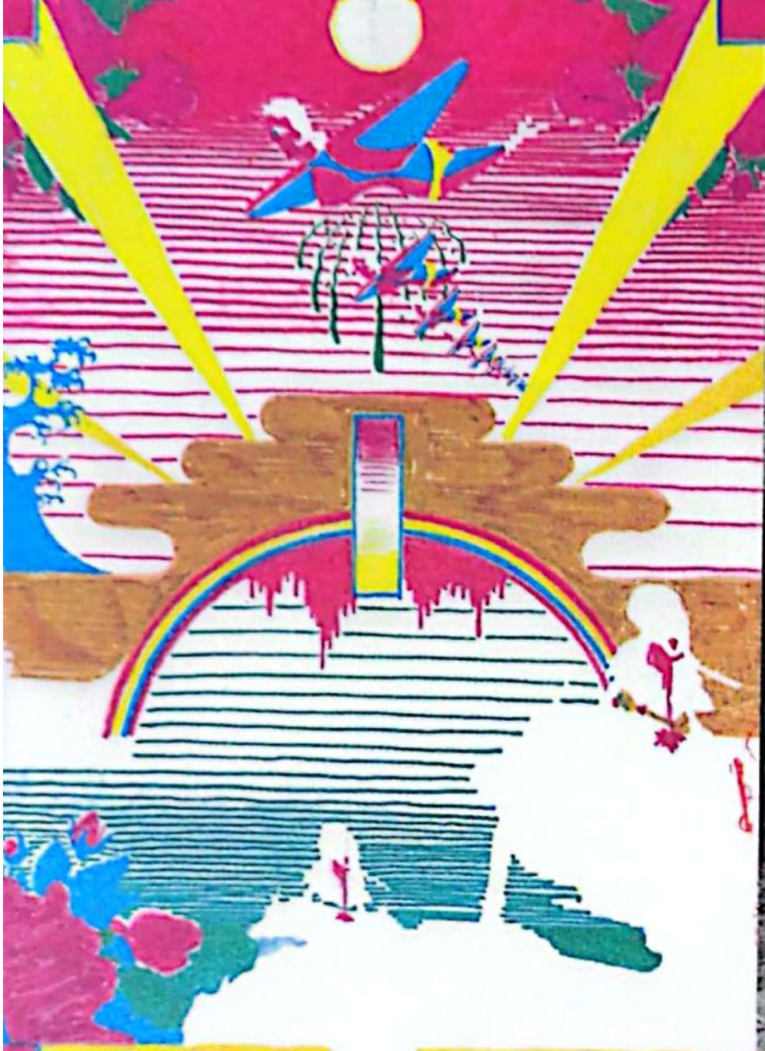


CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



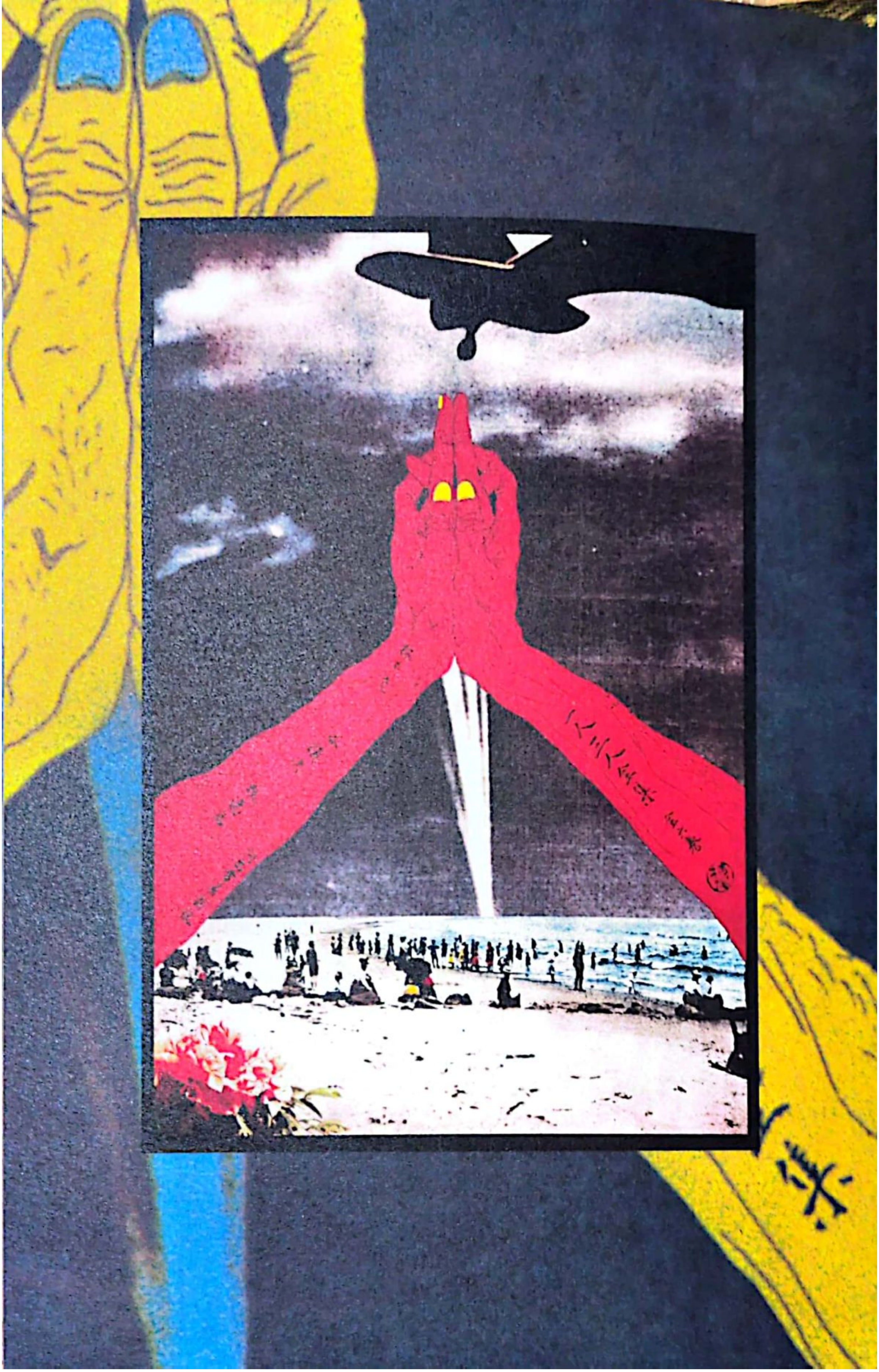
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

さすらいの唄

唐 十郎・作詩/小室 等・作・編曲

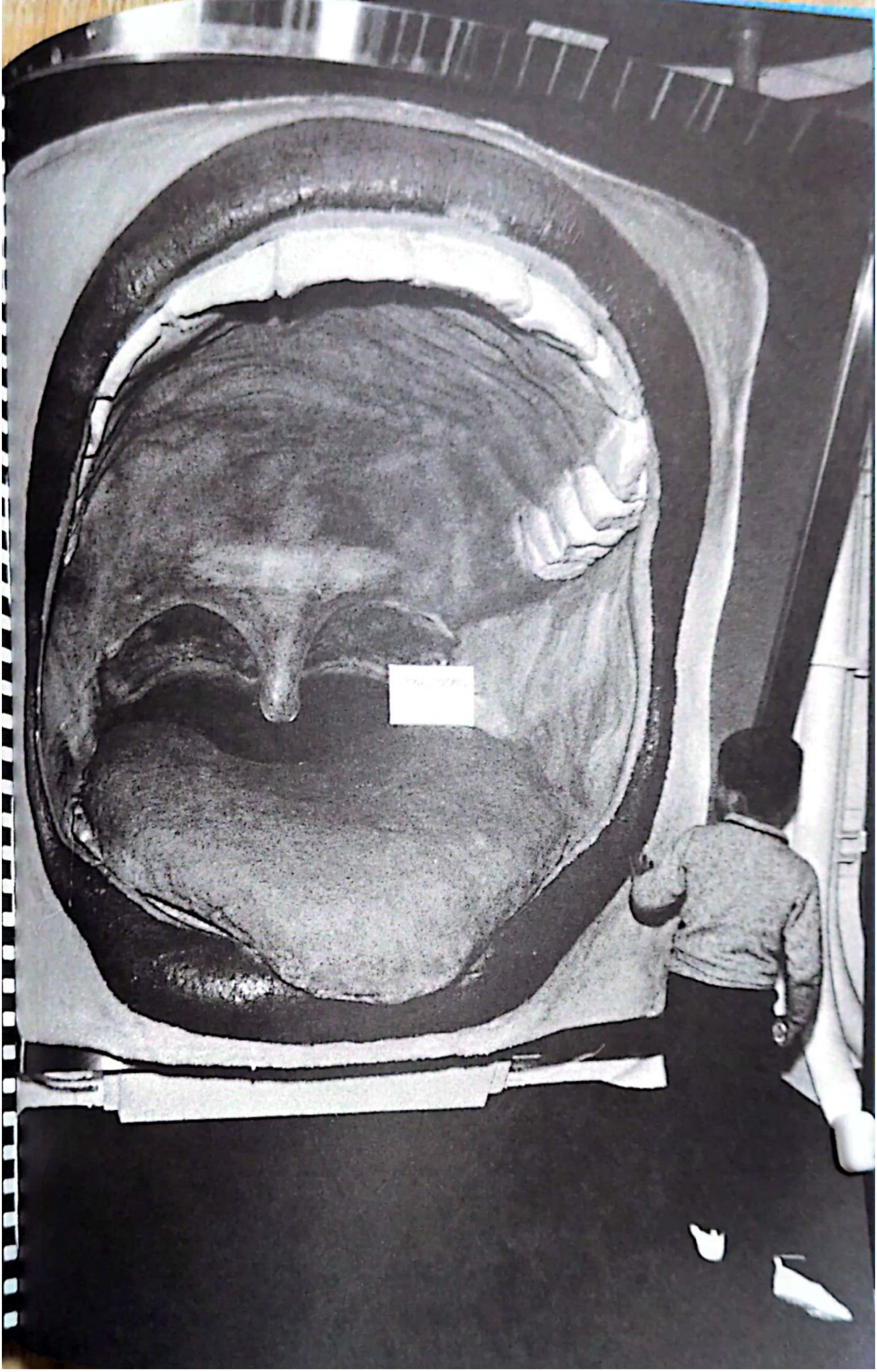
〈歌〉唐 十郎

愛の床屋

唐 十郎・作詩/小室 等・作・編曲

〈歌〉唐 十郎

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

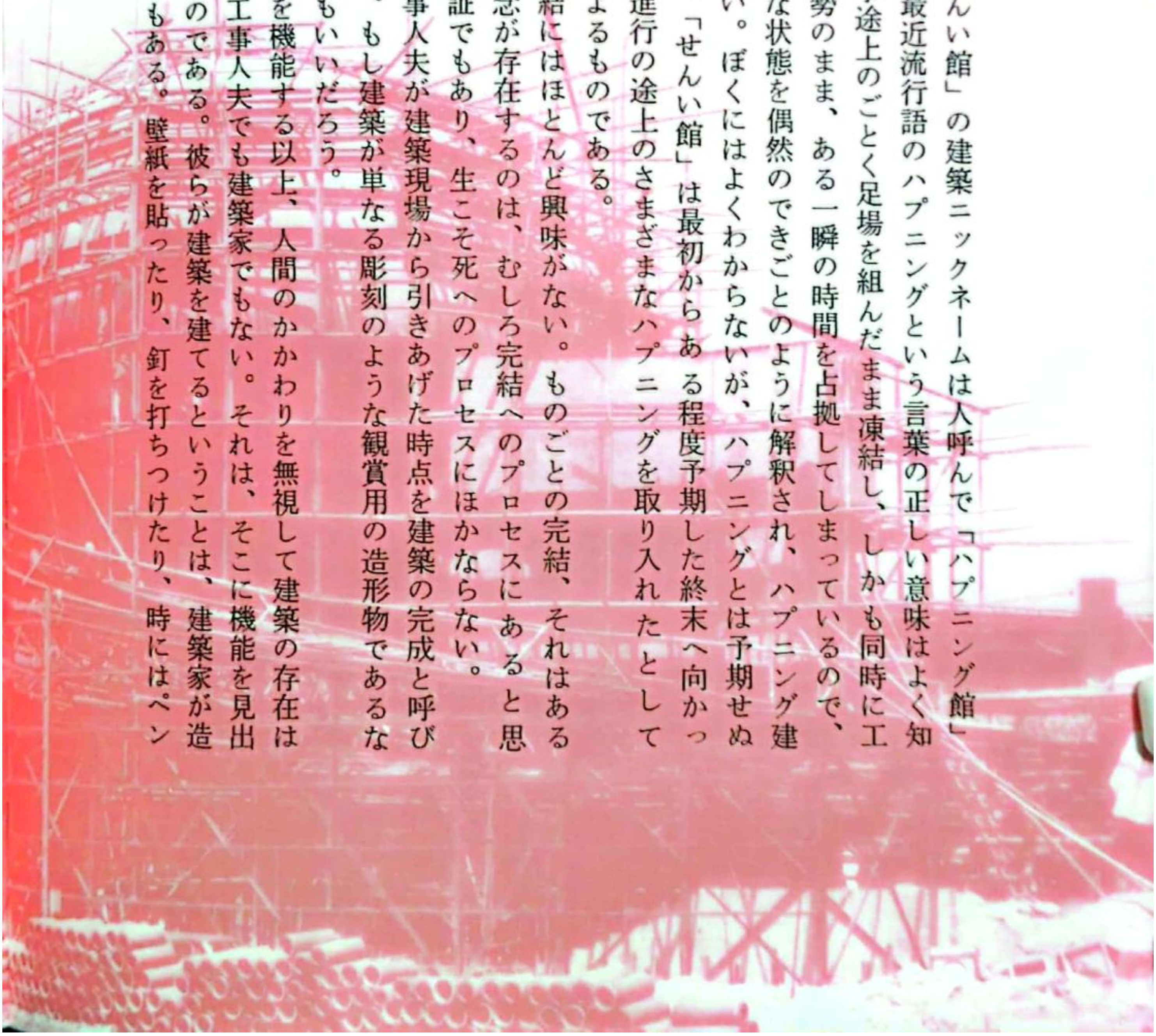
CamScannerでスキャン

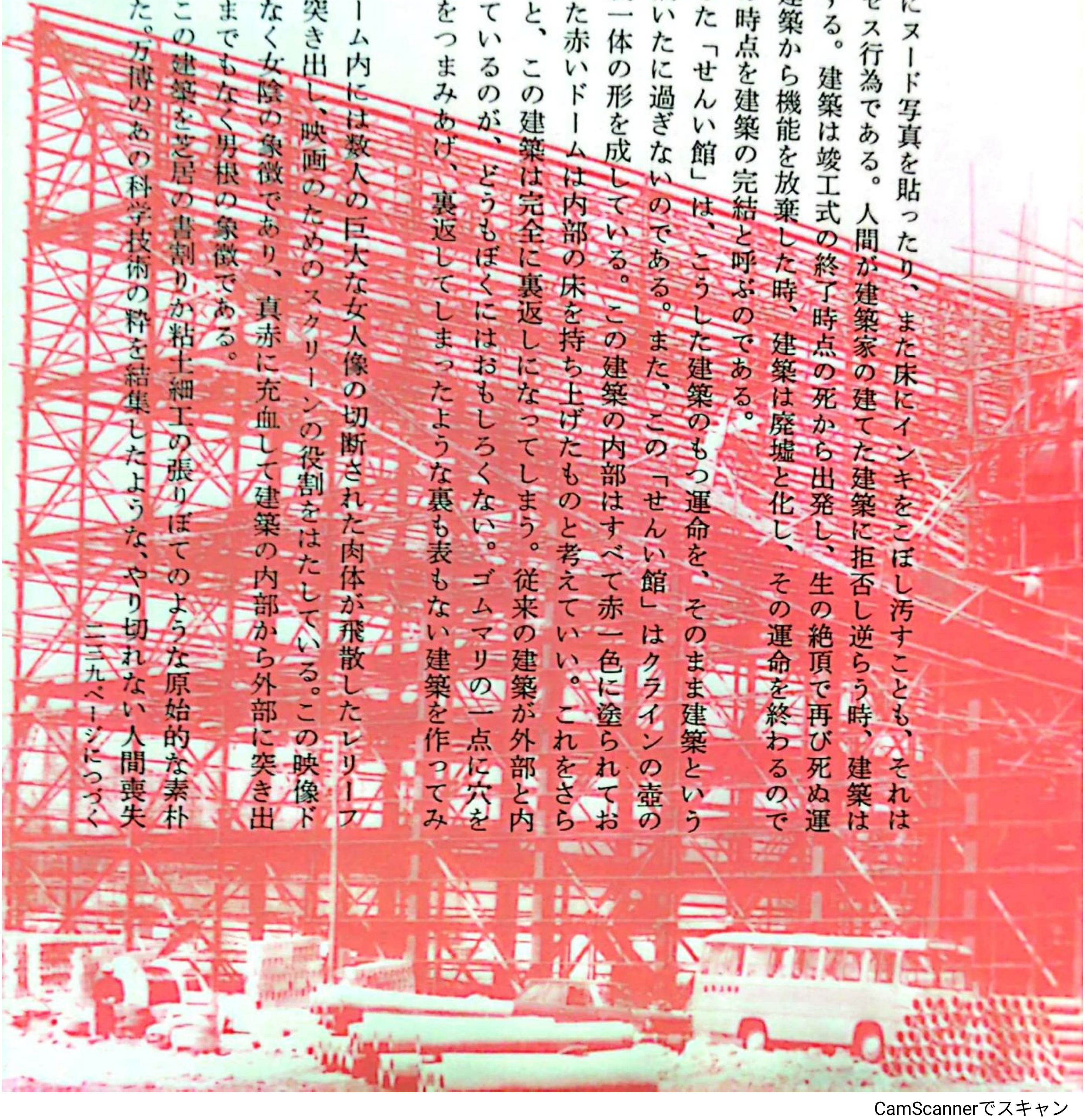
私のデザインした万博の「せんい館」の建築ニックネームは人呼んで「ハプニング館」といっているらしい。ぼくは、最近流行語のハプニングという言葉の正しい意味はよく知らない。「せんい館」が建築工事途上のごとく足場を組んだまま凍結し、しかも同時に工事人夫までが作業を停止した姿勢のまま、ある一瞬の時間を占拠してしまっているので、この時間が凍結したようなヘンな状態を偶然のできごとのように解釈され、ハプニング建築と呼ばれているのかも知れない。ぼくにはよくわからないが、ハプニングとは予期せぬできごとのことを指すらしいが、「せんい館」は最初からある程度予期した終末へ向かって計算されており、たとえ建設進行の途上のさまざまなハプニングを取り入れたとしても、すべてこれは計算の結果によるものである。

ぼくは普段からものごとの完結にはほとんど興味がない。ものごとの完結、それはある意味で死を意味するが、死の観念が存在するのは、むしろ完結へのプロセスにあると思う。死を見つめることは、生の証でもあり、生こそ死へのプロセスにほかならない。

建築がいちおう形を成し、工事人夫が建築現場から引きあげた時点を建築の完成と呼び竣工式をあげるのが通常である。もし建築が単なる彫刻のような観賞用の造形物であるなら竣工式を建築の完結と呼んでもいいだろう。

しかし建築が人間の生活空間を機能する以上、人間のかかわりを無視して建築の存在はあり得ない。建築を建てるのは工事人夫でも建築家でもない。それは、そこに機能を見出す人間によってのみ建てられるのである。彼らが建築を建てるということは、建築家が造った建築空間を破壊することでもある。壁紙を貼ったり、釘を打ちつけたり、時にはペン





キを塗ったり、壁にヌード写真を貼ったり、また床にインキをこぼし汚すことも、それは建てることのプロセス行為である。人間が建築家の建てた建築に拒否し逆らう時、建築ははじめて生を知覚する。建築は竣工式の終了時点の死から出発し、生の絶頂で再び死ぬ運命にある。人間が建築から機能を放棄した時、建築は廃墟と化し、その運命を終わるのである。つまり、この時点を建築の完結と呼ぶのである。

ぼくのデザインした「せんい館」は、こうした建築のもつ運命を、そのまま建築という表現媒体によって描いたに過ぎないのである。また、この「せんい館」はクラインの壺の原理を応用した表裏一体の形を成している。この建築の内部はすべて赤一色に塗られており、外部に突き出した赤いドームは内部の床を持ち上げたものと考えていい。これをさらに上部に持ち上げると、この建築は完全に裏返しになってしまう。従来の建築が外部と内部によって成り立っているのが、どうもぼくにはおもしろくない。ゴムマリの一点に穴をあけてそこから内側をつまみあげ、裏返してしまったような裏も表もない建築を作ってみたかったのだ。

また、この建築ドーム内には数人の巨大な女人像の切断された肉体が飛散したレリーフ彫刻が周囲の壁から突き出し、映画のためのスクリーンの役割をはたしている。この映像ドーム内はいうまでもなく女陰の象徴であり、真赤に充血して建築の内部から外部に突き出したドームは、いうまでもなく男根の象徴である。

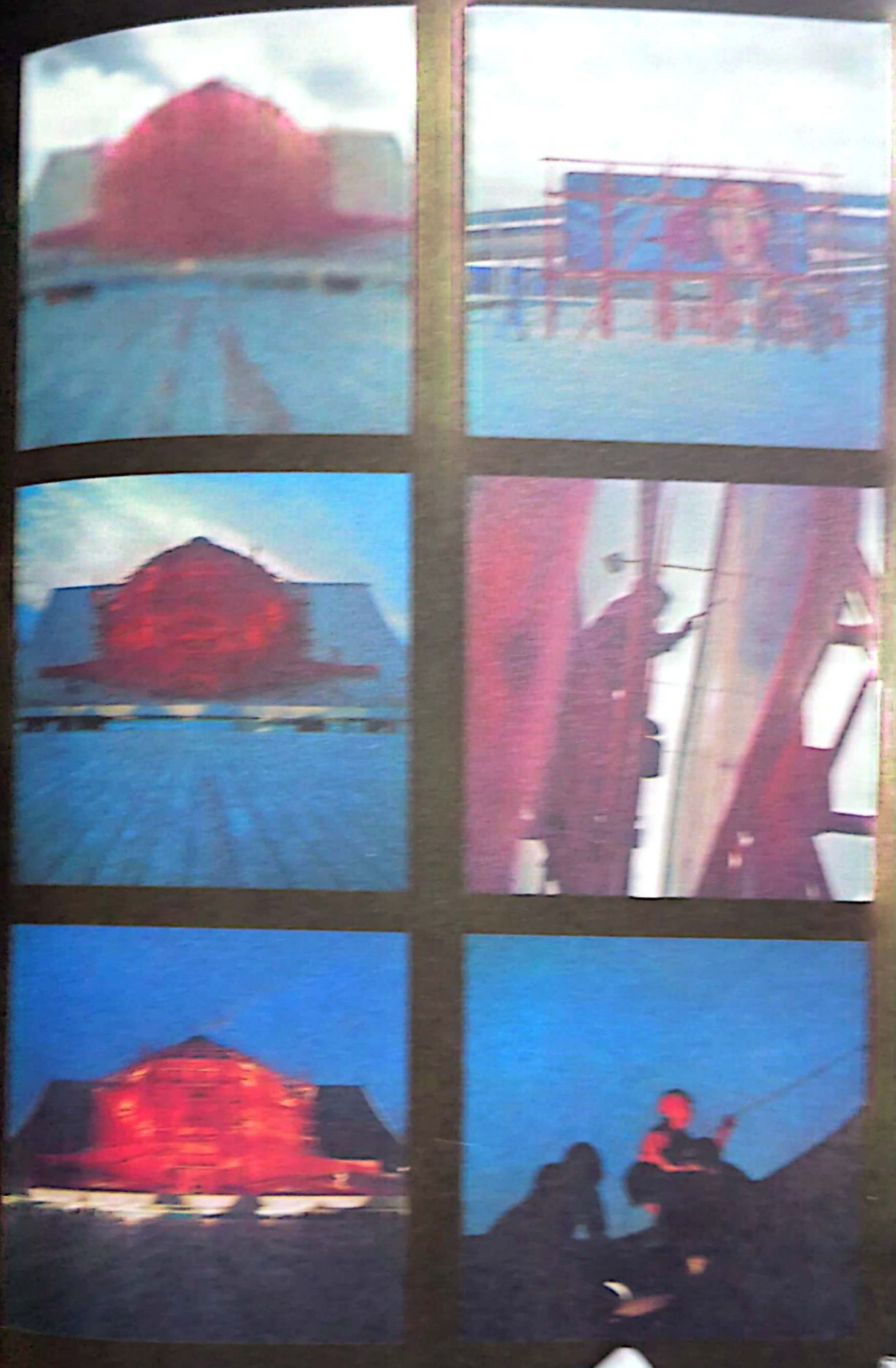
ぼくは、できればこの建築を芝居の書割りか粘土細工の張りぼてのような原始的な素朴な材質で作りたかった。万博のあの科学技術の粋を結集したような、やり切れない人間喪失

二三九ページにつづく

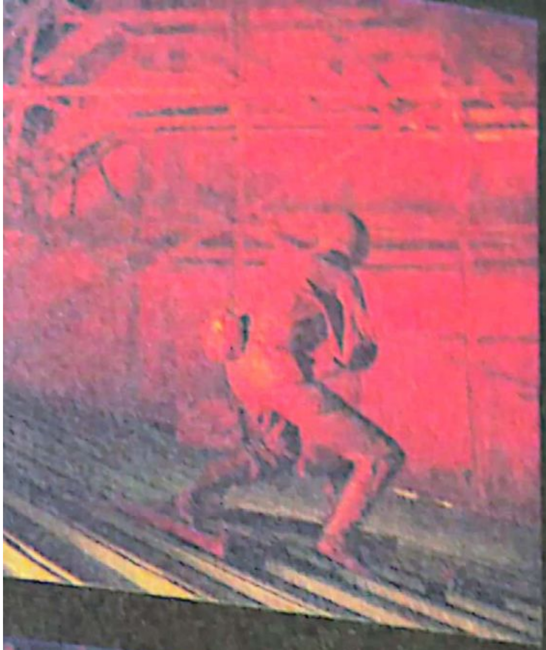
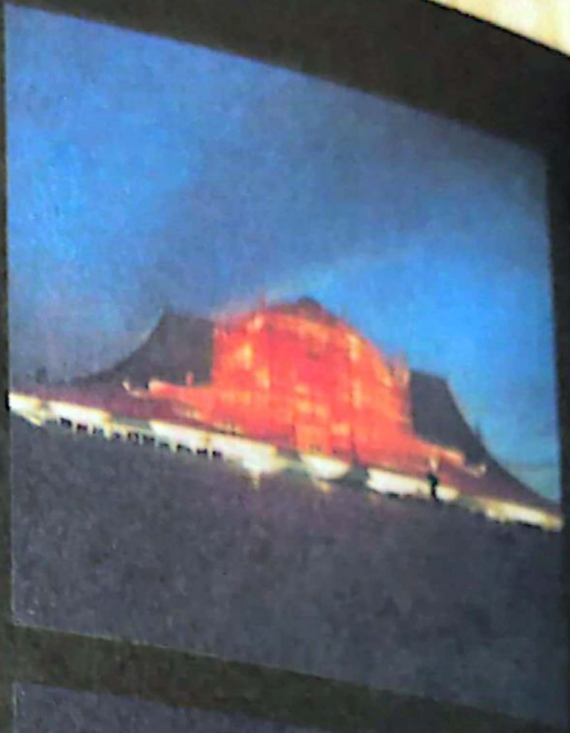
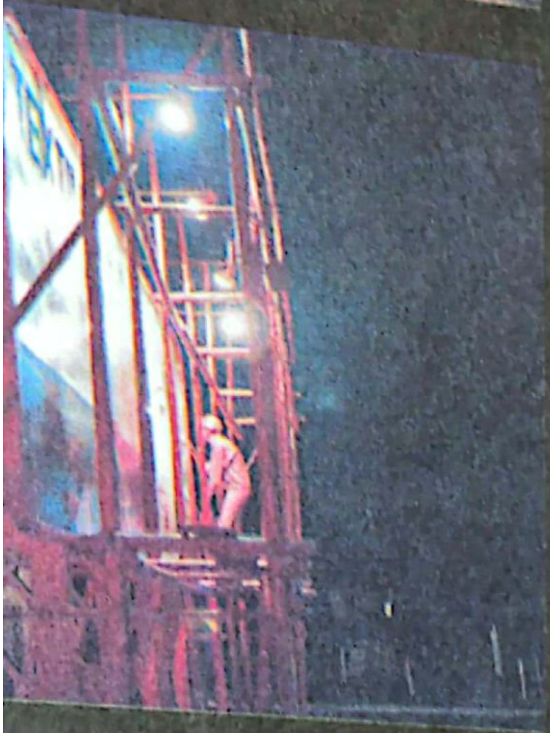
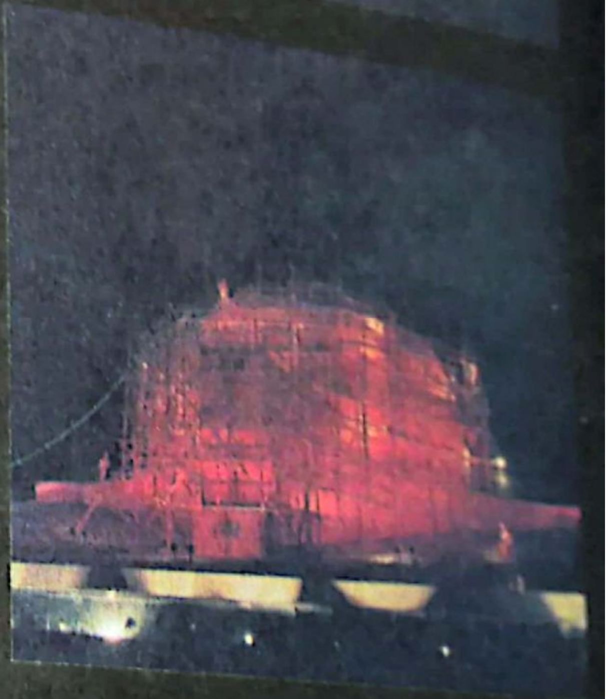
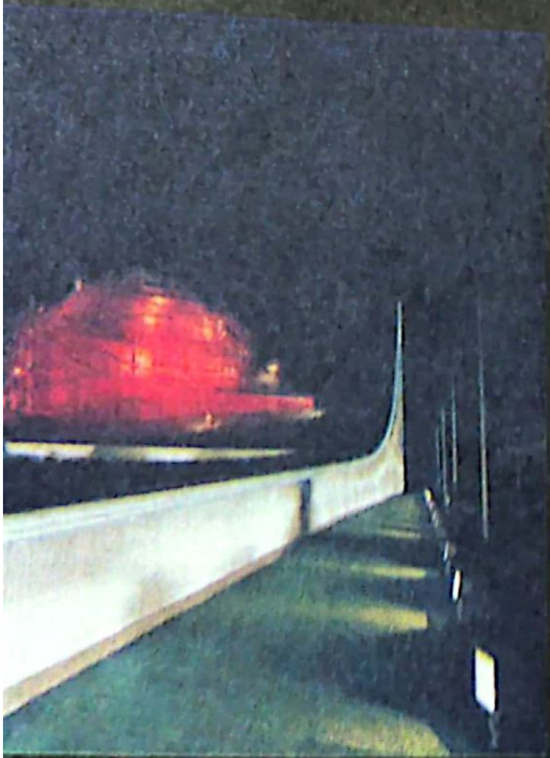
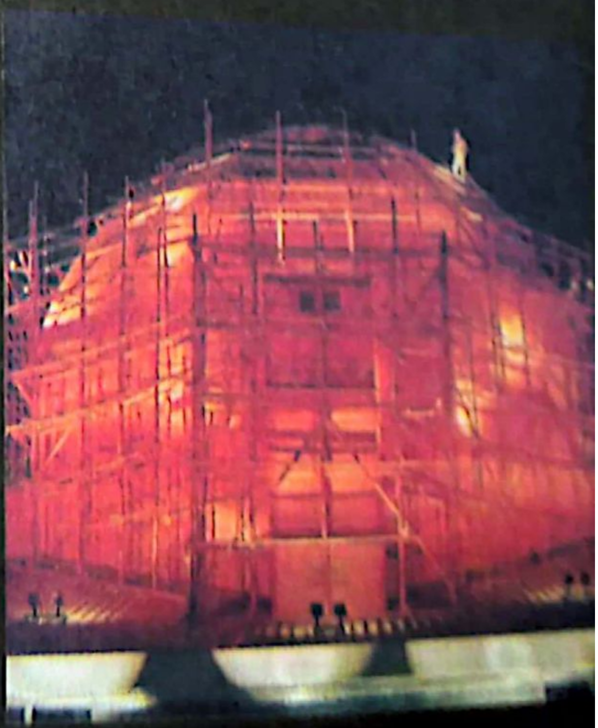
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

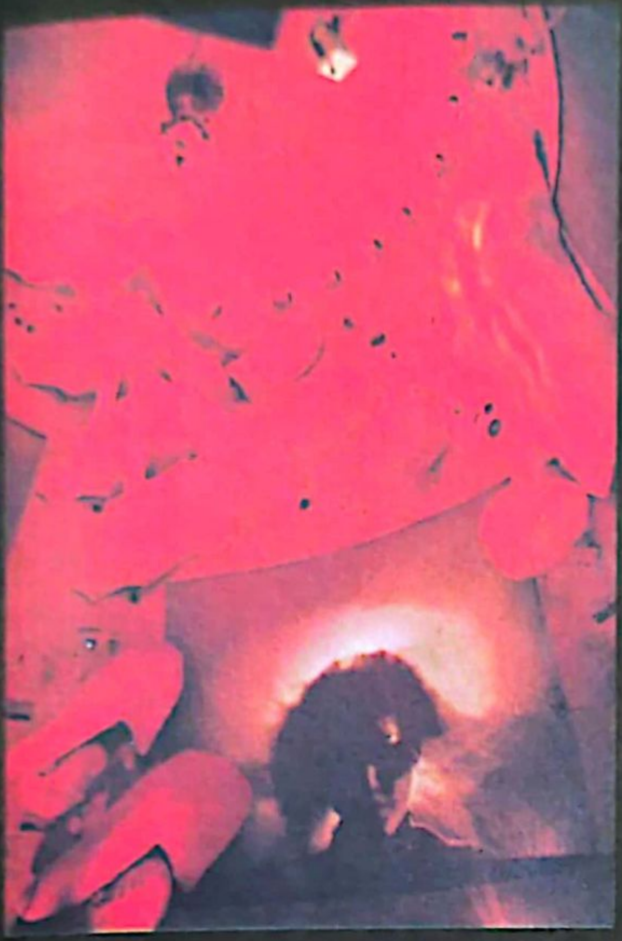
CamScannerでスキャン

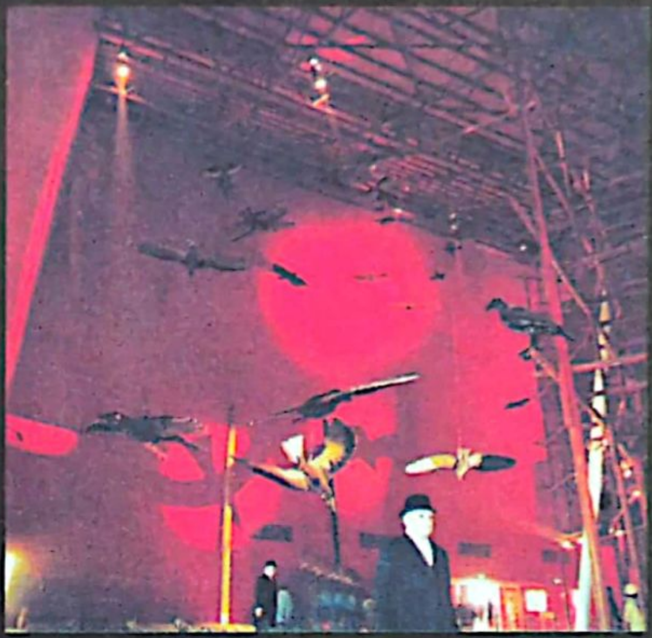


CamScannerでスキャン

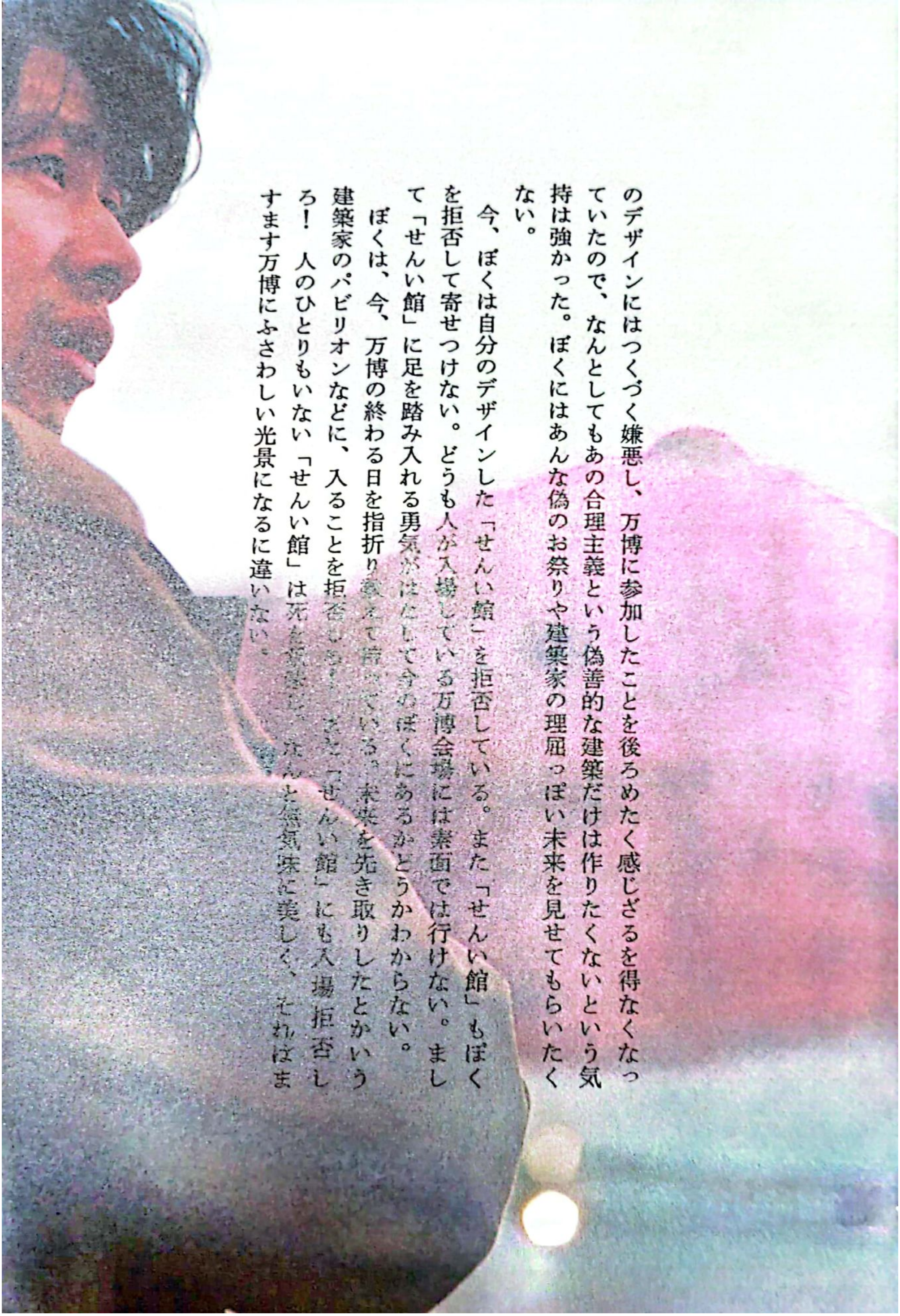







CamScannerでスキャン





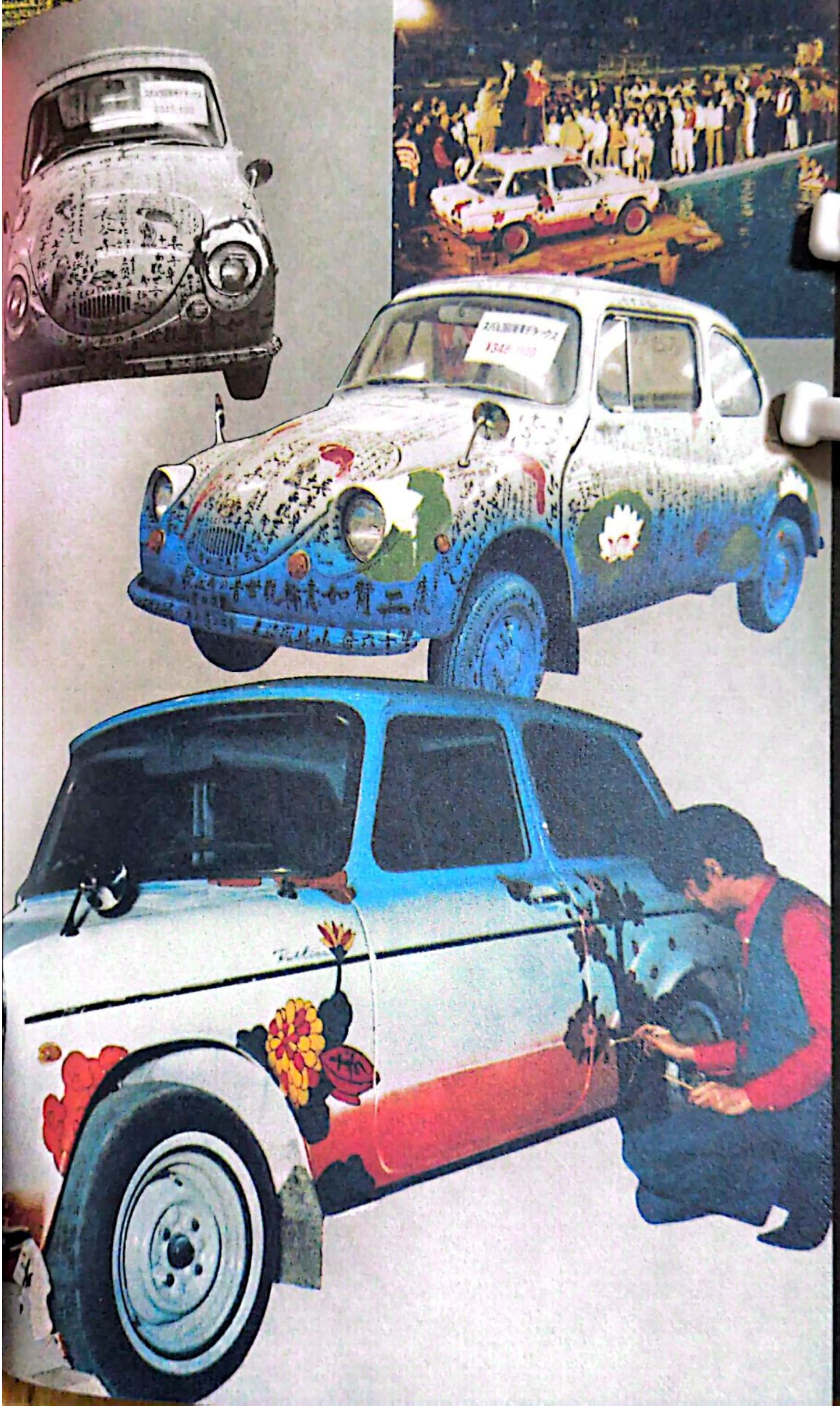
CamScannerでスキャン



のデザインにはつくづく嫌悪し、万博に参加したことを後ろめたく感じざるを得なくなっていたので、なんとしてもあの合理主義という偽善的な建築だけは作りたくないという気持は強かった。ぼくにはあんな偽のお祭りや建築家の理屈っぽい未来を見せてもらいたくない。

今、ぼくは自分のデザインした「せんい館」を拒否している。また「せんい館」もぼくを拒否して寄せつけない。どうも人が入場している万博会場には素面では行けない。まして「せんい館」に足を踏み入れる勇気がはたして今のぼくにあるかどうかわからない。

ぼくは、今、万博の終わる日を指折り数えて待っている。未来を先き取りしたとかいう建築家のパビリオンなどに、入ることを拒否しろ！　そして「せんい館」にも入場拒否しろ！　人のひとりもいない「せんい館」は死んだ建築として、しんと無気味に美しく、それはますます万博にふさわしい光景になるに違いない。



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

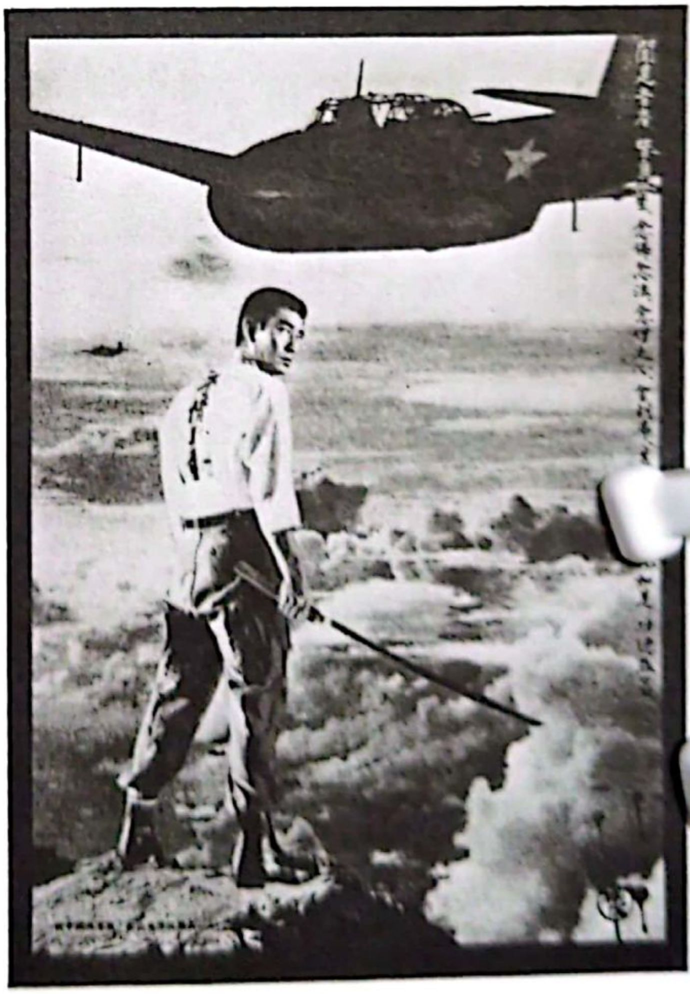
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

舎利弗、
西方世界、
有無量寿佛、
無量相佛、
無量幢佛、
大光佛、
大明佛、
宝相佛、
浄光佛、
如是等
高倉
健
横尾
忠則



緋牡丹博徒
名月赤城山
妻恋道中
吉良の仁吉
おしどり道中

定価 ¥1,600.

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

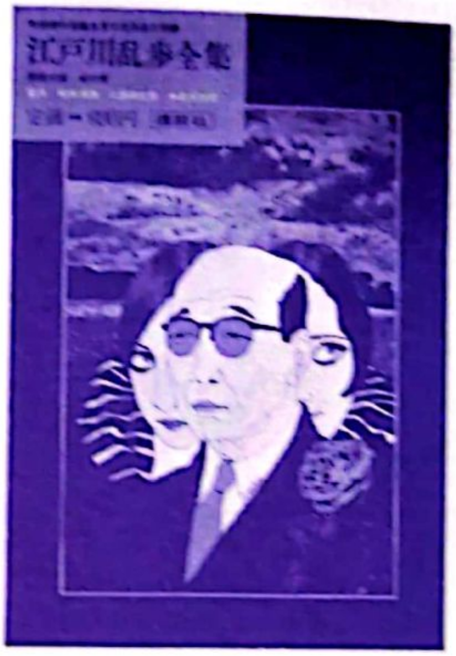
緋牡丹博徒
ビクターレコード
緋牡丹博徒
日本侠客伝
娘盛りを 渡世にかけて
張った体に 緋牡丹燃える
女の 女の 女の意気地
旅の夜空に 恋も散る
アミ40%

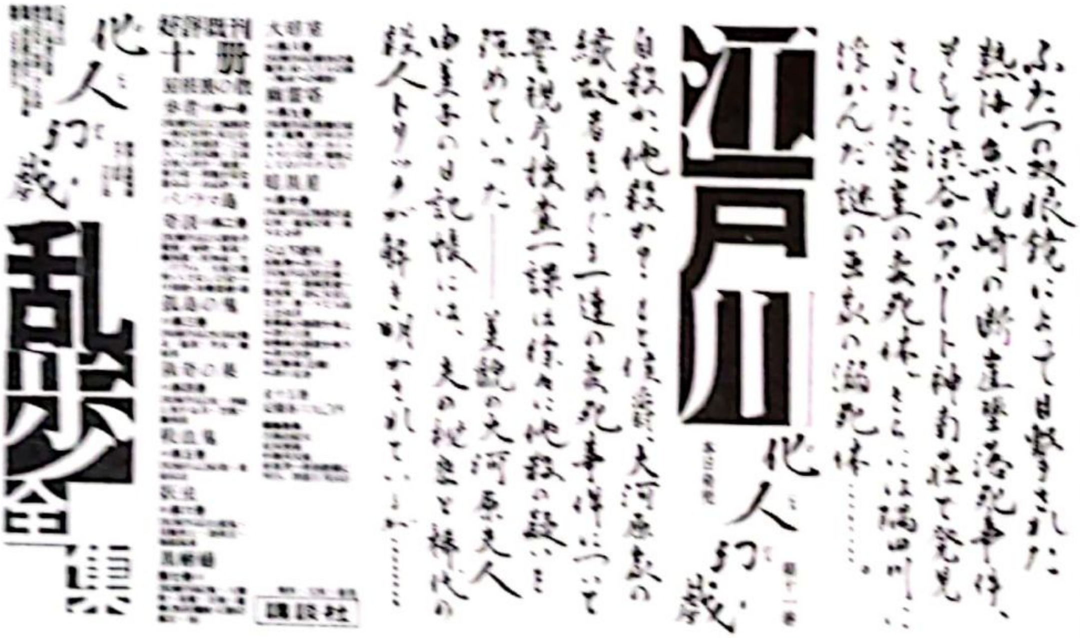
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

江戸川
えどがわ
怪奇と狂気の
地下王国を
支配する
悪魔の
落とし子！

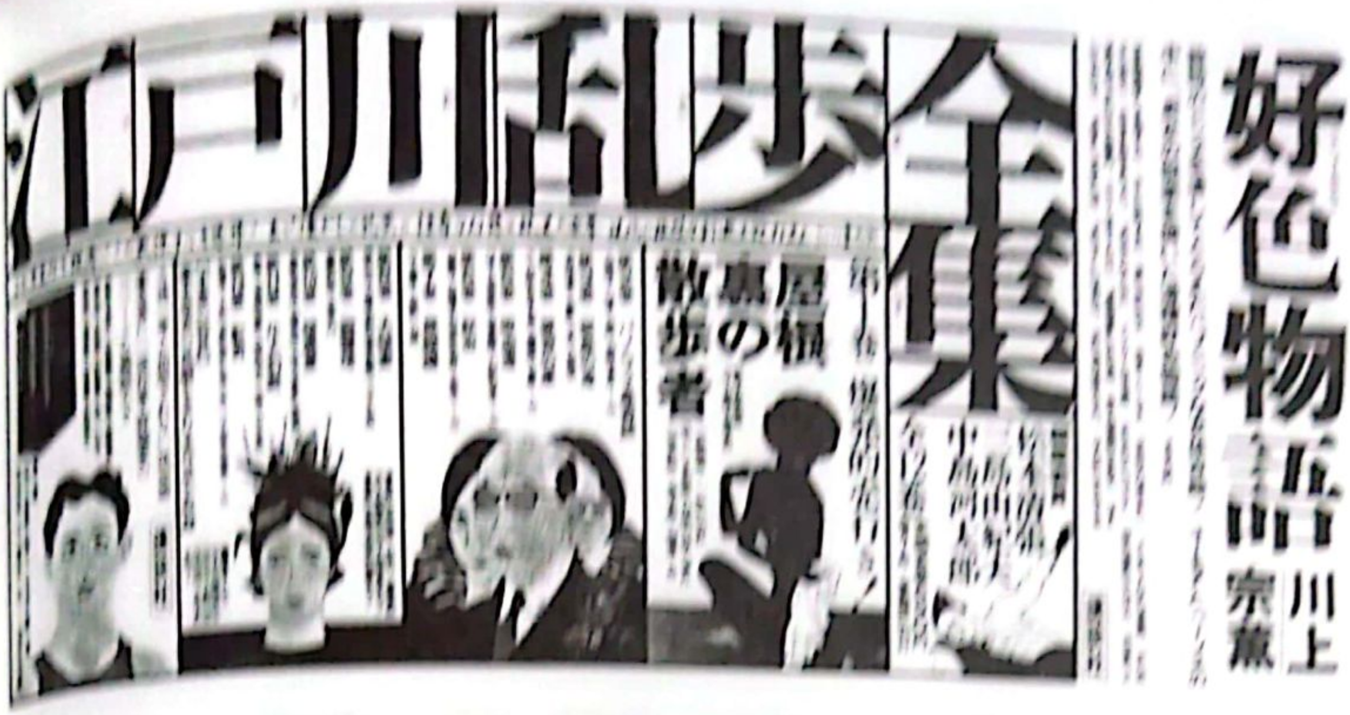
江戸川
乱歩全集
好評既刊
九冊
暗黒星
講談社


江戸川乱歩全集

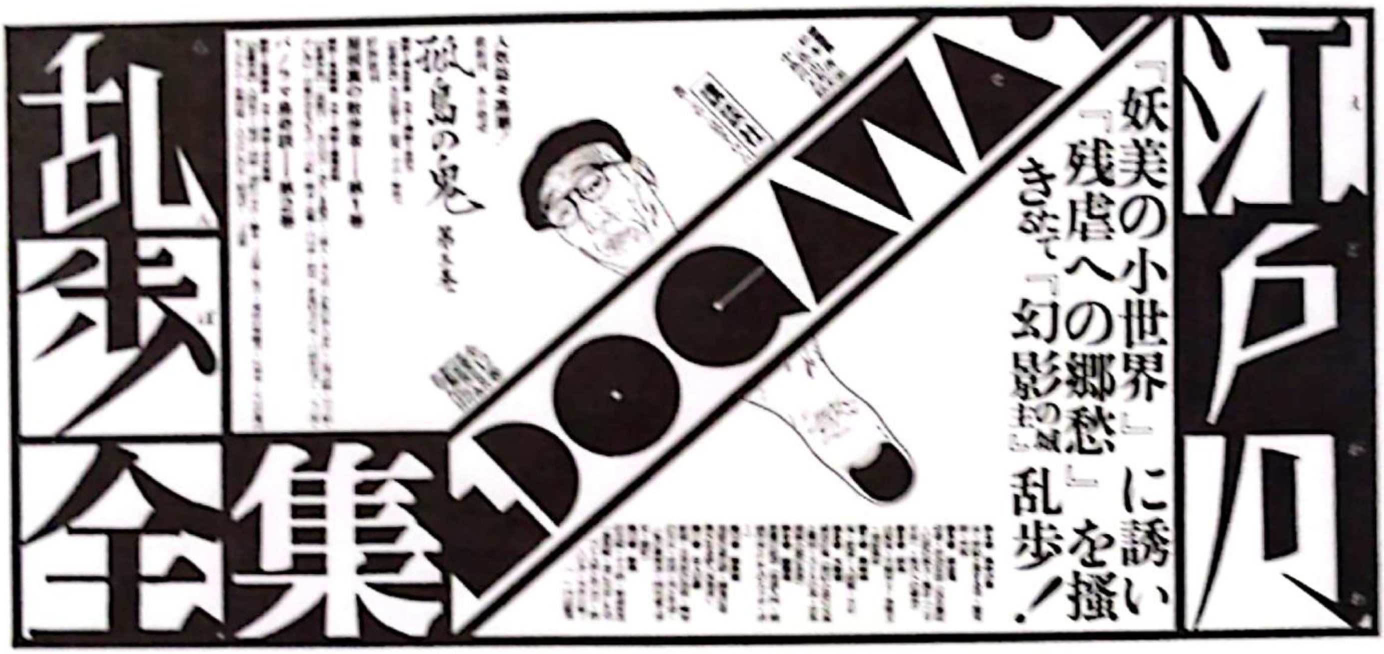

好評既刊
十冊
化人幻戯
乱歩全集
江戸川
化人幻戯
講談社

歳月
司馬遼太郎
講談社

好評既刊
八冊
江戸川
乱歩全集
幽霊塔
RAMPO EDOGAWA
講談社



CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

吸血鬼

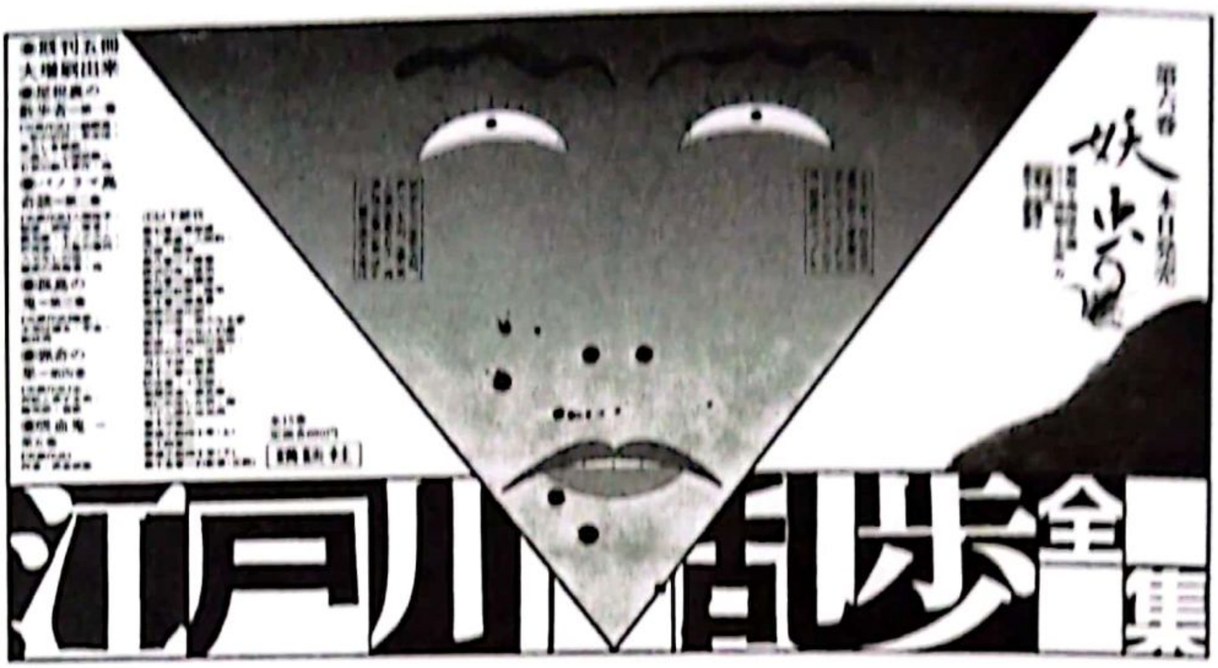
第五巻

"恍惚"と"死"

人間性の深淵を問う

巨星乱歩！

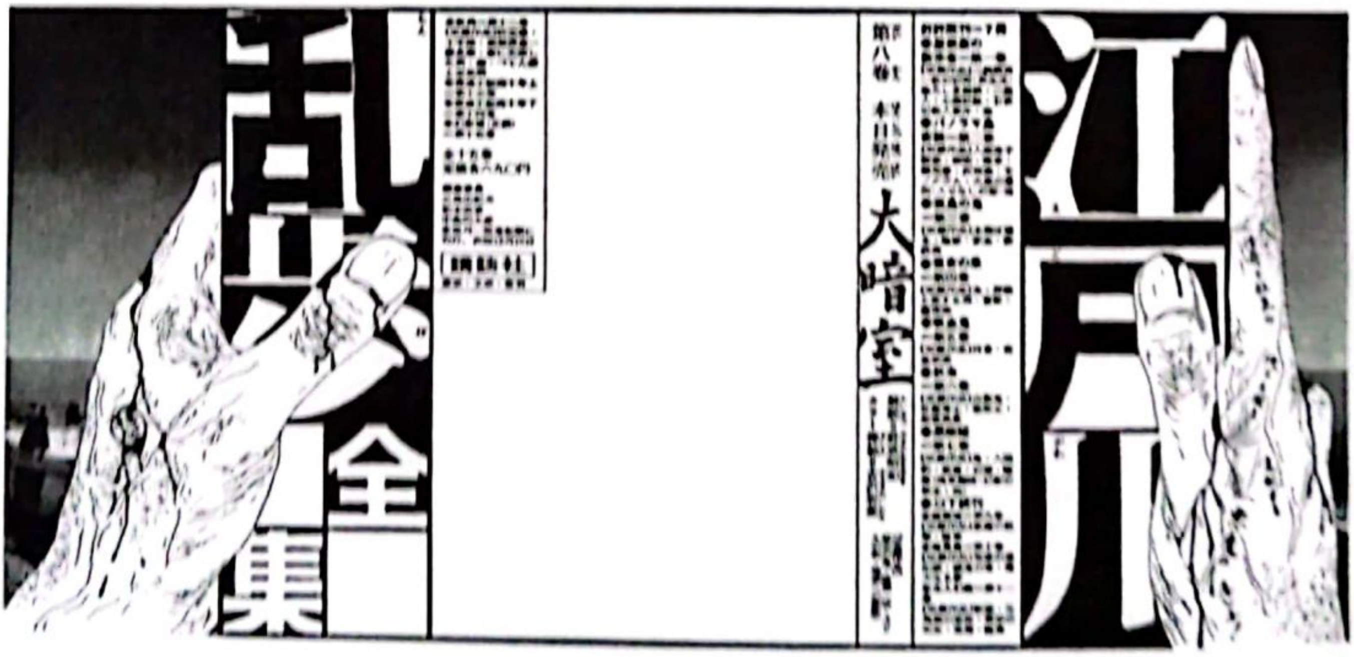
嗚呼



高層の死角

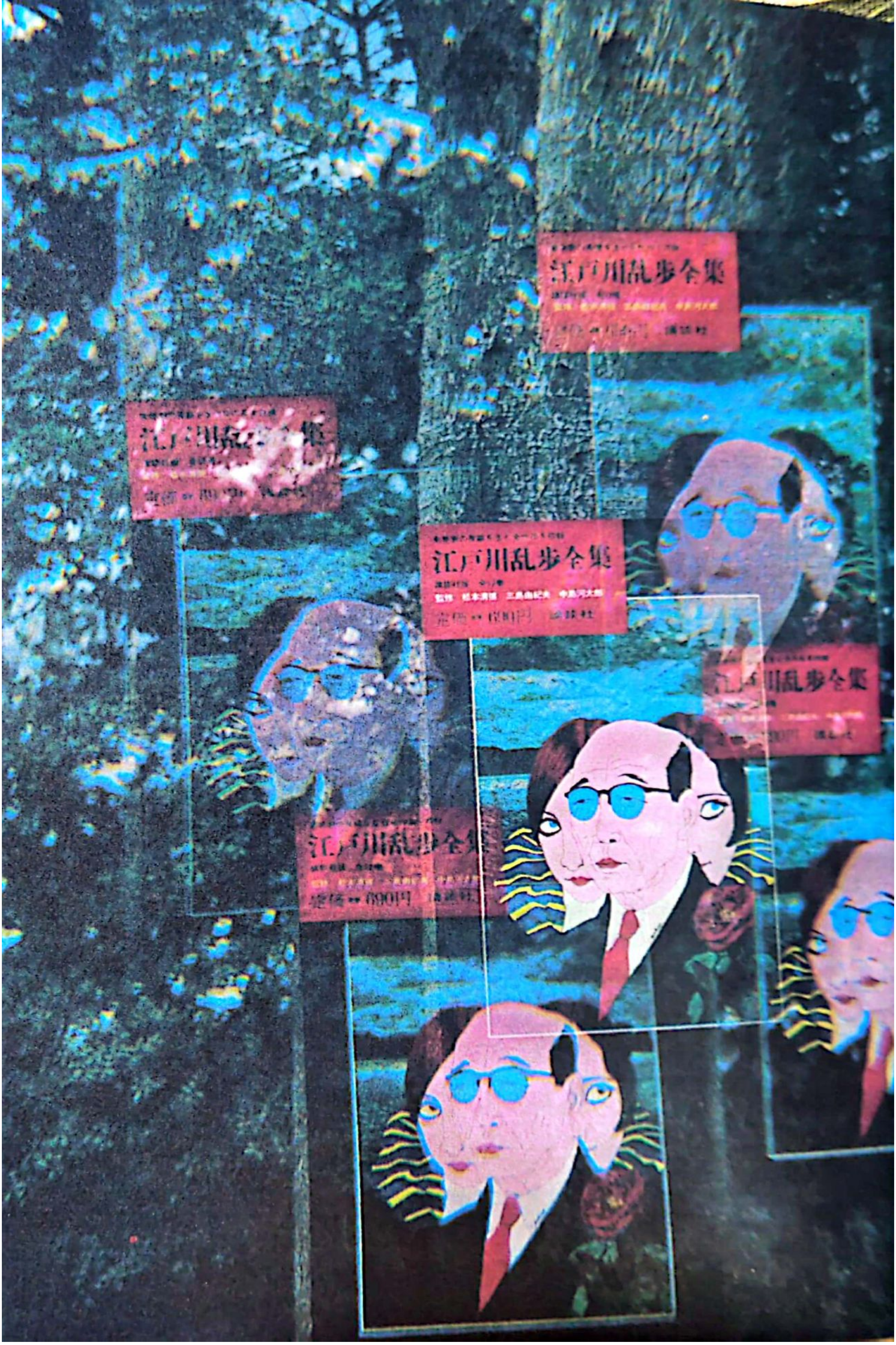
紅の幻影

まぼろしの雷鳥
山岳小説集
新田次郎



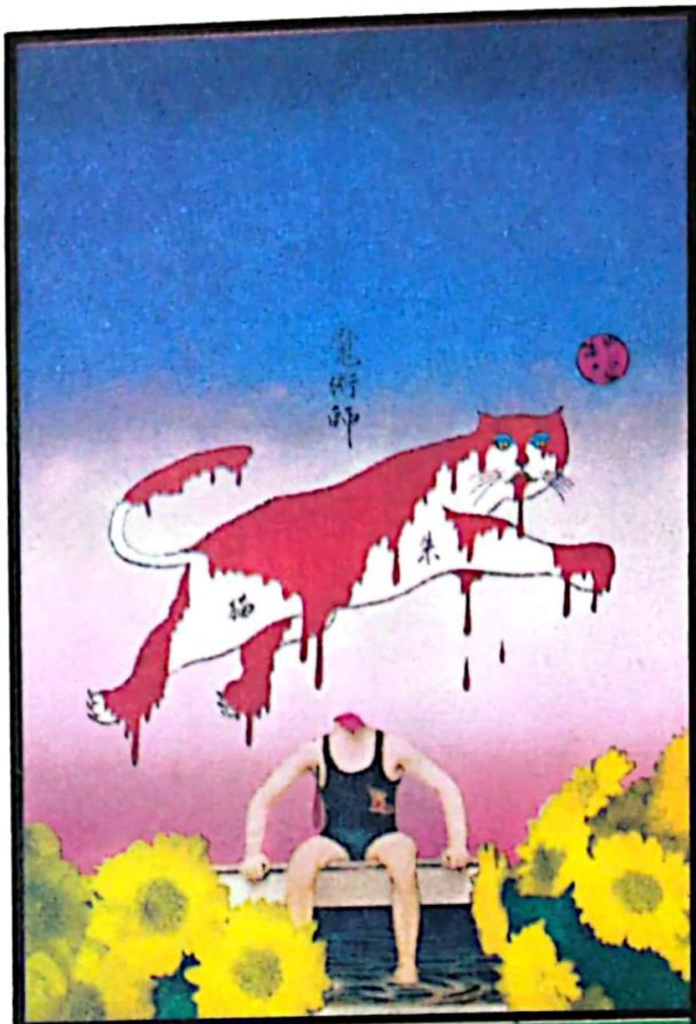
CamScannerでスキャン

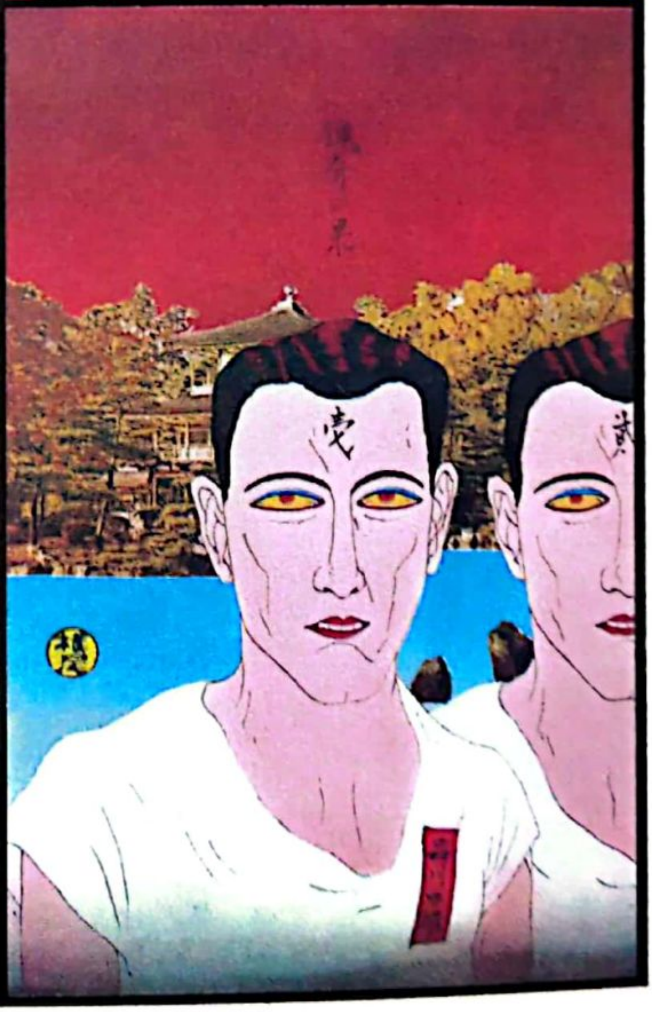
乱
全集



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

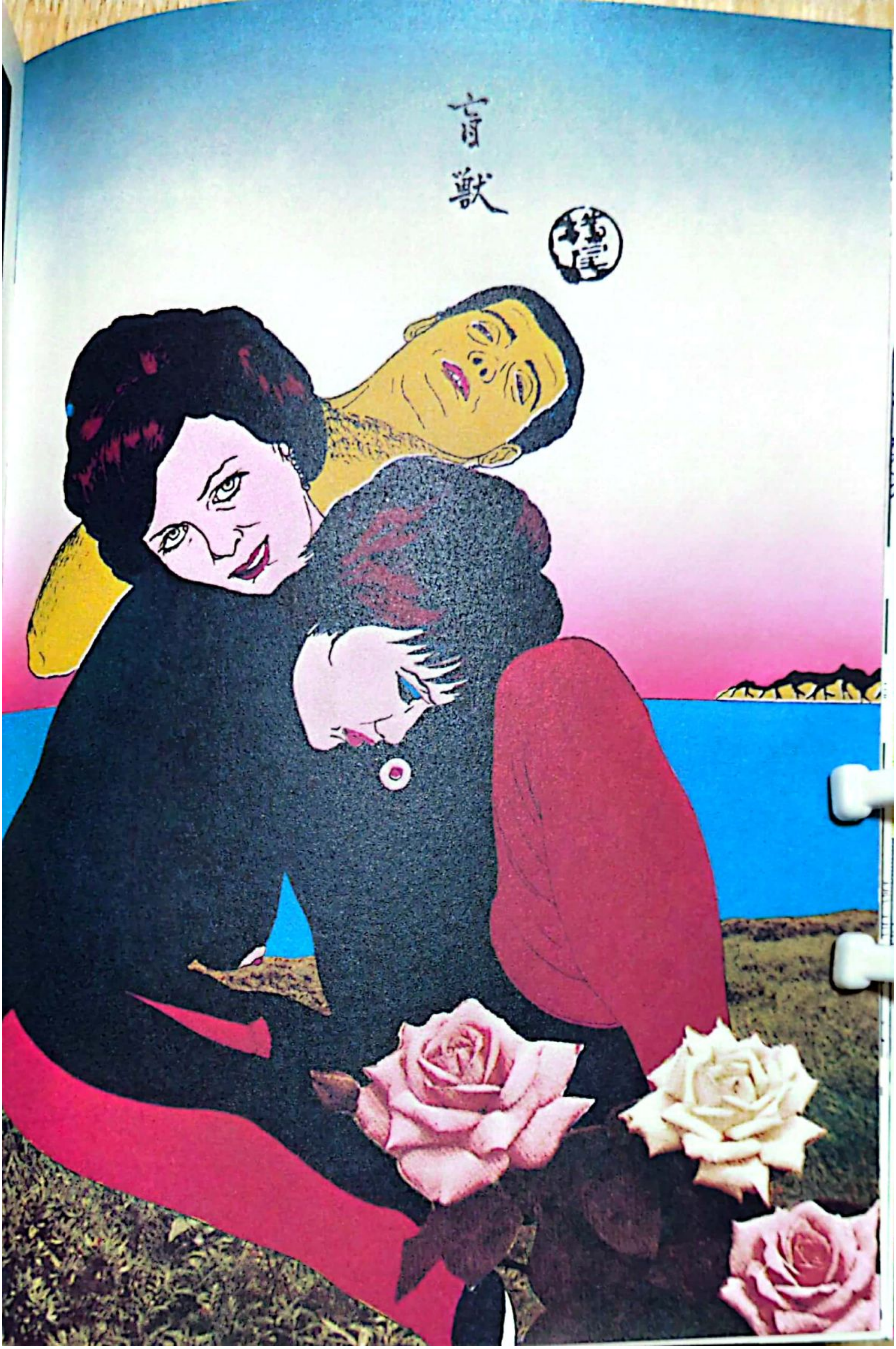




CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

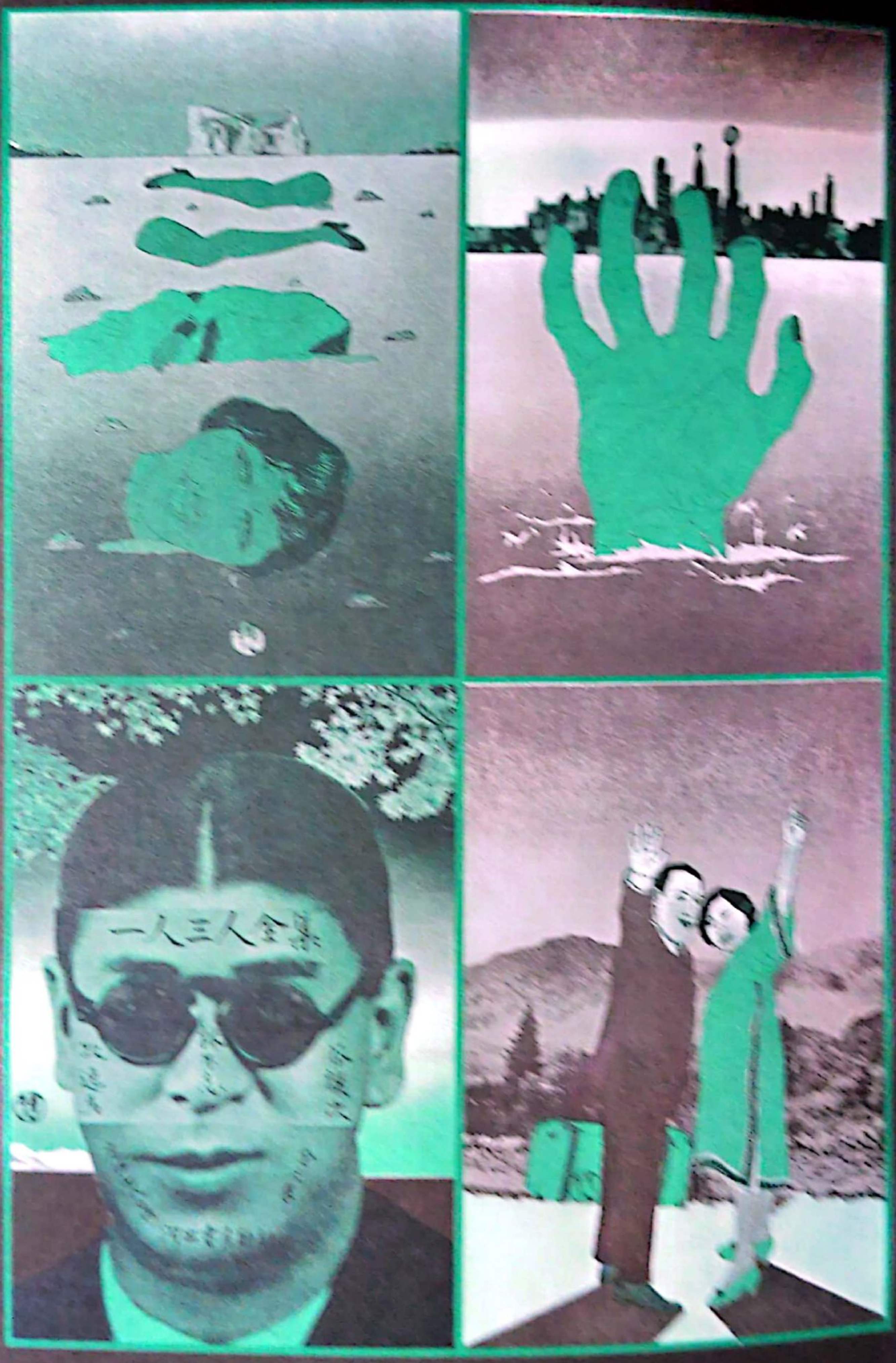
CamScannerでスキャン



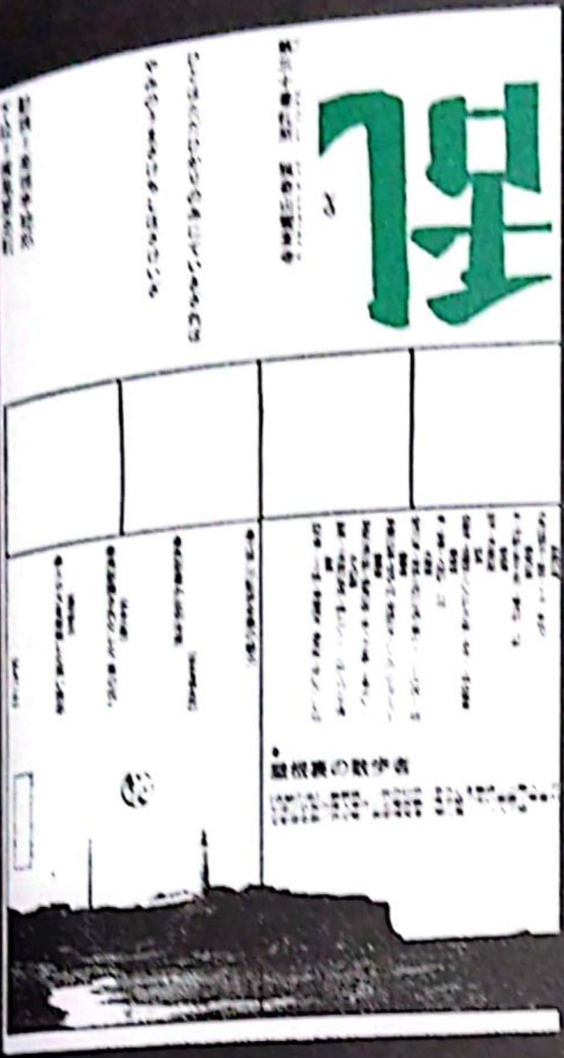
CamScannerでスキャン

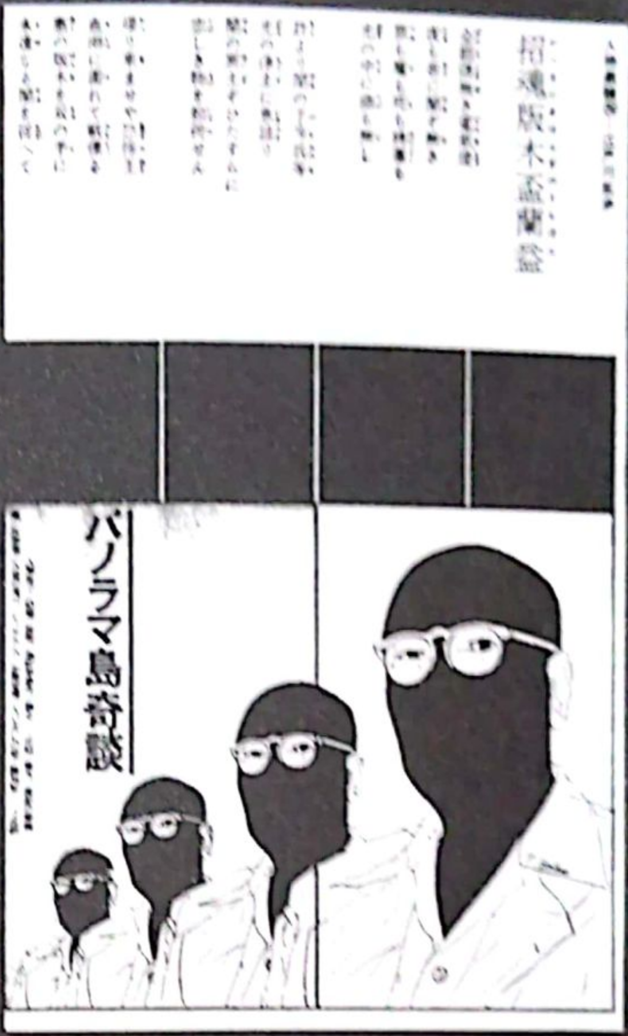
CamScannerでスキャン

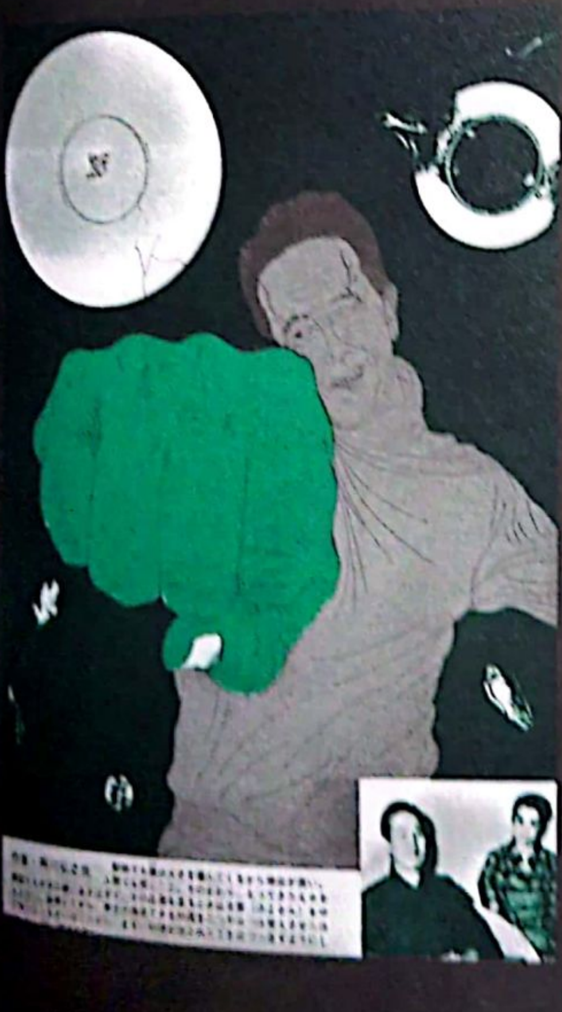
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン



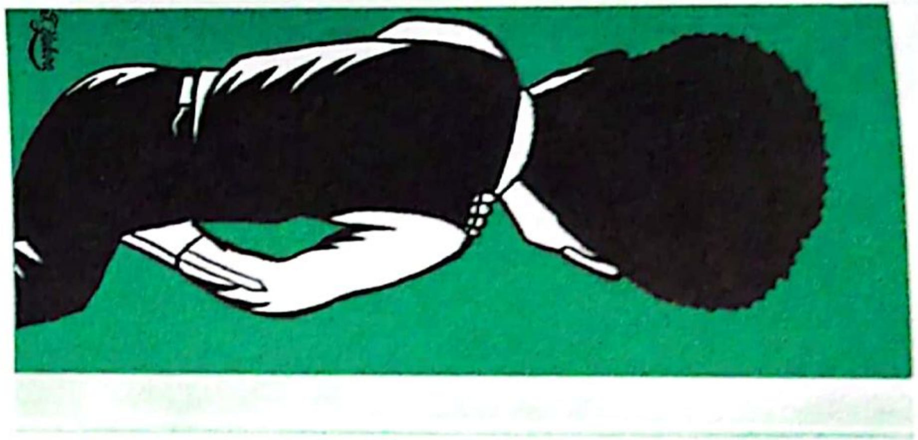

パノラマ島奇談



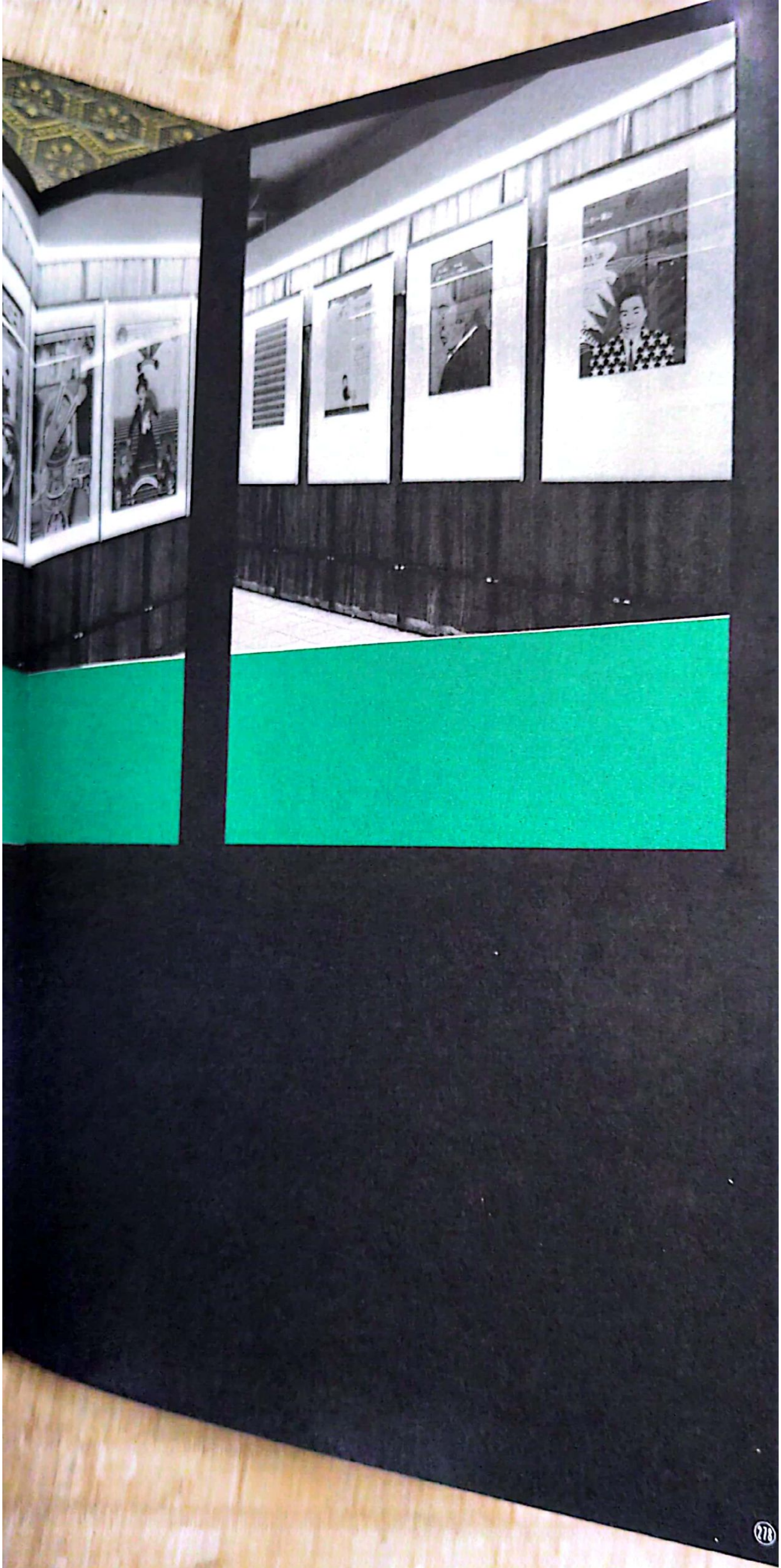
鞍馬天狗
地獄の門

鞍馬天狗
雁のたより

鞍馬天狗



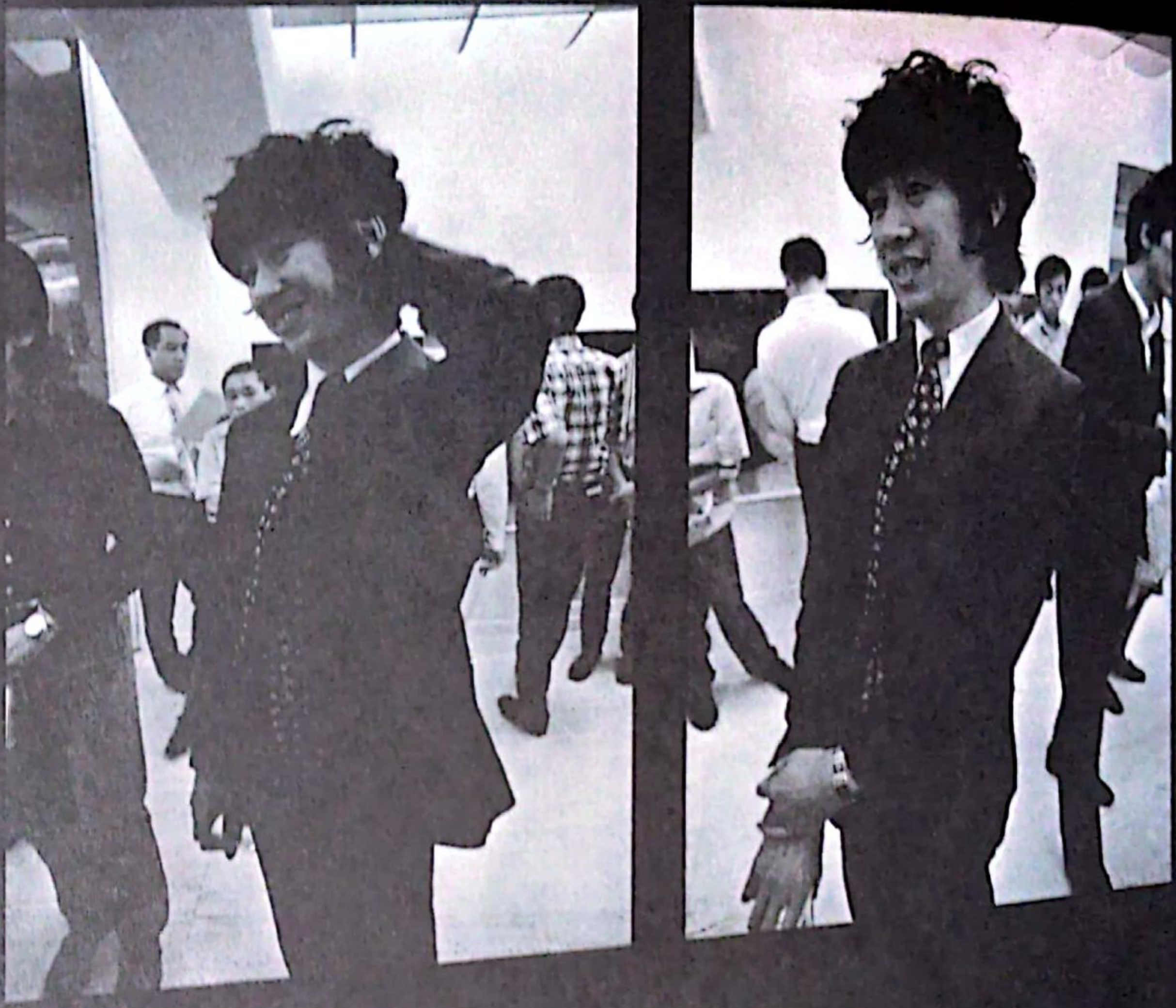
CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

フランクフルト(ドイツ)個展　1967年

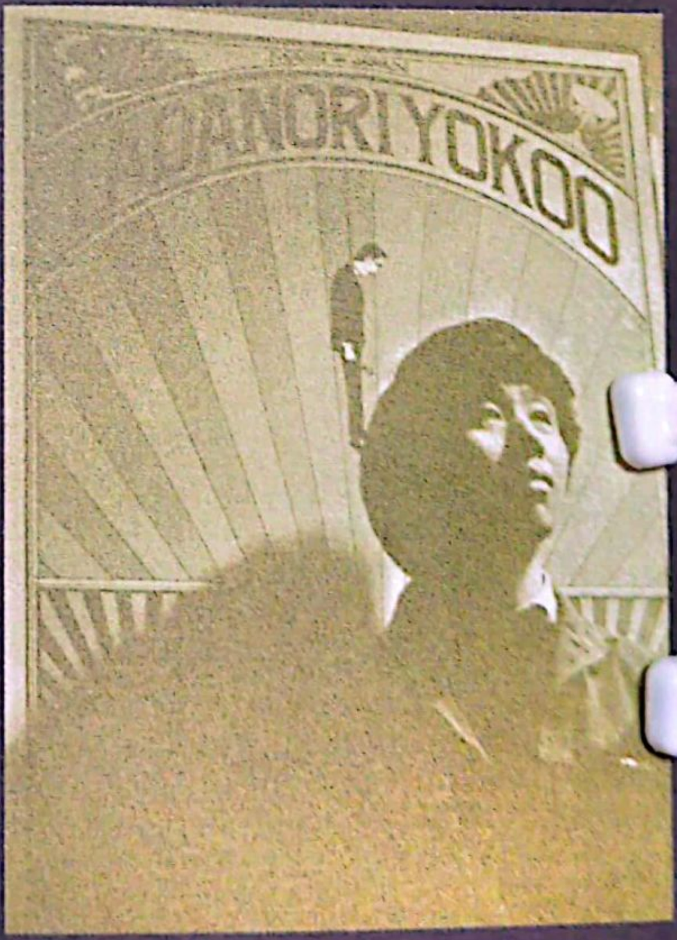
CamScannerでスキャン



東京画廊個展（版画）　1969年

神戸大丸個展（ポスター）　1970年

CamScannerでスキャン



ニューヨーク個展（ポスター・オリジナルス） 1967年

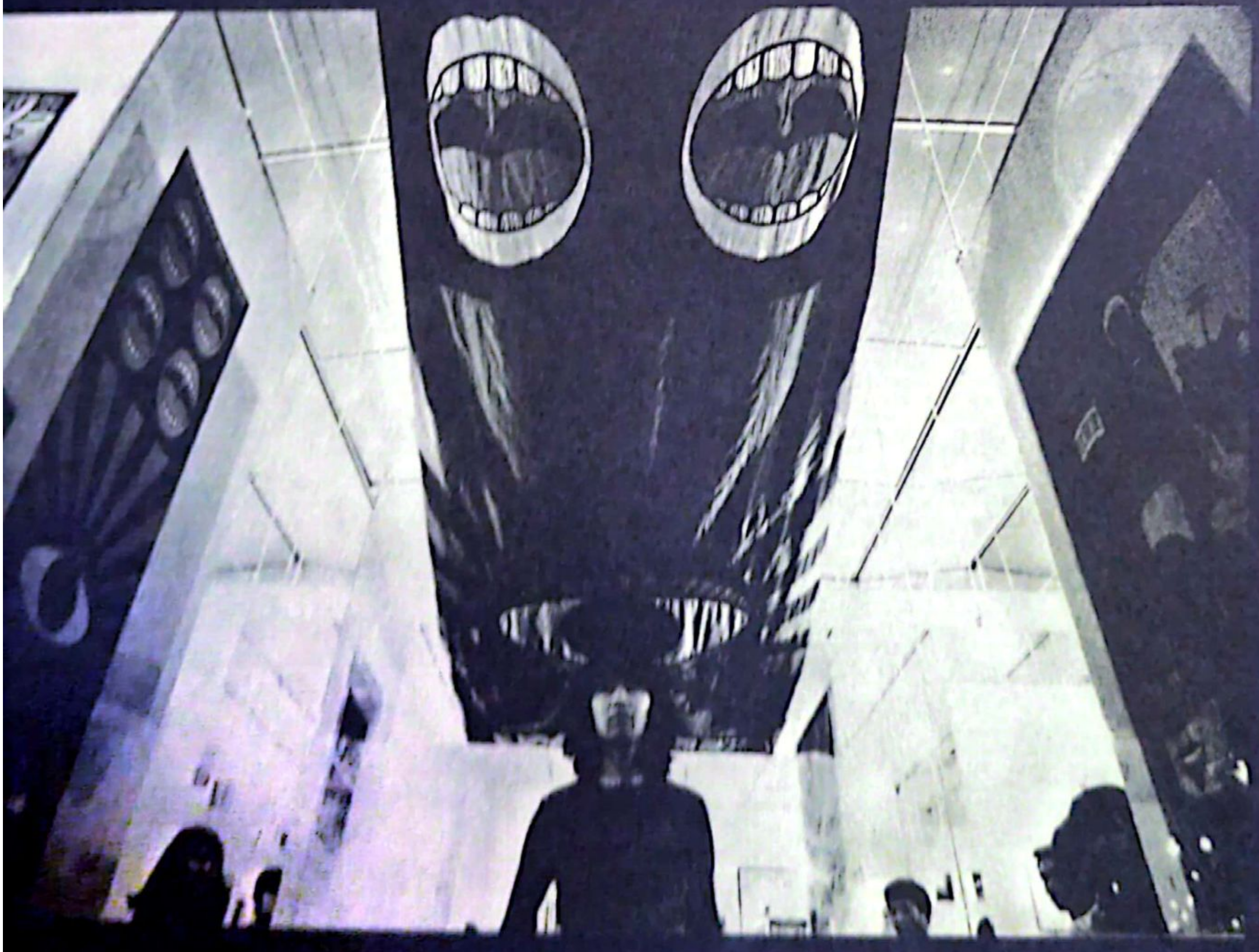
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

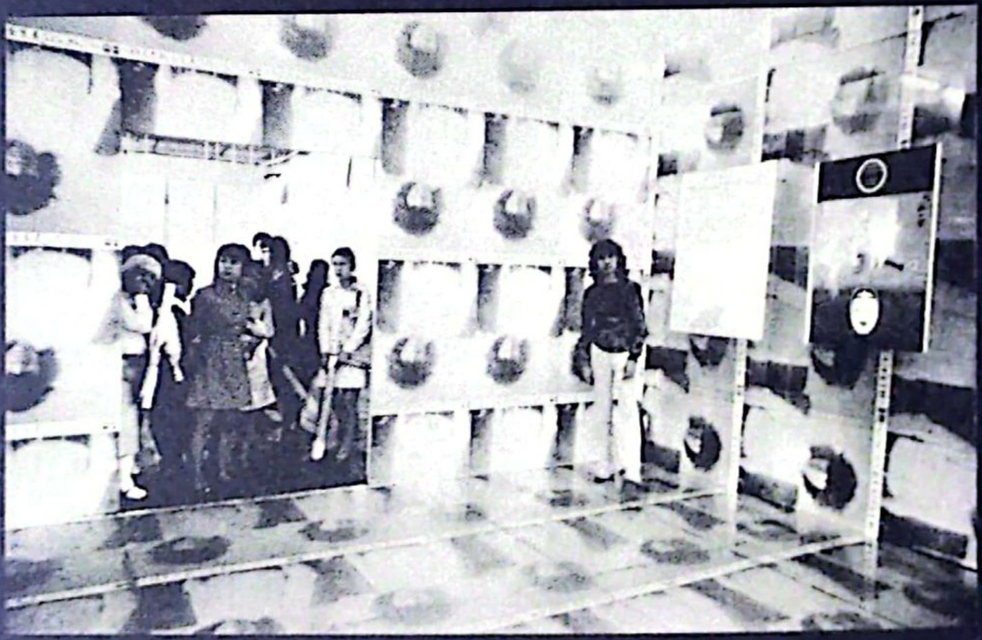
横尾忠則全集展(東京・松屋)　1970年

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

この本について

横尾忠則

ここには過去三年間に制作した大部分の作品が収録されている。過去三年といっても一九七〇年は創作をほとんど打ち切っていたので正確には二年間に制作した作品ということになる。七〇年五月に東京銀座松屋デパートを皮切りに全国主要都市を巡回した「横尾忠則全集展」にちなんでこの作品集のタイトルを「横尾忠則全集」と名づけた。全集と呼ぶにふさわしいかどうかは疑問だ。というのもぼくはこの道に入って約十五年になり、もし全集とするなら過去の全てを収録しなければならないはずだ。その意味からいっても全集と呼ぶのは間違っているかも知れない。正しく呼ぶならば「近作集」ということになる。

ぼくは過去に四度ばかりの転換期があった。そしてその都度作品が変貌した。ここに収録した作品群はその四度目の最終期のものである。最終期といういい方は一寸変かも知れないが、ぼくにとっては無理矢理そう呼びたいのである。なんとか強引にねじふせてまでこういう呼び方をすることによって過去を埋葬してしまいたいのである。ぞろぞろぞろぞろと連綿と尾を引くようにぼくの後に続いている過去、そんな過去への怨念がこういう形で、あたかも終止符でも打つかのように終結させたいのである。ぼくの産み落とした多くの胎児達を背にしながらの創造行為に、ぼくはすっかり疲労してしまったのだ。この否定しても否定しきれない過去からの脱出は、

二九四ページにつづく

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「全集展」や「全集」という形ではとても実現できるものではないかも知れない。また、現在のぼくはすでに一年以上創造を中止している。こうして実行為から避けることが果たして過去の創造から断絶できるものかどうかということもきわめて疑問であり不安でさえある。

創造の禁欲行為そのものさえ、ぼくにとってはまるで創造行為かのごとく毎日苦悩に満ちた日々を送っている。一年前に創った作品がまだぼくのまうしろにピタッとくっついたままでいる。一年以上の禁欲期間はぼくにとってはまったく無駄な期間だったのだろうか？　一年前のぼくと今のぼくはいったいどこが変っているのだろう？　目尻の皺が増えた程度であのいまいましい過去の胎児共とは縁が切れていないのではないだろうか？　こんな焦躁感にぼくは苦悩しながらなお明日への禁欲を続けようとしている。

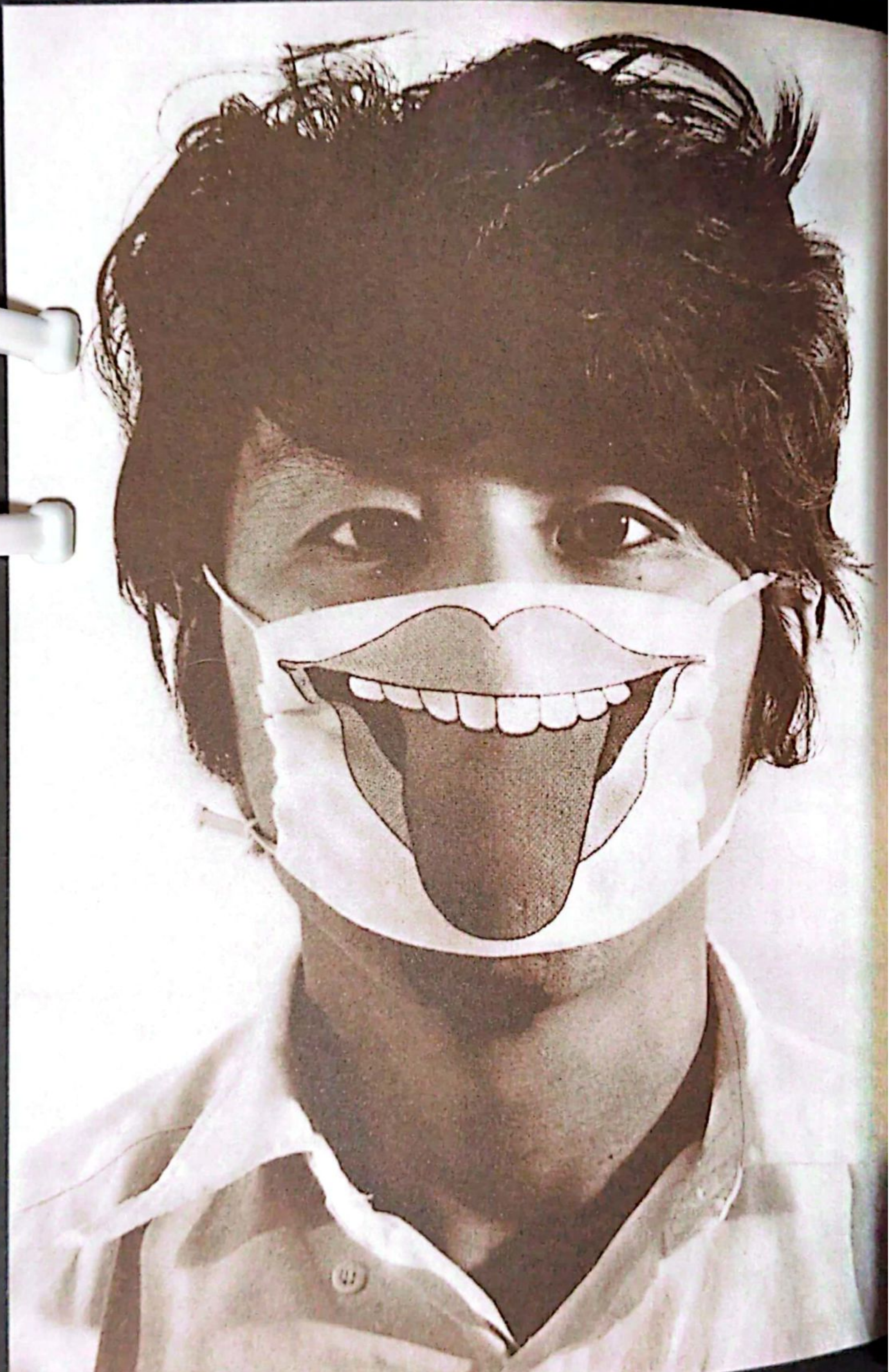
今度いつ再び創作を開始するかわからない。本当は過去とプッツリ切れた時点で創作を開始したいのだ。しかしこんな甘い考えで過去と訣別できようとはさらさら思っていない。

ここに収録された作品はみんなぼくの堕胎児だ。この本はまさに彼等のための墓場以外の何ものでもない。こんなことでもしなければぼくはとても生きていけないのだ。ぼくにつきまとう死の恐怖から一歩でも逃れるために……。一点一点、作品を葬りながらぼくは死に満ち満ちた明日へ向かう己れ自身の死の証言者にならなければならない。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

About This Book

Tadanori Yokoo

Most of the pieces I have written during the past three years are collected here. Since I did virtually nothing during 1970, perhaps it would be more accurate to say "during the past two years." I call the collection *The Complete Tadanori Yokoo*, after an exhibition which, starting of Tokyo's Matsuya Department Store in May, 1970, toured major cities throughout Japan under the same name.

I am not quite sure that *The* Complete *Tadanori Yokoo* is a suitable title. That is, I have been writing for about fifteen years now, and with this title one would expect the inclusion of everything I have done during this time. Perhaps it would have been better to call this book *The Recent Tadanori Yokoo*.

During my writing career I have gone through four major phases, and each and every time the nature of my works has undergone major changes. The pieces here belong to the end of the fourth transition. It may sound strange to refer to the "end", but this is, nevertheless, what I want to call it. By using this term to somehow forcibly pin it down, I hope to bury the past once and for all. My grudge against these bygone years makes them seem like an incredibly heavy tail that drags back through the years behind me, and I want to bring this to a conclusion by, as it were, typing the final period.

I am utterly worn out by trying to create while carrying on my back the many fetuses I have borne in the past. A simple "Exhibition" or "Complete works" may provide no escape at all from the undeniable past. And although I have not written anything for over a year now, it is doubtful, and a source of considerable anxiety, whether I can truly cut myself off from my own history by inaction of the sort I am practicing.

Even the act of creative abstinence itself is to me exactly like the act of creation, filling each day with torment and distress. The pieces I wrote a year ago are today snapping at my heels. Has this year of abstinence been wasted? How, I wonder, have I changed, if indeed I have, from a year ago? Have I undergone nothing more than an increase in the wrinkles at the corners of my eyes, and seen no final separation from those vexing fetuses of the past? This is the sort of torment that hounds me as I struggle to carry on with my abstinence.

I do not know when I will again begin writing. Actually, I want to start the moment I feel I have broken cleanly with the past. But I do not in the least expect to break away merely by simplistic thinking such as this.

The works collected here are all my miscarriages, and the book is no more than a cemetery for them. Without doing this, or something like it, I simply could not go on with life. Burying my works one piece at a time—if only to be free for a moment from the fear of Death's shadow—I must become a witness to my own death as I confront tomorrow, and the death which it holds.

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

横尾忠則の画をはじめて見、奇妙にそそられるのは、それが孜々として倦まぬ個性の開発、などという近代的個性主義などとは関係ないところにある、ある個性のなす業ゆえと思われた。

これはまた、いわゆる近代絵画の系列にもなければ、アブストラクト、あるいはシュールといったものとも関係ない。

河上徹太郎氏の芸術論には傾聴すべきものが多いけれど、そのひとつに、絵画、彫刻が空間芸術であり、音楽は時間芸術であるとするのは表現媒体をそのまま表現としてう呑みにした俗論なりという卓説があり、これは自らピアニストであり、「ドン・ジョヴァンニ」論を書いた人にしてはじめてなしうる説法であろう。

横尾君の画業は、つい先日、全集展が行なわれたばかりだが、この筆法にしたがって、私はこれぞ時間の芸術ではなかろうかと思う。

彼の画の特徴は独特な線描にあると思われるけれど、その線描は、たとえばマチスの線描が、修練のはてに対象を一瞬のうちに暗示するといった態のものでなく、つねにある性格、状況の類型を目ざすのみで、そのなかに限りないデテールが集約されているといった筋合のものではない。

そして、このようにデテールを指向しない線描は、正にそれゆえに空間を表象するのではなく、ある時間を停止させ、ピンでとめたかの如き、時間を担った空間世界をわれわれに提示するのである。

CamScannerでスキャン

さて、その時間とは、当世流行の言辞を弄せば、前近代の世界をたゆたう時間であるけれど、ここで、われわれはひとつの自己撞着に逢うので、それは、前近代の、あるいは個人の下意識における時間とは、実は永遠のという形容詞の冠されるものであって、永遠の時間とは、即ち永遠の停止であり、無時間であり、そこで、より正確にいえば、横尾君の業（ワザと読むか、ゴウと読むかは全く読者の好みである）は、無時間性を暗示する空間の把握につきるといっていいのであろう。

それは、神話のなかの(無)時間性であり、夢のなかのそれである。

神話、乃至は夢を構成するものは、大気であり、水であり、土であり、太陽であって、これらいわば四大元素的なるものは、デテール描写の外にあるもので、神話、夢の持つ不思議なレアリテは、古典的リアリズムの方法とはあたう限りはなれた地点にある。

横尾君の全作品は、すでにして初期作品と後期作品と劃然と分別されるが、しかし、その間を一貫して流れるアリアドネの赤い糸は反古典的、反リアリズムの方法への固執である。

では、横尾君の夢とは何か、神話とは何か。たとえば神話といっても、これが、上昇的なる感覚によって把握されるか、あるいはその逆に下降的であるかによって、甚だしく異なった貌を呈してこよう。

創世の神話と、あるいは、リヒャルト・ヴァーグナーの没落のそれとは別なのであって、強いて

いえば、前者にはエトスが、後者にはエロスがみちみちているのではなかろうか。

勿論、横尾君の神話、乃至夢は後者のそれであり、その世界は、死とエロスに充満しているというべきであろう。

そして、幸か不幸か、われわれは、キリストを持たず、キリスト一神教と裏腹にあるヴァーグナーの没落神をもたず、それゆえに、さらにさかのぼって、フェリーニが映画「サチュリコン」で描いたような異教徒、多神教の世界を持つわけでもない。死とエロスが、絶対的至高者を媒介にして睦みあう世界とは無縁なのであり、われわれの神話とは、かくして、土着であり、アニミズムであり、それらが〝幼時体験〟を通して、ある絶対性を獲得している世界、というべきなのであろう。

横尾君の、実際のふるさとは、神戸と西脇のちがいこそあれぼくと同じ兵庫だが、いまここに彼のエッセイをとりあげて、幼時体験の場における感懐を聞いてみよう。

＊

女性雑誌「アンアン」で写真を撮りたいといって来た。ぼくは篠山紀信を指定した。どこで撮るか随分話し合った。ぼくにとって最後の切札的な場所があったが、それを今、口にしていいものかどうか迷ったが、思い切って、「俺の生まれた故郷の西脇で撮ってくれ」と地獄に行くような思いでいった。

＊

変わり果てた生家の跡を見ると、ぼくの記憶の中の風景が再録できなくなりそうだから、生家や近所の風景をあらゆる角度から数十枚描いた。筆を持つ手はまるで何かにとりつかれたように、細部にわたってわれわれながら驚くほどの正確な記憶力で描きあげていった。失われたものの迫ってくる怖しさに、僕の魂は筆先にあずけられたかのようになった。

＊

想像を絶する家の周辺の変貌を前にして、ぼくは目の前からみるみる薄れてゆく十年前の風景を、死にもの狂いで取りもどそうとしていた。

＊

故郷の人々は皆んな年老いていた。山や川の自然までが、皺くちゃになっており、故郷は見知らぬ他国で、ぼくも半ば異邦人だった。

長い引用になったが、この文は、横尾君の故郷に対する、アンビヴァレンツな感情の揺れを表して遺漏がない。

アニミストであるわれわれは、裏切っていくふるさとの風物を切札の場所と思い、しかしそれは同時に地獄でもあることも知悉している。

そして、神話といい、夢といい、つねに一定のパターンであることをその存立の条件であるとすれば、横尾君の画は、一口でいえば、個性のそれではなく、パターンの画であるといっていいのではないか、つまり、二十世紀絵画における抽象指向に異を唱えるに際して、些やかな個的、内的現実の個性的、具象的発現では無力ではないかということを殆ど本能的嗅覚で察知し、個性よりはパターンを前面におしたてたのではなかろうか。

今日この頃、マニエリスムなる、絵画上の一潮流が大きくクローズ・アップされているようであり、横尾君の画もまた日本におけるマニエリスムの一翼を担うものとされているが、この傾向の絵画には、今頃出すには些か遅きに失した証文と受けとられるかもしれぬけれど、ぼくには以前より親近感があった。

というのは、ぼくがまだ新潟にいた頃のこと、何を思ったか、ギリシャのアルカイックからピカソまでの、いわゆる泰西名画の検討に十日ほどかかりきりになったことがあり、さて、ヒイキの画家三人を自ら決めんとして考えて遂にゴヤ、モロー、ルドンの三人を秘かにえらんだことがあった。そして、このことをさる友人に話そうとして、ゴヤとルドンは有名すぎるゆえに遠慮し、ぼくの好きな画描きは、ギュスターブ・モローであると揚言したことがある。

その時、美学志望のその友人は、モローなんどあまりに文学的にすぎて、造型なぞとは関係ないマイナーである、そのモローがいいという君には、セザンヌなどは全く解らんのとちゃうかと云わ

CamScannerでスキャン

れ、そう云われてみると、正にその通りで、やっぱりぼくの審美眼は駄目らしいと、以来、絵の鑑賞に関しては完全な自信喪失、失語症的傾向を帯びるに至った。

モローの「出現」などは些か偏倚であるとしても、十数年まえ、銀座のたしか求竜堂画廊と記憶しているけれど、日本にある限り集めたとされたルドン展は、ぼくのささやかな教養体験のなかで、特筆大書されてしかるべきものであり、特に彼ルドンが愛児を失ってからの幻想に圧倒された記憶は生々しく、とにかくぼくは、造型的であるよりは、文学的であり、観念的である絵画が、殆ど先天的に親しみ易いのだ。

横尾君のことを論じて、話が外れてきたが、しかし同君の出現以前におけるぼくの絵画への態度はほぼ以上のような次第だったことは云っておかなければなるまい。

ぼくは日本人の絵描きさんとは殆どあいかたるところなく、日本における幻想の画家たちが奈辺にいるのか一向に見当もつかない、そして、横尾君こそ、ぼくのまえに、いわばナショナリティをもって現われた、はじめての日本幻想画家なのであった。

ビアズレーの亜流はあちこちにいたけれど、それらは所詮、コスモポリタンの二流感覚であり、横尾君にみられるナショナリティは何処にもなかった。ナショナリティと書いて大慌てに断っておくけど、勿論それは別にナショナリズムのそれではなく、はじめに述べた求心的、土俗的なるものの顕現を意味する。

CamScannerでスキャン

一神教徒の神話、つまり神は、青山に似て到るところにあり、それゆえに、たとえばアルバート・シュヴァイツァーは、九十を越えても平然とアフリカの僻地にあり、死に際しても、彼の脳裏にあったのは、十二使徒のエトスに充ち充ちたマスクであり、どう転んでも故郷アルザスの風景ではなかっただろう。

このように、上昇的、一神教的神話は、遠心力に充ち、それゆえに、西欧資本主義のモラルを支え得たのである。

その点、われわれの土着神話は、下降的であり、求心性のみに充ち、これが天皇神話、つまり、上昇的民族神話に吸収されないかぎりにおいて、著るしく反近代的であるといわなければならぬ。

勿論、土着神話一辺倒であれば、横尾君は自らを画業に赴かす必要性なく、求心性をも拒否するところに、妖しい画業が成立した。

さて、幼時体験への固執と反撥は、インファンティリズムの土壌でなされるのがつねであり、横尾君その人も、何処やら、永遠のインファントふうである。

幼時体験を成立させる要素にはいろいろあるけれど、なかでは、母親のそれがもっとも大きく、それは、即自的なる性の世界を内包しているからである。

横尾君が、あるインタビューで語っているところによると、瀕死の母親が、胴巻のなかに小銭を

CamScannerでスキャン

一杯つめていたとのことであり、金銭とは、外の世界のシンボルであるとすれば、もっとも内的体験の中心にあるマザーが実は外の世界そのものでもあったことになり、病人のベッド脇にあって、少年は神話の外にひきずり出されたことになる。

その時点で、少年は、永遠に停止している時間から追放されたのである。

ぼくは、画一般について、巧みに語る術を知らぬ不学変才の徒だけれど、彼の画を支配する色、ヴァーグナー風にいえばライト・モチーフの色が朱色であることにいろいろなイメージを仮託したい。

朱、つまり、血の色でもある赤は、ぼくには、単に七色のひとつとは云いきれぬ意味があるように思われる。いま、思いつくままに列記すれば——、

朱に染って、血染めの日章旗、赤い夕日の満州、赤裸な心と、それらは血にからんだ、人間行為の最基部と深くからみあっており、この赤が天空一杯に拡がれば、それは永遠の夕暮れである。

夕暮れとは、誰そ彼、つまり、たそがれであり、人々と風物は混淆してあやめがなくなり、それはつまり、停止せる時間のなかに、人々と風物が、映画でいえば、ストップ・モーションふうに静止する瞬間である。

しかも、この赤は、夢と結びつけば、カラフルなる夢は神経症の徴候であり、不安とともに恍惚をも感じさせないではいない場なのである。

ぼくは横尾君の画にひかれ、その理由はいっぱいあるけれど、そのまず一つは、はじめに申し述べたごとく、デテール描写における無個性、つまりパターーンの徹底であり、そこからくる、土俗的下品さ（?）とでもいうべきものである。

そして、このパターン性こそは、われわれの意識下における共同性の幻影をあからさまに把握する唯一の方法であろうとぼくは確信している。

ぼくは彼の画をみつめていて、忽ち時間と空間の制約を越え、かのサーカスの黒幕に描かれてあった奇怪の異形のイメージの世界に運び去られるのである。横尾絵画を伝統の面から考えてみれば、彼は浮世絵のもっとも正統な後継者といえよう、それも、後期のそれである。

昭和元禄の申し子というマスコミ命名に左右されているわけでなく、横尾君の才能は世紀末的デカダンスにおいてこそ花咲くのであり、一九七〇年は、安保の年、というよりは全世界的な世紀末の皮切りであるとすれば、ぼくは、横尾君がわれわれのチャンピオンとして、あくなく、世界滅亡を告げる夕日を描きつづけてくれることを希望する。

幸か不幸か、彼は自動車事故に出合って、ムチ打ち症になり、これをいいシオに二年間休業して諸国漫遊の旅に出ると聞く。

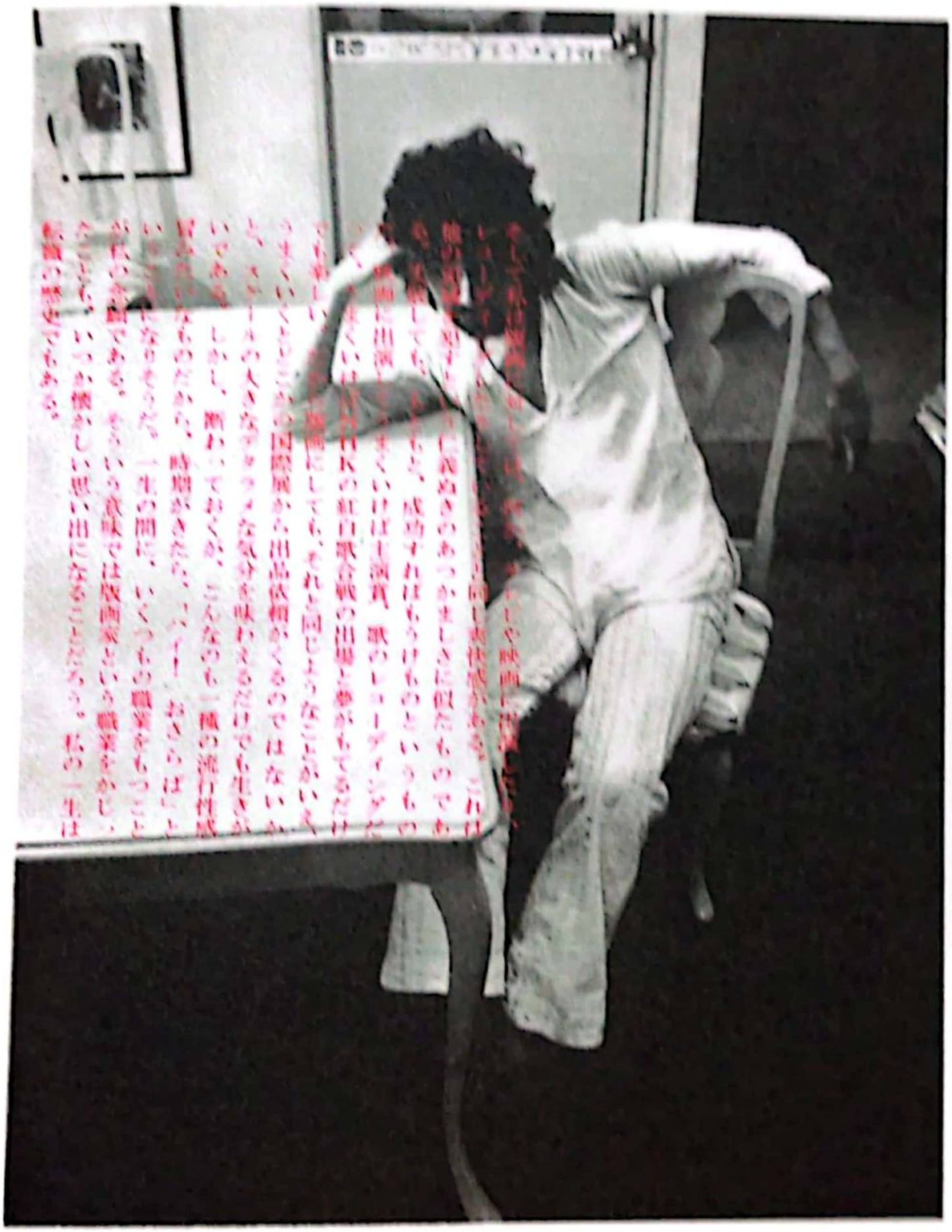
彼の全作品を見ればすぐ解ることだが、初期作品と近作のあいだには明らかに切れ目があり、初期の傑作は何といっても西欧的エロチシズムが濃厚であり、これにキリコ的静寂が加味されて、今

日の横尾君になったわけだが、二年間の沈黙ののち、彼はわれわれに、どのような世紀末の毒花を見せてくれるだろうか。地獄の旅の、数少い水先案内人としての彼の健闘を切に願う。

（一九七〇・六）

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



そして私は版画[illegible]しや映画に出演したり、これは
ヒットす[illegible]同じ快感がある。
他の職業[illegible]に義ぬきのあつかましさに似たものであ
る。版画にしても[illegible]と、成功すればもうけものというもの
[illegible]映画に出演[illegible]まくいけば主演賞、歌のレコーディングだ
ってうまくいけば[illegible]の紅白歌合戦の出場も夢かもしれるだけ
でき[illegible]画にしても、それと同じようなことがいえ
うまくいくとどこかの国際展から出品依頼がくるのではないか
と、スケールの大きなドラマな気分を味わえるだけでも生きが
いである。しかし、断わっておくが、こんなのも一種の流行性感
冒みたいなものだから、時期がきたら、「バイ！」おさらばと
いうことになりそうだ。一生の間に、いくつもの職業をもつこと
が私の念願である。そういう意味では版画家という職業をかし、
たとえも、いつか懐かしい思い出になることだろう。私の一生は
転職の歴史でもある。

CamScannerでスキャン

復刻版　横尾忠則全集

令和七年八月五日　第一刷

著者―横尾忠則

装幀・レイアウト―横尾忠則

製版者―富岡隆

発行者―佐藤丈夫

発行所―株式会社国書刊行会

東京都板橋区志村一―一三―一五　郵便番号一七四―〇〇五六

電話〇三―五九七〇―七四二一

印刷所―TOPPANクロレ株式会社

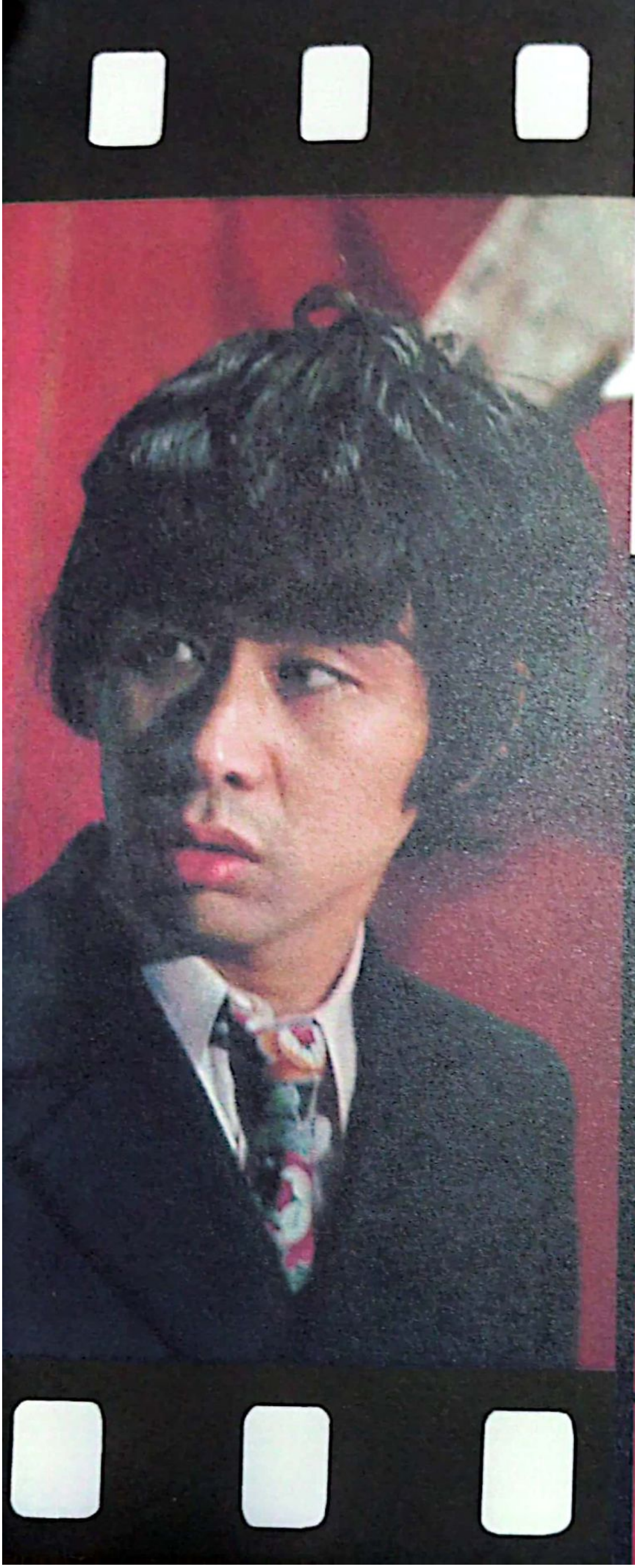
製本所―株式会社ブックアート

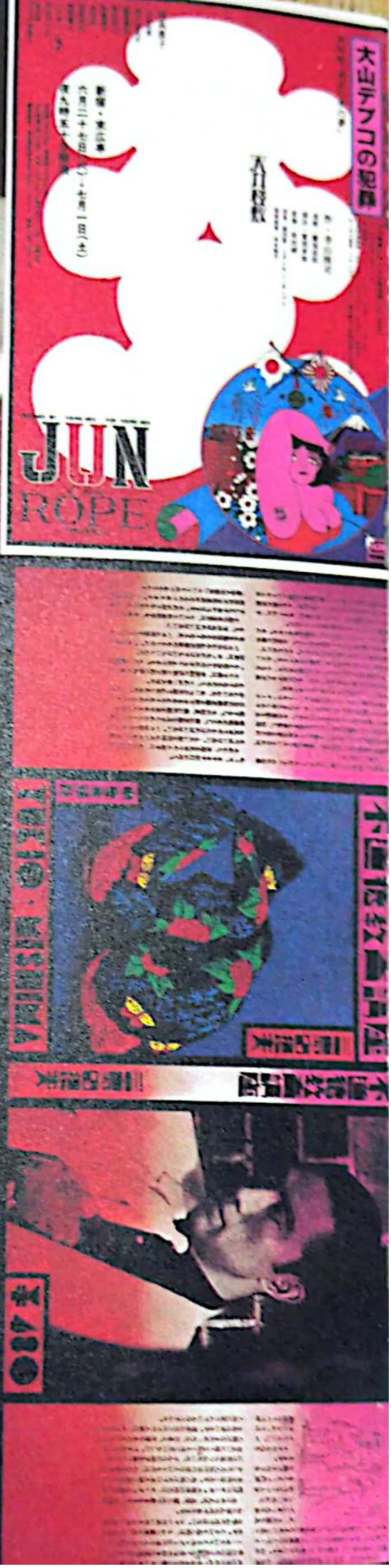
© 横尾忠則　二〇二五

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

ISBN 978-4-336-07707-3

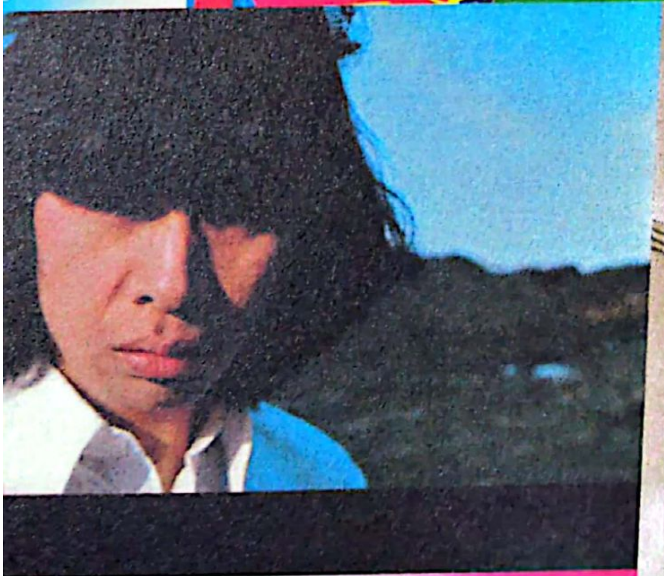
CamScannerでスキャン





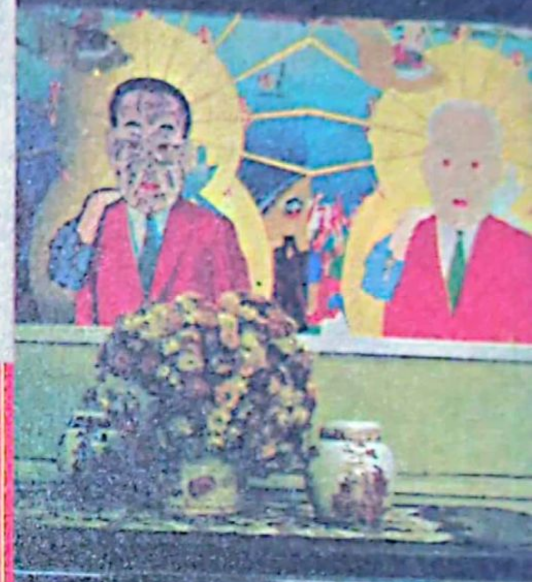
CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

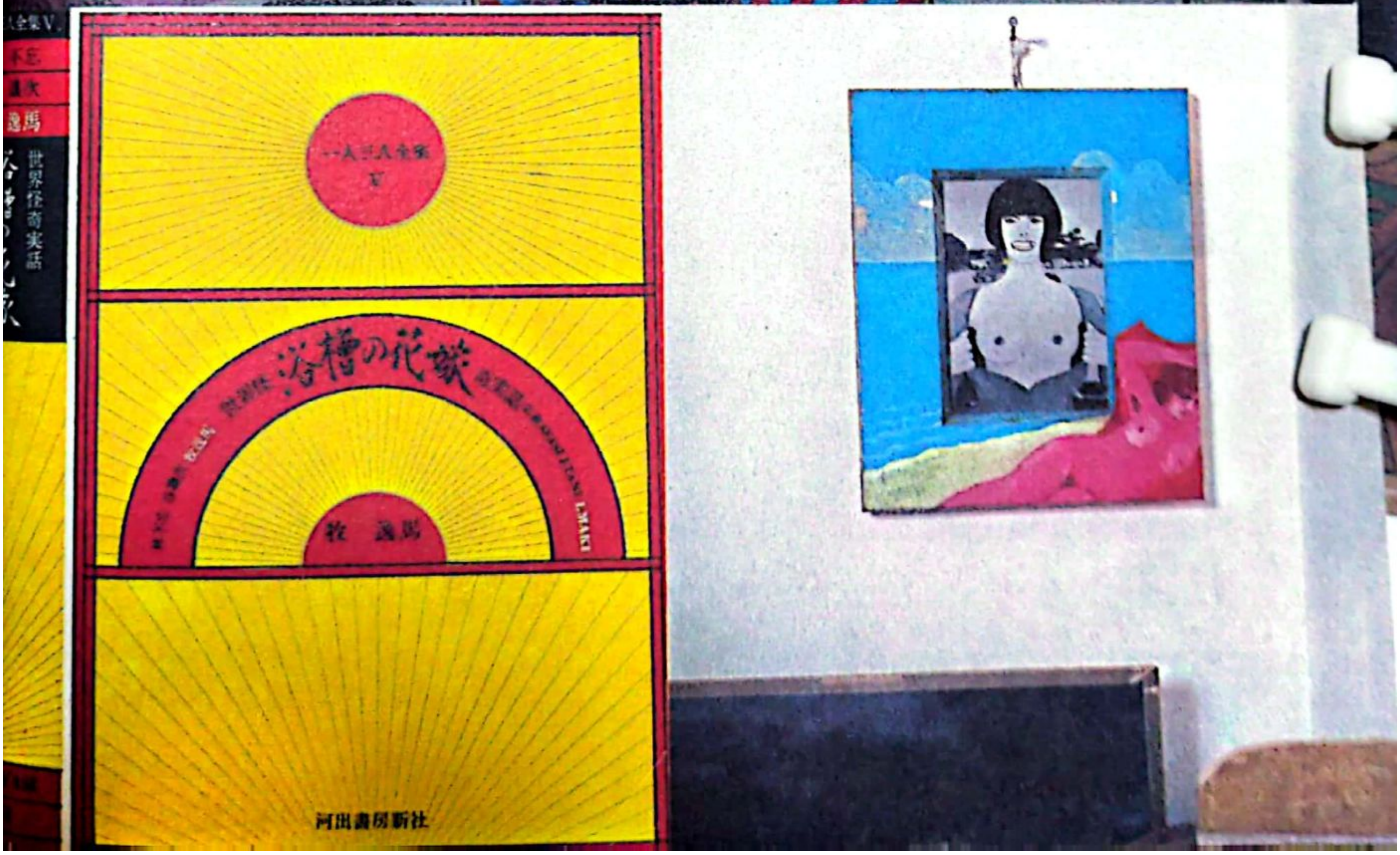


CamScannerでスキャン

能、
繭の會
第二期定期公演
會場 觀世會館
T.YOKOO
'69

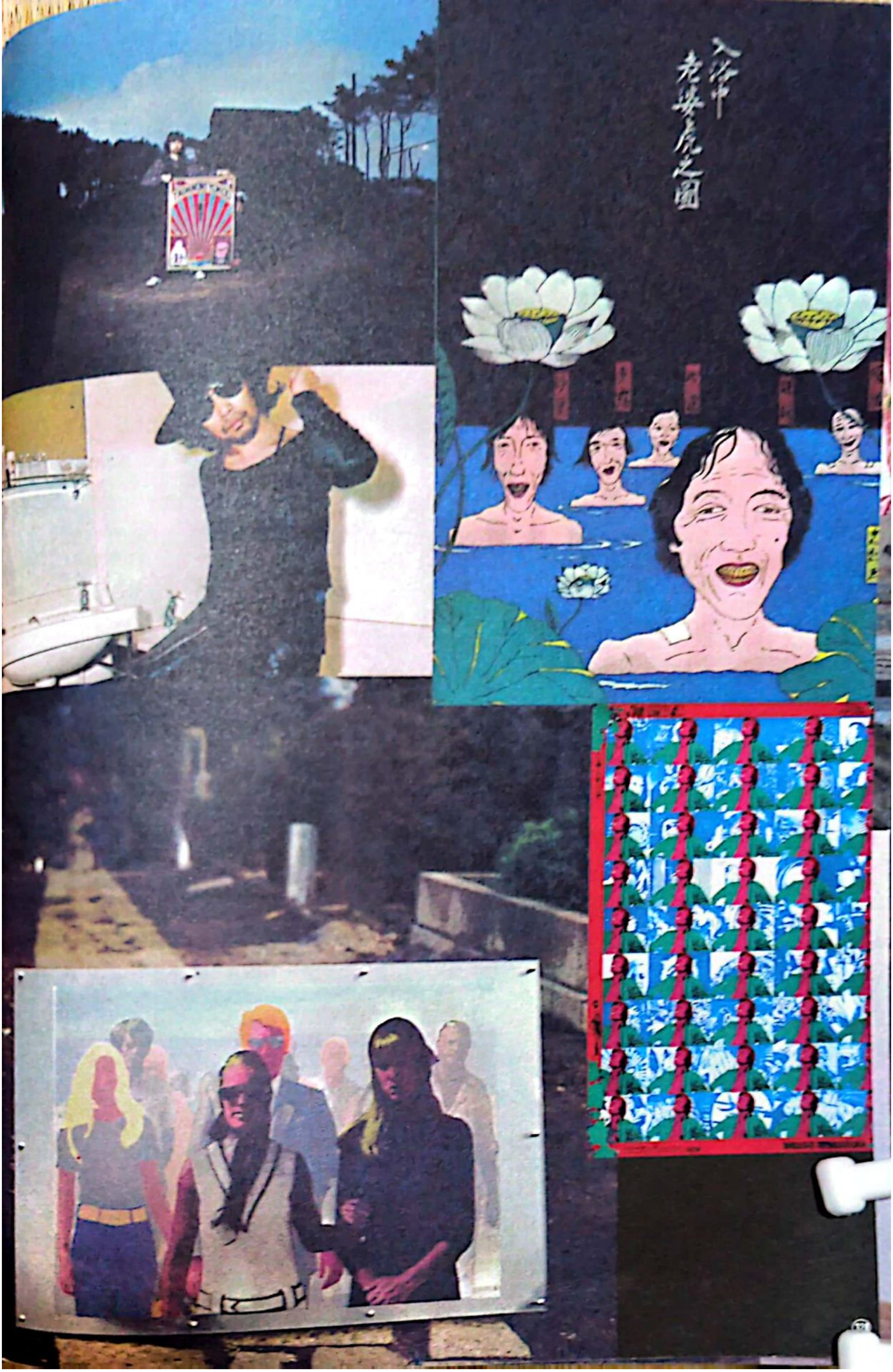


CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン



CamScannerでスキャン